



Title	チューリッヒ市建築賞に見る自治体主体の建築賞に関する研究：市町村による優れた都市景観/空間の創造に向けた理念・手法について
Author(s)	大脇, 慶多
Citation	北海道大学. 博士(工学) 甲第12060号
Issue Date	2015-12-25
DOI	10.14943/doctoral.k12060
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/63873">http://hdl.handle.net/2115/63873</a>
Type	theses (doctoral)
File Information	Keita_Ohwaki.pdf



[Instructions for use](#)

チューリッヒ市建築賞に見る自治体主体の建築賞に関する研究  
-市町村による優れた都市景観／空間の創造に向けた  
理念・手法について-

A Study on Architectural Prizes by the Local Municipalities through an Architectural Prize,

*AUSZEICHNUNG FÜR GUTE BAUTEN DER STADT ZÜRICH*

Ideas and Methods for Creating Superior Cityscape and Urban Space by the Local Municipalities

大脇

OHWAKI

慶多

Keita

北海道大学大学院工学院  
建築史意匠学研究室

はじめに

本論は、チューリッヒ市建築賞の基本理念、運営体制、審査方針、評価基準、受賞作品、広報に着目し、戦後 65 年のチューリッヒ市による建築評価の理念と手法を明らかにするものである。

一般に、「建築賞」といえば、優れた建築に対しその設計者を表彰するものと捉えることができる。社会の共有財産である建築に対して、継続的に評価することの必要性は誰しもが認めるところであろう。我が国には、業界団体や地方自治体が主催する建築賞が数多く存在する。しかしながら、その実態は、建築界での評価が社会に伝わらず、優れた都市空間の形成に繋がっているとは言い難い。

地域主権の強いスイスでは、地方自治体毎に独自の建築評価を行なってきた。中でもチューリッヒ市建築賞 (*Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich*) は、1945 年の創設以降、65 年にわたり継続され、且つ、市民である施主が主たる表彰対象となるなど、世界的に先駆的かつ特徴的で、建築評価のあり方を検討する上で見逃すことのできない事例である。

チューリッヒ市建築賞を総体的かつ客観的に分析することによって得られる成果は、地方分権が叫ばれる我が国における地方自治体が独自の建築評価を行なう上で、有用な知見を与えるものである。

Keywords: 建築賞、評価、理念、都市景観、審査方針、評価基準、空間構成、チューリッヒ、スイス

チューリッヒ市建築賞に見る自治体主体の建築賞に関する研究  
-市町村による優れた都市景観／空間の創造に向けた理念・手法について-  
目次

Table of contents

はじめに	2
目次	3
<b>序章 本研究の目的と意義</b>	
第1節 本論の目的・意義・方法	7
研究の目的と意義／研究の方法	
第2節 既往研究	8
第3節 本論の構成と用語の定義	11
本論の構成／用語の定義	
第4節 スイス概要	12
スイスの地方自治／スイスの空間計画体系／チューリッヒ市に着目する意義	
序章注記、図版出典リスト	16
<b>第1章 スイスにおける建築賞の概要と戦後チューリッヒの建築関連行政の活動</b>	
第1節 スイスにおける建築賞の概要	17
スイスにおける主要な建築賞／職能団体による建築賞／地方自治体が主体の建築賞 ／ドイツの建築賞	
第2節 戦後建築史におけるスイス建築の位置づけ	20
戦後スイス建築界の動向／スイス・ドイツ語圏の建築家	
第3節 戦後チューリッヒの都市形成過程と建築関連行政の活動	22
Stadtbaumeister について／建築・ゾーニング令を用いた都市政策	
第4節 小結	25
第1章注記、図版出典リスト	25
<b>第2章 チューリッヒ市建築賞における審査体制と受賞作品の特徴</b>	
第1節 賞の創設背景	27
第2節 審査員構成	33
市当局に所属する審査員／ETH 教授と民間建築家の審査員	
第3節 受賞作品の建築種別と広報の特徴	37
住宅作品／住宅以外の建築種別／改修・増築作品／出版物の特徴	
第4節 審査員構成・受賞作品の建築種別・広報の傾向	40
第I期／第II期／第III期／第IV期	
第5節 小結	43
第2章注記、図版出典リスト	44

### 第3章 市参事会議事録と関連出版物から見るチューリッヒ市建築賞の基本理念・

#### 審査方針・評価基準の変遷と特徴

第1節 『チューリッヒ市参事会議事録』と作品集の性格	45
第2節 賞創設時の議事録における創設理念並びに運営方法と審査方針 建築賞の基本理念／賞の仕組み	46
第3節 各回の議事録にみる審査時における都市と建築に対する認識と審査方針・ 評価基準の変遷	48
田園都市構想に基づく低層団地開発（第1～2回：1945～1950年）／多様な建築 種別の選出（第3～6回：1950～1965年）／高層住宅建設と石油危機後の建設数 の減少（第7～11回：1965～1984年）／高密度化した市街地における増築・改修 の意義（第12～13回：1985～1994年）／再開発に関わる都市デザインのあり方（第 14～16回：1995～2010年）／都市と建築に対する認識・審査方針・評価基準と 各時代の傾向の関係	
第4節 創設時の理念の継承と適用	54
第5節 小結	56
第3章注記、図版出典リスト	57

### 第4章 チューリッヒ市建築賞受賞作品の空間構成

第1節 集合住宅に着目する意義	59
第2節 受賞作品の敷地条件・配置構成と分布 田園都市構想に基づく時代（1943～1957年）／都市の高度利用が進む時代（1957 ～1985年）／リノベーションと再開発の萌芽の時代（1985～1997年）／都市の 更新が進む時代（1997年以降）	60
第3節 受賞作品の構成単位と住棟構成の特徴 集合住宅の構成単位／Wohnung-Haus-Gebäudeの関係	70
第4節 受賞作品の空間構成と都市景観における位置づけ	72
第5節 非住宅系の空間構成の特徴 配置構成とヴォリュームの分節パターン／構成類型	74
第6節 小結	76
第4章注記、図版出典リスト	79

### 第5章 スイス・ドイツ語圏におけるバーゼル建築賞の特徴

第1節 本章の位置付け バーゼル建築賞の位置付け／バーゼルの基本的性格	81
第2節 バーゼル建築賞の理念・手法・広報について 理念／方針／広報	82
第3節 審査体制について	84
第4節 受賞作品について	86
第5節 小結	87
第5章注記、図版出典リスト	90

### 第6章 チューリッヒ市建築賞と日本の建築賞の比較考察

第1節 日本における地方自治体が主催する建築賞・景観賞の実態	91
第2節 建築関連団体が主催する建築賞・景観賞の実態	93
第3節 日本の地方自治体への展開可能性	94
第4節 小結	95

## 終章 総合考察

第1節 各章のまとめ	107
第2節 結論	108
第3節 今後の課題	109
資料篇	
チューリッヒ市建築賞受賞作品一覧	113
チューリッヒ市参事会議事録要約	147
参考文献リスト	195
研究業績リスト	199
あとがき	201



## 序章 研究の意義と目的

### Preface

#### 第1節 本論の目的・意義・方法

##### § 0-1-1. 本論の目的と意義

本論は、1945年から現在まで65余年にわたって続く、チューリッヒ市建築賞の基本理念、運営体制、審査方針、評価基準、受賞作品、広報に着目し、自治体主体の建築賞が長期にわたってどのように継続され、定着しているのかを明らかにすることによって、地域の歴史や文化に根ざした建築評価手法の開発に向けた技術的方策に必要な知見を見出すことを目的とする。

一般に、「建築賞」といえば、優れた建築に対しその設計者を表彰するものと捉えることができる。社会の共有財産である建築に対して、継続的に評価することの必要性は誰しもが認めるところであろう。我が国には、業界団体や地方自治体が主催する建築賞が数多く存在する。しかしながら、その評価の実態は、大野秀俊が「建築界の内部の、いわば仲間内の評価である」（「建築評価のフレームワーク」、日本建築学会大会研究協議会資料、1997年）と指摘しているように、建築界での評価が社会に伝わらず、優れた都市空間の形成に繋がっているとは言い難い状況が現在も続いている。このことは、日本の建築賞の多くが、建物の設計者に対するもので、一般市民に対して閉じた性格であるため、都市形成に有効に利用されているとは言い難い状況であることを示している。また近年、日本国内において景観法の制定や、歴史的建造物を活かしたまちづくりの活動等が見られるが、歴史的建造物と共存する形の新規の建築計画には、既存の建築物に対する配慮や評価といった点で多くの課題があり、行政、民間ともに美しい街並を形成するための方策を探っている段階にあるといえる。一方、欧州では、建築を都市空間の中で評価し、実際の都市形成に活用していく取り組みが見られ、例えば英国では、瀬口哲夫が『英国建築事情 上』（建築ジャーナル、2001年）の中で取り上げている Civic Trust Awards が挙げられ、1959年に非営利団体によって創設された、国家レベルでの都市景観に対する建築賞としては欧州で最も歴史がある。

こうした国レベルの建築評価とは異なり、地域主権の強いスイスでは、地方自治体毎に独自の建築評価を行なってきた。中でもチューリッヒ市建築賞 (*Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich*) は、1945年の創設以降、65余年にわたり継続され、且つ、市民である施主が主たる表彰対象となるなど、世界的に先駆的かつ特徴的で、建築評価のあり方を検討する上で見逃すことのできない事例である。各回の受賞作品は丁寧につくり込まれた作品が継続して受賞しており、優れた建築物によって都市景

観を形成していることを体現した建築賞である（巻末の資料篇に全受賞作品を掲載している）。管見の限り、戦後 65 年にわたり、強い地域主権のもとで独自の建築賞を継続している例は、チューリッヒ市以外に見られない。しかし、本賞の実態は、スイスにおいてもこれまで総体的、客観的に分析されていない。

建築が都市景観を構成する要素であり、都市景観が市民が共有する文化的財産であるとの前提に立てば、現代、我が国では、様々な権限が地方に移譲される大きな流れの中で地方自治体により積極的に建築を評価しても良いのではないだろうか。チューリッヒ市という自治体の建築評価の理念と手法は、今後の我が国の地方自治体における建築評価の一助になり得ると考えている。

## § 0-1-2. 研究の方法

本論では、各主催団体が刊行している建築賞の作品集を基礎資料として、各建築賞の審査毎の受賞作品数を把握している。また、北海道大学図書館、スイス連邦工科大学建築学部図書館に所蔵される建築専門誌や新聞資料から、戦後のチューリッヒ市の都市形成過程や建築界の状況を明らかにした。

さらに、2008 年 10 月のチューリッヒ市への予備調査に加えて、2011 年 8 月から 2014 年 6 月にかけて、スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築史・建築理論研究所に客員研究員として滞在し、受賞作品の現地調査や建物所有者、建築賞企画運営担当者、審査員への聞き取りを行ない、一次審査や授賞式に参加して、関係者への聞き取りを行なった。

## 第 2 節 既往研究

本論に関連する主な先行研究は、以下に大別できる。

### [建築評価に関するもの]

1. 木川田洋祐「建築関連顕彰制度にみる建築評価の日米比較」（北海道大学修士論文、2005 年）
2. 大野秀俊「建築評価のフレームワーク」（日本建築学会大会研究協議会資料、1997 年 7 月）
3. 阿部仁祐、近江榮「建築批評の変遷にみる 1950 年代の意義」（日本建築学会大会学術講演梗概集、1994 年 7 月）
4. 銀山正晴、沖塩荘一郎、塚田幹夫、荒木牧人『建築物の長寿命化に関する研究—BELCA 賞受賞物件の調査を通して』（日本建築学会大会学術講演梗概集、1997 年 7 月）
5. 佐藤加永子、松本正富「「新建築賞」受賞作品にみる住空間の評価傾向について」（日本建築学会中国支部研究報告、2010 年 3 月）
6. 馬野宏貴、宇杉和夫「都市の景観表彰制度とその実態の調査研究（埼玉県下の都市事例）」（日本建築学会大会学術講演梗概集、1997 年 9 月）
7. 奥山健二「名古屋市都市景観賞に関する考察」（日本建築学会大会学術講演梗概集、1999 年）
8. 山口泰輔、松本直司「都市景観賞受賞物の現状及び同賞に対する市民意識に関する研究—名古屋市都市景観賞を題材として」（日本建築学会東海支部研究報告、2006 年 2 月）
9. 末江真、黒瀬重幸「福岡市における都市景観に関する研究—福岡市都市景観賞を事例として」（日

本建築学会九州支部研究報告、2003年3月)

10. 恒松良純「秋田市都市景観賞」にみる景観の特徴と分類－秋田の景観に関する研究その1」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2004年7月)

11. 那須聖「札幌市都市景観賞の審査評における批評言語」(日本建築学会計画系論文集第675号、2012年5月)

12. 安藤恭慎、吉川啓太、広田直行「公共建築賞の審査講評にみる評価実態」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2011年7月)

1は、インターネット海外の事例を含めた様々な建築顕彰制度を取り上げ、日米の比較を通して、日本は米国より評価軸が少なく、歴史的・文化的に優れた建築に対する評価が不十分だと指摘している。論文の中で、世界各国の建築関連顕彰制度のリストが示されているが、スイスに関するものは僅かに4件<sup>1)</sup>のみで、本研究で扱うチューリッヒ市建築賞 (*Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich*) についての情報は得られなかった。2は、我が国における建築評価に対する論考であるが、「建築の利用者や鑑賞者は、建築を評価する立場を持っていない。建築の評価に決定的に欠けているのは、建築の受容者側からの評価である」という指摘は、本論の背景に通じるところがある。3と4に関しては、我が国の代表的な建築賞を取り上げ、受賞作品の特徴を把握するものである。5～10については、我が国の地方自治体が主体となって運営する都市景観賞に着目した研究である。5は、埼玉県内の10市による景観顕彰制度の実態をアンケート調査によって明らかにしている。結論として「ほとんどの市で応募数は減少傾向で、新たな市民、事業者の意識の育成が達成できているとは言い難い」と指摘しているものの、今後どうあるべきかについての言及はない。11や12は選考作品そのものではなく、選考過程で議論された価値や景観誘導の表れである審査評を扱うことで、そこで定義された建築や都市空間の価値について考察を行なっている。この方法は本研究の考察においても有用である。

[スイスおよびチューリッヒの建築に関するもの]

13. 木下勇、B. Schwarzenbach・石光研二ほか「スイスの空間計画」(助農村開発企画委員会、農村工学研究63、1998年3月)

14. 木下勇「持続可能な地域マネジメント型市街地整備の展開に関する研究」(科学研究費基盤研究(C)(課題番号19560610)報告書、2009年、3月)

15. 木下勇、ハンス・ビンダー「工場跡地の都市再生のためのエリアマネジメントにおけるアイデンティティと持続可能性に関して－スイスのズルツァー・アレアルの事例報告－」(日本都市計画学会都市計画論文集Vol.46、2011年4月)

16. 高橋直子、松村秀一「チューリッヒにおける工業地区および建築のコンバージョンに関する研究」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2003年7月)

17. Otsachev Ilia, Ishida Toshikazu, 'Swiss Made Materiality Analysis of non-building materials in contemporary Swiss-German architecture' (日本建築学会九州支部研究報告、2006年3月)

18. 湯谷紘介、田上健一「現代スイスにおける公立小中学校の空間構成に関する研究」(日本建築学会

九州支部研究報告、2007年3月)

19. 田所辰之助「ノイビュール・ジードルンク的设计経緯と計画理念について-1920～30年代初頭における工作連盟のジードルンクについてその3-」(日本建築学会関東支部研究報告、2003年2月)

13は、スイスの都市計画の仕組みについて、行政が用いる都市計画図の種類や、空間計画(Raumplan)という概念について、具体的な地区を取り上げて纏めている。14と15は、持続可能な地域マネジメント型市街地整備の展開を目的とした研究である。16は、チューリッヒ市における工業地区および建築のコンバージョン事例の都市再生手法を明らかにしている。17は、建築素材に着目して、スイスの現代建築の特徴を明らかにしている。18は、建築種別の中でも中学校に着目し、スイスの現代学校建築10事例について、配置やヴォリューム構成の特徴について言及している。19は本賞の受賞作品でもあるノイビュールジードルンク的设计経緯を明らかにしている。

これらの研究・報告は、チューリッヒ市の都市形成の一部をもとにした論考にとどまり、本賞と都市景観形成の関係には言及しておらず、考察の余地が残されている。

#### [空間構成に関するもの]

20. 塚本由晴、坂本一成「現代日本の住宅作品における空間の分節と接続-住宅建築の構成形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第465号、1994年11月)ほか<sup>2)</sup>

21. 足立真、坂本一成ほか「集合住宅の空間構成における多様性・均質性-現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第490号、1996年12月)ほか<sup>3)</sup>

22. 寺内美紀子、坂本一成ほか「建築の外部空間の文節と配置形式-領域的性格からみた建築の外部空間の構成形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第491号、1997年1月)ほか<sup>4)</sup>

23. 中井邦夫、坂本一成「現代日本の市庁舎建築における空間構成と用途の分節-外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第519号、1999年5月)ほか<sup>5)</sup>

24. 美濃部幸郎、坂本一成ほか「ヴォリュームの配列からみた複合建築の構成における統合形式」(日本建築学会計画系論文集第525号、1999年11月)ほか<sup>6)</sup>

25. 小川次郎、小野田環、坂本一成「外形ヴォリュームと室の配列による建築の構成」(日本建築学会計画系論文集第537号、2000年11月)ほか<sup>7)</sup>

26. 遠藤康一、坂本一成、寺内美紀子「傾斜地における住宅建築の断面構成-建築と周辺環境による空間構成に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第561号、2002年11月)

20～26は、いずれも東京工業大学坂本一成研究室による一連の研究である。現代の都市空間における建築の建ち方や、建築を構成する要素毎に特定の建築種別に対する建築的特徴を見出すことを目的としている。主に東京を中心とした作品に着目しており、混沌とした都市環境の中で、現代の建築がいかに構成されているかを理解する上で、興味深い研究である。本論の第4章で、受賞作品の空間

構成の特徴を分析する際に、これらの分析手法を参考にした。これらの研究はあくまで設計者の立場で現状の都市空間の分析に主眼を置いているため、良好な都市景観形成に対する具体的な理念や手法を導くものではない。

### 第3節 本論の構成と用語の定義

#### § 0-3-1. 本論の構成

本論は全8章で構成しており、各章の概要は以下の通りである。

序章では、本研究の背景、目的、方法について論述した。さらに主題に関する既往研究について概括し、本研究の位置づけを行なうとともに、論文の構成を示す。

第1章「スイスにおける建築賞の概要と戦後チューリッヒの建築関連行政の活動」では、スイスにおける建築賞について、主催団体（地方自治体、職能団体、財団）、創設年毎に分類し、各建築賞の特徴を明らかにし、本論でチューリッヒ市建築賞に着目する意義を述べる。次に、市内の都市計画から建築設計に至る権限を有する Stadtbaumeister 制を採用していたチューリッヒ市の建築関連行政組織の変遷に着目し、各 Stadtbaumeister による都市政策の特徴や、1997年の組織改編によって創設された都市計画局の活動を、戦後のスイス建築界の動向と関連付けながら明らかにする。

第2章「チューリッヒ市建築賞における審査体制と受賞作品の特徴」では同賞の審査体制、受賞作品の建築種別、広報の3点に着目し、同賞の運営手法の特徴について論じ、市の都市形成過程と審査体制、受賞作品の建築種別との関係性を考察する。

第3章「市参事会議事録と関連出版物から見るチューリッヒ市建築賞の基本理念・審査方針・評価基準の変遷と特徴」では、同賞が設計者ではなく施主を表彰の主対象とすることを踏まえた上で、審査方針並びに評価基準に関わる4つのキーワード（Baugesinnung, städtebaulich, Stadtbild, Verständnis）を通して議事録の詳細を追うことで、65余年にわたる同賞の基本理念、審査方針、評価基準の変遷

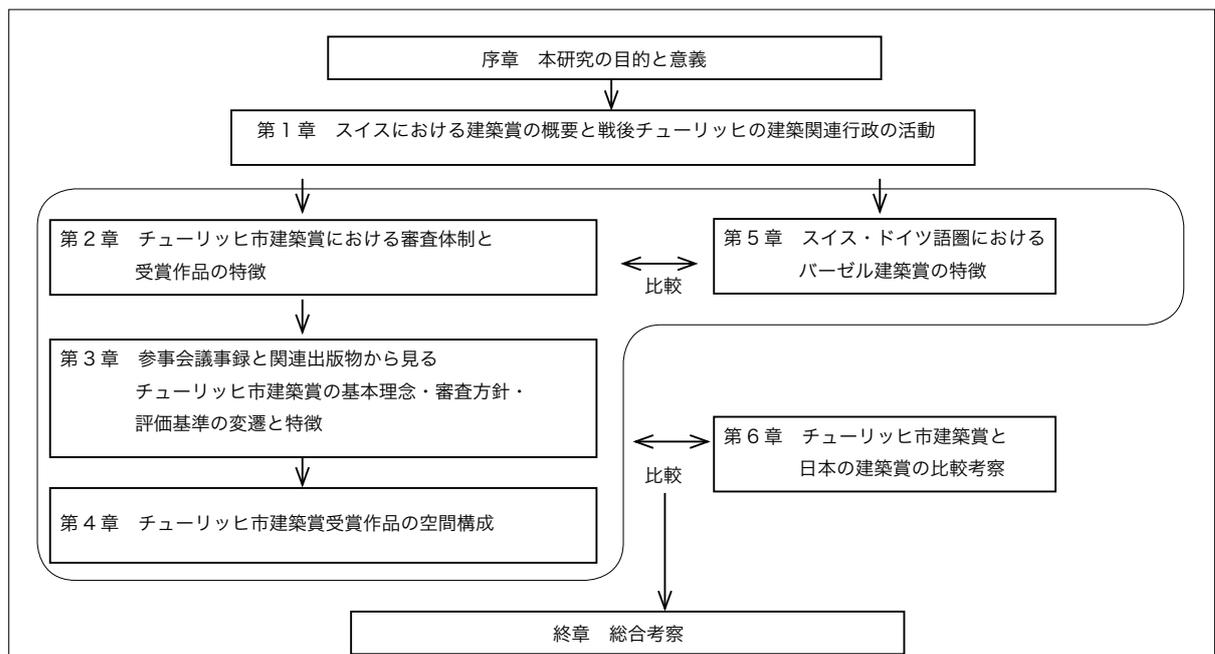


図 0-3-1 本論の構成

と特徴を明らかにする。

第4章「チューリッヒ市建築賞受賞作品の空間構成」では、受賞作品全193件の現地調査と図面資料を基に、配置構成に着目しつつ、空間構成の特徴を明らかにする。さらに、集合住宅68件に関しては、住戸単位の関係性に着目し、建築的特徴を明らかにする。

第5章「スイス・ドイツ語圏におけるバーゼル建築賞の特徴」では、スイス・ドイツ語圏の自治体主体の建築賞の中でも、チューリッヒ市の次に創設年が早く、受賞作品数も多い、バーゼル建築賞を分析対象とし、同賞の理念、手法、広報、審査体制、審査方針、評価基準、受賞作品の建築種別の特徴をチューリッヒ市建築賞と比較することによって明らかにする。

第6章「チューリッヒ市建築賞と日本の建築賞の比較考察」では、我が国における地方自治体が主催する建築賞、景観賞の実態を、ホームページ上に公開されている資料から整理し、その特徴を明らかにする。さらに、第5章までで明らかにしたチューリッヒ市建築賞の特徴と関連付けながら、我が国における地方自治体の建築賞への展開可能性について考察する。

終章では、各章の内容を総括し、今後の課題を述べる。

## § 0-3-2. 用語の定義

本論で用いる語句について以下のように定義した。

### [年代]

特に断りのない限りにおいて、西暦で統一した。

### [地名]

地名については、初出時は、カタカナ表記の後に、独語を併記し、以降はカタカナ表記で統一した。

### [人物名]

人物名については、実際の呼び方と異なる表記になる恐れがあるため、すべて原語で統一した。

### [役職、政策名]

役職、政策名については、日本語に訳せるものについては、日本語表記とし、初出時に独語を併記した。適当な日本語が当て嵌まらないものに関しては、カタカナ表記とし、初出時に独語を併記した。

### [引用文と図版出典]

引用文は、英文、独文とも原点の記述に従うことを基本とした。

図版出典については、煩雑さを避けるため章末にリストとしてまとめた。

## 第4節 スイス概要

スイスは、現在26の州(Kanton)の下に、約2700の基礎自治体(Gemeinde、以下ゲマインデ)で構成される連邦国家である。日本の九州より僅かに広い国土は、4つの文化圏を持ち<sup>1)</sup>(図0-4-1)、強固な地域主義が展開されている。各州には、連邦の各種機関と共存可能な範囲内で、州ごとに独自の憲法、行政機構、議会、裁判所、法律、警察がある。また、税率を含むさまざまな政治的決定に関し大きな決定権が認められている。スイスの歴史に関する研究は、既に森田安一や踊共二らによって数多くの蓄積がある<sup>2)</sup>。本節では、スイスの地方自治の歴史について俯瞰し、次章以降の足がかりと

する。

#### § 0-4-1. スイスの地方自治

森田安一、踊共二『ヨーロッパ読本 スイス』（河出書房新社、2007年）によると、スイスという国家が誕生する背景には、「13世紀におけるヨーロッパの政治・経済状況を見れば、アルプスの峠にあることがわかる」と言われるように、神聖ローマ帝国は、13世紀初頭に、中央アルプスを越えるザンクト・ゴットハルト峠（Sankt Gotthard）を開削した。当時、他にもアルプス越えのルートがあったものの、ザンクト・ゴットハルト峠が「ドイツから北イタリアに出る最短距離であった」。「この峠を皇帝勢力が自由に往来できるようにするため峠に登る地域を皇帝直轄地にする必要があった。皇帝はこの地域に「帝国自由」という特権を保証して、近隣諸侯の支配から保護してあげることにした。こうして帝国自由都市と同様に、アルプスの農村地域から「自由と自治」を享受できるようになっていく。」

ザンクト・ゴットハルト峠は重要な交易路にもなっていたため、ウーリ（Uri）の人々は、峠越えの運搬業務の組織をつくり、経済的に自立していった。こうした地域からスイスの誕生ははじまった。

ウーリやシュヴィーツ（Schwyz）は単独で「自由と自治」を維持することは不可能であったため、相互扶助の同盟を結ぶこととなる。1291年8月1日、ウーリ、シュヴィーツ、ニートヴァルデン（Nidwalden）は誓約同盟を交わした。この同盟がスイスの独立といわれ、8月1日はスイスの建国記念日となっている。

1315年、ハプスブルク家は三盟約者団（ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンを原初三邦という）を屈服させようと騎士軍を派遣した。原初三邦はモルガルテンの戦いで騎士軍に対して勝利を取めた。この戦いはスイスの独立戦争ともいえるが、農民軍が封建騎士軍に勝利したことにより、「自



図 0-4-1 スイスの文化圏

由と自治」を確保したがっていた近隣の都市や農村が原初三邦と同盟を結ぶようになった。1353年までに、ルツェルン (Luzern)、チューリッヒ、ベルン (Bern) といった都市、グラールス、ツークといった農村地域が原初三邦と個別に同盟を結ぶことでゆるい結合体ができた。その後16世紀初頭までに、ゾーロトゥルン、フリブール、バーゼル、シャフハウゼンの4都市とアッペンツェル農村邦が同盟に加わり、13邦同盟の時代が1798年までつづくことになる。1798年までのスイスは同盟を構成する13の都市邦・農村邦と準構成メンバーである従属邦、それに一方的に支配される「共同支配地」という三重構造をもった国であった。

フランス革命の影響がスイスにも及び、フランス総裁政府を真似た中央集権国家ヘルヴェティア共和国が成立した。しかし、スイスでは1291年の原初三邦の最初の同盟以来、各地域の自治が大切にされてきた歴史があったため、一気に中央集権国家を確立しようとしたことには無理があり、地域間あるいは階層間に強い対立が生まれ、ヘルヴェティア共和国は短命に終わる。

この混乱を調停するため、ナポレオンがスイスに調停条約を結ばせた。これまで従属邦や「共同支配地」の地位に甘んじていたアールガウ、トゥールガウ、ティチーノ、ヴォー、ザンクト・ガレン、グラウビュンデンを自立したカントンとして認め、革命以前の13邦と対等の立場を与えた。カントンは旧来の邦 (ドイツ語の Ort の訳) に代えてナポレオンが広めた言葉で、しばしば「州」と日本語に訳され、現在も使われている。カントンは主権をもち、ミニ国家に近い自立した政体をもつ存在であった。ただ軍事・外交面ではナポレオンの意向が反映できるように、19カントンを監督する知事制が導入され、事実上はナポレオンの傀儡政権であった。

ナポレオンがヨーロッパの連合軍に敗退し、保守反動のウィーン体制が成立すると、ナポレオンによってフランスに併合されていたヌシャテル、ジュネーヴ、ヴァレーのフランス語圏地域がスイスに返還され、22のカントンから構成される同盟体となった。

1848年は「四八年革命」と総称されるように、ヨーロッパにとって一大変革の年だった。スイスではその前年に「分離同盟戦争」という、いわば内乱が勃発していた。都市カントン・プロテスタント対農村カントン・カトリックの図式でおおよそ対立構造を示せるが、産業革命推進の立場に立つ前者が勝利し、翌年に近代憲法が制定され、近代スイスが誕生した。

この憲法は、1874年に一度大改正がなされたのち、毎年のように部分改正を繰り返し、1999年まで存続した。その間、1797年にカントン・ベルンからジュラが独立して、新カントン・ジュラが成立し、現在では、23のカントンからなる連邦制をとっている。正確にはウンターヴァルデンはニートヴァルデンとオプヴァルデン、アペンツェルはアペンツェル・インナーローデンとアペンツェル・アウサーローデン、バーゼルがシュタットとラントシャフトのそれぞれ半カントンに分かれ、独自の憲法をもっている。つまり、今日のスイスは半カントンを含めて、独自の憲法と一定の主権をもつ26のカントンから構成され、連邦制よりはるかに強い地域自治の制度をもっている。なお、2000年1月から施行された新憲法は、環境条項等を含む先進的な憲法となっている。

ほぼ中世を通じて、スイスの歴史は基本的にはドイツ語圏内で展開した。しかし、16世紀の膨張時代に各邦は単独あるいは協力して、フランス語圏やイタリア語圏の地域を支配領域に繰り入れていった。また、中世初期にはスイス東南部のグラウビュンデン地域に広くロマンシュ語を話す人々が

いたが、ドイツ語の圧迫を受け続けていた。

以上のように、建国の背景を辿るなかで、アルプスという自然環境を活かし、小規模な自治単位が時代と共に同盟を結ぶ中で、スイスという連邦国家が成立してきた。中でもドイツ語圏は、スイスの形成史の上で、主要な地域であることが理解できる。

#### § 0-4-2. スイスの空間計画体系

木下勇、B. Schwarzenbach・石光研二ほか「スイスの空間計画」(財農村開発企画委員会、農村工学研究 63、1998年3月)によると、連邦制の地方分権の徹底したスイスでは連邦の建設法はなく、各州で建設法が制定、施行されている。州に計画の大幅な権限が存在する。連邦レベルでは、部門別計画(Sachpläne)というエネルギーや交通、観光などの連邦で管轄する事業計画があり、建築規則の記述とともに、前段には市町村や群(Bezirk)、州の計画制度の体系、それぞれの管轄範囲、用語の定義が述べられている。

市町村レベルの空間計画は地区計画(Ortsplanung)と称される計画に集約される。これは現状の調査や評価のもとに将来の利用を検討して計画したものである。一般にこの計画は、目標像(Leitbilder)、基本計画(Richtplan)、建築令(Bauordnung)を総合した計画となっている。地区計画は最近では土地利用計画(Nutzungsplanung)に代表され、これは建築令の中心的なゾーニング計画(Zonenplan)や建築規則(Baureglement)などを意味し、土地の権利者に対して拘束力を持つ。このほか、建築計画(Überbauungsplan)、開発計画(Erschliessungsplan)、構成計画(Gestaltungsplan 都市デザイン的な形態規制計画)なども地区計画に含まれる。

#### § 0-4-3. チューリッヒ市に着目する意義

ドイツ語圏を中心とした地方自治体が主体となって成立したスイスの中で、チューリッヒ市を本論で取り上げる意義についても触れる必要があるだろう。ここで、建築分野以外での研究に目を向けると、政治学分野で、岡本三彦がチューリッヒ市の議会の仕組みと近年の政策に着目して、地方自治の仕組みに関する研究を行なっている。『現代スイスの都市と自治チューリッヒ市の都市政治を中心として』(早稲田大学出版部、2005)中で、チューリッヒ市の人口(約38万)が日本における中規模都市の人口に近く、将来的な地方自治体の合併が進んだ際に、この人口規模の中で、住民投票や住民発議といった直接民主制がどのように運用されているかを検討する上で意義があると述べている。

こうした政治学の分野における視点に留まらず、チューリッヒ市は世界的に見て、生活の質「Quality of Life」が高いことが、マーサー・ヒューマン・リソース・コンサルティング(Mercer)の調査などでも報じられている(2015年のランキングでは世界第2位)。こうした調査は一つの指標に過ぎないものの、生活の質が高い背景には、都市生活の基盤となる都市空間や建築物が関係しているといえよう。こうした点からもチューリッヒ市を研究対象とする意義があると考えられる。

## 【序章注記】

- 1) 木川田作成のデータベースに掲載されたスイスの建築賞は、次の4つである。1：Prix d'Architecture Beton、2：Aga Khan Award for Architecture、3：Holcim Awards for Sustainable Construction、4：IABSE Awarda。
- 2) 塚本由晴、繁昌朗、坂本一成「現代日本の住宅作品における外部空間の分節と結合－住宅建築の構成形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第470号、1995年4月)、塚本由晴、坂本一成「現代日本の住宅作品における空間の分割－住宅建築の構成形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第478号、1995年12月)、塚本由晴、奥矢恵、坂本一成「住宅作品における架構表現による構成単位に分節－住宅建築の構成形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第480号、1996年2月)がある。
- 3) 足立 真、坂本一成「住戸の集合と外部空間の配列による構成形式－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究その2」(日本建築学会計画系論文集第522号、1999年8月)、足立 真、坂本一成「要素の配列による集合住宅の外形構成－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究その3」(日本建築学会計画系論文集第530号、2000年4月)、足立真、坂本一成「外部空間の接続と配列による集合住宅の構成形式－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究その4」(日本建築学会計画系論文集第538号、2000年12月)がある。
- 4) 寺内美紀子、村田 淳、坂本一成「現代日本の建築作品における外形構成とアプローチ空間－領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究(2)」(日本建築学会計画系論文集第525号、1999年11月)、寺内美紀子、坂本一成ほか「現代日本の建築作品における外部領域要素の配列－領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究(3)」(日本建築学会計画系論文集第543号、2001年5月)、寺内美紀子、町田敦ほか「街路型建築作品における外部ヴォイド空間の構成－領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究(4)」(日本建築学会計画系論文集第554号、2002年4月)、寺内美紀子、坂本一成「現代日本の建築作品における地形化表現による外形構成－領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究(5)」(日本建築学会計画系論文集第559号、2002年9月)がある。
- 5) 中井邦夫、大内靖志ほか「現代日本の建築作品における室の集合と外形構成－外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究(2)」(日本建築学会計画系論文集第528号、2000年2月)、中井邦夫、妹尾慎吾ほか「現代建築作品における架構と空間構成－外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究(3)」(日本建築学会計画系論文集第551号、2002年1月)、中井邦夫、森山ちはるほか「現代日本の博物館建築における立地環境と外形構成－外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究(4)」(日本建築学会計画系論文集第607号、2006年9月)、中井邦夫、根本理恵ほか「街路に面した商業施設の外形構成－外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究(5)」(日本建築学会計画系論文集第622号、2007年12月)がある。
- 6) 美濃部幸郎、増山絵理奈ほか「ヴォリュームの配列と接続からみた増築建築の構成形式」(日本建築学会計画系論文集第547号、2001年9月)、美濃部幸郎、寺内美紀子ほか「外部空間の分節からみた分棟建築の構成－ヴォリュームの配列による現代建築の統合形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第552号、2002年2月)、美濃部幸郎、寺内美紀子ほか「周辺環境との隣接関係からみた都市建築の統合形式－ヴォリュームの配列による現代建築の統合形式に関する研究」(日本建築学会計画系論文集第558号、2002年8月)がある。
- 7) 岡村航太、小川次郎「外部空間の配列と接続からみた都市型住宅作品の構成－現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式(2)」(日本建築学会計画系論文集第552号、2002年2月)がある。
- 8) たとえば、森田安一、踊共二『ヨーロッパ読本 スイス』(河出書房新社、2007年)、森田安一『スイス：歴史から現代へ』(刀水歴史全書、1994年)、踊共二、岩井隆夫『スイス史研究の新地平 都市・農村・国家』(昭和堂、2011年)、瀬原義生『スイス独立史研究』(ミネルヴァ書房、2009年)など。

# 第 1 章

## スイスにおける建築賞の概要と 戦後チューリッヒの建築関連行政の活動

### Architecture Prizes in Switzerland and Activities of the Building Section of the City of Zurich after World War II

本章では、スイスにおける建築賞の概要を主催団体別に明らかにする。また、戦後チューリッヒ市の建築関連行政の活動をスイスの建築界の動向と関連づけながら明らかにする。

#### 第 1 節 スイスにおける建築賞の概要

##### § 1-1-1. スイスにおける主要な建築賞

優れた都市景観の創造を実現する上で、一定の基準で建築・都市空間に対する評価を行なうことは、重要な手法の一つといえる。スイスでは多数の建築賞が催され、その全体像については、芸術学者 Cordula Seger による建築専門誌『Hochparterre』所収の論考がある<sup>2)</sup>。このうち、最も早いのはスイス・ドイツ語圏のチューリッヒ市建築賞で、1945 年に創設され、自治体が主催している。同様の賞は、1980 年代に各地で開催されるようになり、スイス・ドイツ語圏に着目すると、バーゼル、ルツェルン (Luzern)、ツーク (Zug) などがあげられる。ここでは、賞の目的の違いを示す上で主要な建築賞の概要について述べたい。

##### § 1-1-2. 職能団体による建築賞

まず、スイス文化財保護協会 (Schweizer Heimatschutz) によるワッカー賞 (Wakker Preis) は、1972 年に創設され、町の景観や居住区の開発に関して特別な活動が認められる地方自治体に対して贈られる賞である。この賞は、主催団体が郷里保護 (Heimatschutz) の理念<sup>2)</sup>を掲げているため、創設以来、歴史的街並の保存に成功している自治体の受賞が続いている。しかし近年では、歴史的な文脈の中で綿密な都市の再開発が進められている自治体が受賞しており、現代的な状況のなかで地域の歴史と将来的な土地利用をどのように調整していくべきかを各自治体に啓蒙的に促す上で、特徴的な賞である。また、同団体は 1998 年以降、都市における優れたオープンスペースや緑地計画が達成された自治体または設計者に対する賞 (Schluthess Gartenpreis) も運営している。

次に、具体的な建築作品に対する賞としては、建築材料毎に賞が設けられている。コンクリートの建築作品に対する建築賞として、スイスセメント・漆喰・石膏メーカー協会 (Verein Schweizerischer Zement- Kalk- und Gips-Fabrikanten) が 1977 年にコンクリート建築賞 (Architekturpreis Beton) を創設し、

現在は2007年に設立されたスイスコンクリート協会（BETONSWISS）がその活動を引き継ぐ形で毎年優れたコンクリート作品を評価している。また、鉄骨造の建築作品に対しては、スイス鉄骨造建築センター（Stahlbau Zentrum Schweiz）が主催するPrix Acier賞が2005年から隔年で運営されている。

つぎに、職能団体や財団が主体となり、行政が後援している賞を見ると、グラウビュンデン州建築賞（Auszeichnung guter Bauten im Kanton Graubünden）は1987年に第1回が開催され、2013年までに計4回実施されている。ここでは、グラウビュンデン郷里保護連盟（Bündner Heimatschutz）やグラウビュンデン空間計画協会（Bündner Vereinigung für Raumplanung）等の職能団体が賞の企画・運営を行ない、州は財政支援をする体制をとっている。1990年には、スイス北東部の5州（内アッペンツェル半州、外アッペンツェル半州、サンガレン州、シャフハウゼン州、トウルガウ州）が合同で建築賞を創設した。この地域の建築賞においても、建築フォーラム・スイス東部地区（Architekturforum Ostschweiz）が企画・運営を行なっている。

### § 1-1-3. 自治体が主体の建築賞

表 1-1-1 はスイス・ドイツ語圏における地方自治体が主体となって運営する建築賞を創設年の古い順に表したものである。まず、行政が主体となって運営している賞として、1980年に都市バーゼル半州（Kanton Basel-Stadt）が本賞を創設した。1985年には、地方バーゼル半州（Kanton Basel-Landschaft）が同様の建築賞を創設した。1992年には、BS、BL両州が共同開催するようになり、現在までに計7回開催している。バーゼル以外では、ルツェルン州建築賞（Auszeichnung guter Bauten im Kanton Luzern）が1994年に始まり、2006年までに計3回開催している。ツーク州建築賞（Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zug）は、創設年は不明だが、これまで1996年、2006年の開催が確認できる。さらに、チューリッヒ州建築賞（Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zürich）は、2001年に始まり、2013年までに計4回開催している。行政単独以外では、ゾロトゥルン州建築賞（Architektur-Auszeichnungen Kanton Solothurn Werke aus dem gestalteten Lebensraum）が、1999年に州とスイス建築家技術者協会（Schweizerischer Ingenieur und Architektenverein）と共催し、2013年までに6回開催している。このように、地方自治体が主体となって運営される建築賞が複数存在するが、バーゼルが、都市部と郊外の両州で共同開催しているのとは相反し、チューリッヒでは、市と州が別々で建築賞を運営している。

このように、1980年以降のスイス・ドイツ語圏の各州において、主体の違いこそあれ、次々に建築賞を創設し運営されている。特に、ゾロトゥルン州を除く全ての州で、建築賞の名称に「Auszeichnung guter Bauten」が用いられていることもスイス・ドイツ語圏の特徴といえる。もちろん、その嚆矢はチューリッヒ市建築賞であり、日本語では「良い建築に対する表彰」という意味である。

ドイツ語圏以外の自治体が運営する建築賞として、フランス語圏で1984年創設のヴォー州建築賞（Distinction Vaudoise d'architecture）のみが確認できる。

### § 1-1-4. ドイツの建築賞

これまでの節を通して、本論でチューリッヒ市建築賞に着目する理由を述べてきたが、ここで、

表 1-1-1 スイス・ドイツ語圏における地方自治体が運営する建築賞

賞の名称	開催年	対象年	受賞数	備考
Auszeichnung für gute Bauten in der Stadt Zürich チューリッヒ市建築賞	1947	1940-2011	193	1945年創設。2011年までに、全16回開催
Auszeichnung für gute Bauten Kanton Basel-Stadt	1980	1970-1980	11	BS 単独開催
Auszeichnung guter Bauten Kanton Basel-Stadt	1985	1981-1985	17	BS 単独開催
Auszeichnung guter Bauten Kanton Basel-Landschaft	1985	1980-1985	24	BL 単独開催
Auszeichnung guter Bauten Kanton Basel-Stadt Kanton Basel-Landschaft	1992	1985-1992	36	BS, BL 共同開催
	1997	1993-1997	40	
バーゼル建築賞（都市バーゼル半州、地方バーゼル半州）	2002	1998-2001	36	
	2008	2002-2007	31	
	2013	2008-2012	33	
	計		238	
Auszeichnung Gute Bauten Graubünden グラウビュンデン州建築賞	1987	1981-1987	11	B ü n d n e r
	1994	1988-1994	15	Heimatschutz,
	2001	1995-2001	17	Bündner Vereinigung
	2013	2002-2013	13	für Raumplanung が主催（州は財政支援のみ）
	計		56	
Architekturpreis (Kanton Appenzell Innerhoden, Appenzell Ausserhoden, Stadt St. Gallen, Kanton St. Gallen, Schaffhausen, Thurgau)	1992	1980-1990	6	Architektur Forum Ostschweiz が主催
Auszeichnung gutes Bauen (AI, AR, FL, SG, SH, TG)	1996	1991-1995	21	改称
Auszeichnung gutes Bauen (AI, AR, FL, SG, SH, TG, GL)	2001	1996-2000	8	Glarus 州が加わる
東部スイス建築賞（内アッペンツェル半州、外アッペンツェル半州、サンガレン州、シャフハウゼン州、トゥルガウ州、グラウス州、リヒテンシュタイン）	2006	2001-2005	25	
	2011	2006-2010	24	
	計		78	
Auszeichnung guter Bauten im Kanton Luzern ルツェルン州建築賞	1994	1983-1993	不明	州が主催
	1999	1994-1998	不明	
	2006	1999-2004	15	
Auszeichnung guter Bauwerke 1991-1995 Kanton Zug	1996	不明	5	創設年不明、州が主催
Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zug ツーク州建築賞	2006	1996-2005	8	改称
Auszeichnung ausgewählter Bauten im Kanton Solothurn	1999	1996-1998	11	州と sia の共同開催
	2001	1998-2000	6	
	2004	2001-2003	5	
	2007	2004-2006	5	
Architektur-Auszeichnungen Kanton Solothurn	2010	2007-2010	4	改称
Werke aus dem gestalteten Lebensraum ソロトゥルン州建築賞	2013	2010-2013	2	
	計		33	
Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zürich チューリッヒ州建築賞	2001	不明	4	州が主催
	2003	1999-2002	3	
	2006	2001-2005	3	
	2013	2007-2012	3	
	計		13	

(各建築賞の作品集を基に作成。ツーク州、ルツェルン州については、最新の作品集のみが収集できたため、受賞作品の総数を把握することができなかった。)

隣国ドイツの状況についても触れておく必要がある。ドイツの地方自治体が主催する建築賞の創設年を調査したところ、エッセン郡が主催する建築賞（Auszeichnung von Bauherren und Architekten für qualitätvolle und beispielhafte Bauwerk）が1954年創設と最も早いことが明らかとなった。この他にもドイツ建築家連盟（Bund Deutscher Architekten）が主催する優れた建築に対する賞（Auszeichnung guter Bauten）が各州で運営されているが、どの州においても、創設年は2000年以降である。従って、チューリッヒ市建築賞の1945年創設が隣国ドイツよりも早いことが確認できた。

## 第2節 戦後建築史におけるスイス建築の位置付け

### § 1-2-1. 戦後スイス建築界の動向

1920年になると Walter Gropius（1883-1969）が創設したバウハウス（Bauhaus）の思想がスイスにも流入した。中でも Le Corbusier（1887-1965）は、人間と工業化の進んだ社会を共存させる試みを通じて重要な役割を果たした。フランスの集合住宅「ユニテ・ダビタシオン」など、Le Corbusier の思想は主に国外で実現されたが、最初の作品であるジャンヌレ邸（Villa Jeanneret）をはじめ、生地ラ・ショードフォンに残る初期の作品や母親のためにつくった小さな家、彼の最後の作品となった美術館などがスイスに現存する。Le Corbusier はその思想によって機能的で実践的な新たな建築の道を開き、世界中で、特にスイスでは若い建築家の世代に大きな影響を与えた。時としてブルータリストと評された Le Corbusier の機能的な建築様式は、1960年代になって、ポストモダニズムの代表的建築家で、連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）の名誉教授であったイタリア人建築家 Aldo Rossi（1931-1997）によって発展させられた。Rossi は「類似する建築」という、客観的で現象的な関係を強調する概念プロセスを展開した。ロッシの主張した建築の独立、都市の批評分析、タイポロジーの問題は、1945年以降のドイツとスイスのセカンド・モダン建築の開花に貢献した。

1980年代には、Mario Botta（1943-）を主流とするティチーノ派の形式的で職人的な正確さが評価され、現代スイス建築の最も重要な流派として認知されるようになった。ティチーノ派の作品では、建築の詩的側面を強調しつつ、合理性と近代性、歴史意識、景観との関係が考慮されている。1990年代以来、Peter Zumthor（1943-）や、Herzog & Meuron（Jacques Herzog（1950-）と Pierre de Meuron（1950-）によるユニット）などのミニマリストが活躍している。

スイスでは、建築単体の個性よりも、むしろ施行水準やデザイン完成度の高さを追求する傾向がある。1970年代から80年代初頭にかけては、構造主義の一時的な流行に乗じて、プレファブ工法への関心が盛り上がった。Jakob Zweifel（1921-2010）設計のスイス連邦工科大学ローザンヌ校（EPFL）キャンパスと、Max Ziegler（1921-）と Erik Ranter 設計の ETHZ の HIL 棟は、この時代を象徴する建築である。こうした時代にも関わらず、スイスでは職人氣質が失われなかったため、建設業界の急速な工業化にも歯止めがかけられるようになった。知識や技能はもとより行動規範も正しく継承され、特に後者については、現場監督やバウマイスターの育成にあたる職業訓練校において徹底された。また、スイスの設計事務所に勤務する者の多くが、建築を学ぶために応用科学系の大学か、国内に2校しかない連邦工科大学へ進学している。1996年には、Botta が中心となって、スイス・イタリア語圏大学ならびにアカデミア・ディ・アルキテットウーラ・メンドリジオが開校した。

とりわけ ETHZ を卒業した多くの建築家は、深くその建築教育の影響を受けている。スイスの建築教育に特徴的なのは、構法や施工といったテクニカルな実践にベースを置く一方で、歴史的・地理的コンテキストへの精緻な問題定義とそのうえでの具体的な解決に基盤を置いた教育方針といえよう。そうしたコンテキストへの深い眼差しが生まれた背景には、1972年に ETH-Z に客員教授として招聘された Rossi の存在が大きい。Rossi は、自著『都市の建築』（大龍堂書店、1991、原著＝1966）のなかで「建築は都市という全体像の中の一部である」というスタンスによるタイポロジー論を展開した。都市建築では機能は変わっても建築のタイポロジーは変わらず、都市の建築が機能ではなく形態においてどのように生き延びるべきなのか、という命題は現代においてもいまだなお示唆を与えつづけているといえよう。

### § 1-2-2. スイス・ドイツ語圏の建築家

ここでは、主に貝島桃代監修『Space Design 都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築』（鹿島出版会 /1998）に掲載されている Patrick Gmür and Regula Lüscher Gmür 「The Historical Flow of Swiss German Architecture（スイス・ドイツ語圏の建築における歴史の変遷）」を参考にスイス・ドイツ語圏の建築家についてまとめる。

スイス・ドイツ語圏の建築の変遷を見る上で、まず近代の萌芽期における一つの契機として、1922年にバーゼル市が公示した新しい中央基地のための設計競技が挙げられる。この設計競技を通して、スイス建築史において初めて「近代運動」という意識が明確化した。これによって、保守的な設計競技の公的結果に対して、スイス全土の建築家達から抗議運動が巻き起こった。その中には、Hermann Baur<sup>3)</sup>、Hannes Meyer<sup>4)</sup>、Emil Roth<sup>5)</sup>、Hans Schmidt<sup>6)</sup>、Karl Moser<sup>7)</sup>等の落選者もいたが、結果としてこの事件は、当時近代的構えに同調した若い建築家達の意識を合流させ、近代への大きなうねりを起こす転機となった。

一方、これらの建築家達とは立場を異にした、Max Ernst Haefeli<sup>8)</sup>、Werner Max Moser<sup>9)</sup>、Rudolf Steiger<sup>10)</sup>、Alfred Roth<sup>11)</sup>、Paul Artaria<sup>12)</sup>等の当時新世代に属していた建築家達は、独自の立場を模索しつつ、自らの運動を「Neues Bauen（新たなる建設）」と命名した。

しかし、その後の世界経済の悪化やそれと連動した政治状況の推移によって、スイスにおける近代は寧ろ、地域的要因を受容させる方向へと転換していくこととなる。このような傾向が顕著に現れたのは、第二次世界大戦直前の1939年に開催されたスイス博覧会での Hans Hoffman<sup>13)</sup>と Hans Fischli が設計した展示館においてであった。この建築以前も「Neues Bauen」を指向していた建築家達は、混沌としたこのような状況の中で厳密な近代化を探求し、スイス特有の社会環境に即した形態を開拓していった。

戦後におけるスイス・ドイツ語圏の建築の歴史は、図式的には一方でスカンジナビア建築の新たな動向に反応し、他方、近代の巨匠達と連鎖していく。

このようなスイスにおける一連の変位は、Heinrich Helfenstein が1982年のシンポジウムで提言したように、近代の巨匠達に追従するいくつかの流れに分離していく。まず、Mies van der Rohe の基軸（Jacques Schader<sup>14)</sup>、Fritz Haller<sup>15)</sup>、Franz Fueg、Barth & Zaugg 等）、次に Le Corbusier の基軸（Atelier

5<sup>16)</sup>、Aurelio Galfetti、Escher & Rudolf Guyer、Otto Glaus & R. Lienhard 等)、そして、Frank Lloyd Wright の基軸 (W. Aebli、Bernhard Hoesli、Tito Carloni、Rino Tami 等)、Alvar Aalto の基軸 (Ernst Gisel<sup>17)</sup> 等)、さらにバウハウスの基軸 (Max Bill<sup>18)</sup>、W. Aebli、Bernhard Hoesli、Dolf Schnebli<sup>19)</sup> 等) など多岐に分流していった。

### 第3節 戦後チューリッヒにおける建築関連行政の活動

#### § 1-3-1. Stadtbaumeister について

中世以降、ドイツでは、Baumeister (バウマイスター) という職名が存在した。そもそも Meister (工匠) という言葉自体、中世以前からドイツで根付いていた職能を持つ人物に対する呼名であり、建築の分野では、Baumeister と呼ばれる人物が、都市形成に大きく貢献してきた。Baumeister の嚆矢とされるのは、Dombaumeister (ドムバウマイスター) と呼ばれたゴシック大聖堂の建築技術者であった。

スイス・ドイツ語圏の諸都市では、近代以降、Stadtbaumeister (シュタットバウマイスター) という役職が存在し、Stadtbaumeister が都市計画から建築物の設計までを遂行してきた歴史を持つ。チューリッヒ市に関しては、1861年に Jakob Friedrich Wanner (1830-1903) が Stadtbaumeister の任に就いてから、Caspar Conrad Ulrich (1846-1899)、Arnold Bürkli (1833-1894)、Arnold Geiser (1844-1909)、Gustav Gull (1858-1942)、Freidrich Fissler (1875-1964)、Hermann Herter (1877-1945)、Albert Heinrich Steiner (1905-1996)、Adolf Wasserfallen (1920-2000)、Hans Rudolf Rüegg (1933-) がその任にあたってきた。Stadtbaumeister は、中世の城塞都市から産業革命を経て、近代都市形成における計画から設計に渡る権限を有し、1945年以降は、市内に竣工した建築物に対する評価も行なってきた。1997年に、市の大幅な組織改編に準じて、Stadtbaumeister 制は廃止され、それまで Stadtbaumeister が担ってきた権限が、建築局 (Amt für Hochbau) や都市計画局 (Amt für Städtebau、以下、AfS) に分割された。中でも AfS は、アーバニズムの観点から都市計画、都市デザインに関わる計画に対する許認可権を有するとともに、市内に竣工した建築物に対する評価を行なう部署として位置づけられる。

#### § 1-3-2. 建築・ゾーニング令を用いた都市政策

チューリッヒ市が1946年に策定した「建築・ゾーニング令」(Bau- und Zonenordnung、以下 BZO と表記) の立案と実施は、当初 Stadtbaumeister を中心に進められ、これまでチューリッヒ市の建築家 Albert Heinrich Steiner、Adolf Wasserfallen、Hans Rudolf Rüegg の3人が登用された。その後1997年の市の改組で Stadtbaumeister 制は廃止となる。BZO は、60年代の経済成長に伴う都市の高密化、70年代の郊外大規模住宅開発などの社会状況に応じて改訂を重ね、特徴ある施策を実施する。各時代の BZO の特徴を表 1-3-1 に示す。

1946年策定の最初の BZO (BZO46) を主導した Stadtbaumeister は、Albert Heinrich Steiner であった。Steiner は戦前からつづいていた田園都市構想に基づいて開発計画を進め、特に郊外開発に市の補助金を投入し、個別の計画を実現させた。BZO46 では、開発用地と緑地など保存用地を明確に定義し、開発用地では、住宅のほか、学校や教会といった中核となる街区と街路や歩道との結びつき、将来的な開発に相応しい場所を規定したことが特徴である。

2人目の Stadtbaumeister に登用されたのは、Adolf Wasserfallen である。Wasserfallen は既存市街地周縁部の高度利用を図るため、更新事業を税金で補助する特別な許可を下した。また、Wasserfallen は1963年にBZOを改訂し(BZO63)、市内の建物の高さ制限を最高90mとした。これらの決定は、市域全体の計画を動かす契機となり、官民協同で大規模な住宅地開発が進められた。特に1950年代後半から70年代には経済成長とともに大規模な開発が実現したほか、主要幹線道路や河川などの土木事業も展開し都市景観が形成されていく。好景気に支えられたこうした開発の過程で、建築生産と建設技術も発展する。好景気に伴い市内中心部の手頃な価格の住宅の多くが、新規の事業所に建て替えられたため、既成市街地の居住人口は周縁部や郊外へ移り、中心市街地の人口が空洞化する。そこで、Wasserfallen は都市居住を再び促すため、1974年にBZOを改訂した(BZO74)。BZO74で注目すべき内容は、中心市街地における既存建築の屋根裏を住戸に転用できるという「居住空間計画」(WAP)の策定である<sup>20)</sup>。

しかし、1973年のオイルショックで景気が後退し、大規模住宅地開発に対する市民の批判が見られるようになる。そのひとつは自然環境破壊を懸念するもので、緑豊かな郊外での集合住宅の開発と全く異なった方針は市民にとっては受け入れ難かったことを示している。さらに、1975年に「ヨーロッパ建築遺産憲章」<sup>21)</sup>が採択され、欧州全体でリノベーションに対する認識が高まった。その影響は市民にまでおよび、既存建物の取り壊しよりも、内部改修や街並に影響を与えない範囲での増築等を検討する動きが活発になった。

3人目の Stadtbaumeister に登用されたのは、Hans Rudolf Rüegg であった。また、当時の建設局長であった Ursula Koch が市の都市計画に強力な影響を持つようになったことがこれまでの時代と相違する。聞き取り調査によれば、強力なリーダーシップを発揮する Koch を Rüegg がサポートするような関係であったという<sup>22)</sup>。

上述の通り、前の時代は1975年の「ヨーロッパ建築遺産憲章」の影響で増改築の動きが活発になる一方、新築の動きが鈍っていたが、1987年のベルリン国際建築展の開催で、市街地の再開発がさらに注目を集めた<sup>23)</sup>。この影響はチューリッヒ市にもおよび、市は「都市の修繕」(Stadtreparatur)を都市計画のスローガンに掲げた。そして、1988年、Koch は「チューリッヒは埋め尽くされた」(Zürich ist gebaut)と声明を出している<sup>24)</sup>。つまり、市には新規開発を行なう敷地的余地がなくなり、再開発が都市計画の主題となる。実際、80年代後半から、90年代にかけて、市街地における一街区全体を再構成する計画が進められるようになり、これに対応して1992年に市はBZOを改訂した(BZO92)。その作成過程で、Koch は既存の工業地域を業務地域に変更して開発する際、一定割合の集合住宅を組みこむことを定め、さらに、駐車場や学校、公園などを一体的に計画し、同一街区における多様な用途が混在することの妥当性を主張した。この主張は、再開発地域における「構成計画」(Gestaltungsplan)の運用に発展することになる。

1997年、市は組織改編を行ない、都市空間とアーバニズムの観点から景観の質の向上を担う都市計画部(Amt für Städtebau)を設置した。これまでの Stadtbaumeister の役割は分割され、建築局の都市計画部など各部の長が担い、各部の連携で、都市計画を進めることとなった。都市計画家であり、都市計画部長である Franz Eberhard が、Rüegg の時代に計画された再開発プロジェクトを引き継いだ

表 1-3-1 戦後チューリッヒ市における Stadtbaumeister と関連する政策

期	都市計画の変遷	声明、提言、動向
Albert Heinrich Steiner	BZO 46 (市)	郊外の街区開発に対する補助金 田園都市構想に基づく街区開発計画の作成 Generalverkehrsplan (1955) : 総合交通計画
Adolf Wasserfallen	BZO 63 (市)  BZO 74 (市) PBG 1975 (州)  空間計画法 (連邦) Bundesgesetz über die Raumplanung, 1980	Tiefbahn (1962) : 地下鉄計画  「高密度化した都会の雰囲気 (Urbanität durch Dichte)」 (社会学者 Edgar Salin) →新たな都市デザインの模範として都市計画家達に採用  U-Bahn (1972) : 地下鉄計画  “Nein zum Y” (1974) : 高速道路建設に対する反対運動  オイルショックや経済危機 →既存の歴史的建造物や高い評価が、公共住宅建設に影響を与える次の段階  70年代終わりまで好景気の間、大規模な建設活動が続く 例) Hardau, Grünau (写真 4、5) は、この段階における最後のプロジェクト  S-Bahn (1980) : 郊外鉄道計画
Hans Rudolf Rüeegg	BZO 92 (市)  BZO 95 (市)	“都市の修繕 (Stadtreparatur)”  “lebendige und durchmischte Stadt” (Ursula Koch, 1986) “Zürich ist gebaut” (Ursula Koch, 1988)
Amt für Städtebau	BZO 99 (市)  BZO 14 (市)	Elmar Ledergerber “10年間で10000戸の新たな住宅建設を”, 1998  ミネルギー基準 (1998)  新築事例の大部分が設計競技によって決められる →住宅組合は単に割安で持続的な生態系に配慮したものだけでなく、建築的に質の高いプロジェクトを競わせるようになった →建築的な表現力が直接賃貸率に影響し、街区のアイデンティティを高めている



写真 1-3-1 Adolf Wasserfallen

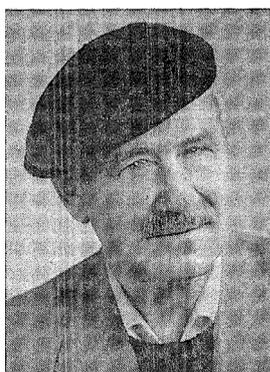


写真 1-3-2 Hans Rudolf Rüeegg



写真 1-3-3 Franz Eberhard

ほか、新たに西部地区の再開発計画にも取り組んだ。これは、Kochの再開発の方針によるばかりではなく、人口の変動とも結びついている。というのは、1962年以降、市内の人口は減少傾向にあったが、90年代半ばから再び増加に転じ、住宅不足が深刻であった。そこで、市は1998年に10年間で10,000戸の新規住宅建設という方針を打ち出した。この政策は、2002年に掲げられた「全ての市民に住宅を」(Wohnung für alle)というスローガンとして受け継がれ、限られた建設用地の中で、高密度化した住宅の建設が市内各地で展開している。

この間、BZO92の修正を重ねて(BZO95)、1999年にBZOは改訂されている(BZO99)。さらに、建築家のPatrick Gmürは2009年に都市計画部長に就任し、郊外における都市居住の高密度化や、2014年のBZO改訂(BZO14)を指揮している。

#### 第4節 小結

以上より、スイスにおける建築賞について、主催団体別(地方自治体、職能団体、財団)に建築賞の創設年や評価対象などの概要をまとめ、それぞれの特徴を整理した。その中で、スイス・ドイツ語圏で戦後から運営されている建築賞は、施主を表彰の主対象にするところに独自性が認められ、チューリッヒ市建築賞がその嚆矢として他の地方自治体の建築賞創設に影響を及ぼしていたことが明らかとなった。

次に、市内の都市計画から建築設計に至る権限を有するStadtbaumeister制を採用していたチューリッヒ市の建築関連行政組織の変遷に着目し、歴代Stadtbaumeisterによる都市政策の特徴や、1997年の組織改編によって創設された都市計画局の活動を、戦後のスイス建築界の動向と関連付けながら明らかにした。チューリッヒ市では、建築都市関連行政組織に建築の専門家を登用し、都市空間デザイン、建築設計だけでなく、竣工した建築物に対する評価を継続して行なってきた歴史があり、こうした背景の中で、具体的にどのような体制、理念、方針を持って、建築評価を継続してきたのかを次章以降で明らかにしていくこととする。

#### 【第1章注記】

- 1) Cordula Seger: "Die Hoffungen des Guten Bauens", *Hochparterre*, 1999. 12. pp. 30-33.
- 2) 猪野勇一、小池新二『世界の現代建築7スイス篇』(彰国社、1953) p.11によると、Heimatschutzとは、「元来チュートン民族の特殊な観念で、地方の祭礼や行事、服飾、民謡、舞踊をはじめ建築、工芸その他地方的な風俗習慣を維持・保持しようとする民族文化の保護運動であるが、ナチス・ドイツに見られたような偏狭な感傷的な執着に墮することなく、郷土の風景を保護し純粋に歴史的価値あるものを十分に尊重しつつ、全体としての国土の計画的発展のために、現代の諸要求との間に巧みな調整を図るという方向に向けられている」とある。
- 3) 1894年バーゼル生まれ。1910-17年ルドルフ・リンダーに学ぶ。1918-19年ETHZ(K. Moser, H. Bernoulli)助手。1927年バーゼルに事務所開設。CIAM参加。1980年逝去。
- 4) 1899年バーゼル生まれ。1905-12ベルリン工芸美術学校。1927-28年デッサウ・バウハウス学長。1930-36年モスクワ工業学校教授。1934-35年ソ連建築アカデミー教授。1939-49年メキシコ国立工業大学教授。1955年ルガーノにて逝去。
- 5) 1893年生まれ。1940-59年チューリッヒ工芸美術学校教授。1980年逝去。
- 6) 1893年バーゼル生まれ。ETHZ卒業後、H. Bernoulli, K. Moser研究室。1920-22年M. ブリンクマン事務所(オランダ)。1972年ベルゲルにて逝去。

- 7) 1860年バーデン生まれ。1915-28年ETHZ教授。1928年第1回CIAM開催、初代議長。1936年チューリッヒにて逝去。
- 8) 1901年チューリッヒ生まれ。1919-23年ETHZ (K.Moserのスタジオ)。1923-24年O.パートニング事務所(ベルリン)。1924年プレクハルトと事務所開設。1930-60年代W.M.Moser、R.Steigerと共働。1960年代-ETHZ教授。1976年ヘルリベルクにて逝去。
- 9) 1896年カールスルーエ生まれ、K.Moserの息子。1930-1960年代M.E.Haefeli、R.Steigerと共働。1960年代～ETHZ教授。1970年逝去。
- 10) 1900年生まれ。1930-60年代M.E.Haefeli、W.M.Moserと共働。1960年-ETHZ教授。1982年逝去。
- 11) 1903年アアレ生まれ、K.Moserに学ぶ。1927-28年ル・コルビュジェ事務所。1931年チューリッヒに事務所開設。1943-56年Werkの編集。1949-54年セント・ルイスのワシントン大学、ハーバード大学にて教鞭を取る。1956-71年ETHZ教授。
- 12) 1892年生まれ。1913-20年H. Bernoulli事務所。1959年逝去。
- 13) 1897年生まれ。1957年逝去。
- 14) 1917年バーゼル生まれ、バーゼル工芸美術学校で学ぶ。1939-43年ETHZで学ぶ。1946年チューリッヒに事務所開設。1948-53年Bauen + Wohnen編集。1960-70年ETHZ教授。
- 15) 1924年ソロトゥーン生まれ。1941-43年専門学校で学ぶ。1943-48年スイスの様々な事務所。1948-49年ファン・ティン&マースカント事務所(ロッテルダム)。1949年ソロトゥーンに事務所開設。1966-71年南カリフォルニアカリフォルニア大学ワックスマン客員教授と共働。1974年-シュトゥットガルト大学名誉教授。1977年-カールスルーエ大学教授。
- 16) 1954年E.フリッツ、R.ヘスターベルク、H.ホシュテットラー、A.ピニ、S.ゲルベルによってベルンに事務所開設。
- 17) 1922年チューリッヒ生まれ。1938-42年チューリッヒ美術工芸学校。1942-45年A.Roth事務所。1947年チューリッヒに事務所開設。1966-71年ベルリンに事務所開設。1968-69年ETHZ客員教授。1969-71年カールスルーエ工科大学客員教授。
- 18) 1908年ヴィンタートゥアー生まれ。1924-27年チューリッヒ工芸美術学校。1927-28年デッサウ・バウハウス(カンディンスキー+クレーススタジオ)1929年-チューリッヒで画家。1944-45年チューリッヒ工芸美術学校教授。1948年ダルムシュタット大学客員教授。1952年ウルム工科大学学長。1967-74年ハンブルク工科大学教授。1994年ベルリンにて逝去。
- 19) 1928年バーデン生まれ。1948-52年ETHZで学ぶ。1951-53年ダニエル・ジラルデ事務所。1953-55年グロピウス事務所。1957年-オットー・グラウス事務所。1959年アグノーに事務所開設。1959-60年ETHZ (W.H.モーザー) 助手。1970年-ETHZ教授。
- 20) Richard Heim: "Alles eine Frage des Masses", GERECHTER Die Entwicklung der Bau- und Zonenordnung der Stadt Zürich, Stadt Zürich Amt für Städtebau, 2013, p. 66.
- 21) Daniel Kurz: "Gebremste Grossstadt", archithese, 2005.06, p. 27.によると、ドイツ語では、Europäischen Denkmalschutzjahrと表記する。日本語訳は、日本イコモス国内委員会の表記に倣った。
- 22) Inge Beckel氏への聞き取り調査による(2014年3月17日)。
- 23) 太田尚孝ほか「ドイツの都市計画における国際建築展(IBA)の役割と存在意義に関する研究-IBAの歴史的発展と現代的位置付けに注目して-」(日本都市計画学会都市計画論文集、vol. 47、No. 3、2012. 10) pp. 679-684.
- 24) Ursula Koch: "Bauen in Zürich zwischen Utopie und Resignation", SIA Hauptversammlung in Zürich, 1998. 3. p. 8.

#### 【図版出典リスト】

- 写真 1-3-1、Adolf Wasserfallen；Neue Zürcher Zeitung vom 23. Juli 1957より転載。
- 写真 1-3-2、Hans Rudolf Rüegg；Tages Anzeiger vom 15. Juli 1983より転載。
- 写真 1-3-3、Franz Eberhard；Zürich Baut, Stadt Zürich p.28より転載。

## 第 2 章

### チューリッヒ市建築賞における審査体制と受賞作品の特徴

#### Features of Jury Organization and Award-Winning Works

本章では、チューリッヒ市建築賞 (*Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich*) の理念と手法を明らかにする上で、審査員構成と受賞作品の建築種別の特徴を考察する。全 16 回の審査を大きく 4 期に分けることによって、各時代に現れる特徴を明らかにした。

#### 第 1 節 賞の創設背景

建築家 Daniel Kurz によると、19 世紀の終わりにチューリッヒ市は大都市になり、1890 年頃に、オペラハウス、音楽ホールをはじめ、大規模な文化施設が市の中心部で建設された。また、都市人口も毎年 5000 から 10,000 人の増加していた。1900 年までに都市部の高密度化が進み、20 世紀に入ると、田園都市構想を基にした市域の拡張を伴う開発が始まった<sup>1)</sup>。当時の市建築局 (Hochbauamt) の局長で、Stadtbaumeister だった、Hermann Herter (1877-1945) の任期中 (1919-1942) と、その後の Albert Heinrich Steiner (1905-1996) の Stadtbaumeister 任期 (1943-1957) に、市は郊外地において、未開発用地の利用を積極的に進め、土地の合筆を行ない、開発を推し進めていった。その際、新たな都市計画法規として、「建築・ゾーニング令」(Bau- und Zonenordnung) を 1947 年に策定した。同年にチューリッヒ市建築賞の第 1 回の審査が行なわれていることから、新たに創設された本賞は、都市化が進む中で建築的に優れたデザインがどのようなものであるかを考えるきっかけになったものと思われる。

第 2 次世界大戦後間もない、1945 年 10 月 12 日の本賞の創設に関する参事会議事録<sup>2)</sup>によると、本賞は、市長 (Stadtpräsident)、財務局 (Finanzamt)、建設局 1 と 2 (Bauamt I, II)、建築局 (Hochbauamt、建設局 2 の下にある組織で、その長が Stadtbaumeister) といった市当局と、スイス建築家連盟チューリッヒ支部 (Ortsgruppe Zürich des Bund Schweizer Architekten, BSA) によって創設された。当時、チューリッヒ市の都市空間は発展にあわせて急速に変化していたが、都市景観形成要素としての建築を評価する仕組みが存在していなかった。一方で、文学、音楽、絵画、彫刻といった芸術分野には、既に社会に認知された表彰制度が存在していた。議事録には、本賞の創設理念として、建築に対する考え方 (Baugesinnung) を広く市民に問うことと、チューリッヒ市の都市景観 (das Stadtbild Zürichs) の中で建築がどうあるべきかを考えることの重要性を記している。賞の仕組みの詳細については、以下の通りである。第 1 に、本賞は 2 年毎に開催される。第 2 に、本賞は建築家に対してではなく、施主に対してのものである。第 3 に、賞金はない。その代わりに、授賞者には、表彰状と記念プレートが授与

表 2-1-1 チューリッヒ市建築賞受賞作品一覧

No	Name	Client	竣工年	建築種別	
1	1	Überbauung am Katzenbach	Baugenossenschaft Glattal	1946	集合住宅
	2	Arbeitersiedlung im Riedacker <Sunnige Hof>	Siedlungsgenossenschaft Sunnige Hof	1943	集合住宅
	3	Engepark	Immobilien-gesellschaft Turicasa AG	1943	集合住宅
	4	Geschäftshaus Pelikan	D. Lanfranchi, W. Fuchs	1947	オフィス
	5	Bellaria-Park	Baugesellschaft Zürich AG	1945	集合住宅
	6	<Sonnengarten-Goldacker>	Baugenossenschaft Sonnengarten	1949	集合住宅
	7	Bleicherhof	Immobilien AG Bleicherweg	1940	オフィス
	8	Rentenanstalt	Schweizerische Lebensversicherungs- und Rentenanstalt	1939	オフィス
	9	Kolonie Wasserwerk	Baugenossenschaft des Eidgenössischen Personals	1947	集合住宅
2	10	Siedlung <In der Ey>	Baugenossenschaft Schönheim	1949	集合住宅
	11	<Lux-Hof>	Immobilien-gesellschaft Schimmeihof AG	1948	集合住宅
	12	Überbauung <Im Herrlig>	Allgemeine Baugenossenschaft Zürich (ABZ)	1948	集合住宅
	13	Siedlung Staudenbühl	Gewerkschaftliche Wohn- und Baugenossenschaft GEWO BAG	1950	集合住宅
	14	Siedlung am Burriweg	Genossenschaft der Baufreunde	1949	集合住宅
3	15	First Church of Christ Scientist	First Church of Christ Scientist	1938	教会
	16	Kolonien am Glattbogen	ASIG Arbeiter-Siedlungsgenossenschaft Zürich	1952	集合住宅
	17	Alterssiedlung <Espenhof>	Stiftung Wohnungsfürsorge für betagte Einwohner der Stadt Zürich	1952	医療・福祉
	18	Mehrfamilienhäuser	Jakob Maurer	1954	集合住宅
	19	Wohnbauten Hohenbühl	Erben D. Schindler-Huber	1953	集合住宅
	20	Geschäftshaus Talgarten	Immobilien Besitz AG Zürich	1952	オフィス
	21	Kirchgemeindehaus Schwamendingen	Reformierte Kirche Schwamendingen	1954	教会
	22	Siedlung In der Au	Stiftung Wohnungsfürsorge für kinderreiche Familien der Stadt Zürich	1953	集合住宅
	23	Überbauung Mühlezelg	Siedlungsgenossenschaft Sunnige Hof	1950	集合住宅
	24	Kirche Altstetten	Reformierte Kirche Altstetten	1942	教会
	25	Sihlgarten	Weltwoche-Verlag, Karl von Schumacher & Co.	1948	オフィス
	26	Liegenschaften Letten	Baugenossenschaft berufstätiger Frauen	1952	集合住宅
	27	Siedlung Köschenrüti	Baugenossenschaft Schönau	1949	集合住宅
	28	Wohnbau mit Läden am Talwiesenplatz	Frau Kath. Koradi, Hch. Koradi jun.	1951	集合住宅
	29	Büro- und Wohlfahrtshaus	Maschinenfabrik Escher Wyss, Aktiengesellschaft	1949	オフィス
30	Geschäftshaus Langstrasse	Edwin Schönbacher	1952	オフィス	
31	<Zum Einhornli>	G. & P. Martellosio und Robert Seyffer	1952	集合住宅	
4	32	Markus-Kirche Seebach	Reformierte Kirche Seebach	1948	教会
	33	Freibad Oberer Letten	Stadt Zürich	1952	スポーツ
	34	Autoreparaturwerkstätte	AMAG Automobil- und Motoren-AG	1956	産業施設
	35	Schulhausanlage <Untermoos>	Stadt Zürich	1955	学校・大学
	36	Tramwarte-halle	Stadt Zürich	1956	駅・公園
	37	Schulhausanlage <Chriesiweg>	Stadt Zürich	1956	学校・大学
	38	Gewerbehäuser Eichstrasse	Ernst Göhner AG	1956	オフィス
	39	Geschäftshaus Waltisbühl	Erbengemeinschaft Anton Waltisbühl	1957	商業施設
	40	Verwaltungsgebäude	Aluminium Industrie AG	1957	オフィス
	41	<Zur Bastei>	AG Heinrich Hatt-Haller	1955	オフィス
	42	Überbauung <In der Zelg>	Karl Ochsner-Krämers Erben	1956	集合住宅
	43	Einfamilienhaus Zollikerstrasse	Hans und Annemarie Hubacher-Constam	1955	戸建住宅
44	Schulhausanlage <Luchswiesen>	Stadt Zürich	1957	学校・大学	
5	45	Freibad und Primarschule Auhof	Stadt Zürich	1958	学校・大学
	46	Doppeleinfamilienhaus Sillerwies	Nr. 7: Philipp Bridel; Nr. 9: Max Ziegler, in Firma Schucan & Ziegler	1957	戸建住宅
	47	Doppelhaus, 4. Etappe	Baugenossenschaft Kleweid	1959	集合住宅
	48	Clubhaus	Schweizerische Rückversicherungsgesellschaft Zürich	1958	スポーツ
	49	Mehrfamilienhaus Bächtoldstrasse	Dr. Eugen Curti	1961	集合住宅
	50	Geschäftshaus Textor	Jacob Textor	1958	オフィス

No	Name	Client	竣工年	建築種別	
5	51	Saal- und Geschäftshaus Lindenplatz	Initiativ-Genossenschaft Lindenplatz Altstetten	1958	複合施設
	52	Familienheim-Genossenschaft Zürich, Bauetappe 19	Familienheim-Genossenschaft Zürich (FGZ)	1960	集合住宅
	53	Kirchgemeindehaus Hottingen	Kirchgemeinde Hottingen	1959	教会
	54	Einfamilienhaus Leutert	Jakob Leutert	1960	戸建住宅
	55	Alterssiedlung Waldgarten	Stiftung Wohnungsfürsorge fürbetagte Einwohnerder Stadt Zürich	1959	医療・福祉
	56	Bosshardhaus	H.U. Bosshard	1958	オフィス
	57	Geschäftshaus Üetlibergstrasse	Tages-Anzeiger für Stadt und Kanton Zürich, Imago Tiefdruckanstalt AG	1960	オフィス
	58	Affenhaus	Genossenschaft Zoologischer Garten Zürich	1959	スポーツ
	59	Sportanlage Letzigrund	Stadt Zürich	1958	スポーツ
	60	Einfamilienhaus Wirzenweid	Dr. H. Müller	1957	戸建住宅
	61	Jugendheim <Erika>	Stadt Zürich	1963	医療・福祉
	62	Terrassenhaus	Georges Boesch	1960	集合住宅
	63	Überbauung Hirzenbach	H.Koella, Baugenossenschaft der Baufreunde Zürich	1961	集合住宅
	64	Kantonsschule Freudenberg	Baudirektion des Kantons Zürich	1959	学校・大学
6	65	Verwaltungs- und Betriebsgebäude Herdern	Genossenschaft Migros, Zürich	1964	オフィス
	66	Veterinärmedizinische Fakultät der Universität Zürich und Kantonales Tierspital	Baudirektion des Kantons Zürich	1963	学校・大学
	67	Erweiterungsbau	Tages-Anzeiger für Stadt und Kanton Zürich AG	1962	オフィス
	68	Kirche Saatlén	Reformierte Kirche Gemeinde Zürich-Schwamendingen	1964	教会
	69	Gewerbehau Hardturmstrasse	Ernst Göhner AG, Zürich, Brauerei Eichhof, Luezen	1963	オフィス
	70	Werkschulhaus Hardau	Stadt Zürich	1965	学校・大学
	71	Einfamilienhaus mit Atelier	Edwin Schoch	1964	戸建住宅
	72	Post- und Telefongebäude Hirslanden	Direktion der Eidgenössischen Bauten, Bern	1965	オフィス
	73	Einfamilienhaus Wasserstrasse	Lorenz Moser	1964	戸建住宅
	74	Schulhaus Riedhof	Stadt Zürich	1963	学校・大学
	75	Erweiterungsbau Schulhaus	Stadt Zürich	1964	学校・大学
76	<In der Ey>	Werner Keller	1961	集合住宅	
77	<La Residence>	Hansjörg Seitzmeir & Co.	1964	集合住宅	
7	78	Afrikahaus	Genossenschaft Zoologischer Garten Zürich	1965	スポーツ
	79	Überbauung <Zum Bauhof>	Dr. H. und Frau I. Reimann-Bächtold	1967	複合施設
	80	Kasino Zürichhorn	Stadt Zürich	1964	スポーツ
	81	Andreaskirche im Heiligfeld	Reformierte Kirche Gemeinde Sihlfeld	1964	教会
	82	Freizeitanlage Heuried	Stadt Zürich	1964	スポーツ
	83	<Kantorei>	Verein Verbindungshaus Zürcher Singstudenten	1968	商業施設
	84	Bally-Haus	Immobilien AG Eterna	1967	商業施設
	85	Jugendherberge	Stadt Zürich	1966	商業施設
	86	La Maison d'Homme, Centre Le Corbusier	Heidi Weber	1967	美術館
	87	Geschäftshaus Schmelzbergstrasse	Verband Schweiz. Schreinermeister und Mobelfabrikanten VSSM	1967	オフィス
	88	Wohnsiedlung Friesenberg	Stiftung Wohnungsfürsorge für kinderreiche Familien der Stadt Zürich	1965	集合住宅
8	89	Wohnsiedlung Glaubten III	Stadt Zürich	1969	集合住宅
	90	Stadtsptal Triemli II und Maternité	Stadt Zürich	1970	医療・福祉
	91	Bahnhof Altstetten	Schweizerische Bundesbahnen, SBB Kreis III, Zürich	1968	複合施設
	92	Mensa der Universität Zürich	Baudirektion des Kantons Zürich	1969	学校・大学
	93	Töchterchule IV	Stadt Zürich	1966	学校・大学
	94	Geschäftshaus Patria	Patria Schweizerische Lebensversicherungs-Gesellschaft Basel	1969	オフィス
	95	Wohnsiedlung Unteraffoltern	Stadt Zürich	1970	集合住宅

No	Name	Client	竣工年	建築種別	
8	96	Geschäfts- und Quartierzentrum Witikon	K. Ochsner-Krämers Erben	1970	商業施設
	97	Geschäftshaus Mythenquai	Schweizerische Rückversicherungs-Gesellschaft	1969	オフィス
	98	Geschäftshaus <Les Ambassadeurs>	Les Ambassadeurs AG	1971	商業施設
	99	Geschäftshaus SUIZA	SUIZA, Gesellschaft der Urheber und Verleger	1968	オフィス
9	100	Geschäftshaus Modissa	Modissa AG	1975	商業施設
	101	Hallenbad Altstetten	Stadt Zürich	1973	スポーツ
	102	Überbauung Kolonie Wiedikon	Allgemeine Baugenossenschaft Zürich (ABZ)	1975	集合住宅
	103	Schulhaus und Freizeitanlage Loogarten	Stadt Zürich	1975	学校・大学
	104	Jugendsiedlung Heizenholz	Stadt Zürich	1973	医療・福祉
	105	Primarschulhaus Sihlweid	Stadt Zürich	1975	学校・大学
	106	Pfarrzentrum Maria-Hilf	Römisch Katholische Kirchengemeinde St. Franziskus	1974	教会
	107	Kirchliches Zentrum St. Katharina Affoltern	Römisch Katholische Kirchengemeinde St. Katharina	1974	教会
	108	Überbauung Wehrenbachhalde	Erbengemeinschaft Prof. Werner M. Moser, vertreten durch T. Styczynski	1975	集合住宅
	109	Atelierhaus	Ernst Gisel	1973	オフィス
	110	Kirchgemeindehaus Aussersihl	Reformierte Kirchengemeinde Aussersihl	1974	教会
	111	Erweiterungsbau Kunsthaus	Stiftung Zürcher Kunsthaus	1976	美術館
	112	Laubenganghäuser	Eisenbahner-Baugenossenschaft <Dreispietz Zürich-HB>	1973	集合住宅
	10	113	Gewebeschulhaus	Stadt Zürich	1972
114		Wohnsiedlung Heuried	Stadt Zürich	1975	集合住宅
115		Mehrfamilienhaus Wettingerwies	Marianne Gisel	1978	集合住宅
116		Fernbetriebszentrum 3, Zürich-Herdern	Generaldirektion PTT, vertreten durch die Hochbau-abteilung, Bern	1978	産業施設
117		Hallenbad Oerlikon	Stadt Zürich	1983	スポーツ
118		Botanischer Garten und Instituts-Neubauten der Universität Zürich	Direktion der öffentlichen Bauten des Kantons Zürich	1976	駅・公園
119		Universität Zürich-Irchel	Direktion der öffentlichen Bauten des Kantons Zürich	1978	学校・大学
120		Alterswohnheim <Grünhalde>	Verein für Alters- und Pflegeheime Zürich-Seebach	1977	医療・福祉
121		Wohnanlage Dolderpark	Erbengemeinschaft Schinz	1979	集合住宅
122		Schulhaus Grünau	Stadt Zürich	1977	学校・大学
11	123	Wohnüberbauung Gutstrasse	Siedlungsgenossenschaft Eigengrund	1979	集合住宅
	124	Überbauung Manessehof	Familienheim-Genossenschaft Zürich (FGZ)	1984	集合住宅
	125	Kirchliches Zentrum <Suteracher>	Evang.-reformierte Kirchengemeinde	1982	教会
	126	Stadelhofer Passage	Spaltenstein AG Immobilien	1983	商業施設
	127	Einfamilienhaus Krähbühlweg	Dr. Erwin P. Nigg	1983	戸建住宅
	128	Im Altried	Baukonsortium Altried	1982	集合住宅
	129	Krankenhaus Witikon	Stadt Zürich	1984	医療・福祉
	130	Druckereigebäude Bubenberg	Tages Anzeiger AG	1983	産業施設
	131	Reiheneinfamilienhäuser Kienastewiesweg	W. und S. Hüslers-Vogt	1983	集合住宅
	132	Wohnüberbauung Winzerhalde	Matthys Immobilien AG, Siedlungsgenossenschaft Eigengrund Zürich	1982	集合住宅
	133	Wohn- und Bürohaus Keltenstrasse	Claude Paillard	1981	集合住宅
	134	Bürohaus Münzplatz	Bank J. Bär & Co. AG	1984	オフィス
	12	135	Lehrlingsausbildungszentrum BBC, Werk Oerlikon	BBC Aktiengesellschaft Brown, Boveri & Cie.	1982
136		Zeichensäle	Schulleitung der ETH Zürich, Amt für Bundesbauten, Baukreis IV	1987	学校・大学
137		Werkbundsiedlung Neubühl	Genossenschaft Neubühl	1987	集合住宅
138		Wohn- und Ateliergebäude REZ	Aktiengesellschaft REZ Häuser, Hauptaktionärin Katharina Züst-Felle	1986	集合住宅
139		Aufnahmegebäude Bahnhof Stadelhofen	Schweizerische Bundesbahnen, SBB Kreis III, Zürich	1989	駅・公園

No	Name	Client	竣工年	建築種別	
12	140	Erweiterung Bahnhof Stadelhofen	Schweizerische Bundesbahnen, SBB Kreis III, Zürich	1990	駅・公園
	141	Villa Meyer	Dr. Franz und Pia Meyer-Federspiel	1986	戸建住宅
	142	Wohnhaus Josefstrasse	Erbengemeinschaft Peter Müller, Bruno und Frank Gloor	1988	集合住宅
	143	Mehrfamilienhaus <Reinachergüetli>	Käthi und Jean Robert-Durrer	1987	戸建住宅
	144	Geschäftshaus Marti	Marti Unternehmungen AG	1987	オフィス
	145	Hörsaaltrakt Universitätsspital Zürich	Hochbauamt des Kantons Zürich, P. Schatt, R. Drescher, M. Hofer	1990	医療・福祉
	146	Rotachhäuser	Ruggero Tropeano, Cristina Tropeano-Pfister, Germaine Stamm	1990	集合住宅
13	147	Geschäftshaus Apollo	Schweizerische Bankgesellschaft	1991	オフィス
	148	S-Bahnhof Museumstrasse und unterirdische Ladenpassagen	Schweizerische Bundesbahnen, Kreisdirektion III	1990	駅・公園
	149	Technopark Zürich	Technopark Immobilien AG	1993	オフィス
	150	Villa Bleuler	Schweizerisches Institut für Kunstwissenschaft	1993	オフィス
	151	Konferenzgebäude Grünenhof	Schweizerische Bankgesellschaft	1991	オフィス
	152	Boutique Issey Miyake	Erica Ouie AG	1991	商業施設
	153	Überbauung Brahmshof	Evangelischer Frauenbund Zürich	1991	集合住宅
14	154	Umnutzung Waschanstalt Wollishofen	Lienhardt & Partner Privatbank AG	1991	複合施設
	155	Oerliker Park	Stadt Zürich	1991	駅・公園
	156	Bürogebäude SVA	Sozialversicherungsanstalt des Kantons Zürich	1998	オフィス
	157	Wohnüberbauung Selnau	Stadt Zürich	1995	集合住宅
	158	Wohnüberbauung Im Föhrenhain	Credit Suisse Real Estate Fund Siat, Credit Suisse Asset Management	2000	集合住宅
	159	Mehrfamilienhaus Kurfürstenstrasse	Stockwerkeigentümer-gemeinschaft "Kurfürst" Vertreten durch Wüest & Partner	2000	集合住宅
	160	Zwei Häuser Krattenturmstrasse	Bühlmann-Eschmann	1998	戸建住宅
	161	Haus in der Hub	Stockwerkeigentümer-gemeinschaft "Hubacht"	1998	集合住宅
	162	Mehrfamilienhaus Bäckerstrasse	Iwan und Manuela Wirth-Hauser	2000	集合住宅
	163	Umbau und Aufstockung Geschäftshaus Hohlstrasse	Halvetia Patria Versicherungen	2001	オフィス
15	164	Umbau Bürogebäude Susenbergstrasse	Mutschler Immobilien AG	2001	オフィス
	165	Pneushop - Art Exchange	Christian Schaller	2002	商業施設
	166	Schulhaus Ahorn	Stadt Zürich	2002	学校・大学
	167	Heilpädagogische Schule Zürich	Stadt Zürich	2000	学校・大学
	168	Wohnüberbauung Hagenbuchrain	Baugenossenschaft Sonnengarten, Zürich	2004	集合住宅
	169	Wohnüberbauung Brombeeriweg	Familienheim-Genossenschaft Zürich (FGZ)	2003	集合住宅
	170	Wohnüberbauung Pflögi-Areal	Stiftung Diakoniewerk Neumünster - Schweizerische Pflegerinnenschule, Zürich	2002	集合住宅
	171	Mehrfamilienhaus Forsterstrasse	Gisela Kerez	2003	集合住宅
	172	Mehrfamilienhaus am Fuss des Üetlibergs	Andreas Fuhrmann, Gabrielle Hächler, Balz Roth, Pipilotti Rist, Zürich	2004	集合住宅
	173	Mehrfamilienhaus Altstetterstrasse	Pensionskasse Käppeli Unternehmungen, Wohlen	2003	集合住宅
	174	Wohn- und Geschäftshaus Hohlstrasse	Stiftung PWG, Zürich	2005	集合住宅
	175	<Greulich> Hotel, Restaurant, Bar, Wohnungen	Dr. Thomas B. Brunner, Zürich	2003	商業施設
	176	Park Hyatt Zürich	Hyatt International EAME LTD., Lausanne	2004	商業施設
	177	Fachhochschule Sihlhof	KV Schweiz, SKV Immobilien AG, Zürich	2003	学校・大学
	178	Erweiterung und Sanierung Schulanlage Mattenhof	Stadt Zürich, Hochbaudepartement	2003	学校・大学
16	179	IBM Schweiz	Allreal Generalunternehmung AG, Zürich	2004	オフィス
	180	Bibliothekseinbau und Aufstockung	Baudirektion des Kantons Zürich	2004	学校・大学
	181	Pavillon am Hafen Riesbach	Stadt Zürich, Hochbaudepartement	2004	駅・公園
	182	MFO Park	Grün Stadt Zürich	2002	駅・公園
	183	Wohnüberbauung Aspholz Nord	BVK Personalvorsorge des Kantons Zürich	2007	集合住宅
	184	ABZ Siedlung Wolfswinkel	ABZ, Allgemeine Baugenossenschaft Zürich	2007	集合住宅
	185	Mehrfamilienhaus Rondo	Rondo-Bau GmbH	2007	集合住宅

No	Name	Client	竣工年	建築種別
186	Wohnsiedlung Werdwies	Stadt Zürich, Amt für Hochbauten und Liegenschaftenverwaltung	2007	集合住宅
187	Seniorenresidenz Spirgarten	Atlas Stiftung	2006	集合住宅
188	Wohn- und Geschäftshaus Selnastrasse	Einfache Gesellschaft Selnau	2009	複合施設
189	Gesamtsanierung SIA Haus	SIA Haus AG	2008	オフィス
190	Ringelreigen	Stadt Zürich, Amt für Hochbauten	2006	駅・公園
191	Im Viadukt	Stiftuna PWG	2010	商業施設
192	Museum Rietberg	Stadt Zürich, Amt für Hochbauten	2006	美術館
193	Schulhaus Leutschenbach	Stadt Zürich, Amt für Hochbauten	2009	学校・大学

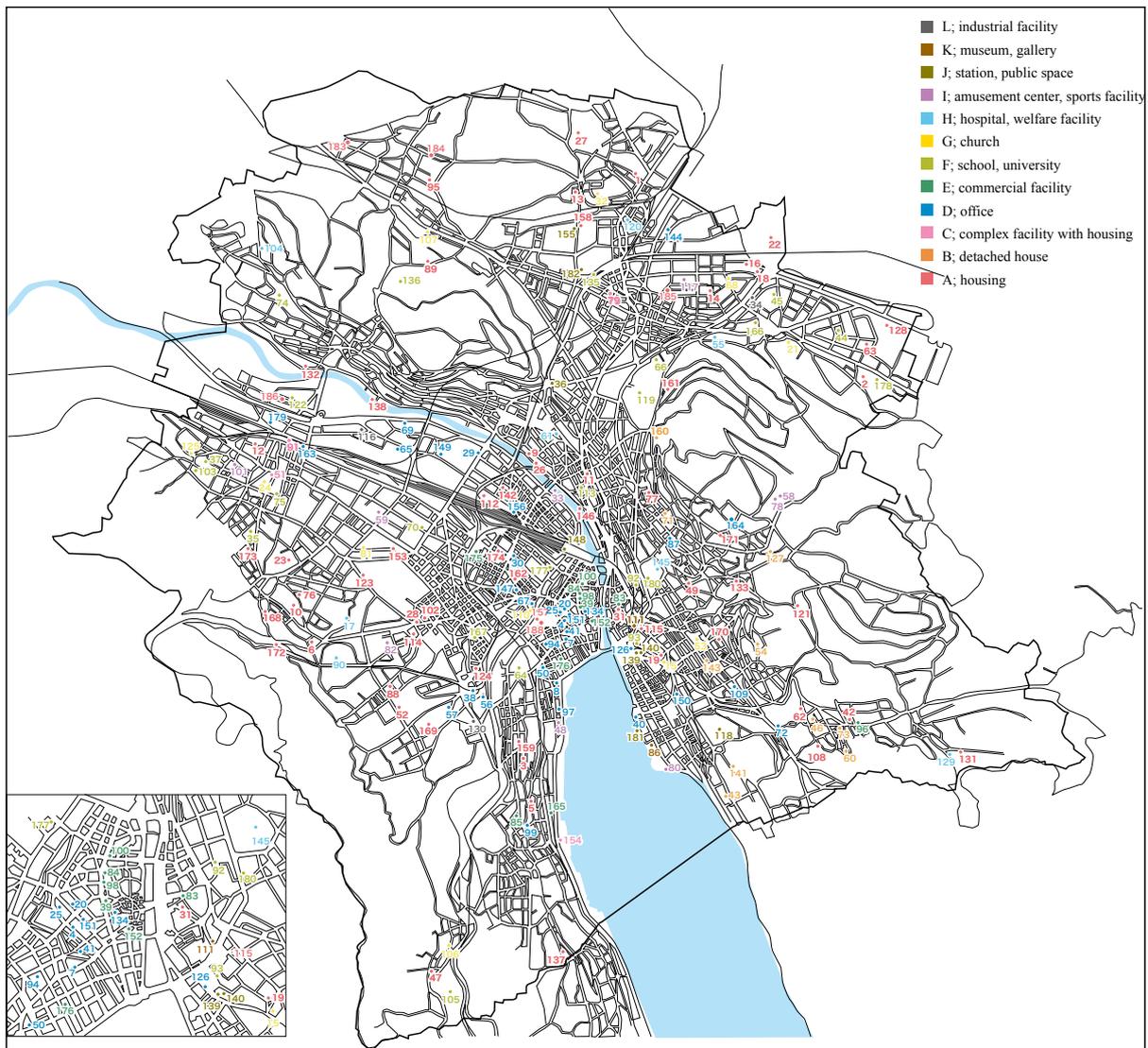


図 2-1-1 チューリッヒ市建築賞受賞作品分布

される。第4に、毎回10～12作品が選定される。第5に、審査委員会は、市当局から3名、スイス連邦工科大学（ETH）から1名、民間の建築家から3名。審査員の任期は4年（2回の審査）である。第6に、第1回の審査は1946年に開催予定である。1945年議事録には、このような賞の創設背景と理由が簡潔に明記されている。審査において、60余年の間に審査員構成に関して若干の変更が見られるものの、本賞の指針は1945年の創設時とほぼ同じである<sup>3)</sup>。

本賞の注目すべき点として、チューリッヒ市の都市景観に寄与する建築物に対する賞であること、また、本賞は設計者のみならず、施主に対してのものであることがあげられる。新たな賞の創設にあたり、市当局は、市の都市計画の政策に則った建築を重視すること、さらに、建築の専門家に対しての評価というよりも、市民の建築に対する意識を啓蒙することを動機としていたものと考えられる。BSAチューリッヒ支部は、本賞創設にあたり重要な役割を担っていたものの、審査員構成との関連は見られなかった。したがって、本賞の運営に関しては、最初から市当局に委ねられていたものと考えられる。

## 第2節 審査員構成

本節では、審査員構成に着目し、全16回の特徴を明らかにする（表2-2-1）。審査員の属性を、市当局、民間建築家（ETH教授を含む）に分類して考察をすすめる。

### §2-2-1. 市当局に所属する審査員

第1回（1947年）は、7名の審査員で構成される。その内訳は、市長（Stadtpräsident）が審査委員長をつとめ、市参事会員（Stadtrat）で建築局II（Bauamt II）の局長、Stadtbaumeister、ETH教授、民間建築家3名である。第2回（1950年）は、市長がAdolf LüchingerからEmil Landoltに交代し、Landoltは審査委員長として第6回まで任にあっている。第3回（1954年）になると、市長とStadtbaumeister以外の審査員は全て入れ替わった。第3回までのStadtbaumeister、A. H. Steinerは、田園都市構想に基づいて新たな住宅地開発を推進した人物である。また、後にSteinerからStadtbaumeisterを引き継ぐことになる、Adolf Wasserfallenは、開発用地に対する特別補助金を交付することで、市内の大規模開発を推進することになるが<sup>4)</sup>、第3回の時点で、初めて補足の審査員として登用される。Wasserfallenは、後にStadtbaumeisterとして、第4回（1957年）から第11回まで審査に携わる。第7回（1968年）は、審査委員長を担っていた市長が、E. LandoltからSigmund Widmerに交代した。Widmerは建築局IIの局長として、第3～6回まで審査員を勤めていた。また、第7回から建築局IIの副局長も審査員に加わることとなった。これによって、市当局に所属する審査員の数は、審査員全8名中4名を占めることとなった。第7回に市当局から登用された4名は、第10回まで審査を継続している。第11回（1985年）は、市長と建築局II局長が交代した。第12回（1990年）は大きな変化が見られた。参事会員Ursula Kochが1986年に建築局II局長に就任し、Hans-Ruolf RüeggがStadtbaumeisterに登用された。市長と建築局II副局長は審査員から外れ、U. Kochが建築局II局長として新たに審査委員長になった。さらに、今回から初めて文化財保護、建築許可、建築法規の職員がアドバイザー（Beratende Stimme）として審査に加わった。彼らは、自らの専門から意見を

表 2-2-1 チューリッヒ市建築賞の審査員構成

Jurymitglieder		1	2	3	4	5	6	
Architekten		1945-1947	1947-1950	1950-1954	1954-1957	1957-1961	1961-1965	
Beratende Stimmen								
<b>Dr. A. Lucinger, Stadtpräsident</b>								
<b>Hrsh. Oetiker, Stadtraat</b>								
<b>Albert H. Steiner, Stadtbaumeister</b>								
Prof. Dr. h. c. Hans Hofmann, Zürich								
Hans Leuzinger, Zürich								
Werner M. Moser, Zürich								
Josef Schutz, Zürich								
<b>Dr. E. Landolt, Stadtpräsident</b>								
<b>Dr. Sigmund Widmer, Stadtrat (-1965), Stadtpräsident (1965-)</b>								
<b>Adolf Wasserfallen, Adjunkt (-1954), Stadtbaumeister (1954-)</b>								
Otto Dreyer, Luzern								
Arthur Durig, Basel								
Werner Krebs, Bern								
Henry G. Lasemann, Genf								
Hermann Baur, Basel								
Hans Reinhard, Bern								
Arthur Lozeron, Genf								
<b>Edwin Frech, Stadtrat</b>								
<b>Dr. R. von Tschärner, Abteilungssekretar des Bauamtes II</b>								
Prof. Alberto Camenzind, Zürich								
Fritz Haller, Solothurn								
Max Schlup, Biel								
Frederic Brugger, Lausanne								
Paul Biegger, Stadtbaumeister St. Gallen								
Prof. Franz Oswald, Hinterkappelen								
Florian Vischer, Basel								
Wilfried Steib, Basel								
<b>Dr. Thomas Wagner, Stadtpräsident</b>								
<b>Hugo Fahrner, Stadtrat</b>								
Mario Campi, Lugano								
<b>Dr. Ursula Koch, Stadtratin, Vorsitz</b>								
<b>Hans-Rudolf Ruegg, Stadtbaumeister</b>								
Katharina Steib, Basel								
Prof. Karljosef Schattner, Eichstatt, BRD								
Dieter Nievergelt, Denkmalspfleger								
Beat Maeschi, Leiter Bauberatung und -begutachtung								
Dr. Christoph Schaub, Jurist im Zentralsekretariat des Bauamtes II								
<b>Kathrin Martelli, Stadtratin (-1994), Vorsteherin Hochbaudepartement (2002-)</b>								
Prof. Hans Kollhoff, Berlin, BRD								
Peter Zumthor, Haldenstein								
Dr. Dominik Bachmann, Jurist im Zentralsekretariat des Bauamt II								
<b>Dr. Elmar Ledergerber, Vorsteher Hochbaudepartement (-2001), Stadtpräsident (2001-)</b>								
<b>Josef Estermann, Stadtpräsident</b>								
<b>Franz Eberhard, Direktor des Amtes für Städtebau</b>								
Wiel Arets, Architekt, Maastricht								
Ulrike Jehle-Schulte Strathaus, Direktorin Architekturmuseum, Basel								
Heinz Tesar, Architekt, Wien (entschuldigt)								
Roderick Honig, Architekturkritiker, Bern (für Heinz Tesar)								
Jan Capol, Leiter Archäologie und Denkmalpflege, Amt für Städtebau								
Jürg Rehsteiner, Leiter architektonische Beratung, Amt für Städtebau								
Monica Barth, Rechtsabteilung, Hochbaudepartement								
Eva Keller, Herisau								
Adolf Krischanitz, Wien								
Matthias Ackermann, Basel								
Winy Mass, Rotterdam								
Regula Iseli, Projektleiterin, Amt für Städtebau								
<b>André Odermatt, Vorsteher Hochbaudepartement (Vorsitz)</b>								
<b>Corine Mauch, Stadtpräsidentin</b>								
<b>Patrick Gmür, Direktor Amt für Städtebau</b>								
<b>Brigit Wehrli, Direktorin Stadtentwicklung Zürich</b>								
Elisabeth Boesch, Architektin, Zürich								
Andrea Deplazes, Architekt, Chur								
Annette Gigon, Architektin, Zürich								
Matthias Sauerbruch, Architekt, Berlin								
Luca Selva, Architekt, Basel								
Roland Polentarutti, Jurist, Hochbaudepartement der Stadt Zürich								
<b>Jury Organization</b>	<b>Zurich municipal authority</b>	the Mayor	← as a chair →					
		a member of City Council as a head of Bauamt II	← →					
		Municipal Architect (1998~ the Direktor of Amt für Städtebau)	← →					
		second-in-command of Bauamt II	← →					
	<b>independent architects (including professors at ETH)</b>	architectural adviser of Amt für Städtebau	← →					
professional staffs of Bauamt II or Amt für Städtebau (1998~)		← →						
architects from Zurich		← ×4 architects →		← →				
architects from other Swiss region		← →				← ×3 or →		
	architects from abroad	← →						
	<b>Periods</b>	<b>1</b>	<b>2-1</b>					



述べることができたが、投票権は持たなかった。このようにして、U. Koch と H-R. Rüegg は第 12、13 回の審査において、以前よりも大きな影響を与えることとなった。U. Koch は、「チューリッヒは建設され尽くした (Zürich ist gebaut)<sup>5)</sup>」という声明を出し、後のリノベーションへの重要な政治的発言をしている。1997 年 3 月、建築局は組織改編を行なった<sup>6)</sup>。それまでの Stadtbaumeister 制は廃止され、都市空間と景観の質をアーバニズムの観点から担う、都市計画部 (Amt für Siedlungsplanung、1999 年に Amt für Städtebau に改称) が新設された。注目すべき点として、これまでの Stadtbaumeister が、公共建築の計画、実施と都市景観の中で建築を評価することを両方担っていたのが、都市計画部が後者の評価の部分の責務を負うことになったことである。この組織改編によって、第 14 回(2001 年)の審査員構成は大きく変化した。全審査員が入れ替わり、市長が審査員に再び登用されることとなったが、審査委員長は依然として建築局長が担っていた。都市計画部からのアドバイザーの登用によって、都市デザイン的な視点からの審査が強調されることとなった。さらに、第 15 回 (2005) は、市当局の審査員とアドバイザーが殆ど変わらなかったのに対し、民間建築家は全て入れ替わった。これによって、都市計画部が本賞の審査において主要な役割を担うようになったといえる。

## § 2-2-2. ETH 教授と民間建築家の審査員

市当局の審査員がそれほど大きく変化しなかったのに対し、ETH の教授や民間建築家は 2 回の審査で入れ替わる状況が殆どであった。第 1 回では、ETH から Hans Hofmann (1897-1957)、Werner Max Moser に加え、チューリッヒ市出身の建築家達が審査員になった。第 1 回の審査の後で、W. M. Moser は建築局 II 局長に対して懸念を示した。Moser は、選出された住宅が「建築的に優れた業績」を示していないことを批判し、市による具体的な評価基準が示されるべきだと主張した<sup>7)</sup>。彼はさらに、今後は、チューリッヒ市外部からの審査員によって審査がなされるべきだと提案した。第 3 回からはチューリッヒ市からの建築家の登用はなくなり、ルツェルン、バーゼル、ベルン、ジュネーヴといったスイスの他都市から建築家を登用することになった。こうした動きに合わせて、BSA チューリッヒ支部は本賞の運営から退いた。建築家の登用の状況全般を見ると、第 12 回までは 2 回の審査毎 (最長でも 3 回の審査) に入れ替わっている。第 12 回は、初めてスイス国外の専門家として、ドイツから Karljosef Schattner が審査員に登用された。第 13 回以降は、民間建築家、教授は国外からの審査員も含めて、毎回交代している。例えば、審査員のリストに目を向けると、ドイツの建築家で ETH 教授でもある Hans Kollhof やクール出身の Peter Zumthor が第 13 回の審査に加わり、オランダのマーストリヒトから Wiel Aretz が第 14 回の審査をしている。

以上より、3 つの所属から本賞の審査員構成を大きく 4 期に分けることができる。第 1 期は、Stadtbaumeister、A. H. Steiner と BSA チューリッヒ支部の構成員による時代 (第 1、2 回)。第 2 期は、Stadtbaumeister、A. Wasserfallen と市当局が指導力を発揮し、チューリッヒ市外出身の建築家を招聘していた時代 (第 3 ~ 11 回)。第 3 期は、リノベーションの標語を掲げた参事会員 U. Koch の基で運営された時代 (第 12、13 回)。この時代に、市は国際的に活躍している建築家を審査員の招聘に動き始めている。第 4 期は 1997 年の組織改編の後に、市当局がこれまで以上に本賞の運営に実行的な役割を担う時代である (第 14 ~ 16 回)。

### 第3節 受賞作品の建築種別と広報の特徴

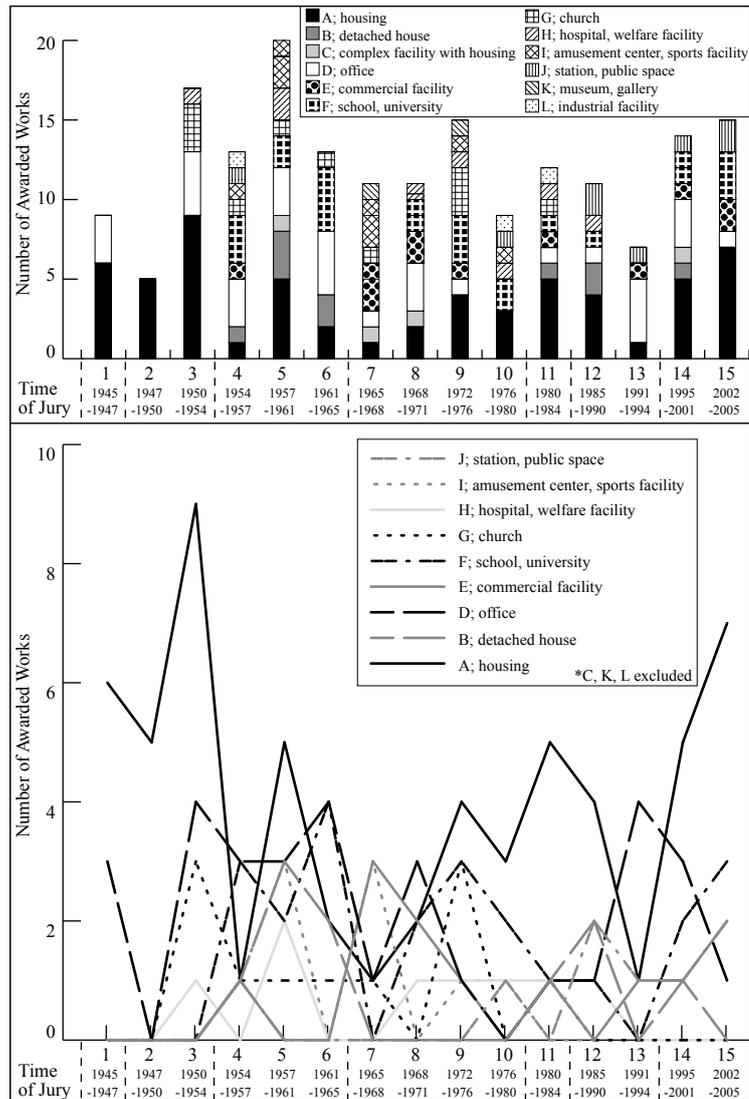
本節では、本賞受賞作品の一般的な特徴を概観した後、建築種別やその他の特徴に着目して、時代の傾向を明らかにすることを目的とし、出版物の特徴にも着目する。次節以下では、集合住宅とその他の建築種別に分けて考察を進める（図 2-3-1）。

#### § 2-3-1. 住宅作品

第1回（1947年）は、集合住宅が全体の67%を占める。集合住宅の施主の属性は、住宅組合（Genossenschaft）と民間の開発業者の両方が見られた。これらの集合住宅は、郊外の大規模な敷地に2～3階の低層住棟が配置され、伝統的な切妻屋根を有している（写真 2-3-1）。第2、3回（1950年）は、全受賞作品が集合住宅、第3回（1954年）は53%が集合住宅だった。第2回の集合住宅は第1回と同じような特徴を持っているが、第3回は、4～6階の中層の住棟が市中心部の周辺に見られるようになった。そのため、郊外の低層住棟による集合住宅の割合は減少している。第4回（1957年）は集合住宅は1件のみの受賞で、その後、第9回（1976年）まで、集合住宅の割合は27%以下となっている。第6回（1965年）までに、伝統的な切妻屋根の集合住宅作品は見られなくなり、代わりに、ボックススタイルの4～5階建てのデザインへと変遷していった。第7回までは市による公営住宅は一件も受賞していなかったが、第8、9回では公営住宅が受賞するようになった。さらに、小・中規模の集合住宅から大規模なものに受賞作品の特徴は変化し、特に、郊外における高層住宅の受賞が特徴的である。第10、11回になると、集合住宅の傾向に大きな変化が見られ、集合住宅の割合が再び増加したが、全ての受賞作品が民間業者によるもので、公営住宅は受賞しなくなった。この時代の集合住宅は小規模なものが多く、前回までの大規模なものとは対照的で、その殆どが郊外に建設されたものであった。第12回（1990年）では、受賞した集合住宅作品全5件中4件が、既存の住宅の改修、若しくは増築であった。これらの施主の属性、階数、住棟の構成は第1、2回と同様の特徴を有していたが、第13回では、僅か1件のみの受賞となった。第14回（2001年）になると、集合住宅の割合は再び増加し、36%を占め、第15回になると、47%まで増加した。これらの集合住宅は全て民間の開発業者によるものであったが、その立地は多岐に及び、19世紀に形成された旧市街の街区の一部を構成するものや、市の中心部から外れた郊外地、さらには、旧工業地域の再開発によって整備された集合住宅も含まれる。



写真 2-3-1 No.6 外観（第1回受賞）



	Floors	Time of Jury														
		1 1945-1947	2 1947-1950	3 1950-1954	4 1954-1957	5 1957-1961	6 1961-1965	7 1965-1968	8 1968-1971	9 1971-1976	10 1976-1980	11 1980-1985	12 1985-1990	13 1990-1994	14 1994-2001	15 2001-2005
Housings	2 Floors	1	2		1							1				
	3 Floors	4	4	2	1					1	3	2		1	1	
	4 Floors	1		2		4				2				1	3	
Volume Composition	5 Floors		1						1		2	1	1	2	2	
	6 Floors		1	2										1	1	
	7~ Floors						1	2	3							
Client	Forming a group	6	4	5	1	1	1	1	1	1	1	1			2	
	Forming a city block			1					2	2	1	1	1	3	2	
	Independent Volume		1	3		4	2		1	1	3	2		2	3	
Other Works	Private Client	6	5	9	1	5	2	1		3	3	5		1	5	7
	Public Client							2	1							
	J; station, public space												○		○	
	I; amusement center, sports facility					○		○								
	H; hospital, welfare facility					○										
	G; church			○						○						
	F; school, university				○	○	○		○	○					○	○
	E; commercial facility							○	○						○	○
D; office	○	○	○	○	○			○					○	○		
B; detached house					○	○						○				
Renovations and Extensions								1	1	1			7	4	1	1
Publication by the City of Zurich											a	b	c	d	e	
Periods (shown on Table 2)		1	transitional periods		2-1		2-2			2-3		3	4			

\*a; Auszeichnung für gute Bauten in der Stadt Zürich 1945-1980. (1980)  
 \*b; Auszeichnung für gute Bauten und Renovationen 1985-1990. (1990)  
 \*c; 50 JAHRE AUSZEICHNUNGEN FÜR GUTE BAUTEN IN DER STADT ZÜRICH. (1995)  
 \*d; Auszeichnung gutes Bauten der Stadt Zürich 1995-2001. (2002)  
 \*e; Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich 2002-2005. (2006)

図 2-3-1 受賞作品の建築種別の推移

### § 2-3-2. 住宅以外の建築種別

第1回(1947年)は、旧市街地に建設されたオフィスが3件受賞した。第2回(1950年)は集合住宅以外の建築種別は一件も受賞しなかったが、第3回(1954年)は、市中心部のオフィス3件、教会3件、福祉施設1件が選出された。これらの受賞者は民間企業であった。第4、5回は、学校、戸建住宅、娯楽施設、スポーツ施設、病院、商業施設、トラムの停留所、産業施設、住宅を伴う複合施設といった新たな建築種別が選出されるようになった。また、市中心部のオフィス(各回3~4件)、既に開発された郊外における学校(各回2~4件)、戸建住宅(各回1~3件)、教会(各回1件)は継続的に受賞している。第4回では初めて公共施設が5件受賞し、その内訳としては、学校3件、トラムの停留所、スポーツ施設が各1件ずつとなった。さらに、第5、6回でも市自身、若しくは、チューリッヒ州(Kanton Zürich)が施主の事例が4件ずつ受賞している。第7~9回の審査では、毎回主要な建築種別は変化している。第7、8回までは、市もしくは州が施主の建物は3件ずつ受賞しているが、第9回では5件に増加している。第10、11回でも、多様な建築種別が受賞する傾向は変わらないものの、各種別の受賞数は、1~2件になっている。第10回の市若しくは州が施主の事例は4件だったが、第11回は1件に減少した。第12回では建築種別の種類や数は第11回に類似するが、第13回では、その割合に変化が生じた。オフィスが前回までの1件から4件と大幅に増加したものの、建築種別としては、3種類のみを選出となった。第14回以降では、オフィス、学校、オープンスペースがそれぞれ異なる視点から評価された。立地が市中心部や旧工業地域、郊外であっても、これらの多くが再開発プロジェクトによるものであった。また、市が施主の事例が、第14回に学校が3件、オープンスペースが1件、第15回に学校4件、オープンスペース1件が選出されていることも注目すべき特徴である(写真2-3-2)。

### § 2-3-3. 改修・増築作品

第7~9回にかけて、改修、増築事例が1件ずつ受賞するようになった。第7回では旧市街に位置するカフェの改修事例が本賞で初めて改修事例として受賞した。その後、第8回の大学のカフェテリアの増築、第9回のアートギャラリーの増築がそれぞれ受賞している。第10、11回では改修、増築事例については一件も受賞していないが、第11回の審査においては、改修の重要性についての議論はされている<sup>8)</sup>。それを受けて、第12回に改修が主要なテーマとなり、全11件中、7件が改修、増築事例であった。第13回においても、審査員が留任している影響もあり、全7件中4件が改修または増築事例となった。第14回以降、改修、増築事例については、単に建築単体に対する評価ではなく、大規模な再開発の一部として評価されたものが受賞している。



写真 2-3-2 No.182 (第15回受賞作品)

#### § 2-3-4. 出版物の特徴

1957年、受賞作品はスイスの有名な建築専門誌 *Bauen, Leben, Wohnen* (No. 29, 1957) 誌上で見開きページ全面1ページを使い、初めて紹介された。この時期は A. Wasserfallen が Stadtbaumeister に就任した時期と同じである。この時期から本賞が専門家の中で広く認知されるようになったものと推察できる。一方、チューリッヒ市が初めて作品集を出版するのは1981年であった。第10回(1980)に、A. Wasserfallen は Stadtbaumeister の任期を終え、建築局 II が作品集 *Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich 1945-1980* を出版した。この本賞初めての作品集には、第1回の審査から35年間の全受賞作品の基本情報が簡潔に纏められている。この経験が後の U. Koch の時代でも引き継がれ、第12回(1990年)の審査の後に、*Auszeichnung für gute Bauten und Renovationen 1985-1990* が出版された。さらに、第13回の審査の後、1995年に、『チューリッヒ市建築賞50年誌』(*50 Jahre Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich*) が出版された。この作品集には、全受賞作品の基本情報に加え、作品の分布図、各回の審査における議事録の抜粋、複数の批評家による論文が掲載されている。第14回以降は、毎回の審査毎に作品集が出版されることになり<sup>9)</sup>、授賞式後に受賞作品の展示会も開催されることになった。第15回の審査後に開かれた展示会は2006年3月24日から4月7日まで開催され、述べ2,500人の来場者があった<sup>10)</sup>。すなわち、1990年の第12回の審査以降、チューリッヒ市の本賞に関する情報をより広く市民に広めようとする姿勢をみることができる。第16回の審査後においても、同様の展示会が開催された。

本節のまとめとして、受賞作品と広報の特徴に着目することで、以下に示すように全16回の審査を幾つかの時代で分けることができよう。まず、第3回で、受賞作品数が増加し、それまでの民間開発業者による低層の集合住宅から、中層の公営住宅へ変化した。また、教会や福祉施設といった新たな建築種別の受賞を確認できた。第4回では、全受賞作品における集合住宅の割合が極端に減少し、多様な建築種別が受賞するようになった。そして、その結果を建築専門誌上で公表することになった。第7回では、高層住宅や改修事例が目立つようになった。第10回になると、中層の集合住宅が再び受賞するようになり、その割合は30%を超え、市当局による出版物の刊行も始まった。公営住宅の割合は減少するが、第13回までその割合はしばしば変化する。第12回は改修や、増築事例に対する評価が高まる一方、広報活動はより活発になっていく。第14回以降は、再開発計画が主題になったのに合わせて、民間、公共を問わず、集合住宅が受賞するようになり、作品集の出版や展示会の開催がより活発になっていく。

#### 第4節 審査員構成・受賞作品の建築種別・広報の傾向

本賞の審査員構成、受賞作品の建築種別、広報に着目することで、本賞の特徴を大きく4期にわけて考察する。

##### § 2-4-1. 第I期(第1、2回:A. H. Steiner とチューリッヒ市出身建築家による田園都市構想に基づく低層集合住宅)

Stadtbaumeister、A. H. Steiner、ETH 教授、BSA チューリッヒ支部所属の民間建築家は、主に郊外

における低層の集合住宅と、市中心部のオフィスを選出した。このことは、A. H. Steiner による田園都市構想に基づく住宅地開発が推進されていた影響によるものと考えられる。市長が A. Lüchinger から E. Landolt に交代した第 2 回では、民間の集合住宅が受賞作品を独占した。評価基準や審査結果は BSA チューリッヒ支部に所属する建築家の審査員にとって曖昧なものだったため、第 2 回の審査の後で、彼らは完全に賞の運営から退くことになった。チューリッヒ市がこの新たな評価、査定の仕組みの発案、実施に強い権限を持つようになった。

## § 2-4-2. 第 II 期（第 3～11 回：A. Wasserfallen の基での高層建築と多様な建築種別）

### 【第 II-i 期（第 3～6 回：低層集合住宅から中層近代集合住宅への変遷）】

この時代は、審査員構成の変化を反映して、受賞作品数が増加した。第 3 回は、A. H. Steiner が Stadtbaumeister として留まり、過去の影響を引く継ぐ点もあったが、後の Stadtbaumeister、A. Wasserfallen やチューリッヒ市以外のスイス出身の建築家が審査員になったことにより、受賞作品は、伝統的な切妻屋根の低層集合住宅から、近代的なボックススタイルの 4～6 階建て中層集合住宅に変遷した。教会や福祉施設が初めて受賞したのも第 3 回である。第 4 回に、A. Wasserfallen は Stadtbaumeister に就任した。全ての審査員が留任したにも関わらず、受賞作品は大幅に変化した。大規模な伝統的な集合住宅開発は見られなくなり、小規模のボックススタイルの計画が受賞するようになった。その一方で、戸建住宅、オフィス、学校、教会等はこれまで通り受賞していた。受賞作品の多くが、それまでに開発が完了した郊外地に建つものであった。市によって計画された公共施設も継続して受賞するようになった。このことは、A. Wasserfallen が大規模な住宅地開発を推進した政策を反映している。

### 【第 II-ii 期（第 7～11 回：市当局の審査員の優勢と高層建築の受賞、石油危機後の建設数の減少）】

A. Wasserfallen が引き続き Stadtbaumeister として審査をするのに加え、建築局 II 副局長も審査員に加わった。第 7～9 回にかけて、郊外に建つ高層の公営住宅が 6 件受賞した。高層建築に反対していた市長 E. Landolt が辞任したことが高層建築の選出に繋がったものと考えられる。また、第 7～9 回にかけて、改修、増築事例が 1 件ずつ選出されている。1987 年には建築史公文書館（Baugeschichtliches Archiv）が Stadtbaumeister の基に吸収され、さらにこの時期のヨーロッパでは、1974 年のヨーロッパ建築遺産憲章（Europäischen Denkmalschutzjahr 1974）の制定などの文化財保護の機運が高まる状況にあった。第 10 回では審査員構成に大きな変化は見られなかったが、受賞作品には明らかな変化が認められた。受賞作品数と建築種別の多様さに加え、改修、増築事例は一つも選出されなかった。その一方で、3～4 階建ての民間業者による集合住宅は著しい増加を示した。1974 年の石油危機の影響は、本賞に対する熱意の衰退を招いた。実際に、第 10 回における申請数は 230 件で、前回の 800 件を大幅に下回ることとなった。その一方で、市は本賞の歴史を纏めた作品集 *Auszeichnung für gute Bauten in der Stadt Zürich 1945-1980* をこうした状況下で 1981 年に出版した。第 11 回には、市長と建築局長の両者が交代した。これ以降、民間建築家の審査員はこれまで以上に頻繁に交代するようになった。集合住宅の割合が増加し、他の建築種別については、受賞を続けるものの、この時代の特徴を表現す

るようなものではなかった。受賞した集合住宅は、比較的小規模で、民間による独立した住宅だった。市または州による受賞作品数は、第10回の4件から第11回には1件に減少した。結果として、石油危機後の審査となった第10、11回は、それ以前に見られたような時代特有の特徴を見出すことができなかった。しかし、振り返ってみると、この時代は、後の期への過渡期と位置づけることができる。

#### § 2-4-3. 第Ⅲ期（第12、13回；U. Kochの基での高密度化した都市の中における改修、増築）

第12回は、民間建築家1名とETH教授1名を除く全審査員が入れ代わった。市長が審査員から外れ、建築II局長U. Kochが審査委員長となった。A. WasserfallenからH-R. Rüeggに交代したことで、市当局からの審査員は全て交代することとなった。新たな制度の下で、市当局から3人のアドバイザーが審査に加わることとなった。また、審査員として、スイス国内、国外の建築家、教授が登用された。U. Kochは初めてリノベーションを主題に掲げ、それによって、改修や増築の事例が増加した。第13回では、全7件中4件が、改修または増築であった。さらに、それまで主流だった建築種別にも大きな変化が生じた。その原因の一つとして、民間建築家、教授の審査員がほぼ全て入れ替わったことがあげられる。これ以降、建築家と教授の審査員は毎回入れ替わることとなった。U. Kochの下で、チューリッヒ市は、評価と査定に関する主導権を握ろうとした反面、より専門的で客観的な視点からの評価がされるよう、実績のある民間建築家の登用を積極的に行なった。さらに、第12回の時点で、市が本賞の作品集の刊行を通して、広く本賞の広報を行ない、市民に対して積極的に情報を公開していたことも指摘できる。

#### § 2-4-4. 第Ⅳ期（第14～16回：新設された都市計画部による再開発に対する査定）

第14回における外部からの審査員は全て新任であった。市当局の審査員は第14、15回と継続するなかで、国際的に著名な建築家を各回毎にスイス国内、国外問わず審査員に招聘した。この時代の全受賞作品数は増加した。民間業者による集合住宅が再び主要な建築種別になると同時に、公共の学校やオープンスペースの事例が市内中心部、旧工業地域、郊外で選出されるようになった。再開発がこの時代の新たなテーマになっていたと思われる。さらにこの時代は、出版や展示の頻度が増え、その成果物も洗練されたものであった。市当局は本賞の運営において先導的な役割を担うこととなった。1997年の組織改編における都市計画部の新設と、都市計画部からのアドバイザーが審査に加わったことにより、アーバニズムの視点から審査が行なわれ、結果として受賞作品の建築種別に変化が生じることとなった。

以上のことから、全16回を全4期に分け、第Ⅱ期についてはさらに2期に分けることで、特徴が明らかになった。各期の変化に伴って、市当局と民間建築家・教授の役割が上手く再調整されてきた。この評価手法は、市当局の主導によるものといえ、さらに、各時代の都市形成の主題に対応している。しかしながら、各期において、建築種別やその他の受賞作品の特徴の多様な変遷は、民間建築家や教授を含む審査員の視点の変化を反映している。

## 第5節 小結

本章では、チューリッヒ市建築賞の歴史を明らかにする上で、審査体制、受賞作品の建築種別、広報の特徴に着目して考察をすすめた。審査員構成と受賞作品の建築種別に関する詳細な分析は、第2節、第3節で、全体の傾向は第4節で明らかにした。この分析によって、チューリッヒ市における60余年にわたる建築評価の理念と手法がどのようなものであったのかを明らかにした。1945年の創設時の理念や基本的な審査員構成を継承する一方、各時代の潮流に合わせた審査を行なっている。このことは、市当局や建築家がどのように新たな建築を評価することが最善か、また、自治体レベルでいかに優れた建築、都市景観形成のために先導することができるかという考え方を反映している。さらに、筆者は第I～IV期の全過程を通して、創設当時の伝統的な評価手法から、現在のチューリッヒ市のより広汎で体系化された査定のあり方への変遷を示そうとした。

## 【第2章注記】

- 1) Daniel Kurz: "Gebremste Grossstadt", archithese, 2005. 06, p. 26
- 2) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle des Stadtrates von Zürich Nr. 2023 vom 12, Oktober, 1945"
- 3) チューリッヒ市都市計画部所属 Regula Iseli 氏への聞き取り調査 (2007年8月10日) による。
- 4) 前掲 1)、pp. 26–27。
- 5) Loderrer Benedikt, "Was Bisher Geschah", *Zürich Wird Gebaut*, Zurich, 2005
- 6) *Neue Zürcher Zeitung*, November 7, 1996
- 7) Inge Beckel, "Zwanglos und Masstäblich", *50 Jahre Auszeichnungen für Gute Bauten in der Stadt Zürich*, Bauamt II der Stadt Zürich, Zurich, 1995, p. 25
- 8) Stadt Zürich, "Auszug aus dem Protokolle des Stadtrates von Zürich Nr.3240 vom 6, November, 1991" 9) *Auszeichnung gutes Bauen der Stadt Zürich 1995-2001*, 2002. *Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich 2002-2005*, 2006. *Auszeichnungen für gute Bauten der Stadt Zürich 2006-2010*, 2011.
- 9) 第14回の作品集: Hochbaudepartement der Stadt Zürich Amt für Städtebau, *Auszeichnung gutes Bauen der Stadt Zürich 1995-2001*, Zurich, 2002. 第15回の作品集: Stadt Zürich Amt für Städtebau, *Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich 2002-2005*, Zurich, 2006. 第16回の作品集: Stadt Zürich Amt für Städtebau, *Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich 2006-2010*, Zurich, 2011.
- 10) 展覧会会場デザインを担当した建築家 Zeno Vogel 氏への聞き取り調査 (2008年6月17日) による。

## 【図版出典リスト】

- 写真 2-3-1、No. 6 外観 (第1回受賞作品); 筆者撮影 (2008)
- 写真 2-3-2、No. 182 (第15回受賞作品); 筆者撮影 (2008)

## 第3章

### 参事会議事録と作品集にみる 創設理念・審査方針・評価基準の変遷と特徴

Transition and Feature of Philosophy, Evaluation Policy and Criterion of the Prize  
Through the Minutes and Statements of the City of Zurich

本章では、チューリッヒ市建築賞 (*Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich*) の公式記録である第1回 (1947年) から第16回 (2011年) までのチューリッヒ市参事会議事録 (*Auszug aus dem Protokolle des Stadtrates von Zürich*、以下、議事録) と本賞作品集に着目し、本賞の創設理念、審査方針、評価基準の変遷と特徴を明らかにするものである。

#### 第1節 『チューリッヒ市参事会議事録』と作品集の性格

本章では、主たる資料として、チューリッヒ市公文書館 (Das Stadtarchiv Zürich) 所蔵の『チューリッヒ市参事会議事録』のうち、1945年のチューリッヒ市建築賞創設に関するものと、第1～16回 (1947～2011年) の計17回の議事録を通読した。この資料は、公文書館で一般に公開されているため、後述する本賞創設時の理念や方針を参照することができる。ここでは、その性格を示すため、議事録に見い出せる審議項目と審査委員数 (行政と建築家に区分)、議事録の全単語数を表3-1-1にまとめた。

1945年の議事録には、創設の理念、運営方法、審査対象、審査員構成、予算の主に5項目の内容が書かれている。第1～16回に共通するのは、賞の理念、審査員構成、審査方針、受賞作品名の4項目である。内容の濃淡はあるが、この点は全ての回で比較可能である。しかし、具体的な評価基準については、第2、10、15、16回の4回にしか見られず、こうした点も考察に値する。

議事録全体の単語数は、第1～9回は800～1300語程度、第10～16回は1200～3000語程度で纏められている。第10回以降は個別の受賞作品に対する解説が記述されるため、より具体的に個別作品の評価内容を理解できるが、第9回までではなく、第1～16回までを同列に比較することは難しい。しかし、議事録は、審査員構成や社会状況が変化する中で、本賞の理念や審査方針が各回でどのようなテーマであったかを読み取れる上で有用である。

また、本賞では、第1～16回の作品の全容を把握するため、関連作品集4冊を収集した。第1～13回までは、前掲の『チューリッヒ市建築賞50年史』に纏められており、第14～16回の3回は、各回で個別に出版されている<sup>9)</sup>。作品集は、建築家による論文、作品の基本情報と写真 (第1～13回は1カット、第14～16回は複数)、図面 (第1～13回は平面図、第14～16回は平面、立面、断面図など複数) を掲載しており、議事録で欠如している個別の作品情報を補完できる。この、作品集は、一般販売された市民向けの公開資料と位置づけられ、市が掲げる建築・都市空間のあり方を市民にア

表 3-1-1 議事録から見出せる審議項目と審査委員数・全単語数

開催回	審査員構成 行 建	基本理念	運営方法	審査対象	予算	審査方針	評価基準	個別作品解説	審査対象数	応募数	審査数	視察数	受賞作品数	議事録の全単語数
0	1945	3	4	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	1017
1	1945-47	3	4	○	○	○	○	×	×	-	×	-	-	876
2	1947-50	4	4	○	○	○	×	○	○	×	-	×	-	1057
3	1950-54	3	4	○	○	○	×	○	×	×	-	×	-	1064
4	1954-57	3	4	○	○	○	×	○	×	×	約500	×	約170	1364
5	1957-61	3	4	○	○	○	×	○	×	×	約800	×	約130	1307
6	1961-65	3	3	○	○	○	×	○	×	×	約1000	×	128	759
7	1965-68	4	4	○	○	○	×	○	×	×	約600	×	89	963
8	1968-71	4	4	○	○	○	×	○	×	×	約600	×	120	806
9	1972-76	4	4	○	○	○	×	○	×	×	約800	×	137	861
10	1976-80	4	4	○	○	○	×	○	○	○	約230	×	110	1313
11	1980-84	4	3	○	○	○	×	○	×	○	153	×	153	1190
12	1985-90	5	4	○	○	○	×	○	×	○	168	×	168	1837
13	1991-94	6	3	○	○	○	×	○	×	○	-	×	-	1282
14	1995-01	6	4	○	○	○	○	○	×	○	×	131	131	1968
15	2002-05	7	4	○	○	○	×	○	○	○	×	124	124	3073
16	2006-10	5	5	○	○	○	×	○	○	○	×	130	130	1634

\*表中「-」は不明を表す。

ピールする役割を担っている。

こうした資料の収集、分析に加え、筆者は、受賞作品全 193 件の現況確認<sup>10)</sup>と、本賞の企画運営担当者であるチューリッヒ市都市計画局 Regula Iseli 氏や審査員 1 名、設計者 4 名、論文執筆者 1 名に聞き取り調査を行ない<sup>11)</sup>、資料からは見出せない情報の収集につとめた。

以上をもとに、建築評価の変遷において通底するものと変化する事項に着目し、社会情勢、変化の要因を見出し、特徴を考察する。

## 第 2 節 賞創設時の議事録における創設理念並びに運営方法と審査方針

本賞の創設経緯については、1945 年 10 月 12 日の議事録「チューリッヒ市による優れた建築物に対する賞の創設 (2023. Schaffung eines Preises der Stadt Zürich für gute Bauten)」に 1017 語にわたって記されている。この議事録は大きく賞の創設背景と意義・目的について書かれている前半部と、賞の運営方法、審査対象、審査員構成、予算について書かれた後半部に分けられる。

### § 3-2-1. 建築賞の基本理念

本節では本議事録の前半部 (全 3 段落) における文章中の主要キーワードを抽出し、本賞創設時における基本理念を明らかにする。

まず第 1 段落では、本賞の創設意義に関わる記述が見られた。本文中に、「都市デザイン的な

(städtebaulich) 視点による持続的な都市の発展に伴う、優れた都市景観 (Stadtbild) を形成する上で、優れた作品を評価することの重要性」と記され、これが本賞の基本理念として位置づけられていることから、文中の「städtebaulich」と「Stadtbild」をキーワードとして抽出した。また、本賞創設の目的として、「建築に対する考え方 (Baugesinnung)」を正当に評価し、その結果を公表することで、「新たに建築物をつくる際に、適切な設計者の選定を含めた施主の建築的思考の水準を高め、そうした考え方を広く社会に広げること」の必要性が述べられている。この主題が生まれた背景に、文学、音楽、彫刻、絵画といった他の芸術分野に対する芸術賞が既に存在し、それらが社会に根付いていることが指摘され、建築分野もこうした評価の仕組みを取り入れることで、より社会に根ざした存在となることを期待したものである。

第2段落では、「優れた都市構造に対するチューリッヒ市民の理解 (Verständnis) が広がることを期待し、世代を跨いで引き継がれることが、将来的な優れた都市形成に繋がる」と言及している。

第3段落では、他の芸術分野と建築分野の相違点について書かれている。具体的に創作者と社会の関係が挙げられ、芸術分野では芸術家が「自らの制作意欲や、個人のクライアントから依頼を受けて作品をつくる」ことに対し、建築分野は、「優れた設計者は建築に対する考え方を持った施主を必要とする」ことが求められ、施主を表彰の対象としたという本賞の理念が改めて強調されている。

以上のように、本賞の創設に関して、施主と設計者の建築に対する考え方を積極的に評価することが重要であり、議事録にも「Baugesinnung」が賞の目的として、6度使用されている。つまり、本賞の基本理念として「Baugesinnung」は基本的かつ重要なキーワードである。また、賞の創設が、都市デザイン的な (städtebaulich) 視点による持続的な都市の発展のための優れた都市景観 (Stadtbild) の形成を最終的な目的とし、各建築物を評価することが議事録に書かれている。さらに、都市空間に対する市民の理解 (Verständnis) を促すことの重要性が述べられていることから、これら4点 (Baugesinnung, Stadtbild, städtebaulich, Verständnis) を本賞創設時の基本理念として位置づけることができよう。

### § 3-2-2. 賞の仕組み

創設時の議事録の後半部は、本賞の仕組みについて書かれている。受賞作品の表彰について、施主に対しては、1) 公式証書、2) プレート (市の紋章が描かれた陶器製)、3) 記念品 (絵画、彫刻、グラフィック、美術工芸品の類いのもの、もしくは例外的に賞金) が贈られることが決定された。実際にはこれまでの表彰で、賞金が贈られたことは一度も無く、本賞が優れた建築を公的に評価する行為のみによって、広く市民を啓蒙する為のものであることが読み取れる。また、施主に対する表彰に加えて、「優れた建築作品を創作した設計者に対しても表彰すべき」との議論が起り、設計者に対しては賞状による表彰を行なうこととなった。次に、審査対象とする建築種別について、以下の分類が見られた。住居 (戸建住宅、共同住宅)、住宅団地、住宅組合<sup>12)</sup>による住宅、オフィス、商業施設、工業施設、土木構築物、教会、学校等。ここで、賞の選出方法について、民間企業や住宅組合、個人が施主の建物に限って賞を与えるべきで、市が施主の事例については設計者に対する表彰に留める方針が示された。これは、賞の運営を市自身が行っているためである。

### 第3節 各回の議事録にみる審査時における都市と建築に対する認識と審査方針・評価基準の変遷

本節では、第1～16回（1947～2010年）の議事録の記述を分析し、審査時における都市と建築に対する認識、審査方針、評価基準の順に各期の特徴を示す。以下、各節は、前稿で明らかにした審査体制、受賞作品の特徴による期分けを踏襲して分析、考察した。

#### § 3-3-1. 田園都市構想に基づく低層住宅団地開発（第1～2回：1945～1950年）

まず、都市と建築に対する認識について、1947年に当時のマスターアーキテクトの Albert Heinrich Steiner (1905-96) を中心に新たな建築法規（Bau- und Zonenordnung, BZO）を制定した。この法規には、これまでの個々の土地を合筆し、より自由度の高い建築計画を推し進める狙いがあった。これについて審査委員会は、「既に都市デザイン的に良好な影響を及ぼしている」<sup>13)</sup> ことによって、今回の作品ができたものであると評している。

次に審査方針について、審査委員会は「既存の街区構成を超えた新規住宅団地開発事例と賞創設以前に竣工したオフィスを重点的に評価の対象とする」<sup>14)</sup> としている。これは、人口増加に伴う新規住宅地開発政策と住宅組合による住宅建設が推進される時代背景によるものと解釈できる。当時の市長 Adolf Lüchinger (1894-1949) は左派に属し、社会保障政策に取り組んでいたため<sup>15)</sup>、住宅組合による住宅建設の推進にも影響を与えていたと考えられる。また、賞の創設から2年しか経過していないため、創設以前に竣工した事例も含めなければ、住宅団地以外の建築種別に対する評価が出来なかったことも推察される。第2回の審査において、他の建築種別は「審査の時点であまりにも実数が少なく、建設中のものが多く含まれていた」<sup>16)</sup> ことから、住宅団地（Wohnsiedlung）に対する評価に絞る方針を採った。1947-49年にかけて住宅組合による集合住宅建設が最も盛んな時期にあった<sup>17)</sup> ことも審査に影響しているといえよう。

そして、評価基準について、具体的には、都市デザイン的に欠点のない配置（städtebaulich einwandfreie Situierung）と優れた建築的構成（gute architektonische Gestaltung）を挙げている。受賞作品は郊外の大規模な緑地帯に田園都市をモデルとした住宅団地事例（写真 3-3-1）が挙げられているが、これらの事例がチューリッヒ市郊外の理想的な都市景観のプロトタイプとして評価されたものと解釈できる。

#### § 3-3-2. 多様な建築種別の選出（第3回～6回：1950～1965年）

都市と建築に対する認識として、審査委員会は、「建築的にも都市デザイン的にも好ましい成長・発展を遂げることができた」<sup>18)</sup> とし、「居住地域に対して適用された BZO が、既存の街区構成を超えた建設に好影響を及ぼしている」<sup>19)</sup> との見解を示している。

つぎに、審査方針として、審査委員会は、1949-53年に建設された事例（件数は不明）を対象に視察、検討を行なった。具体的に審査対象に竣工時期を明記したのは第3回からであり、以後この方針が継続される。また、今回からチューリッヒ市外出身の建築家が審査員に加わった。賞の運営を市自身が行なっているため、市は自らが施主の建物（学校やスポーツ施設等）を審査対象にすることを避けてきたが、「市外部出身者の視点から評価がされるのであれば、市が施主の建物を審査対象から外す根

抛がない」<sup>20)</sup>と判断し、次回以降の審査に於いては、市が施主の事例も評価すべきとの見解に至った。この判断は、後の本賞の役割や意義を語る上で大きな転機と捉えることができる。さらに、「歴史的建造物が建ち並ぶ旧市街においては、新たに建築物を嵌め込む際に十分に注意を払う必要がある」<sup>21)</sup>とし、旧市街の住宅事例を選出している(写真 3-3-2)。この頃から住宅に留まらず多様な建築種別や立地環境に対する評価に言及していることが読み取れる。第4回以降、市建築局は審査委員会が各年代の竣工物件数を把握するためのリストを作成した。これについて、審査委員会は「優れた建築作品の実数がかかり多く生じたため、建築種別毎に受賞作品数を制限し、それぞれ1～2件に絞った」<sup>22)</sup>とあり、審査の際に多様な建築種別を網羅するとともに、「建築的のみならず都市デザイン的な観点から受賞候補を絞り込んだ」<sup>23)</sup>としている。第5回では、集合住宅を中心とした郊外の大規模な開発事例を3件挙げ(写真 3-3-3, 3-3-4, 3-3-5)、「これらの事例は建築単体のデザインとしてではなく、全体計画(Gesamtplanung)として優れ…模範的な街区構成を示すものであり、このような建築の考え方は称賛に値する」<sup>24)</sup>と述べている。具体的に、用途に応じたヴォリュームの配置構成が評価されている。しかしながら、「個々の建築物については、設計者の個人的な興味に抛る所が大きく、模範的な地区計画の手法が欠落しているため、施主への表彰は行なうが、設計者に対しては表彰を見送る」<sup>25)</sup>との評価が下された。ここでの模範的な地区計画の手法の欠落とは、複数の設計者が共同する際に、全体の配置計画やヴォリューム構成は調整できても、各々の建物のデザインにまで統一感を持たせることが出来なかった為だと推察できる。従って、賞の創設時に強調されていた、施主の建築に対する考え方(Baugesinnung des Bauherrn)を評価するという点と都市デザイン的な視点で評価をする点を考慮すると、大規模な開発に際して、単体の建築デザインの評価よりも、複数の建築物によって生まれる外部空間や、建築物の高さの調整を含めた総合計画に対する評価であったと言え、計画段階に関わる施主を積極的に評価したものと解釈出来る。こうした審査方針が、本賞の特徴を示しているといえよう。

ただし、この期では、具体的な評価基準に関する記述は見られなかった。

### § 3-3-3. 高層住宅建設と石油危機後の建設数の減少(第7～11回:1965～1984年)

第11回に審査委員会は「近年、新たなテーマとして、既存の建物に対して新たな建築をどのように取り入れるかという問題がある」<sup>26)</sup>と、都市と建築に対する認識を示している。

また、審査方針について、第5回を踏襲し、建築単体よりも総合的な施設(Gesamtanlage)としての評価がなされる。第7回は、「今後より一層重要になるであろう旧市街地における改修の方法を評価する上で、幾つかの改修事例を視察した」<sup>27)</sup>とあり、結果として1事例(写真 3-3-6)が選出され、本賞における最初の改修事例となった。第10回は、石油危機の影響もあり、審査対象数が大幅に減少する一方で、審査方針の点から大きな転機が見られた。それは、まず、審査の前提として、第7～9回で各1作品が受賞した改修事例は選考対象から外すことが議事録に明記されている。その後、第11回で、前回の審査で審査対象を新築事例のみに絞り込んだことに対する新たな方針が見られ、「実際に優れた改修事例が散見され、これらは今後の文化財保護の観点からも評価対象にすべき」<sup>28)</sup>との意見があがった。最終的に改修事例は受賞作品に選出されなかったものの、審査方針として改修事例

を含んでいたことがわかる。つまり、本格的に改修事例の評価を行う第12回（後述）以前の時点で前回の審査方針が定まっていなかったと判断できる。

評価基準について、第10回においては、審査委員会は次の5点を評価基準として明示した：1) 建築計画と都市計画の関連 (Planerische und städtebauliche Zusammenhänge)、2) 周辺環境との関係 (Verhältnis zur Umgebung)、3) 区画の構成 (Gestaltung der Parzellenbezogenheit)、4) 建築の美的・機能的な質 (Ästhetisch-funktionale Qualität)、5) 工法、内部構成 (Konstruktion, inner Struktur)。また、第10回以降は、全受賞作品に対する個別評価が記述されるようになり、ここから評価基準を読み取ることが可能である。例えば、住宅については、「様々な用途に対応しうる適度な大きさを持つ平面」、大規模事例には、「複数の建物の配列やヴォリュームの高さ」について言及している。これまでの都市景観からの視点とは異なり、住宅では、内部の設えにも言及しているが、第10回以降も、主に住宅作品に対する個別作品解説の中で、機能的な平面 (funktionierender Grundriss) や内部空間 (Innenraum)、材料や色彩のシンプルな使用 (einfache Verwendung von Material und Farbe) などが共通して評価されている。一方、教育施設やオフィスによっては、明るい色彩を用いることで、単調な周辺環境に対して際立っている点で評価されている事例もある。このことから、個別作品に対する評価は建築種別や周辺環境によって変化することが読み取れる。

#### § 3-3-4. 高密度化した市街地における増築・改修の意義 (第12～13回：1985～1994年)

都市と建築に対する認識として、審査委員会は、「都市の歴史を形成する上で、既存の建築に適切



写真 3-3-1 低層住宅団地 (No.13, 1950年受賞)



写真 3-3-2 旧市街の住宅 (No.31: 1954年)



写真 3-3-3 複合施設 (No.51: 1961年)



写真 3-3-4 集合住宅 (No.52:1961年)

な改修を施すことが、文化的な価値を生み出す事に繋がる」<sup>29)</sup>と述べている。その上で、「意義のあるテーマは、都市の修繕であり、都市景観の中で歴史的な文脈に沿わない建物を取り除くこと」<sup>30)</sup>としている。

また、審査方針について、第12回においても既存の建物に対する議論が起こり、審査委員会は「特に歴史的建造物に対しての増築や修復についてどのような評価基準を用いるべきか」<sup>31)</sup>と言及している。今回の審査対象の半分以上が改築に分類されていたことも、こうした議論が主題にあったためだといえる。第13回で審査委員会は、「本賞の対象範囲には、文化財保護を主要な目的とした事例を含まない」<sup>32)</sup>と表明している。すなわち、「改修や増築については、その建物自体に建築的な質が見出され、既存の建物に対して適切にデザインされているかを評価すべき」<sup>33)</sup>ということであった。ここから、本賞の改修事例に対する審査方針が単に歴史的建造物の保存を目的とするわけではなく、「建築的介入 (baulicher Eingriff)」という都市との文脈を主題としていると解釈される。

評価基準について、この期では、具体的な評価基準に関する記述は見られなかった。しかし、個別の作品解説の中には、新築事例に対しても、周辺環境に対する調和に対する評価がみられる。

### § 3-3-5. 再開発に関わる都市デザインのあり方 (第14～16回: 1995～2010年)

都市と建築に対する認識について、第14回では、「今回応募された作品から、広範囲な建築活動が見て取れた (内装、増築、新築、改築、自由な構成)」<sup>34)</sup>とあるが、こうした多様さは受賞作品からも読み取ることができる。また、第15回以降では審査委員会が審査を通して、以下の認識を示して



写真 3-3-5 集合住宅 (No.63: 1961年)



写真 3-3-6 改修事例 (No.83: 1968年)



写真 3-3-7 停留所 (No.190: 2010年)



写真 3-3-8 商業施設 (No.191: 2010年)

いる。1) 建築的な質は建築種別を問わず、全体を通して高い。2) 応募の半数が、増改築、改修、再開発の事例であった。3) 集合住宅事例は本賞の核になっている。これは、人口増加に伴う深刻な住宅不足に対して、2002年に参事会で提唱された政策「全ての市民に住居を（Wohnung für alle）」<sup>35)</sup>に深く関係しているといえる。

審査方針について、第14回では、第4回から採用していた各年代の竣工物件数を予めリスト化する方式から、新聞や専門誌を通じた公募方式へ移行した。その理由として、行政の負担軽減があり、公募方式を採ることによって、審査の前段階を簡略化できるようになった<sup>36)</sup>。その後は公募段階で本賞の理念や審査方針を広く市民に発信することが可能となった。審査委員会は、「綿密な都市デザインの介入（städtebaulichen Eingriff）が施された事例」<sup>37)</sup>を評価するとしている。

評価基準について、第15、16回は、第10回以来の具体的な評価基準として、「都市デザイン的な秩序（städtebauliche Einordnung）、建築の質（Qualität der Architektur）、工法（Konstruktion）、技術革新（Innovation）、適切さ（Angemessenheit）」<sup>38)</sup>を定めている。第16回の特徴は、「外部空間（Aussenraum）の質やオープンスペース（öffentlichen Raum）のあり方」<sup>39)</sup>がテーマとなった点であり、市街地の再開発に関連させて、魅力的な外部空間を持つ事例（写真3-3-7）や、改修事例（写真3-3-8）が評価されている。

### § 3-3-6. 都市と建築に対する認識・審査方針・評価基準と各時代の傾向の関係

前節までで明らかにした項目を図3-3-1に示した。

本賞の創設から第2回までの草創期は、前稿で示した通り、A. H. Steinerによる田園都市構想をモデルとした新規住宅団地開発の方針が、深刻な住宅不足に対する政策として重要なテーマであった。そのため、審査方針としても、郊外地における新規低層住宅団地が重点的な対象となり、都市デザイン的に欠点のない配置「städtebaulich einwandfreie Situierung」と優れた建築的構成「gute architektonische Gestaltung」が評価基準となった。A. H. Steinerが審査員をし、都市デザイン的な視点から評価していたことは、市の開発計画に批准した事例を積極的に評価していた事実を鮮明にしたといえる。

第3～6回では、チューリッヒ市外部出身の建築家が審査員に加わったことにより、公共建築も審査対象となった。また、前稿のとおり、審査体制の特徴として、第3回からAdolf Wasserfallen（1920-2000）が審査員に加わっていたが、第4～11回までマスターアーキテクトとして長期にわたり審査をすることになる。A. Wasserfallenは、都市の高密化を図るため、住宅開発予定地域における容積率の規制緩和や補助金の交付といった政策を打ち出すことで、その後の都市の発展を促した人物である<sup>40)</sup>。そうした社会状況の下で審査方針としては、都市デザイン的な視点から、建築単体よりも、全体計画「Gesamtplanung」としての評価を重視した姿勢をとっていた。

第7～11回では審査体制に大きな変化は見られない。審査方針は第9回までは第5回を踏襲し、建築単体よりも、総合的な施設「Gesamtanlage」としての評価を行なった。第10回になると、具体的な評価基準に加えて、個別作品解説が見られる。これは、石油危機後の大幅な建設数の減少によって、これまでの成長方針からの転換を図った時期と重なり、社会状況の変化に応じた建築評価のあり

	田園都市構想に基づく 低層住宅団地開発 第1～2回 1947～1950年	多様な建築種別の選出 第3～6回 1950～1965年	高層住宅建設と 石油危機後の建設数の減少 第7～11回 1965～1984年	高密度化した市街地における 増築・改修の意義 第12～13回 1985～1994年	再開発に関わる 都市デザインのあり方 第14～16回 1995～2010年
期	I	II-i	II-ii	III	IV
対都市と認識に	BZOは制限もないので、まだ十分に効果を検証できないもの、既に都市デザインに良好な影響を及ぼしている	建築的にも都市デザイン的にも好ましい発展を遂げることができた	既存建物に新たな建築をどのように取り入れるか	都市の修繕 都市景観の中で歴史的な文脈に沿わない建物を取り除く	広範囲な建築活動 (内装、増築、新築、改築) 建築的な質は全体を通して高い 集合住宅が本賞の核
審査方針	市が施主の建物は審査対象に含まない 賞創設以前に竣工した建物も審査対象 住宅団地に絞って審査 Wohnsiedlung	各年代の竣工物件数をリスト化(4～12回) 公共建築も審査対象を含む(3回～) 審査対象に竣工時期を明記(3回～) 建築単体よりも全体計画 Gesamtplanung として評価	改修事例を選出(7～9回) 審査対象としない(10回) 建築単体よりも総合施設として評価 Gesamtanlage	改修事例を審査対象にする(11～16回)	公募方式(14回～)
評価基準	都市デザイン的に欠点のない配置構成 städtebaulich einwandfreie Situierung 優れた建築的構成 gute architektonische Gestaltung	具体的な評価基準 の記述なし	建築計画と都市計画の関連 Planerische und städtebauliche Zusammenhänge 周辺環境との関連 Verhältnis zur Umgebung 区画の構成 Gestaltung der Parzellenbezogenheit 美的・機能的な質 Ästhetisch-funktionale Qualität 工法、内部構成 Konstruktion, inner Struktur	都市デザイン的な秩序 städtebauliche Einordnung 建築の質 Qualität der Architektur 工法 Konstruktion 適切さ Angemessenheit 外部空間 Aussenraum オープンスペース öffentlicher Raum 技術革新 Innovation	都市デザイン的介入 städtebaulicher Eingriff
		住宅 内部空間 機能的な平面 材料や色彩のシンプルな使用 大規模施設—建物の配列 高さ制限	個別作品解説(10～16回)		

図 3-3-1 各回議事録に見られる都市と建築に対する認識・審査方針・評価基準と各時代の傾向の関係  
(第1回から16回までのチューリッヒ市参事会議事録 (Auszug aus dem Protokolle der Stadträte von Zürich) を基に作成。議事録はドイツ語表記であるため、「審査方針」「評価基準」における重要なキーワードについては、筆者による和訳と原語を併記している。表中「期」は、前欄における期分けを表す。)

方を丁寧に示そうとしたと言える。具体的には受賞作品の建築種別や周辺環境によって異なる評価がなされている。また、改修事例については、第10回と11回で方針が変化した。これは後の審査における改修事例の扱い方に影響を与えるものだったと推察される。

審査体制が大きく変化した第12回には、当時の建築局長、Ursula Koch (1941-) による提言「チューリッヒは建設され尽くした (Zürich ist gebaut)」<sup>41)</sup>の影響が審査にも反映され、高密化した都市の状況下で、優れた改修事例を積極的に評価することになった。その際、既存の建物に対してどのように新たな用途を組み入れるかという建築的介入「baulicher Eingriff」が審査方針となった。

第14回以降は前稿でも述べた通り、1997年の組織改編によって都市空間と景観の質の向上をアーバニズムの観点から担う都市計画局 (Amt für Städtebau) が創設され、本賞を運営することになった。審査方針は都市居住を主題とした再開発が新たなテーマとなり、建築空間だけでなく、都市の中の外部空間を創出する事例を積極的に評価している。以後、本賞の評価における都市デザイン的に優れた建築とは、施主や設計者による、建築的、都市デザイン的介入「städtebaulicher Eingriff」への評価によるものとなる。

以上のように、時代や社会の変化、審査体制の変遷に応じて、審査方針の内容を変えてきたことが明らかとなった。また、評価基準については、2、10、15、16の4回に見られたが、10回以降は個別の作品解説によって、都市の文脈と照らし合わせて建築を評価をしていると解釈できる。

#### 第4節 創設時の理念の継承と適用

第3節で示した本賞創設時の基本理念を示す4つのキーワード (Baugesinnung, städtebaulich, Stadtbild, Verständnis) が各回でどのように用いられてきたかを図3-4-1に示す。

「Baugesinnung」については、第12回までに、第3、4、11回を除く回で確認できた。第10～15回では、全体に対する文章では使われなくなるが、第10、12回では、個別の作品解説中に示されている。第16回では市民向けに出版された作品集の冒頭で、建築局長 André Odermatt (1965-) が、寄稿文「Baugesinnung のシグナル (Zeitzeichen der Baugesinnung)」<sup>42)</sup>を記している。その中で、「本賞は設立当初の、優れた Baugesinnung に対する賞として、施主並びに設計者によるプロジェクトを通して、建築的、都市デザイン的に高い質を追求する努力に対して与えられるものである」とし、本賞の原点に戻る態度を改めて表明している。「Baugesinnung」という単語がスイスの建築界でどの程度使用されているのかを、20世紀以降の建築専門誌、新聞記事を対象に分析<sup>43)</sup>したところ (図3-4-2)、1920年代後半から50年代を中心に多くの記事が確認できたが、80年頃から徐々に減少し、90年以降は、本賞若しくは他州の建築賞を扱う記事か、過去の文章の引用として使用されているのみであることから、「Baugesinnung」という単語自体は、現在ではあまり日常的に使用されない表現であるとともに、本賞を語る固有のキーワードになったと解釈できる。

次に、「städtebaulich」については、第1回を除いて全ての回で確認することができ、第11回、13回では、個別の作品解説文中にのみ見ることができた。ここから、本賞が建築単体の評価に留まらず、都市デザイン的な視点を持った提案を評価する姿勢を一貫して読み取ることができる。

「Stadtbild」に関する言及については、第3、11回を除いて、第12回まで継続して用いられ、第13

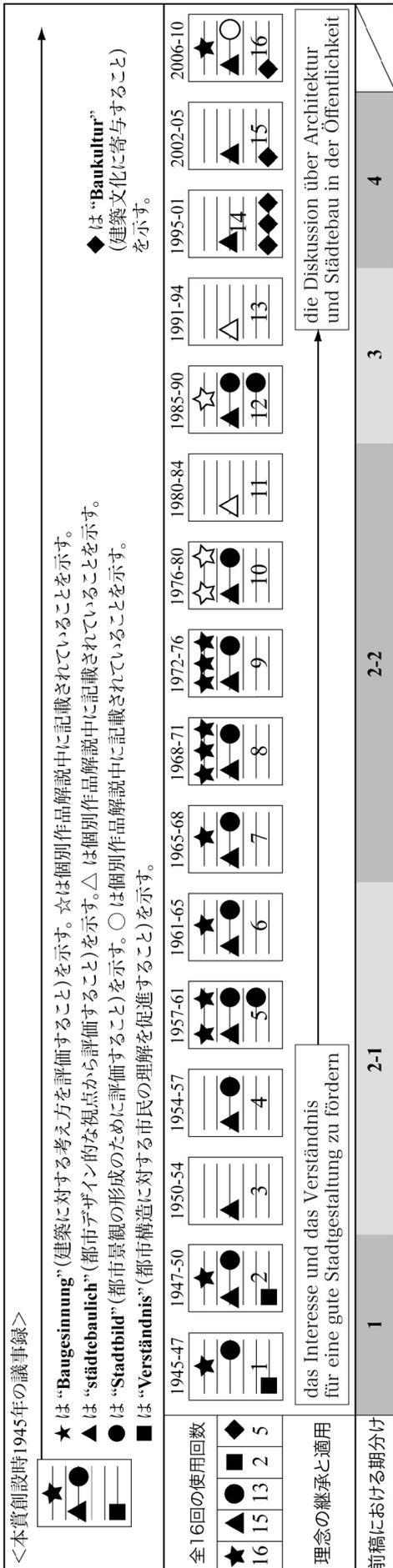


図 3-4-1 本賞の基本理念の継承と適用

(1945年のチューリッヒ市参事会議事録(Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich)と第1回から16回までの全議事録を基に作成。尚、第16回(2011年)は前稿執筆後に開催されたため「前稿における期分け」は該当しない。)

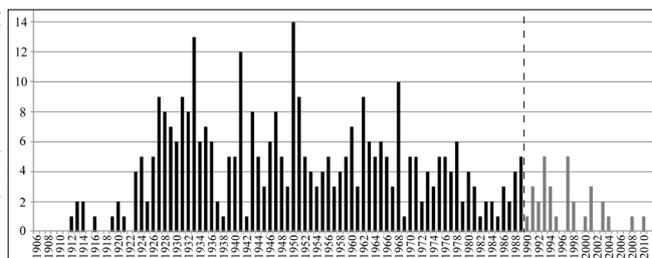


図 3-4-2 スイスの建築専門誌における「Baugesinnung」の使用数  
(主な分析資料として、Hochparterre, Schweizerische Bauzeitung, Schweizer Ingenieur und Architekt, Werk, Bauen + Wohnenを参照した。1990年以降、「Baugesinnung」という単語は、本賞もしくは他州の建築賞を扱う記事、過去の文章の引用としての使用に限られる。)

～15回では使われなくなり、第16回では個別解説文中に見られた。ここから、本賞における「Stadtbild」は「Baugesinnung」とともに用いられてきたが、都市の拡張が一段落してからは、使用されなくなったことがわかる。

「Verständnis」については、第2回までしか見られない。しかし、第15、16回は本賞の意義について、「単なる賞の授与に留まらず、公衆に対する建築的、都市デザイン的な議論(Diskussion über Architektur und Städtebau in der Öffentlichkeit)」を促進させることだと表明し、市民に対する啓蒙に関して踏み込んだ記述が見られる。

第14回には、「Baukultur」という新たなキーワードが理念として追加された。本賞について、「市の建築文化(Baukultur)やアイデンティティの形成に寄与すること」が重要であると記されている。これは、本賞創設から50年以上が経過し、これまでの基本理念では明記されていなかった文化的側面を補完する重要な理念として、新たに追加されたものと考えられる。

以上より、本賞の創設時の理念の継承と適用について、次のことが指摘できる。創設時の第一文に示されていたように、持続的な都市の発展に伴う「Stadtbild」の形成が基本理念として、本賞の審査で継続して用いられてきた。また、本賞が施主に対して「Baugesinnung」を問い、

評価するという姿勢も創設時から受け継がれてきたといえる。しかし、都市の膨張が一段落し既存建物の改修に関心が向かった第13回以降、上記「Stadtbild」「Baugesinnung」については見られなくなるが、あくまで都市デザイン的な(städtebaulich)視点から評価する姿勢は初回から全体を通して一貫していることがわかる。また、第16回で、改めて再び「Stadtbild」「Baugesinnung」に言及していることが、創設時の理念を今後も引き継ぎながら、第14回から「Baukultur」という新たな理念を適用させることによって、再開が進む新たな現代的局面の中で、文化的側面からも都市景観形成に寄与するという市の姿勢を明確に示しているといえよう。さらに、市民への啓蒙に関しては、草創期では、建築・都市空間に対する興味や理解(Verständnis)を促すためのものであったが、近年では、過去の蓄積を踏まえた上で、市民に都市空間に関わる議論を促すという変化が見られた。

## 第5節 小結

これらを通じてわかるのは、本賞創設時に謳われている、「市民の建築に対する考え方」を評価する姿勢が、65余年にわたり継続して最も重要な理念となっていることである。また、こうして時代や世代を超えた建築評価の蓄積を建築文化として構築し、施主を含む一般市民と広く共有しようとしてきた、チューリッヒ市の一貫した強い意志と態度も理解できた。こうした賞の理念を据えた上に、評価手法が重なり、一貫した表彰を行なうことが可能となっており、市民の意識向上に繋がっているといえる。その時代の傾向に対応しながら、毎回の審査委員会において、審査方針について議論を行なった上で評価基準を定めていることが明らかになった。

これを可能にするのに、市が全16回の議事録を公式記録として公文書館に保管し、一般に公開していることは大きい。その結果、審査委員会は現在まで賞創設時の理念を踏襲し、市民の建築・都市空間の啓蒙に繋がっているといえる。実際、過去に何度も創設時の議事録が引用されていることがこのことを裏付けている。

特に、草創期には市の都市計画決定に権限を持つ人物が、戦後の都市開発を推進する中で、新たな法整備に取りかかり、住宅団地開発を促進した時期と本賞の創設が重なることから、市の展望を市民と共有しつつ、都市の発展に結びつけようとする意気込みが確認できた。

その後、市内の建設工事が順調に進む50年代以降、市建築局は、審査委員会が各年代の竣工物件数を把握するためリストを作成した。審査委員会は、このリストを元に予め建築種別を見定め、選定数を決定することが可能となった。この方法は住宅団地開発という都市形成に着目していた草創期から、審査委員会が様々な種類の建築に目を向けるようになる大きな要因となった。このことは、多様な建築が都市景観を構成するという、都市を認識する上での重要性をより強固なものにしたといえ、2000年代以降に公募方式が採用されるまで継続された。その後は賞の公募段階で本賞の理念や審査方針を広く市民に発信することが可能となった。そして、創設時の理念を引き継ぎつつも、各回の審査において、当時の社会情勢を踏まえた上で、審査方針を定めてきた。

具体的な評価基準は2、10、15、16回の4回に見られた。その特徴は欠点のない配置構成、都市デザイン的な秩序といった周辺環境に関わるものや、革新性といったものであった。一方、残る12回に評価基準が見られないのは、その期間の社会状況がある一定の性格を有しており、審査委員会がど

のような基準で建築を評価したのかその変化を捉える指標といえる。この事実は、評価基準を設けていないという理解にも繋がるが、背景には通底する理念があったため、その基準が揺るがなかったと理解でき、その前提となるのは、都市の文脈と照らし合わせて建築を評価するという基準であり、その上で社会状況に応じ、個別作品に評価を加えるといった柔軟な対応を行なった。このことは、本賞の特徴のひとつである。

### 【第3章注記】

- 1) 岡本三彦『現代スイスの都市と自治:チューリッヒ市の都市政治を中心として』(早稲田大学出版部,2005)によると、チューリッヒ市の執行部である市参事会は、9人のメンバーから構成される。チューリッヒ市の9つの行政局は、市長局、財政局、警察局、保健・環境局、土木・廃棄物処理局、建築局、産業事業局、学校・スポーツ局、社会局である。
- 2) 表2は第16回(2006-2010)の受賞作品リストである。第16回審査は前稿(注4参照)執筆後に開催されたため、表2は前稿の表1の追加情報としている。
- 3) Inge Beckel: "Zwanglos und Masstäblich", *50 Jahre Auszeichnung für Gute Bauten in der Stadt Zürich*, Bauamt II der Stadt Zürich, Zurich, 1995. p. 31.
- 4) Takeo Ozawa and Keita Ohwaki, 'Features of Jury Organization and Award-Winning Works of A Swiss Architecture Prize for Patronage, Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich: An Investigation of the Idea and Method of Architectural Evaluation Envisaged by the Zurich Municipal Authority - Part 1' (日本建築学会計画系論文集第670号、2011.12) pp. 2467-2476.
- 5) 全体は4期に分けられるが、第2期はさらに二つに分けられる。
- 6) 木川田洋祐「建築関連顕彰制度にみる建築評価の日米比較」(日本建築学会北海道支部研究報告集第79号、2006.7) pp. 515-518.
- 7) 那須聖「札幌市都市景観賞の審査評における批評言語」(日本建築学会計画系論文集第675号、2012.5) pp. 1033-1042.
- 8) 小澤丈夫、井上直、角哲、尾辻自然「くまもとアートポリスの展開と設計者選定-公共建築における設計者選定のあり方に関する実態調査-」(日本建築学会技術報告集第46号、2014.10) pp. 1121-1124.
- 9) *Auszeichnung gutes Bauen der Stadt Zürich 1995-2001*, 2002. *Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich 2002-2005*, 2006. *Auszeichnungen für gute Bauten der Stadt Zürich 2006-2010*, 2011.
- 10) 筆者は2008年6月、10月に加えて、2011年9月から2014年6月にかけてチューリッヒ市に滞在し、継続的に実地調査を行なった。
- 11) 聞き取り調査日は以下の通り。チューリッヒ市都市計画局 Regula Iseli 氏、2012年3月19日。第16回の審査員だった Annette Gigon 氏、2014年4月26日。設計者である EM2N Architekten の Daniel Niggli 氏、pool Architekten の Matthias Heinz 氏、2012年3月11日。Gigon & Guyer Architekten の Mike Guyer 氏、2014年4月30日。office haratori の Zeno Vogel 氏、2012年11月10日。
- 12) チューリッヒ市における最初の住宅組合は1892年に設立した。組合員は住宅建設の計画段階から共同してプロジェクトに参画する。
- 13) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 473 vom 3, März, 1950"
- 14) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 2808 vom 19, Dezember, 1947"
- 15) Bruno Fritzsche: "Die «guten Bauten» im historischen Kontext", *50 Jahre Auszeichnung für Gute Bauten in der Stadt Zürich*, Bauamt II der Stadt Zürich, Zurich, 1995, p. 14.
- 16) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 473"
- 17) *4 x 25 Günstig wohnen in Zürich*, Präsidialdepartement, Statistik der Stadt Zürich, Zurich, 2009, pp. 41-42.
- 18) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1761 vom 30, Juli, 1954"
- 19) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1761"

- 20) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1761"
- 21) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1761"
- 22) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1859 vom 19, Juli, 1957"
- 23) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1859"
- 24) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 2048 vom 14, Juli, 1961"
- 25) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 2048"
- 26) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 416 vom 6, Februar, 1985"
- 27) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 2437 vom 8, August, 1968"
- 28) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 364 vom 4, Februar, 1981"
- 29) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 3240 vom 6, November, 1991"
- 30) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 3240"
- 31) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 3240"
- 32) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1301 vom 15, Mai, 1995"
- 33) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 1301"
- 34) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 2042 vom 19, Dezember, 2001"
- 35) Stadt Zürich, Präsidialdepartement: "Newsletter: Wohnen für alle", Zurich, 2003. この政策は、今後 10 年間に新たに 10,000 戸の建設を進め、その内 200 棟は高齢者向け、さらに 200 棟を若年層向けのアパートとするものである。
- 36) 前掲 Regula Iseli 氏への聞き取り調査による。
- 37) 前掲 "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 2042"
- 38) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 153 vom 8, Februar, 2006"
- 39) Stadt Zürich: "Auszug aus dem Protokolle der Stadtrates von Zürich Nr. 901 vom 13, Juli, 2011"
- 40) Daniel Kurz: "Gebremste Grossstadt", *archithese*, 2005.06, pp. 26–27.
- 41) Loderrer Benedikt: "Was Bisher Geschah", *Zürich Wird Gebaut*, Zurich, 2005. によると、これは、Koch が 1986 年に、高密度化した市街地に対して、新規開発に歯止めをかけるために用いた標語である。
- 42) Amt für Städtebau der Stadt Zürich, *Auszeichnungen für gute Bauten der Stadt Zürich 2006-2010*, 2011, p. 9.
- 43) 分析にあたり、スイス電子図書サービス "SEALS"(<http://retro.seals.ch/>) を利用し、以下の建築専門誌、新聞記事を調査した。 *Anthos : Zeitschrift für Landschaftsarchitektur. Appenzellische Jahrbücher. Argovia: Jahresschrift der Historischen Gesellschaft des Kantons Aargau. Basler Zeitschrift für Geschichte und Altertumskunde. Berner Zeitschrift für Geschichte und Heimatkunde. (Das) Werk. (Das) Wohnen. Der Geschichtsfreund. (Der) Schweizer Geograph. Du: kulturelle Monatsschrift. Geographica Helvetica. Heimatschutz. Hochparterre: Zeitschrift für Architektur und Design. IABSE congress report. INSA: Inventar der neueren Schweizer Architektur, 1850-1920. Jahrbuch der Schweizerischen Gesellschaft für Urgeschichte. Mitteilungen des historischen Vereins des Kantons Schwyz. Museum Helveticum. Schweizer Ingenieur und Architekt. Schweizerische Bauzeitung. Schweizerische Monatshefte für Politik und Kultur. Schweizer Monatshefte. Schweizerische Zeitschrift für Geschichte. Schweizerische Zeitschrift für Vermessung, Kulturtechnik und Photogrammetrie. Tec21. Traverse: Zeitschrift für Geschichte. Werk - Archithese. Werk, Bauen + Wohnen. Zeitschrift für schweizerische Archäologie und Kunstgeschichte. Zeitschrift für schweizerische Geschichte.*

#### 【図版出典リスト】

- 写真 3-3-1 筆者撮影
- 写真 3-3-2 筆者撮影
- 写真 3-3-3 筆者撮影
- 写真 3-3-4 筆者撮影
- 写真 3-3-5 *Werk*, Nr. 5, 1961, p. 153. より転載
- 写真 3-3-6 筆者撮影
- 写真 3-3-7 筆者撮影
- 写真 3-3-8 筆者撮影

## 第 4 章

### 受賞作品の空間構成の特徴

#### Features of Spatial Composition of the Award-Winning Works

本章は、スイスのチューリッヒ市都市計画部 (Amt für Städtebau) が運営、開催している「チューリッヒ市建築賞」(Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich、以下、本賞) 1947-2011 年における 193 件の受賞作品中、集合住宅全 68 件に着目し、配置、住棟の構成の特徴と都市景観形成への役割を明らかにしようとするものである。

#### 第 1 節 集合住宅に着目する意義

筆者は前章までに、本賞の審査体制や基本理念の特徴について論じてきたが、それらの特徴が、受賞作品の建築的特徴とどのような関係にあるのかについては、言及していない。そこで、本章で具体的な受賞作品の分析を検討する上で、審査記録を辿ると、本賞創設当初の主要テーマは、新規に開発された郊外の集合住宅であった。つまり、市が集合住宅を都市景観の重要な要素とみていたといえる。その後、65 余年間、全 16 回の本賞で毎回集合住宅が選出されていることから理解できる。

さらに、集合住宅の開発は政策としての性格も有し、特に戦後は都市計画の変遷との関わりが強くなる。1946 年、チューリッヒ市は、都市計画である「建築・ゾーニング令」(Bau- und Zonenordnung、以下、BZO) を策定し、社会状況や都市空間に対する市の戦略に応じて、1963、74、92、95、99、2014 年と 6 度の改訂を重ね現在に至る。BZO は、単に用途地域を規定するだけでなく、具体的な建物の形態や大きさを規定する際の土台となる計画で、そこには様々な形で集合住宅の開発に大きく影響する規定が盛り込まれている。

戦後まもなく都市景観形成に主眼をおく本賞の設立と都市形成を規定する BZO の策定をチューリッヒ市が実施し、両者が集合住宅の開発を重要な主題としたことを踏まえれば、集合住宅の開発の特徴を把握した上で、本賞受賞作品の配置、住棟構成に着目し、都市景観形成への役割を明らかにすることによって、戦後 65 余年にわたる本賞の評価の実態を考察することができると考える。

本章では、BZO 関連資料として、Amt für Städtebau が 2013 年に出版した『より公正に チューリッヒ市の建築・ゾーニング令の発展』(GERECHTER Die Entwicklung der Bau- und Zonenordnung der Stadt Zürich) から、都市計画の主要テーマを整理した。また、『チューリッヒ市建築賞 50 年史』(50 Jahre Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich) などの作品集をもとに、本賞を受賞した集合住宅全 68 作品の設計者、施主、所在地、住戸数、延床面積、階数、棟数の基本情報と、配置構成、外観写真、

衛星写真、図面資料を把握した。そして、全 68 件の現地調査<sup>4)</sup>から現況の把握を行ない、4 件について居住者、設計者に対する聞き取り調査を行なった<sup>5)</sup>。この作業を通じて、敷地条件、規模、配置に着目しつつ類型化した。但し、本賞第 1～3 回 (1947-54 年) の審査では、市が施主の物件は対象となっていない。また、建築界で注目に値する物件との評価を受けながら、本賞を受賞していない集合住宅もある。よって、こうした作品と 20 世紀以降のチューリッヒ市における集合住宅の一般的な状況を把握するため、スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築史・建築理論研究所 (Institut für Geschichte und Theorie der Architektur, gta) がまとめた『住宅以上 チューリッヒ市の非営利の集合住宅 1907-2007』 (*Mehr als Wohnen Gemeindnütziger Wohnungsbau in Zürich 1907-2007*) を用いた。同書は 100 物件を掲載し、22 件は本賞受賞作品が占めるが、集合住宅の建設の動向と建築的特徴について記述されている点で有効である。

## 第 2 節 戦後チューリッヒ市における都市計画の変遷と受賞作品の敷地条件・配置構成と分布

チューリッヒ市が 1946 年に策定した「建築・ゾーニング令」(BZO) の立案と実施は、当初 Stadtbaumeister を中心に進められ、これまでチューリッヒ市の建築家 Albert Heinrich Steiner、Adolf Wasserfallen、Hans Rudolf Rüegg の 3 人が登用された。その後 1997 年の市の改組で Stadtbaumeister 制は廃止となる。BZO は、60 年代の経済成長に伴う都市の高密化、70 年代の郊外大規模住宅開発などの社会状況に応じて改訂を重ね、特徴ある施策を実施する。各時代の BZO の特徴と、『住宅以上 チューリッヒ市の非営利の集合住宅 1907-2007』にみるチューリッヒ市の集合住宅の開発に関わる動向は表 4-2-1 に示した。また、受賞集合住宅作品の分布を図 4-2-1 に示した。

### § 4-2-1. 田園都市構想に基づく時代 (1943-1957 年)

1946 年策定の最初の BZO (BZO46) を主導した Stadtbaumeister は、Albert Heinrich Steiner であった。Steiner は戦前からつづいていた田園都市構想に基づいて開発計画を進め、特に郊外開発に市の補助金を投入し、個別の計画を実現させた。BZO46 では、開発用地と緑地など保存用地を明確に定義し、開発用地では、住宅のほか、学校や教会といった中核となる街区と街路や歩道との結びつき、将来的な開発に相応しい場所を規定したことが特徴である。

この時代の集合住宅の一般的な動向について、まず敷地に着目すると、その多くは自然地形を活かした緑豊かな郊外で開発され、郊外各地区は既存市街地と有機的に繋がっていた。すなわち、既存市街地と郊外のランドスケープとの結びつきが 40～50 年代におけるアーバニズムの模範であった。つぎに、住棟配置に着目すると、梯形に配置する傾向がみられる。これらの住棟を有機的な歩道がむすび、芝生や樹木など緑豊かな環境を形成しているところに、戦前からつづく田園都市構想をもとにした BZO の影響がみられる。但し、戦前には、同形同大の線状の住棟を規則的に並べる平行配置の形式であったことに比べると、この時代には旧来の単調な印象を打ち破ろうとする意図が窺える。また、個別の建築では、屋根の軒の深さやバルコニーの手摺壁、張り出し窓など、ディテールを巧みに変化させ、全体が単調にならない工夫をしていることも特徴のひとつといえる (写真 4-2-1)。

受賞作品に注目すると、第 1～2 回 (1947-50 年) は郊外の傾斜地に建つ作品が多く、低層の住棟

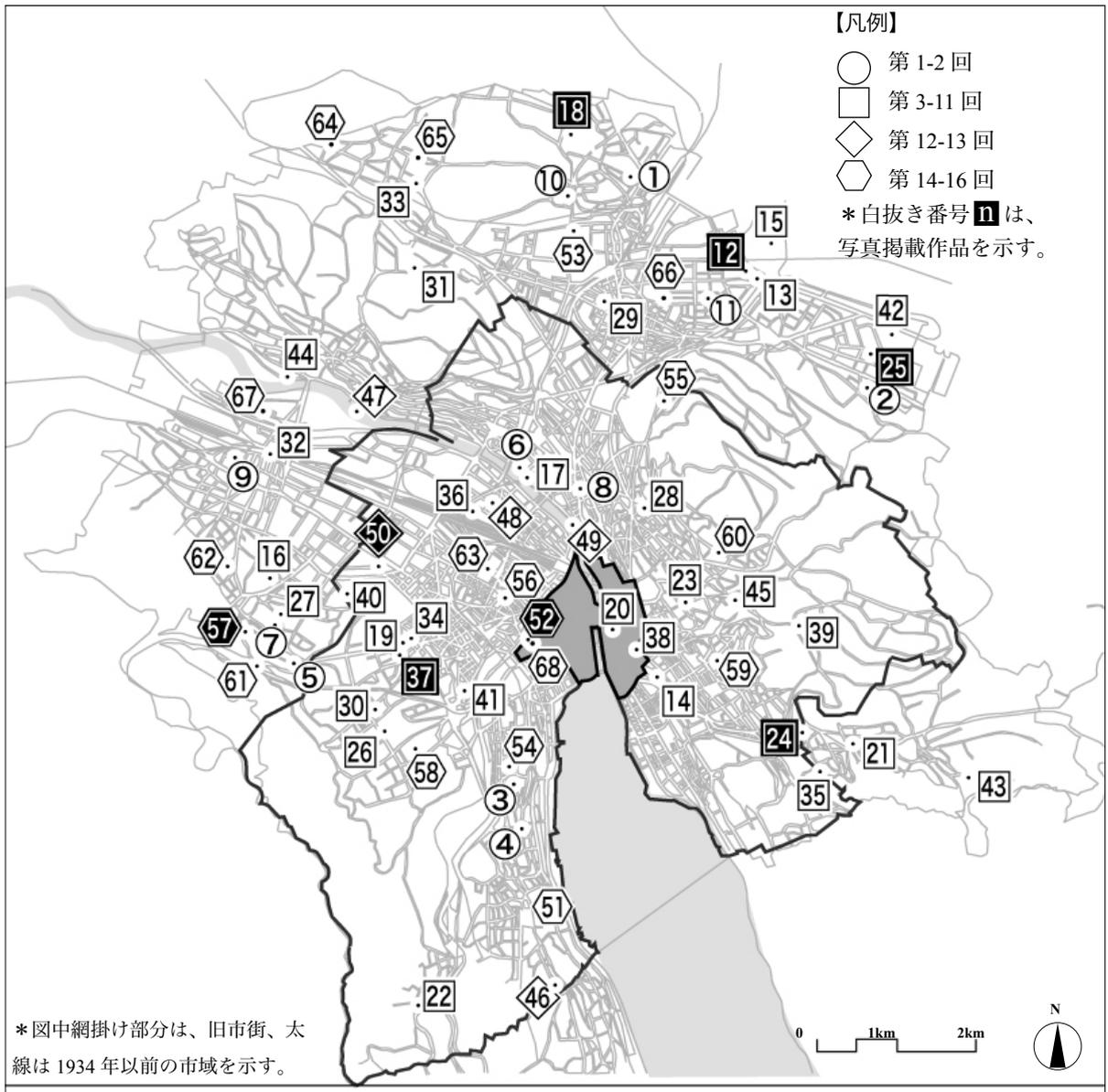


図 4-2-1 受賞作品の分布

(連邦工科大学チューリッヒ市校建築理論研究所編『チューリッヒ市建築賞 50 年誌』(50 Jahre Auszeichnung für gute Bauten in der Stadt Zürich) (1995) を元に調整。)



写真 4-2-1 Siedlung Hirschwiese (1953 年竣工)



写真 4-2-2 No. 6 外観

表 4-2-1 戦後のチューリッヒ市における都市形成に関連する政策、提言と集合住宅の特徴

期	都市計画の変遷	声明、提言、動向	集合住宅の特徴
Albert Heimrich Steiner	BZO 46 (市)	郊外の街区開発に対する補助金 田園都市構想に基づく街区開発計画の作成 Generalverkehrsplan (1955) : 総合交通計画	緑に囲まれ、有機的に繋がった、点在する都市線状の規則的な配置 (単調な印象) →ヴォリュームをまとめて配置、梯形配置 住宅団地の個性→ディテールによって表現 ex.) 張り出し屋根、バルコニーの手摺壁、張り出し窓
Adolf Wasserfallen	BZO 63 (市)  BZO 74 (市) PBG 1975 (州)  空間計画法 (連邦) Bundesgesetz über die Raumplanung, 1980	Tiefbahn (1962) : 地下鉄計画  「高密度化した都会の雰囲気 (Urbanität durch Dichte)」 (社会学者 Edgar Salin) →新たな都市デザインの模範として都市計画家達に採用 U-Bahn (1972) : 地下鉄計画  “Nein zum Y” (1974) : 高速道路建設に対する反対運動 オイルショックや経済危機 →既存の歴史的建造物や高い評価が、公共住宅建設に影響を与える次の段階  70年代終わりまで好景気の間、大規模な建設活動が続く 例) Hardau, Grünau (写真 4-2-4、4-2-5) は、この段階における最後のプロジェクト	1950年代中盤から発生した好景気、技術革新 →建設生産に対する合理化 「より大きく、より高く、より速く建設する」  住宅のモジュール化、プレファブ化  有機的な建築の構成ではなく、幾何学的な規則やヴォリュームの相互作用  例) Hirzenbach, Unteraffoltern, Holzerhurd 都市化=機能的、社会的で、空間的にも高密度化した状態 新たな模範としての Lochergut の高層住宅 →メゾネットタイプの住戸により、個人住宅のような感覚を得る  増加する高齢者向けの集合住宅の問題  Fruttal の住宅団地=プレキャスト部材による合理的で複合的な住宅 →工業化住宅という先入観を覆すことができなかった
Hans Rudolf Rüttig	BZO 92 (市) BZO 95 (市)	S-Bahn (1980) : 郊外鉄道計画  “都市の修繕 (Stadtreparatur)” “lebendige und durchmischte Stadt” (Ursula Koch, 1986) “Zürich ist gebaut” (Ursula Koch, 1988)	控えめな事例がほとんど →既存の団地の部分的な改修に集中、その殆どがファサードの断熱、バルコニーの拡張、サンルームの増築
Amt für Städtebau	BZO 99 (市)  BZO 14 (市)	Elmar Ledegerber “10年間で10000戸の新たな住宅建設を”, 1998 ミネルギー基準 (1998)  新築事例の大部分が設計競技によって決められる →住宅組合は単に割安で持続的な生態系に配慮したものだけでなく、建築的に質の高いプロジェクトを競わせるようになった →建築的な表現力が直接賃貸率に影響し、街区のアイデンティティを高めている	類型的な傾向を持っていない →その時々との条件や住宅需要に対応している  40年代の田園都市構想に基づく線形の住宅の構成 →新たな建物へ解釈される (更新期)  平面図における多様なプランニング  大きくて、快適で、家具の整った外部空間 →現代の住宅建設における外すことのできない構成要素

(『より公正に チューリッヒ市の建築・ゾーニング令の発展』(GERECHTER Die Entwicklung der Bau- und Zonenordnung der Stadt Zürich) (2014)、『住宅以上 チューリッヒ市の非営利の集合住宅 1907-2007』(Mehr als Wohnen Gemeinnütziger Wohnungsbau in Zürich 1907-2007) を元に作成。)



写真 4-2-3 No. 12 外観



写真 4-2-4 Hardau

が緩やかな勾配の緑地に規則的に配置されている。また、敷地が急勾配の場合でも大規模な造成はせず、第1回（1947年）のNo. 5や6（写真4-2-2）のように、住棟の軸を等高線に直角に設定することで、敷地高低差を建物が再現している。この時代は、住棟間隔が広く、外部空間がゆったりとしており、こうした点が評価され本賞を受賞していることが読み取れる。第3回（1954年）も郊外の事例が大半を占め、地形は全て平坦である。No. 12（写真4-2-3）や13のように、その住棟の配置は、単に平行に配置するのではなく、ずらすことで、住棟に囲まれた外部空間を創出している作品が評価されている。ここから、採光や通風条件よりも景観としての住棟配置が評価されていたものと考えられる。さらに、数は少ないが、中心部の作品は、隣接する既存の建物の高さに揃えることで景観に配慮している。

#### § 4-2-2. 都市の高度利用が進む時代（1957-1985年）

2人目のStadtbaumeisterに登用されたのは、Adolf Wasserfallenである。Wasserfallenは既存市街地周縁部の高度利用を図るため、更新事業を税金で補助する特別な許可を下した。また、Wasserfallenは1963年にBZOを改訂し（BZO63）、市内の建物の高さ制限を最高90mとした。これらの決定は、市域全体の計画を動かす契機となり、官民協同で大規模な住宅地開発が進められた。特に1950年代後半から70年代には経済成長とともに写真4-2-4のHardauや写真4-2-5のGrünauなどの大規模な開発が実現したほか、主要幹線道路や河川などの土木事業も展開し都市景観が形成されていく。好景気に支えられたこうした開発の過程で、建築生産と建設技術も発展する。というのは、集合住宅の建設において、より大きく、より高く、より早く建設する機運が高まり、合理的な建築生産が模索された結果、モジュール化、プレファブ化が推進された。集合住宅の高層化で各住戸の接地性は低下し、建築はそれまでの有機的な形態から幾何学的な形態へ変化したことがこの時代の特徴のひとつといえる。また、高層化によって限られた敷地内に広々とした外部空間を得ることもつながっている。

ところで、『住宅以上 チューリッヒ市の非営利の集合住宅 1907-2007』によれば、BZO63策定の前年である1962年の440,180人をピークに人口は減少に転じる（図4-2-2）。人口が減少したにも関わらず都市周縁部で大規模な集合住宅の建設が進み、住戸が供給されたのは、好景気に伴い市内中心部の手頃な価格の住宅の多くが、新規の事業所に建て替えられたためである。そのため、既成市街地の居住人口は周縁部や郊外へ移り、中心市街地の人口が空洞化する。そこで、Wasserfallenは都市



写真 4-2-5 Grünau

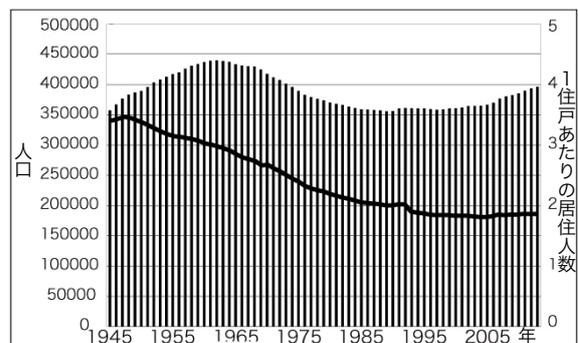


図 4-2-2 チューリッヒ市の人口推移と1住戸あたりの居住人数  
 (『4 x 25 Günstig wohnen in Zürich』(Statistik Stadt Zürich, 2009)、『Bevölkerung Stadt Zürich』(2013)を元に作成。)

居住を再び促すため、1974年にBZOを改訂した(BZO74)。BZO74で注目すべき内容は、中心市街地における既存建築の屋根裏を住戸に転用できるという「居住空間計画」(WAP)の策定である。

しかし、1973年のオイルショックで景気が後退し、大規模住宅地開発に対する市民の批判が見られるようになる。そのひとつは自然環境破壊を懸念するもので、緑豊かな郊外での集合住宅の開発と全く異なった方針は市民にとっては受け入れ難かったことを示している。さらに、1975年に「ヨーロッパ建築遺産憲章」が採択され、欧州全体でリノベーションに対する認識が高まった。その影響は市民にまでおよび、既存建物の取り壊しよりも、内部改修や街並に影響を与えない範囲での増築等を検討する動きが活発になった。

この時代の受賞作品に目を向けると、第5回(1961年)は、No. 25(写真4-2-6)、や26のように大規模な敷地で、学校や商業施設を組み合わせた複合的な集合住宅の計画が受賞しているのが目をひく。つまり、集合住宅が都市の再開発の性格を帯びているのが特徴である。この場合、多くの住棟は中層であるが、一部に高層の住棟を組み込むことで、ランドマークを創出している。また、No.22～24のように小規模な集合住宅では、急傾斜の敷地を造成せず、敷地高低差を建物が再現しており、この点は、前の時代と共通する。しかし、第7～8回(1968-71年)は郊外・中心部ともに全て高層の住棟になる。このうち、郊外では、前の期と変わらず隣棟間隔を十分に取ることで、広大な外部空間を確保している。ここから高層階の住戸の接地性を低下してでも、外部空間の充実を図ろうとする意図が窺え、この点が評価されたと考えられる。第9～10回(1976-80年)は、No. 34～37、39のように、住棟を雁行させて、街区全体を囲うように配置している。この結果、囲まれた空間は大きなものとなるが、住棟の配置に変化をつけることで、多様な空間を創出することに成功している(写真4-2-7)。

### § 4-2-3. リノベーションと再開発の萌芽の時代(1985-1997年)

3人目のStadtbaumeisterに登用されたのは、Hans Rudolf Rüeggであった。また、当時の建設局長であったUrsula Kochが市の都市計画に強力な影響を持つようになったことがこれまでの時代と相違する。聞き取り調査によれば、強力なリーダーシップを発揮するKochをRüeggがサポートするような関係であった。

上述の通り、前の時代は1975年の「ヨーロッパ建築遺産憲章」の影響で増改築の動きが活発になる一方、新築の動きが鈍っていたが、1987年のベルリン国際建築展の開催で、市街地の再開発がさらに注目を集めた。この影響はチューリッヒ市にもおよび、市は「都市の修繕」(Stadtreparatur)を都市計画のスローガンに掲げた。そして、1988年、Kochは「チューリッヒは建設され尽くした」(Zürich ist gebaut)と声明を出している。つまり、市には新規開発を行なう敷地的余地がなくなり、再開発が都市計画の主題となる。実際、80年代後半から、90年代にかけて、市街地における一街区全体を再構成する計画が進められるようになり、これに対応して1992年に市はBZOを改訂した(BZO92)。その作成過程で、Kochは既存の工業地域を業務地域に変更して開発する際、一定割合の集合住宅を組みこむことを定め、さらに、駐車場や学校、公園などを一体的に計画し、同一街区における多様な用途が混在することの妥当性を主張した。この主張は、再開発地域における「構成計画」



写真 4-2-6 No. 25 外觀



写真 4-2-7 No. 37 外觀



写真 4-2-8 Escher Wyss 地区

(Gestaltungsplan)の運用に発展することになる。この構成計画が実施されたのは、民間の工業地域だった北部地区や Steinfels 地区、Escher Wyss 地区（写真 4-2-8）であった。

この時代の集合住宅は、その大部分が、既存建物の部分的な改修に集中しており、ファサードの断熱改修や、バルコニーの拡張、サンルームの増築であった。Koch の主張するリノベーションの大切さは実現されたが、街区全体の再開発の実現にはいたらなかった。

受賞作品に着目すると、第 12 回（1990 年）は 4 件中 3 件が改修事例である。改修されたのは 1930 年頃の集合住宅であるから、配置構成は第 1 回と同じく、規則的な配置である。第 13 回（1994 年）から敷地周辺の既存建物の高さや隣棟間隔などの密度、周辺の都市機能など、都市の文脈を読んだ作品が選出される。No. 50 は、街区全体を一つのブロックとして捉え、中庭を持つ。この手法は第 9 回にみられ、14 回（2001 年）以降も引き続き選出される。

#### § 4-2-4. 都市の更新が進む時代（1997 年以降）

1997 年、市は組織改編を行ない、都市空間とアーバニズムの観点から景観の質の向上を担う都市計画部（Amt für Städtebau）を設置した。これまでの Stadtbaumeister の役割は分割され、建築局の都市計画部など各部の長が担い、各部の連携で、都市計画を進めることとなった。都市計画家であり、都市計画部長である Franz Eberhard が、Rüegg の時代に計画された再開発プロジェクトを引き継いだほか、新たに西部地区の再開発計画にも取り組んだ（写真 9）。これは、Koch の再開発の方針によるばかりではなく、人口の変動とも結びついている。というのは、1962 年以降、市内の人口は減少傾向にあったが、90 年代半ばから再び増加に転じ、住宅不足が深刻であった。そこで、市は 1998 年に 10 年間で 10,000 戸の新規住宅建設という方針を打ち出した。この政策は、2002 年に掲げられた「全ての市民に住宅を」（Wohnung für alle）というスローガンとして受け継がれ、限られた建設用地の中で、高密度化した住宅の建設が市内各地で展開している。

この間、BZO92 の修正を重ねて（BZO95）、1999 年に BZO は改訂されている（BZO99）。さらに、建築家の Patrick Gmür は 2009 年に都市計画部長に就任し、郊外における都市居住の高密度化や、2014 年の BZO 改訂（BZO14）を指揮している。

この時代の再開発による大部分の市や住宅組合による新築の集合住宅に類型的な傾向はなく、各々の敷地条件や、個別の住宅需要を強く反映していた。また、住宅組合は、単に割安で自然環境に配慮したものだけでなく、集合住宅の質の向上を目指して、設計競技を導入したことも影響していると思われる。住宅組合は、建築の意匠的な表現力が直接賃貸率の向上に寄与していることと、街区のアイデンティティを強めていることを設計競技の成果としている<sup>9)</sup>。さらに、屋外家具などが整った広く快適な外部空間は住宅団地に必須の構成要素で、道路からの視線を遮るために、建物内にロジヤを設けたり、バルコニーやベランダを配置するなどの工夫をしている。このことは、集合住宅が一貫して都市景観形成を担う要素でありつづけていることの証左である。このほか、国内ではサステナビリティに関する認識も高まり、エネルギー消費を抑えるための民間の省エネルギー建築認定基準である、1998 年の「ミネルギー基準」（Minergie Standard）<sup>10)</sup>を提示した。この基準は、ソーラー発電や木質ペレット燃料、地中熱ヒートポンプなどを積極的に活用することにつながった。この影響はチュー

リッヒ市にもおよび、設計競技の要項に組み込まれ、提案が実現されることとなった。

受賞作品に注目すると、第14回（2001年）以降は、No. 52（写真10）、53、59のように、第13回に引き続いて、街区全体を一つのブロックとして捉え、中庭を持つ。また、単体の住棟の集合住宅は、都市の中心部において、隣接する建物に揃って配置される形式か、都市の周縁部の急傾斜地に沿って住棟を配置するが作品が選出されている。第15回（2005年）では、複数の住棟で構成される事例も、傾斜に沿った形で配置されている。第16回（2011年）では、中層の住棟が規則性を持って配置されている事例が見られる。また、単体の住棟では、多角形平面のものも見られた。

以上より、各時代の本賞受賞作品の分布と敷地条件の時代傾向は図4-2-3のように表現することができた。

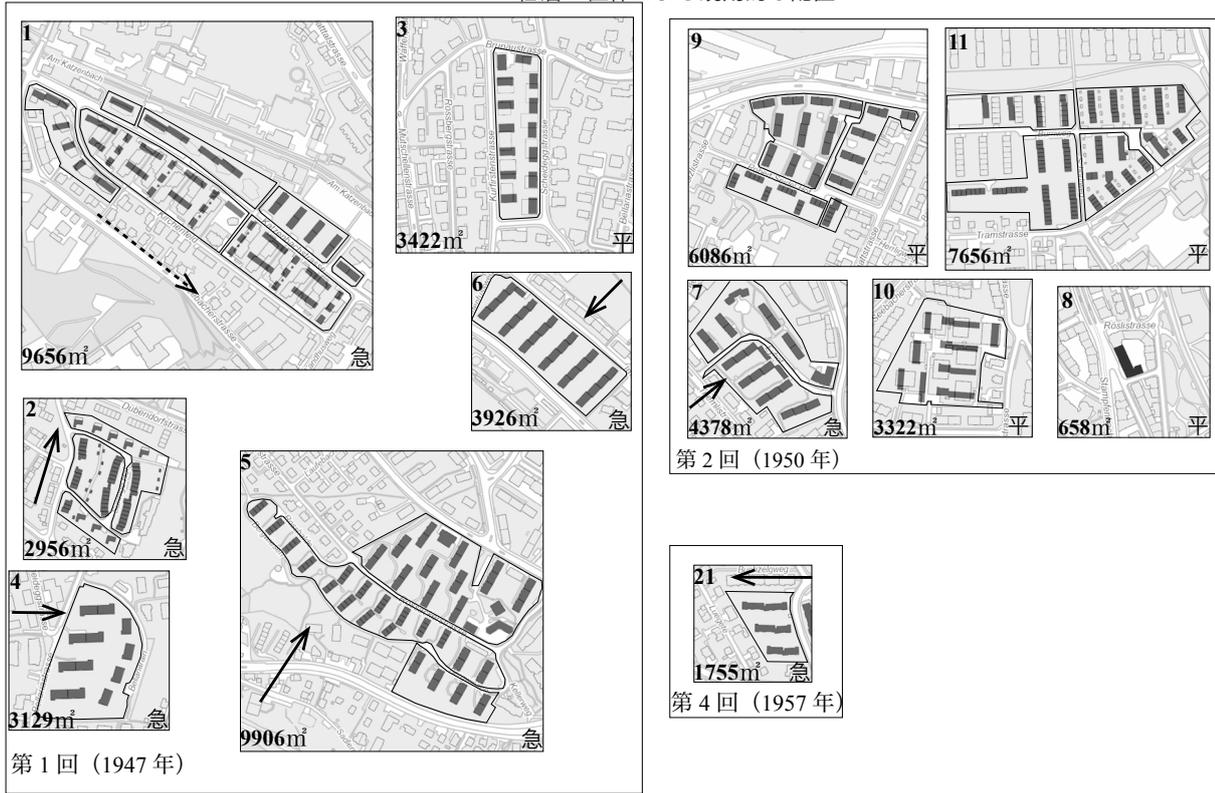


写真 4-2-9 西部地区

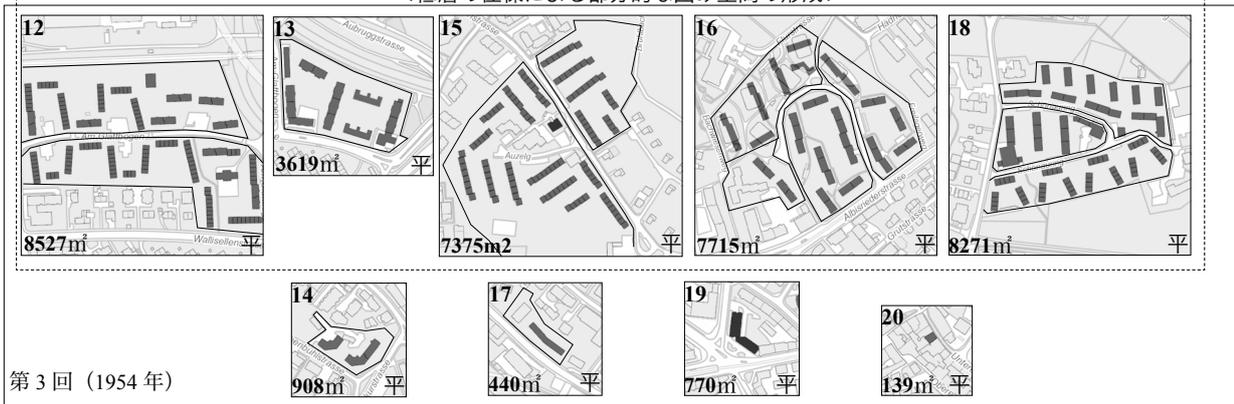


写真 4-2-10 No. 52 俯瞰

＜低層の住棟による規則的な配置＞



＜低層の住棟による部分的な囲み空間の形成＞



＜中層と高層の住棟の組み合わせによる大規模開発＞

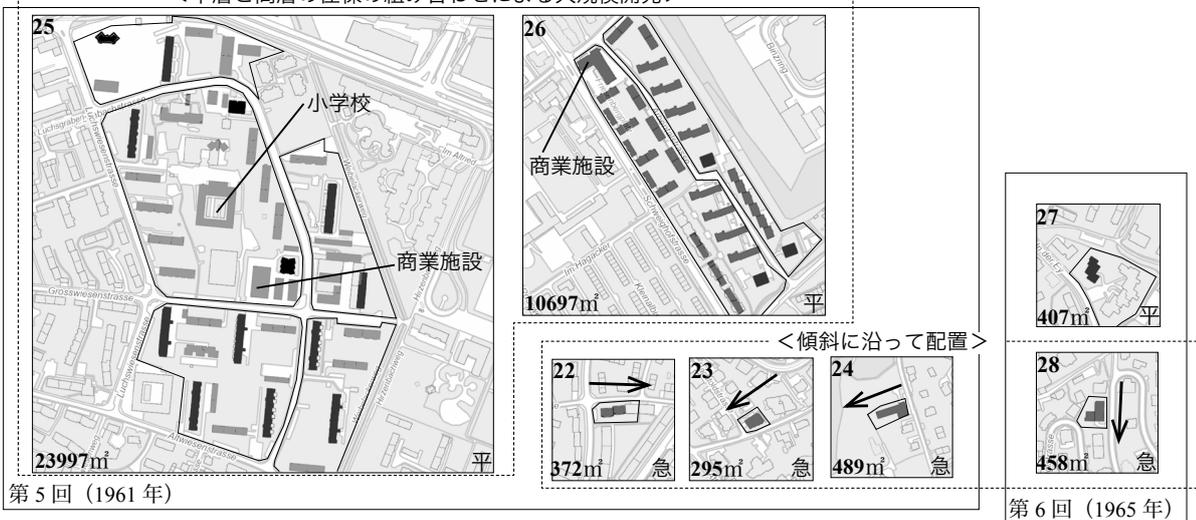
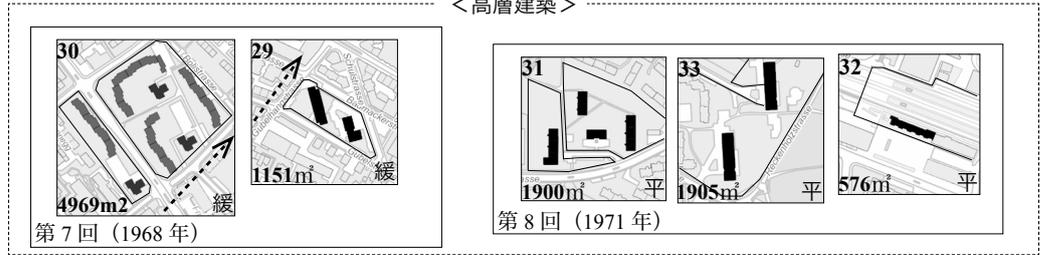
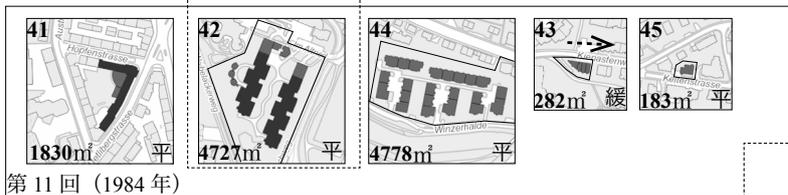


図 4-2-3 受賞作品の敷地条件と配置構成

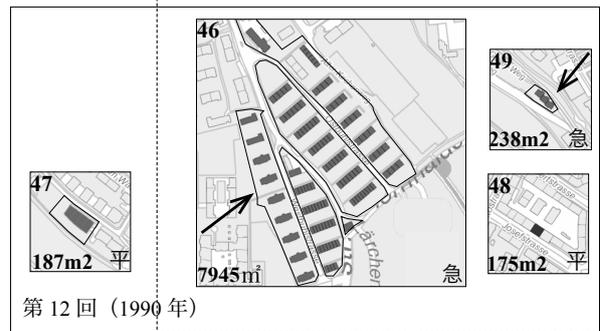
<高層建築>



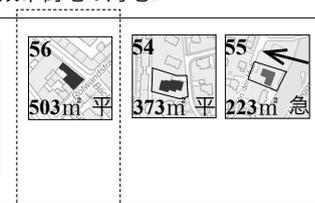
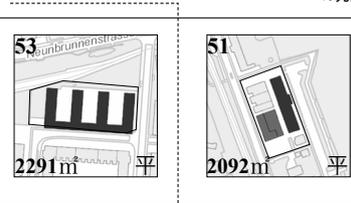
<雁行させた住棟で外部空間を囲う>



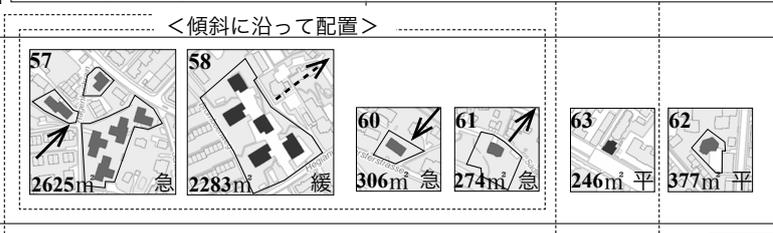
<既存建物の改修>



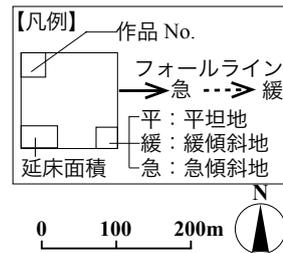
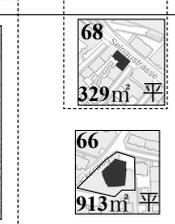
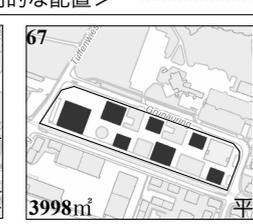
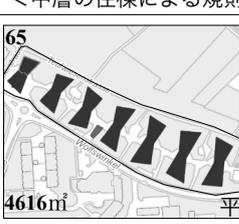
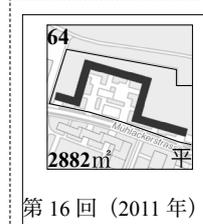
<一街区全体を構成>



<既成市街地の角地>



<中層の住棟による規則的な配置>



(チューリッヒ市電子地図 (<http://www.stadtplan.stadt-zuerich.ch/zuerialan/stadtplan.aspx>) を元に調整。延床面積はチューリッヒ市建築賞データベース (<http://www.stadtplan.stadt-zuerich.ch/zuerialan/gutebauten.aspx>) による。平坦地、傾斜地の判断は現地調査による。尚、急傾斜は、敷地内高低差がそのまま建物内のレベル差になっているものとした。)

### 第3節 受賞作品の構成単位と住棟構成の特徴

#### § 4-3-1. 集合住宅の構成単位

本賞作品集の論考によると、一つの住棟は、最小単位である住戸（Wohnung）が共有のエントランスを持つ Haus というまとまりを形成し、複数の Haus が住棟（Gebäude）を構成している（図 4-3-1）。つまり、一つの住棟の規模は Haus によって決定する。この Haus という考え方が、チューリッヒの集合住宅を考える上で特徴といえる。これらの Wohnung-Haus-Gebäude の関係を明らかにするため、構成パターンを整理し類型化を試みた。図 4-3-2 は Wohnung へのアプローチに注目した Haus の構成パターンを示し、パターンとして、A：外部から直接 Wohnung に入る形式、B：階段室を介して Wohnung に入る形式、C：階段から共有空間を介し Wohnung に入る形式、D：階段から廊下を介し Wohnung に入る形式の4つが得られた。次に、図 4-3-3 は Gebäude と Haus の関係を示し、a: 単体ヴォリューム、b: 単純な形態で分割する形式、c: ヴォリュームの分節による形式の3つが得られた。図 4-3-4 は、Haus と Wohnung の関係を示し、イ：戸建、ロ：単純な形態で分割する形式、ハ：Wohnung 毎に分節された形式の3つが得られた。これらの関係を分析し、受賞作品の構成パターンを表 4-3-1 に示す。

#### § 4-3-2. Wohnung-Haus-Gebäude の関係

まず、Gebäude と Haus の関係は第1～3回（1947-54年）にかけて A-b、B-b が集中している。これらは複数の Haus が直線状に連結し、個々の Haus は Gebäude の中に隠れ、矩形の Gebäude が全体を構成している（写真 11）。A-b は第11回（1984年）以降見られないことから、単純な矩形の住棟を直線状に配置する形式から、分節された Haus の組み合わせで全体ヴォリュームを構成する形式や、Haus そのものの形式が階段室を含め多様になっていると考えられる。

つぎに、Haus と Wohnung の関係について、B-ロが、どの時代にも見られ、チューリッヒの集合住宅の基本的な構成パターンといえる。また、1990年代以降は C パターンが増加しているが、近年は、階段室に共用空間を付随させることで、住棟に住民の共有空間を積極的に創出する設計姿勢が窺える。

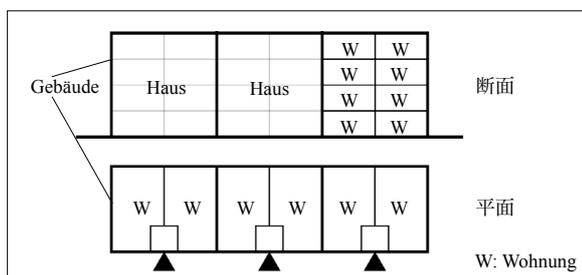


図 4-3-1 集合住宅の構成単位

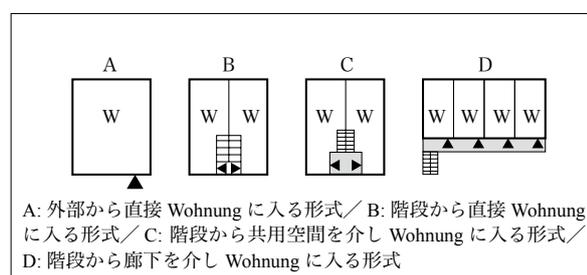


図 4-3-2 Haus の構成パターン

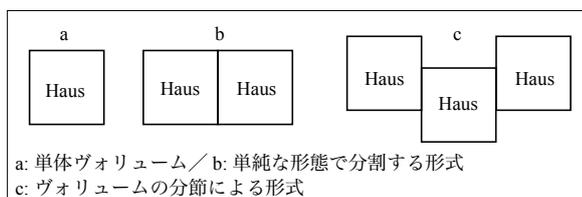


図 4-3-3 Gebäude と Haus の関係

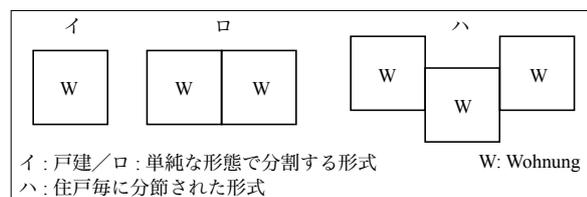


図 4-3-4 Haus と Wohnung の関係

表 4-3-1 Gebäude-Haus-Wohnung の関係

審査回	No.	竣工年	Gebäude数	Gebäude Haus の関係	Type数	Haus数	Haus Wohnung の関係	Type数	Wohnung数	審査回	No.	竣工年	Gebäude数	Gebäude Haus の関係	Type数	Haus数	Haus Wohnung の関係	Type数	Wohnung数													
1	1	1946	30	B-b	6	144	A-イ	121	279	1	27	1961	1	B-a	1	1	1	B-ハ	1	25												
				A-b	3									B-a	1			B-口	1	14												
				B-b,B-c	4									B-b	1			B-口	3	54												
				A-b	1									B-a	3			B-ハ	4	206												
				A-b	11									B-c	3			B-ハ	13													
	A-b	5	B-c	1	B-ハ	1																										
	A-a	8	7	1965	7	51	A-イ	51	51		31	1969	3	B-b	1	8	8	B-口		118												
	A-c	1												B-b	2			B-口														
	A-c	2												D-a	1			D-口	1	40												
	A-c	1												D-a	2			D-口	2	236												
	3	1943	14	14	B-a	14	14	B-口	14		約84	34	1975	2	C-c	2	6	C-ハ	6	144												
B-a					4	D-a				2					A-イ	6					約35											
4	1945	8	8	B-b	4	12	B-口	12	約72	35	1975	4	D-a	2	8	A-イ	6	約35														
				B-b	4								A-c	2					D-ハ													
5	1949	31	31	B-b	12	90	A-口	54	約270	36	1973	2	2	B-c	1	5			156													
				A-b,B-b	4									B-c	1																	
				A-b	12									B-c	1																	
6	1947	6	6	B-c	6	24	B-口	24	144	37	1975	2	B-c	1	9	B-ハ		145														
				A-a	1								B-c	1																		
7	1949	8	8	B-b	4	20	B-口	19	119	38	1978	1	D-a	1	1	D-口	1	17														
				B-b	4								B-c	4					B-口		約14											
8	1948	1	1	B-b	1	3	B-口	3	約24	39	1979	4	B-c	4	8	B-口		約14														
				B-b	1																											
2	9	1948	22	A-a	1	56	A-イ	24	約218	40	1979	2	2	B-c	2	12	B-口	2	約110													
				B-b	11												B-口	2														
				A-b	7												B-口	4														
				B-b	3												B-口	4														
	B-b	2	A-イ	41	89																											
A-b	2	B-口	7																													
10	1950	9	9	A-b	5	49	B-口	7	90	41	1982	8	B-c	14	B-口,B-ハ		約120															
				A-b	5													45	1981	1	B-a	1	1									
3	12	1952	24	B-b	5	149	A-イ	133	221	46	1987	29	29	B-a	9	119	A-イ		194													
				A-b	2									B-b	2																	
				A-b,B-c	5									A-c	7																	
				A-b	3									A-c	1																	
				A-b	4									A-c	2																	
	A-b,B-c	3	A-c	5	B-口		8																									
	A-b	2	A-c	2																												
	13	1954	6	6	D-a	2	12	B-口	10					約90	47					1986	1	B-b	1	4	B-口	4	8					
					B-b	3																D-口	1					48	1988	1	B-a	1
	14	1953	2	2	B-a	1	3	B-口	1					31	49					1990	1	B-c	1	3	B-ハ	3	6					
					B-b,D-b	1																D-口	1									
15	1953	19	19	B-a	1	121	A-イ	120	132	50	1991	1	1	D-c	1	5	D-口	4	12													
				A-b	2									B-b	1					7	B-口	4										
				A-b	3									B-b	1								14	2000	1	C-b	1	15	C-口	4	64	
				A-b	1									C-c	1					4	C-口	4										64
				A-b	5									B-a	1					1	B-ハ											約10
16	1950	18	18	B-b	10	47	B-口		340	54	1998	1	B-a	1	1	C-口	1	3														
				B-c	6								C-a	1					1	C-口	1											
17	1952	1	1	D-a	1	1	D-口	1	30	55	1998	1	C-a	1	1	C-口		41														
				B-a	1								C-a	6					6	C-ハ												
18	1949	25	25	B-a	6	73	A-イ	48	190	57	2004	6	6	C-a	6	6	C-口	2	76													
				B-b	2									C-口	1																	
				B-b	5									C-口	2																	
				A-b	12									B-口																		
19	1951	1	1	B-b	1	2	B-口	2	36	58	2003	5	5	B-b	1	9	A-イ	2	約60													
				A-b	1									B-1	4																	
20	1952	1	1	B-a	1	1	B-口	1	約16	59	2002	2	2	C-a	1	9	C-口	2														
				B-a	1									C-口	1																	
4	21	1956	4	D-a	4	4	D-ハ	1	約50	60	2003	1	1	C-a	1	1	C-口	1	5													
				B-口	1									C-a	1					1	C-口	1	10									
5	22	1959	1	B-c	1	2	B-口	2	16	62	2003	1	1	C-a	1	1	B-口	1	9													
				B-a	1									B-a	1					1	B-口	1										
				D-a	1									D-ハ	1					8												
				D-a	1									D-ハ	1					8												
				B-a,D-a	8									39							418											
B-b	2	D-ハ																														
26	1960	24	24	B-a	8	39	D-ハ		418	64	2007	1	1	C-c	9	9	C-口		119													
				B-b	2									C-c	7					14	C-口		190									
16	26	1960	24	B-a	8	39	D-ハ		418	66	2007	1	1	C-a	1	7	C-口	1	22													
				B-b	2									C-a	7					7	C-口		152									
				B-a	8									B-a	1					1	B-口		4									
				B-b	2									B-a	1					1	B-口											

(「Gebäude数」、「Haus数」、「Wohnung数」は現地調査による。空欄は不明。)

また、第3回（1950年）までは、イもしくはロであるが、第4回（1956年）以降はロとハが共存する。しかし、第14回（2001年）以降は、外観は単純な矩形に見えても、住宅内部に変化の富んだ空間を生み出している（図4-3-5）。

さらに、Hausの基本形を発展させた事例もあり、一つ目は、No.24である（写真4-3-2）。この事例はDパターンを基本とするが、外部に共用エントランスがあり、アプローチ階段を下って、各住戸に入る形式である。これは、急斜面の敷地条件とアプローチ動線上に街を見下ろす空間を創出するための設計上の工夫から生まれたものと考えられる。また、No.50（写真4-3-3）もDパターンであるが、中庭と一体的になるような回廊を計画し、アプローチ階段を含めて住民が集える場が創出されている。住棟は、隣接する既存の建物と高さを揃え、整然とした佇まいをしながらも、敷地内のオープンスペースを集合住宅の構成と併せて計画している点が特徴である。

以上から、受賞集合住宅作品は、集合住宅の構成単位である Wohnung-Haus-Gebäude の関係で分類することで、住棟構成に関する類型を得ることができた。外観を複雑に構成しているように見えても、時代を超えても継承される基本的な構成パターンが存在し、敷地条件に対応させながら少しずつ派生した空間構成を創出していることが、本賞受賞集合住宅作品の特徴といえる。

#### 第4節 受賞作品の空間構成と都市景観における位置づけ

第1～16回までの受賞作品の具体的な計画に着目すると、敷地が平坦地であっても傾斜地であっても、敷地を造成して自然地形を崩すことはせず、住棟を配置するのが時代を問わず共通していることがわかる。その背景には、農業国として発展してきたスイスにおいて自然地形は最も優先される要素であり、それを活かして接地性の高い建築物を設計することは、スイス人にとって重要な考え方で



写真 4-3-1 No. 18 外観

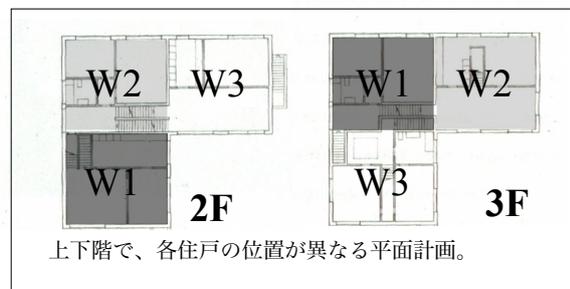


図 4-3-5 No. 55 平面図  
（『Hochparterre』(1999.4)より転載し、筆者により加筆、調整。）



写真 4-3-2 No. 24 アプローチ



写真 4-3-3 No. 50 中庭

あることが聞き取り調査から明らかになった<sup>11)</sup>。こうした設計姿勢は、チューリッヒにおける集合住宅作品の特徴のひとつといえる。敷衍するならば、Steinerの時代の田園都市構想がチューリッヒ市の集合住宅開発に根付いているとも捉えられる。逆に、Wasserfällenの時代の都市計画において高度利用の方針が示され、住棟の高層化を伴った開発が行なわれたことに対する市民の批判は、このような背景に相反することが一因と考えられる。こうした特徴は、住棟のディテールに着目しても理解することが可能で、Steinerの時代に郊外で見られた軒や窓枠のデザインは既成市街地の集合住宅にも共通し、隣接する建物と軒や窓枠の高さを揃えること、周辺環境に配慮してヴォリュームを決定していることなどからわかる。この事実も、集合住宅のファサードデザインやヴォリューム構成が、優れた都市景観の形成に寄与するものとして設計され、評価された結果と考えられる。

概ね1990年代までは、集合住宅の計画において、Hausを中心に据えることで変化のある住棟配置が可能となり、結果として豊かで多様な都市景観がつくられている。このことが本賞の評価の基準であり本質であった。2000年以降は、HausとWohnungの関係に変化がみられるようになり、例えば、外形が単純な矩形であっても、住戸内の断面構成を工夫することによって、変化に富

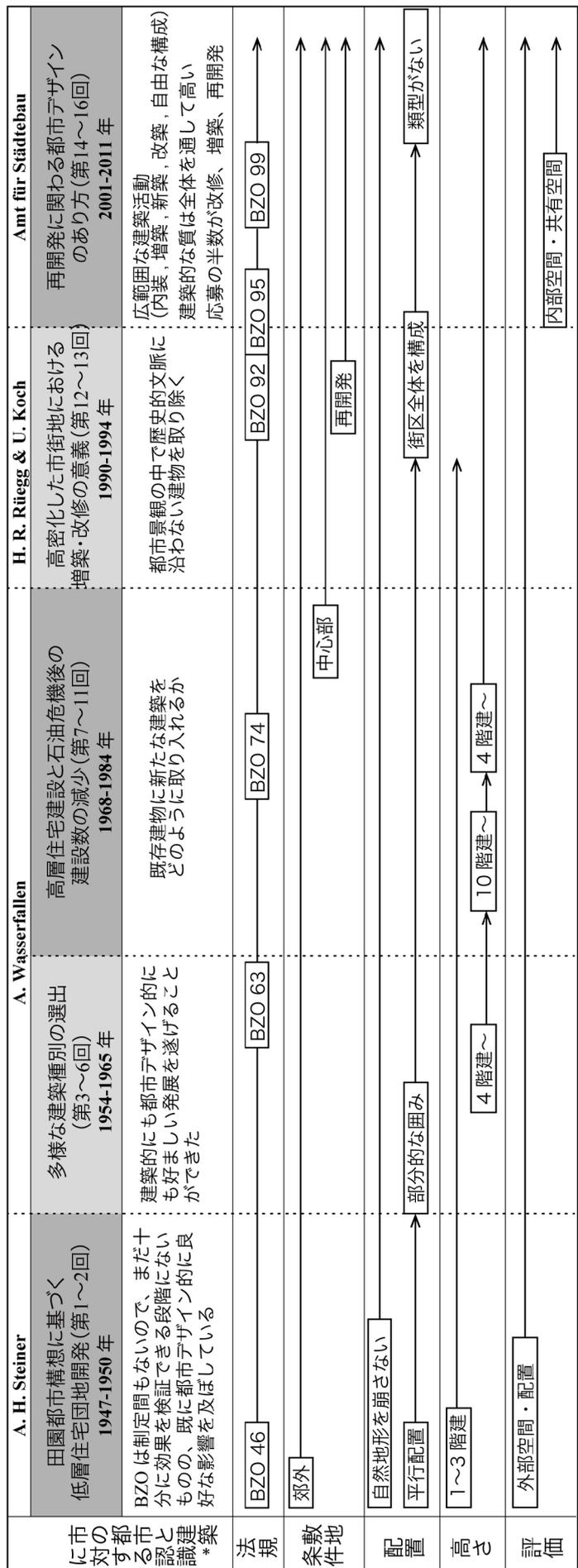


図 4-4-1 都市計画の変遷と受賞作品との関係

んだ住戸を創出しているものが確認できる。さらに、住棟が高層化すると、ベランダの面積を広く確保して失われた接地性を住戸に取り込むなど新しい住居タイプの工夫がみられるようになった。すなわち、Haus と Wohnung の関係に踏み込んで住戸が計画されている。本賞の評価は、元々は配置や外部空間に主眼がおかれていたが、BZO92 以降で改修が主題となったことを転機として、建物の内部空間も着目されるようになった。これ以降、集合住宅の内部空間も主要な評価対象になったと見受けられる (図 4-4-1)。

## 第 5 節 非住宅系の空間構成の特徴

### 4-5-1. 配置構成とヴォリュームの分節パタン

非住宅系の受賞作品の配置構成について、建物の外形と外部空間の関係から次に示す A から F までの 6 パタンが得られた (図 4-5-1)。

- A) 外部空間に単体として存在するもの
- B) 並行配置によって個別の挟まれた外部空間を有するもの
- C) 複数の建物により囲われた外部空間を持つもの
- D) 他の隣接する建物を伴って中庭空間を持つもの
- E) 単体で街区を形成し、三方向を囲うもの
- F) 単体で中庭空間を持つもの

A、B、C は敷地周辺の街路と建物との間に前面空地が確認できる事例であるのに対し、D、E、F は街路と建物との間に空地が無く、建物自体が街区を構成する要素となっている。

全 193 件を分類した結果、A パタンが 74 件 (41%) と最も多く、次いで C パタン 44 件 (24%)、D パタン 32 件 (18%)、B パタン 17 件 (9%)、E パタン 9 件 (5%)、F パタン 6 件 (3%) となった。

また、図 5-3 が示すように、D、E、F は中心市街地に集中しており、19 世紀後半に形成された街区区割りに即した形で新規のプロジェクトが進んでいる事が読み取れる。

ヴォリュームの分節については次の 5 パタンが得られた (図 4-5-2)。

- a) 単体の矩形ヴォリューム

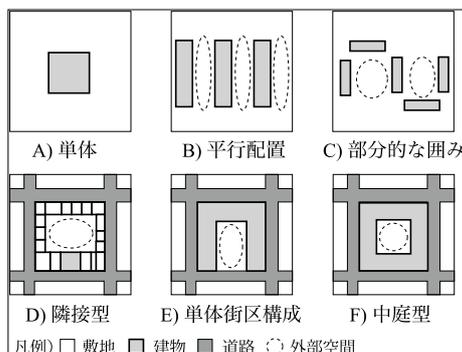


図 4-5-1 配置構成

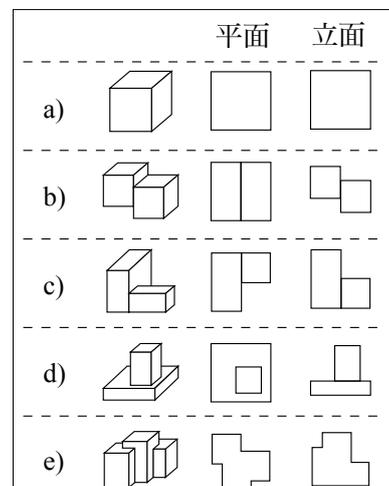
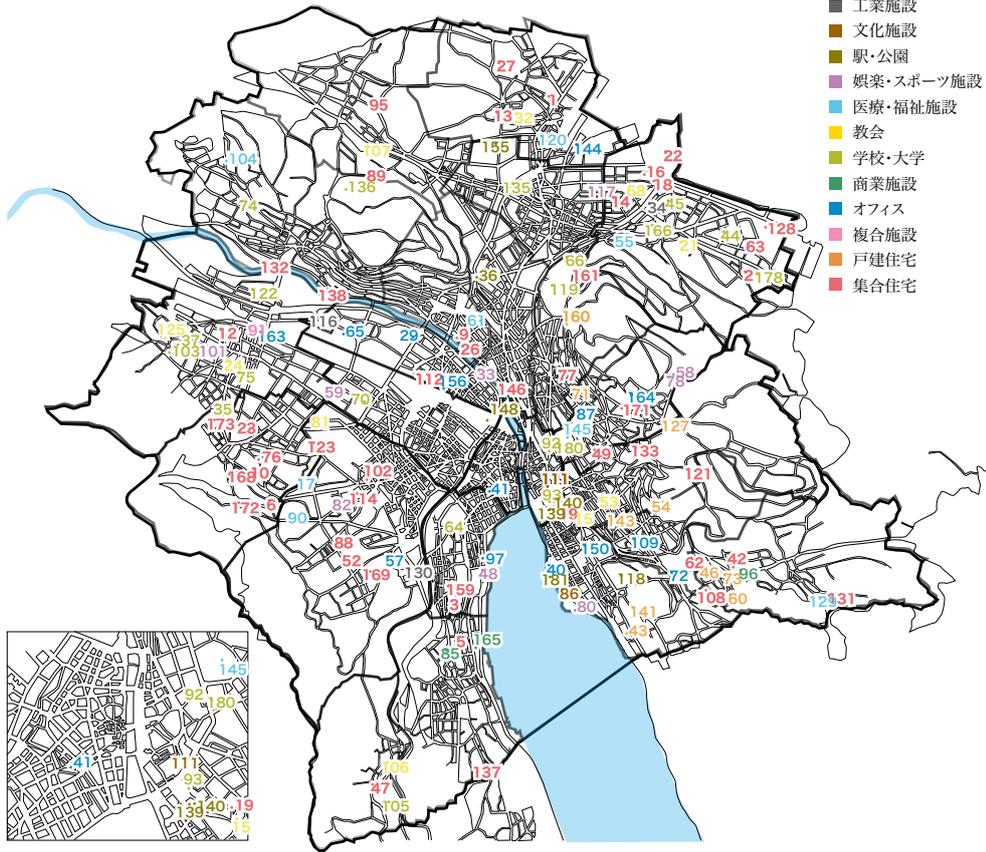


図 4-5-2 ヴォリュームの分節

<ABCパタン>



<DEFパタン>

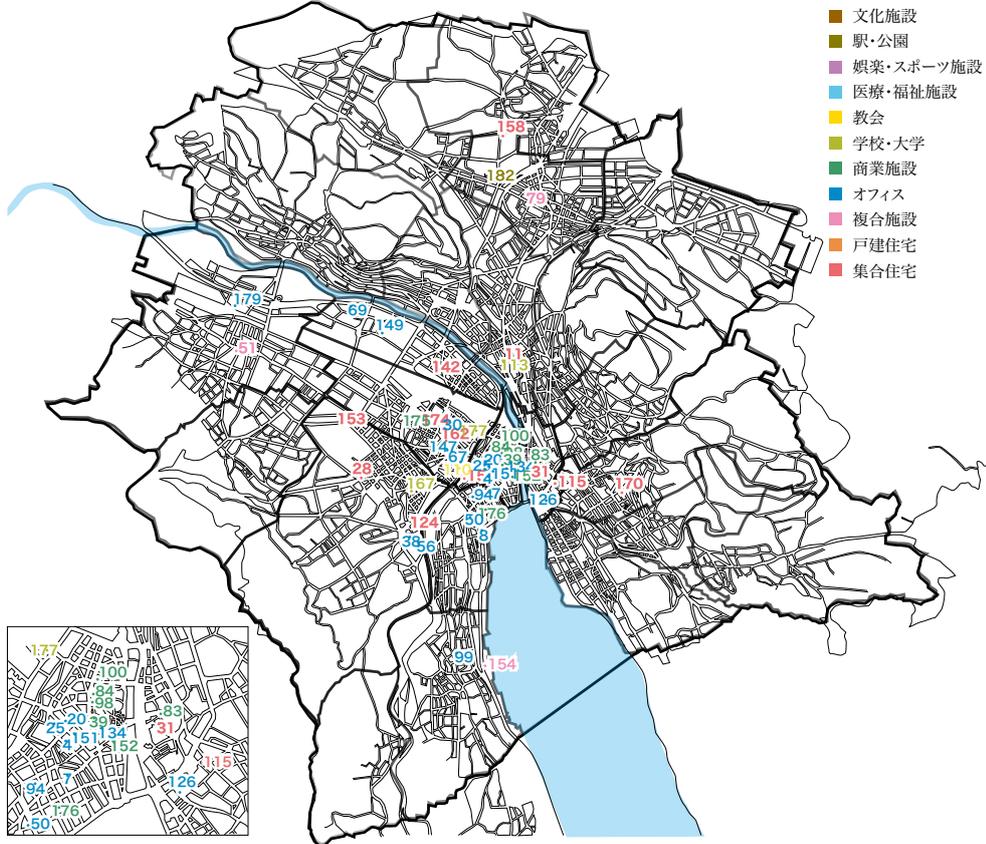


図 4-5-3 配置構成別の受賞作品の分布

- b) ほぼ等しいヴォリュームが鉛直方向にズレを伴う
- c) 異なる矩形ヴォリュームが水平方向に接続する
- d) 異なる矩形ヴォリュームが垂直方向に接続する
- e) 複数ヴォリュームが複雑に組み合わせられたもの

配置構成、ヴォリュームの分節パタンの指標で分析を行った結果を表 5-1 に示す。

#### 4-5-2. 構成類型

配置構成とヴォリュームの分節の関係から、16 パタンの構成類型が明らかになった（表 4-5-1）。

Type 1～5 については、配置構成が A パタンに属し、全体の 41% が該当した。Type 1 は単純な矩形ヴォリュームが敷地内に単体で配置された形式である。Type 2 の多くは傾斜地に建つ形式である。Type 3 は異なる大きさのヴォリュームが平面的に接続し、前面空地を伴い配置される形式である。Type 4 は異なる大きさのヴォリュームが立面的に接続し、前面空地を伴い配置される形式である。Type 5 は複雑に接続したヴォリュームが前面空地を伴い配置される形式である。教会やスポーツ・娯楽施設、工業施設等が該当し、外形が複雑になっている。

Type 8～11 は C パタンで、24% が該当し、集合住宅、学校、教会の順で多く見られた。Type 8 は複数の矩形ヴォリュームが外部空間を囲む形式で、2～4 層の建物が配置される。Type 9 は異なる大きさのヴォリュームが平面的に接続され、複数の単位で外部空間を囲む形式である。Type 10 は異なる大きさのヴォリュームが立面的に接続され、低層部の上に複数の外部空間を持つ形式である。Type 11 は複数の複雑なヴォリュームが接続し、外部空間を囲む形式である。

Type 12、13 は D パタンで、16% が該当し、オフィス、集合住宅、商業施設の順で多く見られた。これらのタイプは前面街路空間を強調するため、単純な矩形ヴォリュームが適用されている。Type 12 は隣接する建物を伴い中庭を形成する形式である。Type 13 は異なる大きさのヴォリュームを平面的に接続し、隣接する建物を伴う形式で、7 件が角地に建つものだった。

Type 14、15 は E パタンで、4% が該当した。Type 14 は、単体の建物が街区を構成し、一方向だけ街路に開く形式で、大規模な事例が多く、シンプルなファサードを持つ。Type 15 は異なる矩形ヴォリュームが立面的に接続し、単体で街区を構成する形式で、低層部の屋上をテラスとして用いる事例が見られた。

Type 16 は F パタンで 3% が該当した。集合住宅やオフィスがこのタイプに該当した。

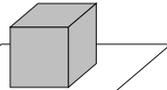
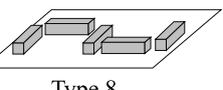
現地調査によって得られた写真資料、建築雑誌から収集した配置図、衛星写真を基に、全受賞作品 182 件について、配置構成、ヴォリュームの分節パターンから、16 の構成類型パターンが得られた。

全体を通して、受賞作品の空間構成は、矩形ヴォリュームを基本形とし、状況に応じて、ヴォリュームを反復させる、平面的・立面的に接続する、またはヴォリューム同士をずらすといった操作をしている。

#### 第 6 節 小結

戦後、チューリッヒ市は Stadtbaumeister の主導で BZO を策定し、時代に応じて改訂を重ねる中で、

表 4-5-1 配置構成とヴォリュームの分節パタンの分析結果

回	No	竣工年	ヴォリューム数	配置	分節	構成類型	回	No	竣工年	ヴォリューム数	配置	分節	構成類型
3	26	1952	1	A	a		3	16	1952	25	C	a	
4	33	1952	1	A	a		3	18	1954	7	C	a	
4	34	1956	1	A	a		3	23	1950	18	C	a	
4	36	1956	1	A	a		3	27	1949	25	C	a	
4	40	1957	1	A	a		5	52	1960	24	C	a	
4	43	1955	1	A	a		5	63	1961	45	C	a	
5	48	1958	1	A	a		6	75	1964	1	C	a	
5	49	1961	1	A	a		8	90	1970	5	C	a	
5	53	1959	1	A	a		15	178	2003	4	C	a	
5	59	1958	1	A	a		3	17	1952	8	C	e	
5	62	1960	1	A	a		3	21	1954	3	C	e	
6	65	1964	1	A	a		3	24	1942	2	C	e	
7	78	1965	1	A	a		4	32	1948	3	C	e	
7	80	1964	1	A	a		4	35	1955	4	C	e	
7	86	1967	1	A	a		4	37	1956	6	C	e	
7	87	1967	1	A	a	4	44	1957	4	C	e		
8	89	1969	5	A	a	5	45	1958	10	C	e		
8	95	1970	2	A	a	6	66	1963	8	C	e		
10	118	1976	1	A	a	6	70	1965	6	C	e		
10	120	1977	1	A	a	6	74	1963	4	C	e		
10	122	1977	1	A	a	7	81	1964	3	C	e		
11	127	1983	1	A	a	8	96	1970	6	C	e		
12	138	1986	1	A	a	9	102	1975	7	C	e		
12	139	1989	1	A	a	10	119	1978	6	C	e		
12	141	1986	1	A	a	11	132	1982	8	C	e		
12	143	1987	2	A	a	14	166	2002	2	C	e		
12	144	1987	1	A	a	15	168	2004	6	C	e		
12	145	1990	1	A	a	5	61	1963	6	C	d		
13	148	1990	1	A	a	5	64	1959	3	C	d		
13	150	1993	1	A	a	15	169	2003	5	C	d		
14	155	2001	1	A	a	7	82	1964	7	C	e		
14	156	1998	1	A	a	7	85	1966	1	C	e		
14	160	1998	2	A	a	7	88	1965	7	C	e		
14	161	1998	1	A	a	9	103	1975	3	C	e		
14	163	2001	1	A	a	9	104	1973	5	C	e		
14	165	2002	1	A	a	9	105	1975	5	C	e		
15	171	2003	1	A	a	9	106	1974	2	C	e		
15	172	2004	1	A	a	9	107	1974	2	C	e		
15	173	2003	1	A	a	9	108	1975	4	C	e		
15	180	2004	1	A	a	9	111	1976	1	C	e		
15	181	2004	1	A	a	9	112	1973	2	C	e		
5	47	1959	1	A	b	9	114	1975	2	C	e		
5	60	1957	1	A	b	11	129	1984	2	C	e		
6	72	1965	2	A	b	12	140	1990	2	C	e		
6	77	1964	1	A	b	1	7	1940	1	D	a		
8	93	1966	1	A	b	2	11	1948	1	D	a		
12	146	1990	1	A	b	3	20	1952	1	D	a		
14	164	2001	1	A	b	3	30	1952	1	D	a		
3	15	1938	2	A	c	3	31	1952	1	D	a		
3	19	1953	2	A	c	4	39	1957	1	D	a		
3	29	1949	1	A	c	5	50	1958	1	D	a		
4	41	1955	2	A	c	5	56	1958	1	D	a		
5	46	1957	1	A	c	6	67	1962	1	D	a		
5	54	1960	1	A	c	7	83	1968	1	D	a		
5	55	1959	1	A	c	7	84	1967	1	D	a		
5	58	1959	1	A	c	8	94	1969	1	D	a		
6	71	1964	2	A	c	8	98	1971	1	D	a		
6	73	1964	1	A	c	9	100	1975	1	D	a		
9	109	1973	1	A	c	12	142	1988	1	D	a		
11	135	1982	1	A	c	13	147	1991	1	D	a		
5	57	1960	1	A	d	13	151	1991	1	D	a		
8	91	1968	1	A	d	13	152	1991	1	D	a		
8	92	1969	1	A	d	14	162	2000	1	D	a		
6	68	1964	1	A	e	15	174	2005	1	D	a		
6	76	1961	1	A	e	15	177	2003	1	D	a		
8	97	1969	1	A	e	1	4	1947	1	D	e		
9	101	1973	1	A	e	3	25	1948	1	D	e		
10	116	1978	1	A	e	3	28	1951	2	D	e		
10	117	1983	1	A	e	6	69	1963	1	D	e		
10	121	1979	4	A	e	10	115	1978	1	D	e		
11	125	1982	1	A	e	11	124	1984	1	D	e		
11	130	1983	1	A	e	11	134	1984	1	D	e		
11	133	1981	1	A	e	14	167	2000	1	D	e		
14	159	2000	1	A	e	15	175	2003	3	D	e		
1	3	1943	14	B	a	9	110	1974	1	D	e		
1	5	1945	8	B	a	11	126	1983	4	D	e		
2	12	1948	22	B	a	15	182	2002	1	E	a		
2	13	1950	9	B	a	1	8	1939	2	E	c		
2	14	1949	28	B	a	5	51	1958	3	E	e		
3	22	1953	20	B	a	9	113	1972	1	E	e		
11	131	1983	2	B	a	7	79	1967	3	E	d		
12	136	1987	3	B	a	8	99	1968	1	E	d		
1	1	1946	30	B	b	14	158	2000	1	E	d		
1	2	1943	14	B	b	15	176	2004	1	E	d		
1	6	1949	32	B	b	14	154	2001	3	E	e		
1	9	1947	6	B	b	4	38	1956	1	F	c		
2	10	1949	12	B	b	13	149	1993	1	F	c		
4	42	1956	4	B	b	13	153	1991	1	F	c		
10	123	1979	2	B	b	14	157	1995	1	F	c		
12	137	1987	31	B	b	15	170	2002	3	F	c		
11	128	1982	3	B	e	15	179	2004	1	F	c		

建築種別

- 集合住宅   ■ 戸建住宅   ■ 複合施設   ■ オフィス   ■ 商業施設   ■ 学校・大学   ■ 教会
- 医療・福祉施設   ■ スポーツ・娯楽施設   ■ 駅・公園   ■ 文化施設   ■ 工業施設

都市形成の方針を示してきた。この方針は、郊外住宅地開発から、既存市街地の高度利用、リノベーション、再開発とテーマは変遷してきた。こうした BZO の変遷と集合住宅の空間構成の特徴の変遷に強い関連をみることができた。とりわけ、外部空間の充実を図る設計手法が繰り返し用いられてきたことが明らかとなった。このことは、本賞は各時代における政策に沿った、模範的な事例として評価されてきたものといえる。受賞作品に共通して見られた外部空間や周辺環境を考慮した計画において、Haus の組み合わせに着目することで、各時代における配置と住戸の構成の特徴が明らかとなった。

優れた都市景観形成を目的とした本賞の理念に立ち返ると、外部空間を考慮した配置構成の評価は一貫しているといえる。しかし、住戸単位の関係性に注目すると、90 年代以降は、外観は単純な矩形に見えても、内部空間の断面構成や共有空間に積極的な工夫を凝らした多様な住宅が選出されている。このことから、本賞の評価が、都市景観形成の視点を継続して持ちつつも、居住性を備えた建築そのものの質を評価するようになったといえる。本賞は景観・建築の両面から評価がなされてきたが、集合住宅の設計においては、新たな展開を見せていることが指摘できる。

このように、本賞の 65 余年間の実態を考察することによって、本賞が、市が単に都市景観に対する具体的な方向性を一方的に示し、先導するようなものではないことがわかる。本賞の役割として重要な点は、各時代における施策である BZO を尊重することによって、施主や設計者と市が、優れた都市景観を形成するための価値観を共有しつつ、居住性に優れた都市空間を共に考えていくための場を提供することにあつたと考えられる。

#### 【第4章注記】

- 1) Marcel Buchner et al.: "100 Jahre Zürcher Bau- und Wohngenossenschaft", Jubiläumsschrift, Zürich, 1993, p. 4.
- 2) Takeo Ozawa and Keita Ohwaki, 'Features of Jury Organization and Award-Winning Works of A Swiss Architecture Prize for Patronage, Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich: An Investigation of the Idea and Method of Architectural Evaluation Envisaged by the Zurich Municipal Authority - Part I' (日本建築学会計画系論文集第 670 号、2011. 12) pp. 2467-2476.
- 3) 筆者は 2008 年 6 月、10 月に加えて、2011 年 9 月から 2014 年 6 月にかけてチューリッヒ市に滞在し、継続的に現地調査を行った。
- 4) 聞き取り調査日は以下の通り。チューリッヒ市都市計画局 Regula Iseli 氏、2012 年 3 月 19 日。本賞作品集論文執筆者 Inge Beckel 博士、2014 年 3 月 17 日。第 16 回の審査員だった Annette Gigon 氏、2014 年 4 月 26 日。設計者である EM2N Architekten の Daniel Niggli 氏、pool Architekten の Matthias Heinz 氏、2012 年 3 月 11 日。Gigon & Guyer Architekten の Mike Guyer 氏、2014 年 4 月 30 日。office haratori の Zeno Vogel 氏、2012 年 11 月 10 日。
- 5) 木下勇ほか「スイスの空間計画」(農村工学研究 63、農村開発企画委員会、1998)
- 6) 木下勇「持続可能な地域マネジメント型市街地整備の展開に関する研究」(平成 19-20 年度科学研究費基盤研究 (C) 一般 (課題番号 19560610) 報告書)
- 7) 高橋直子、松村秀一「チューリッヒにおける工業地区および建築のコンバージョンに関する研究」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2003. 9) pp. 755-756.
- 8) 田所辰之助「ノイビュール・ジードルンク的设计経緯と計画理念について-1920～30年代初頭における工作連盟のジードルンクについて その3」(日本建築学会関東支部研究報告集、2002) pp. 653-656.
- 9) Michael Koch und Daniel Kurz: "Mehr als Wohnen: Auf der Suche nach dem neuen Zürich", Mehr als Wohnen Gemeinnütziger Wohnungsbau in Zürich 1907-2007, gta Verlag Zürich, 2007. p. 31.
- 10) 滝川薫『サステナブル・スイス 未来志向のエネルギー、建築、交通』(学芸出版社、2009) p.102. によると、ミネルギー基準は、1998年にチューリッヒ州とベルン州の建設局エネルギー部が開発、導入した後、スイス全 26 州と隣国リヒテンシュタインに広がった。
- 11) 建築家 Marcel Meili 氏への聞き取り調査 (2010 年 10 月) による。

#### 【図版出典リスト】

- 写真 4-2-1、Siedlung Hirschwiese；*Mehr als Wohnen* (2007) より転載。
- 写真 4-2-2、No.6 外観；筆者撮影 (2008)。
- 写真 4-2-3、Franz Eberhard；Zürich Baut, Stadt Zürich p.28 より転載。
- 写真 4-2-4、Hardau；スイス連邦工科大学図書館デジタルアーカイブ (1983) より転載。
- 写真 4-2-5、Grünau；スイス連邦工科大学図書館デジタルアーカイブ (1977) より転載。
- 写真 4-2-6、No. 25 外観；*Werk* (1997) より転載。
- 写真 4-2-7、No. 37 外観；筆者撮影 (2008)。
- 写真 4-2-8、Escher Wyss 地区；スイス連邦工科大学図書館デジタルアーカイブ (1993) より転載。
- 写真 4-2-9、西部地区；筆者撮影 (2014)。
- 写真 4-2-10、No. 52 俯瞰；スイス連邦工科大学図書館デジタルアーカイブ (1996) より転載。
- 写真 4-3-1、No. 18 外観；筆者撮影 (2008)
- 写真 4-3-2、No. 24 アプローチ；筆者撮影 (2008)
- 写真 4-3-3、No. 50 中庭；筆者撮影 (2008)



## 第5章

### バーゼル建築賞の特徴

#### Chapter 7 ; Features of An Architecture Prize, Auszeichnung Guter Bauten im Kanton Basel-Stadt, Basel-Landschaft

本章では、スイス・都市バーゼル半州（Kanton Basel-Stadt）と地方バーゼル半州（Kanton Basel-Landschaft）によって運営される<sup>1)</sup>、バーゼル建築賞（Auszeichnung guter Bauten im Kanton Basel-Stadt, Kanton Basel-Landschaft、以下、本賞）の理念、方針、広報、審査体制、受賞作品に着目し、スイス・ドイツ語圏において地方自治体が運営する建築賞における特徴を、チューリッヒ市建築賞（Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich）との比較から明らかにするものである。

#### 第1節 本章の位置付け

##### § 5-1-1. バーゼル建築賞の位置付け

バーゼル建築賞（以下、本賞）は1980年に第1回を開催し、2013年までに計7回の審査を行なっている。本論第1章で明らかにしたように、他州に比べ、賞の創設がチューリッヒ市建築賞に次いで最も早いことから、本章では、バーゼル建築賞に着目した。地方自治体独自の手法で、建築・都市空間を評価することは、特徴を持った都市景観の形成に繋がる。その建築評価の理念や手法が自治体毎にどのような違いがあるのかを明らかにすることは、地方分権が叫ばれる我が国において、地方自治体が独自の建築や都市に関する政策を展開する上での一助になると思われる。

ここでまず、本賞第1～7回の作品の全容を把握するため、各回の受賞作品集を収集し分析した<sup>2)</sup>。この作品集は、授賞式の際に無償配布される市民向けの公開資料であり、市が掲げる建築・都市空間のあり方を市民にアピールする役割を担っている。作品集は、審査員による講評、受賞作品の基本情報と写真、図面を掲載しており、個別の作品情報を概観できる。また、本賞創設者である当時のカントンバウマイスター（Kantonsbaumeister）<sup>3)</sup>、Carl Fingerhuth氏、企画運営担当者である都市バーゼル半州建築局のFriedrich Weissheimer氏への聞き取り調査を行なった<sup>4)</sup>。

尚、本章における「バーゼル」とは、バーゼル市内を圏域とする、都市バーゼル半州（Kanton Basel-Stadt、以下、BS）と、バーゼル郊外を圏域とする、地方バーゼル半州（Kanton Basel-Landschaft、以下、BL）を併せた地域を総称している。

##### § 5-1-1. バーゼル市の基本的性格

バーゼルとチューリッヒの都市が有する基本的な性格の違いについて触れておく。バーゼルは、ドイツ、フランスに接した国境に位置する。交通上の利便性・国際性が相まって、バーゼルは有数の見

本市都市、会議都市として位置づけられ、文化的に重要な都市として位置づけられる<sup>5)</sup>。1995年以降はバーゼル広域都市圏において開発計画が進められている<sup>6)</sup>。バーゼルには、世界的に著名な建築家が複数存在し<sup>7)</sup>、国際的な活動を展開している。一方、スイス最大の人口を有するチューリッヒ市は、近代以降、工業都市として発展してきたが、第2次世界大戦後は金融・経済の中心地として発展した<sup>8)</sup>。1990年代以降、チューリッヒは人口増加に伴い高密度化する都市の中で再開発による都市居住の整備を推進している<sup>9)</sup>。こうした状況下で、チューリッヒ市を拠点にする建築家の多くは、同市近郊の集合住宅計画等を中心に活動している<sup>10)</sup>。以上のように、バーゼルとチューリッヒは、同じドイツ語圏でありながらも、それぞれ異なった都市像となる。

## 第2節 バーゼル建築賞の理念・方針・広報について

### § 5-2-1. 理念

第1回（1980年）の作品集に記載された審査記録に依ると、本賞の目的として、「都市景観を豊かにし、建築の質を高める」ことと、賞を通して「市民に様々な視点から建築を捉えてもらうきっかけをつくる」ことが書かれている<sup>11)</sup>。特に、設計者のみならず、施主を表彰することで、建築に対する理解、議論を促すことが重要な理念とされている。この理念は第7回まで一貫している。本賞の企画運営担当者のFriedrich Weissheimer氏への聞き取りでは、「賞金を与えないことが、非常に重要である」<sup>12)</sup>ということが聞かれた。すなわち、本賞は、賞金を競うためのものではなく、市民に積極的に参加してもらうことで、建築に対する関心を持った施主が育ち、それによって良い建築が生まれ、バーゼ

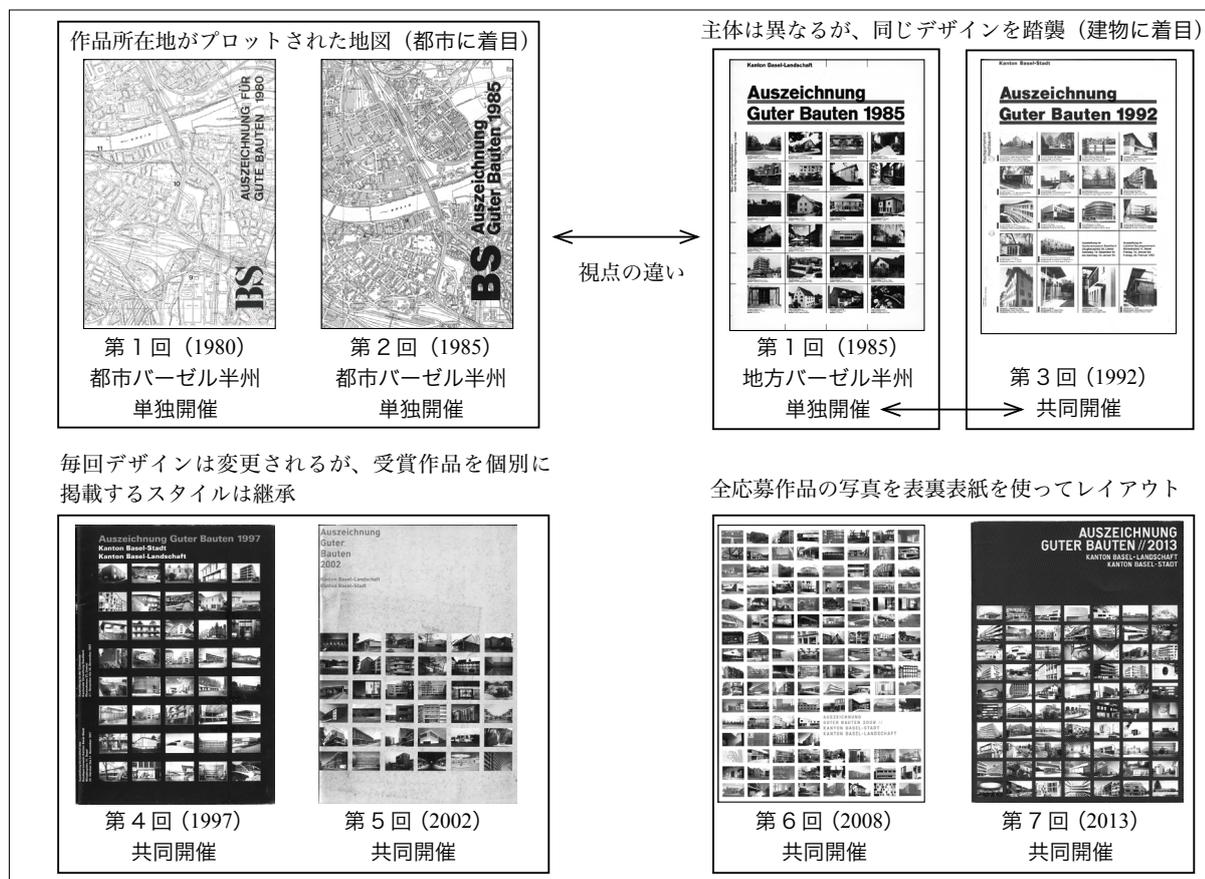


図 5-2-1 バーゼル建築賞作品集の相關関係

ルの建築文化の醸成に繋がっていくために位置づけられるといえる。こうした理念はチューリッヒ市建築賞と共通しており、相違点は見られない。

### § 5-2-2. 方針

第1回の審査方針については、前節の理念に対応して、都市景観の中での秩序 (Einordnung in das Stadtbild) や建築的な表現力の達成 (Erreichung eines starken architektonischen Ausdrucks unter bewusster Beschränkung der angewandten Mittel)、形式や内容表現の明晰さ (Klarheit der formalen und inhaltlichen Aussage) を項目としている<sup>13)</sup>。これらの方針は第2回でも継続して用いられている。

第3回 (1992年) にBSとBLが共同で、建築賞を開催することとなったが、その際の本賞の審査方針として、以下の4点が挙げられている。第1は、建築批評家や建設者に加え、バーゼル外部から審査員を招聘する。第2は、審査にあたって、住宅地開発に関わるものや、改修、増築事例も審査対象にする。第3は、建築の評価は、単に建物の外観に対してなされるだけでなく、都市デザイン的な文脈や、内部の機能性、経済性も考慮されるべきである。第4は、本賞は、建築計画だけでなく、建物の使いやすさも評価の対象に含まれる<sup>14)</sup>。さらに、Weissheimer氏が指摘するように、街の中において、新しい建築の考え方がどう適応するかが重要であり、先進性を求める姿勢はバーゼルの伝統であるとしている<sup>15)</sup>。こうした考え方が評価の背景として審査員の間で共有されている。

審査方針をチューリッヒ市建築賞と比較すると、改修や増築事例も審査対象に加えることになっているが、この点も同時代のチューリッヒ市建築賞の審査方針と共通しており、既存の都市の状況にどのようにして新しい建築を創出すべきかが、評価の視点の一つとなっている。

### § 5-2-3. 広報

本賞の作品集は授賞式に合わせて市民に無償配布される。作品集の内容は、州建築局長による本賞の理念と、審査委員による審査講評の項の後に、受賞作品の基礎情報や写真が掲載される。作品集の表紙デザインに着目すると (図5-2-1)、第1、2回では、受賞作品の所在地がプロットされた地図が用いられ、都市への着目が意識されていることが窺える。一方、BLの作品集で全受賞作品の外観写真がレイアウトされた表紙が採用されているが、後に第3回の共同開催時の表紙がこのデザインと同一であることから、共同開催時にBLのデザインを踏襲していたといえ、それまでの都市的な視点から建物単体へ視点の変化があったことを見出せる。第4回以降の作品集では、毎回デザインに変更が加えられるものの、個別の受賞作品の写真を掲載する方針を継続している。さらに、第6回 (2008年) からは、受賞作品に限らず、全応募作品の写真を掲載することによって、各時代のバーゼル内の建築状況を一目で把握することができる。一方、チューリッヒ市建築賞の作品集は有償で販売され、その内容には、建築家によるチューリッヒ市の都市景観の現状や今後のあり方に関する論文も含まれている点で、バーゼルとは相違する。このように、都市景観形成を主題とした賞であっても、建築単体が主役となり、その先進性が強調されている点が本賞の特徴である。

さらに、本賞は、第3回 (1997年) から、授賞式後に約1ヶ月間の展示会を開催している。会場には州庁舎や、美術館が使用され、BSとBLの両州を巡回する形で運営している。チューリッヒ市

建築賞の展示会が2001年に初めて開催されたことを踏まえると、バーゼルの方が展示会の開催が早い。すなわち、市民に対して積極的に建築に対する興味・関心を広めるための展示会の開催については、チューリッヒ市がバーゼルの影響を受けた可能性も考えられる。

### 第3節 審査体制について（表5-3-1）

本賞の審査委員会は6～9名で構成される。第1回（1980年）は、都市バーゼル半州建築局長 Eugen Keller（1925-）が審査員長に就き、カントンバウマイスター、郷里保護委員会（Heimatschutzkommission）（1981年1月1日に都市景観委員会（Stadtbildkommission）に改称）の委員が審査に入り、行政職員が8名中4名を占める。残りの4名は、スイス出身の建築家であるが、バーゼルを拠点にしているのは Wilfrid Steib（1931-2011）のみで、他はローザンヌやチューリッヒから招聘している。また、Dorf Schnebli（1928-2009）はスイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）の教授である。第2回（1985年）は、行政職員4名の内、Hans Luder（1913-2007）を除く3名が留任し、新たに都市景観委員会委員長の Paul Huber（1924-2007）が加わる。建築家は4名全員が入れ替わるが、国外からの審査員として、ドイツのコンスタンツ工科経済造形大学（Konstanz Hochschule Technik, Wirtschaft und Gestaltung）教授の Fritz Wilhelm（1937-）が招聘されている。また、建築家だけでなく、建築批評家や建設業者も審査員に加わっている。さらに、同年に開催された BL 建築賞の審査員長には、地方バーゼル半州建築局長 Markus van Baerle（1930-1987）が就き、行政職員4名、民間建築家3名に加え、美術史家の Dorothee Huber（1952-）が加わっている。Huber は両州共同開催になる第3回（1992年）以降も第7回まで継続して審査員に登用され、第3回では審査員長を勤めている。Huber は、バーゼルの建築史に関連する書籍も執筆しており、他の審査員が毎回交替することを踏まえても、バーゼルの建築を評価する上で重要な人物であるといえよう。ところで、第3回以降、行政職員からの審査員の登用はなくなり、エンジニアや建築批評家などの専門家や、不動産業や住宅組合といった建物の利用側にあたる人物が審査に加わる。これは本賞の審査体制の大きな転機といえる。こうした変化が生じた理由として、毎回同じ行政職員が審査をすると、評価の視点が変わらないことが危惧されたため、多様な専門家からの評価の視点を大事にしていると考えられる。エンジニアとしてはじめて審査員となった Jürg Conzett（1956-）は、審査講評の中で「申請された作品の大半が、これまで通りの集合住宅や学校、オフィスといったもので、エンジニアからの土木構造物などの申請数がまだまだ少ない。化学都市、橋梁都市、交通都市としてのバーゼルにおいて、代表となるような土木構造物作品が僅かしか見られない」<sup>16)</sup>と指摘している。

各回の審査の進め方については、賞の企画運営担当者が、審査の前段階で議論に加わり、過去の審査がどのように進められたかを審査員に伝えるが、その後の審査基準の設定や進行は各審査員の判断に委ねられている<sup>17)</sup>。

チューリッヒ市建築賞と比較すると、1980年の創設時は、行政4名、建築家4名（うちETH教授1名）で、チューリッヒ市の創設時の体制（行政3名、建築家3名、ETH教授1名）と近い。したがって、BSが審査体制を検討する際に、チューリッヒ市を参考にしたものと考えられる。1985年にBLもはじめて審査を行なうが、ここでもチューリッヒ市建築賞と同じような審査体制となっている。こ

表 5-3-1 バーゼル建築賞の審査体制

氏名	専門	属性 (出身)	開催回							
			1	2	1	3	4	5	6	7
			開催年							
			'80	'85	'85	'92	'97	'02	'08	'13
			BS	BL	BS、BL	共同開催				
Eugen Keller	政治家	行政 (バーゼル)	◎	◎						
Hans Luder	建築家	行政 (バーゼル)	■							
Carl Fingerhuth	建築家	行政 (バーゼル)	■	■	■					
René Nertz	不明	行政 (バーゼル)	■	■						
Frédéric Brugger	建築家	民間 (ローザンヌ)	■							
Jacques Schader	建築家	大学 (チューリッヒ)	■							
Dolf Schnebli	建築家	大学 (チューリッヒ)	■							
Wilfrid Steib	建築家	民間 (バーゼル)	■							
Paul Huber	不明	行政 (バーゼル)		■						
Robert Häfelfinger	建築家	民間 (ジッザッハ)		■						
Fritz Wilhelm	建築家	大学 (レラハ、独)		■					◎	
Dieter Wronsky	建築家	民間 (アーレスハイム)		■						
Arfred Urfer	建設業	民間 (バーゼル)		■						
Robert Schiess	美術批評家	民間 (バーゼル)		■						
Markus van Baerle	政治家	行政 (バーゼルランド)			◎					
Urs Winistörfer	政治家	行政 (バーゼルランド)			■					
Hans Erb	建築家	行政 (バーゼルランド)			■					
Timothy Nissen	建築家	民間 (バーゼル)			■					
Arthur Rüegg	建築家	民間 (チューリッヒ)			■					
Dieter Wronsky	建築家	民間 (リースタル)			■					
Dorothee Huber	美術史家	大学 (ムッテンツ)				◎	■	■	■	■
Friedrich Achleitner	建築批評家	民間 (ウィーン、奥)				■				
Roman Hollenstein	建築批評家	民間 (チューリッヒ)				■				
Jörg Horat	不動産業	民間 (オーバーヴィル)				■				
Jörg Hübschle	住宅組合	民間 (バーゼル)				■				
Manfred Sack	建築批評家	民間 (ハンブルグ、独)				■				
Christoph Löw	建設業	民間 (バーゼル)					◎			
Jürg Conzett	エンジニア	民間 (クール)					■			
Annette Gigon	建築家	民間 (チューリッヒ)					■			
Adorf Krischanitz	建築家	大学 (ウィーン、奥)					■			
Vittorio Lampugnani	建築家	大学 (チューリッヒ)					■			
Günther Pfeifer	建築家	大学 (レラハ、独)					■			
Heinz Pulver	不明	民間 (バーゼル)					■			
Christian Felber	不明	民間 (バーゼル)					■			
Dieter Geissbühler	建築家	大学 (ルツェルン)					■	■		
Patrick Gmür	建築家	大学 (チューリッヒ)					■			
Claudine Lorenz	建築家	大学 (ミュンヘン、独)					■			
Helmuth Pauli	エンジニア	民間 (バーゼル)					■			
Tivadar Puskas	エンジニア	民間 (バーゼル)					■		◎	
Hannelore Deubzer	建築家	大学 (ミュンヘン、独)					■			
Dietz Dieter	建築家	民間 (チューリッヒ)					■			
Beatrice Friedli	ランドスケープ	民間 (ベルン)					■			
Franco Fregnan	エンジニア	民間 (ムッテンツ)					■			
Lukas Richterich	心理学	民間 (バーゼル)					■			
Mateja Vehovar	建築家	民間 (チューリッヒ)					■			◎
Carmen Fechtig	エンジニア	民間 (バーゼル)					■			
Muriel Mangold	コミュニケーション	民間 (バーゼル)					■			
Regine Nyfeler	建築家	民間 (バーゼル)					■			
Anne Marie Wagner	建築家	民間 (バーゼル)					■			

【凡例】■: 行政、■: 建築家、■: 批評家、□: エンジニア、□: その他、◎: 審査員長

(各回の作品集を基に作成。「属性」は、審査員に登用された当時のものを表す。国外出身の人物には、都市名の後ろに国名を記した。独: ドイツ、奥: オーストリア)

の場合、BLはチューリッヒ市を参考にしたというよりも、BSを参考にしてきたと考える方が自然であろう。このことは、審査員にBSのカントンバウマイスター、Carl Fingerhuth（1936-）が関わっていることから推察できる。両州共同開催となる1992年以降は、審査体制が大きく変わり、行政職員が審査に加わらなくなる。チューリッヒ市建築賞が市当局の人物を審査員長に据え、行政職員の割合を高め、市の方針に批准した評価を進めている状況とは相反する。このことについて、Weissheimer氏は、「行政として建築を評価することに躊躇いがあるため」<sup>18)</sup>であると述べている。また、行政職員ではなく、民間や大学からの視点を重視した審査体制を敷くことで、建築以外にも美術史家やエンジニア、批評家といった様々な専門性から建築を評価する体制を生み出していることが理解できる。さらに、不動産業者や住宅組合の構成員も審査員に加わることによって、アカデミックな視点からの評価だけではなく、建物がどのように開発され、利用されているかの視点が評価に加わっていることも、バーゼルの審査体制の特徴と捉えることができる。また、審査員の出身に着目すると、第1回のFrédéric Brugger（1912-1999）がローザンヌ出身であることを除き、全審査員がドイツ語圏出身である。国外からの審査員も散見されるが、ミュンヘンやウィーンなどのドイツ語圏の出身である。この点については、チューリッヒ市建築賞と共通し、国外から審査員を招聘する際に、ドイツ語圏出身者を積極的に登用しようとする態度が指摘できる。このことは、単に審査をドイツ語で行なうことができるだけでなく、建築、都市に対する問題意識や価値観をドイツ語文化圏内で共有しようとしていると推察される。

#### 第4節 受賞作品について

まず、受賞作品の数に着目すると、本賞は全7回の審査で、計238作品が受賞している。両州共同開催になった第3回（1992年）で受賞数が46件と前回の倍以上となったが、その後減少に転じ、30件強が選出されている。第3回以降の作品の所在地の内訳としては、市内（都市バーゼル半州）119件（64%）、郊外（地方バーゼル半州）67件（36%）であり、市内の作品が多く選出されている。

つぎに、建築種別に着目すると（図5-4-1）、第2回（1985年）、BLの第1回（1985年）、第3回（1992年）では、集合住宅や戸建住宅、複合施設といった住宅系の作品が全体の半数以上を占める。特に、BL

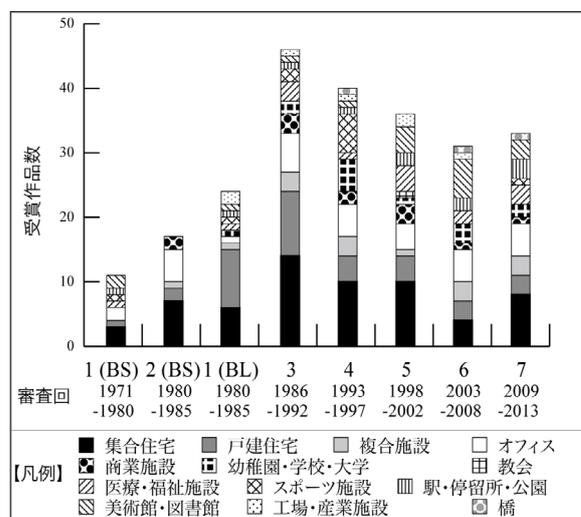


図5-4-1 バーゼル建築賞における建築種別毎の受賞数の推移

では戸建住宅をはじめ、集合住宅、複合施設を加えると、住宅が36件となり、半数以上を占めていることがわかる。戸建住宅に関しては、BSよりも受賞数が多い唯一の建築種別である。写真5-4-1は郊外に建つ集合住宅で、メゾネットの住戸が敷地に沿って配置され、ゆとりのある外部空間を伴っている。写真5-4-2は市内の角地に建つ集合住宅で、低層部にオフィススペースを備え、曲線を用いたバルコニーの張り出しによって、特徴的な街角空間が創出されている。第4回以降は、住宅系の受賞数が半数以下となり、多様な建築種別が選出されている。第4回(1997年)ではスポーツ施設(6件)、学校(5件)の受賞が多い。第5回(2002年)以降では、美術館や図書館といった文化施設の受賞数が多い(写真5-4-3)。また、数は少ないものの、第2回を除く全ての回で、駅や公園、広場といった都市施設が受賞している(写真5-4-4)。さらに、橋梁などの土木構造物や産業施設も第1、2回を除く全ての回で受賞している(写真5-4-5、5-4-6)。4章で示した通り、建築家だけでなくエンジニアも審査員に加わっていることを考慮すると、建築作品だけでなく、都市施設や産業施設、土木構造物を含むさまざまな建築種別が受賞していることが理解できる。さらに、改修事例は、第2回から継続して受賞しており、既存の建物の改修を通して、新たな都市空間を形成する事例が審査体制を問わず、評価されていることが読み取れる(写真5-4-7)。さらに、都市の中でランドマークになる高層建築も受賞している(写真5-4-8)。

受賞作品の数について、1回あたりの比較ではチューリッヒ市建築賞の約3倍である。実際に、「これほど建設活動が活発な都市はスイス国内ではみられない」<sup>19)</sup>という審査講評も見られることから、バーゼルはスイス・ドイツ語圏における現代建築の創作活動が最も盛んである都市であり、そのことが受賞作品の多さに結びついているといえる。さらに、受賞作品の設計者は、バーゼル拠点の著名建築家事務所によるものが多く、特に Herzog & de Meuron が20件、Diener & Diener が13件、Fierz & Baader が9件、Morger & Degelo, Silvia Gmür, Buchner Bründler がそれぞれ7件となっている。著名建築家の作品の多くがファサードのデザインに現代性を感じさせる構成や素材を用いており(写真5-4-9)、バーゼルの新たな都市景観を創出する役割を担っている印象を受ける。

こうした特徴は、バーゼルが近代以降、先進性を求める伝統に支えられてきたことが一因と考えられる。一方のチューリッヒ市は、重複受賞の設計者が少なく、チューリッヒを中心としたローカルアーキテクトによる作品が多数受賞している。近年の作品は、街区全体を構成するものも見られ、それらは、周辺環境に適応させた統一感をもつ構成となっている。バーゼル程の派手さは見られず、保守的な印象を受ける。2章で触れたとおり、バーゼルとチューリッヒには都市形成の歴史や目指す将来像、設計者の活動範囲に相違点が見られた。そうした背景の違いが、本賞の受賞作品の建築種別や設計者の違いを反映していると考えられる。

## 第5節 小結

スイス・ドイツ語圏の草創期の建築賞では、地方自治体が主体となって、独自の建築評価を行ってきた。その嚆矢は1945年に創設されたチューリッヒ市建築賞で、現在まで60余年継続している。1980年代、その影響が、スイス・ドイツ語圏の各州におよび建築賞が創設され、その中では、バーゼルの創設が最も早かった。バーゼル建築賞の特徴について、チューリッヒ市建築賞と比較して考察

した結果、明らかとなったことを共通点と相違点に区分してまとめとしたい（表 5-5-1）。

共通点は、設計者のみならず施主を表彰対象としていることである。この背景には、市民に対して建築・都市空間に対する議論を促すという理念がある。また、建築単体に対する評価だけでなく、都市景観要素として建築を評価する姿勢も共通する。さらに、本賞の評価対象に改修や増築の事例を含んでいることも共通点として明らかにした。これらの事実は本賞の創設に及ぼした、チューリッヒ市建築賞の影響といえる。

一方、相違点は、まず広報と展示である。チューリッヒ市建築賞が優れた都市景観形成に向けた建築家の論文を含めた作品集を有償販売しているのに対し、本賞は受賞作品の写真を表紙に用いた作品集を無償配布していた。さらに、本賞の展示会を開催し、後のチューリッヒ市建築賞の展示会の開催に影響を及ぼした。これらのことは、バーゼルが受賞作品を通して市民に建築に対する啓蒙活動を先駆けて積極的に展開していたことの表れである。

また、審査体制も相違する。第 2 回まで、チューリッヒ市の審査体制と同様に、行政職員と民間建築家が審査委員会を構成していたが、共同開催以降、行政職員から審査員の登用はなくなった。チューリッヒ市が行政職員の視点を審査に反映させていたことと比較すると、バーゼルは専門家の視点を重視していたといえる。特に、専門分野が多岐にわたり、美術史家やエンジニアに加えて、不動産業者、住宅組合等の開発、利用者も審査員に登用された。

さらに、受賞作品の数と設計者、建築種別も相違する。このうち、作品数を比較すると、1 回あたりの受賞数は本賞がチューリッヒ市建築賞の 3 倍近く多い。高密度な都市環境の中で、現代建築が盛んに創出されてきたことがバーゼルの特徴の一つといえる。特に、バーゼルを拠点とする世界的に著名な建築家によって半数近い作品が占められていることも、ローカルアーキテクトが多数受賞しているチューリッヒ市と異なる。建築種別に関しては、建築だけでなく、橋などの土木構造物も受賞している。これは、審査員にエンジニアが含まれていることが影響していると考えられる。

以上より、バーゼル建築賞は、スイス・ドイツ語圏における地方自治体が運営する建築賞の中で、チューリッヒ市建築賞と共通した理念や方針をとりつつ、独自の審査体制をとることでバーゼルの都市景観に寄与する建築・土木作品を選出してきたことにその特徴を見ることができた。スイス・ドイツ語圏という圏域において、バーゼルとチューリッヒ市は、都市形成の歴史や気質に違いがあり、それぞれが目指す都市像も異なる。その中で、優れた建築を継続して評価し、蓄積させることによって、独自の建築文化を醸成することに繋がっているといえる。我が国においても、地方自治体が共通の理念や価値観を共有しつつ、地域性の違いに着目した評価手法を確立することで、独自の都市景観の形成に繋がると考えられる。



写真 5-4-1 郊外の集合住宅



写真 5-4-2 市内の集合住宅



写真 5-4-3 パイエラー美術館



写真 5-4-4 公園とカフェ



写真 5-4-5 三カ国橋



写真 5-4-6 スイス国鉄信号所



写真 5-4-7 オフィスの改修



写真 5-4-8 メッセタワー



写真 5-4-9 メッセ・パーゼル

表 5-5-1 パーゼル建築賞とチューリッヒ市建築賞の比較

自治体名		都市パーゼル半州	地方パーゼル半州	チューリッヒ市
人口		196,141 人	278,656 人	402,275 人
面積		37km <sup>2</sup>	518km <sup>2</sup>	92km <sup>2</sup>
人口密度		5301 人/km <sup>2</sup>	538 人/km <sup>2</sup>	4378 人/km <sup>2</sup>
初回年		1980	1985	1947
賞の運営主体		州		市
理念方針	人	施主		施主
	物	都市景観		都市景観
広報	作品集	無償配布 表紙に写真あり 建築家の論文なし		一般販売 表紙に写真なし 建築家の論文あり
	展示	第 3 回 (1997 年) から		第 14 回 (2001 年) から
審査体制	審査員	専門家 (建築/エンジニア/批評) 施主 (不動産業/住宅組合)		行政 (審査員長) 建築家
受賞作品	建築種別	建築+橋・土木 BL は住宅系の割合が高い BS は業務、文化施設の割合が高い		建築のみ 集合住宅の割合が高い 街区全体の計画
	受賞総数	238		193
	1 回平均	34		12
	設計者数	131		172

## 【第5章注記】

- 1) 財団法人自治体国際化協会『スイスの地方自治』(2006) p.15.によると、「Kanton Basel-Stadt」は「都市バーゼル半州」、「Kanton Basel-Landschaft」は「地方バーゼル半州」と表記される。スイス連邦は23(20の州と6の半州)の州(カントン:Kanton)で構成され、半州は州が地理的・宗教的理由で2つに分かれたもので、次の2点以外は一州と同等の権限を有する。すなわち上院選出の際に各州2名の選出のところが半州においては1名となっている。また、国民投票の際に各州の賛否を1と勘定するところが半州は0.5で計算される。
- 2) スイス連邦工科大学図書館で収集したほか、都市バーゼル半州建築局への聞き取り調査に際して、担当者から入手し、第7回(2013年)については、2013年11月12日の授賞式の場で入手した。
- 3) カントンバウマイスターは、州に所属する建築家で、州内の建築・都市デザインプロジェクトに対する決定権を持つ役職である。
- 4) 聞き取り調査日は以下の通り。都市バーゼル半州カントンバウマイスター Carl Fingerhuth氏、2008年6月17日。都市バーゼル半州建築局 Friedrich Weissheimer氏へは、2008年6月20日と2013年11月12日の2回にわたって行なった。
- 5) 土岐寛『海外の都市政策事情』(ぎょうせい、1987) pp.91-94.
- 6) Hans-Georg Bächtold, "From divided city to transnational conurbation", *Special Bulletin, Spatial Planing in Switzerland*, ISoCaRP, Bern, 2004, pp. 26-27.によると、「1995年にドイツ・フランス・スイスの3カ国の政治家、都市計画家がバーゼル大都市圏の交通・環境に関わる空間整備を行なうためのTAB(Trinational Agglomeration Basel)構想を立ち上げた」とある。
- 7) たとえば、プリツカー賞を受賞したHerzog & de MeuronやPhaidon社から作品集が出版されているDiener & Dienerはバーゼルの拠点としている。
- 8) Benedikt Loderer: "The Story So Far", *Architectural Guide Zurich 1990-2005*, Birkhäuser, Basel, 2005. p. 10.
- 9) BSA Ortsgruppe Zürich, *Zürich 1980-2012 Dynamik einer Stadtentwicklung*, gta Verlag Zurich, 2012, pp. 23-25.
- 10) たとえば、Gigon & Guyer や pool architekten はチューリッヒを拠点に集合住宅作品を数多く手掛ける建築設計事務所である。
- 11) Baudepartment Kanton Basel-Stadt, *Auszeichnung für gute Bauten 1980*, 1980, p. 5.
- 12) 前掲4、2008年6月20日の聞き取り調査による。
- 13) 前掲11
- 14) Baudepartment Katon Basel-Stadt, Bau- und Umweltschutzdirektion Kanton Basel-Landschaft, *Auszeichnung Guter Bauten 1992*, 1992. p.1.
- 15) 前掲4、2008年6月20日の聞き取り調査による。
- 16) Hochbau- und Planungsamt Basel-Stadt, *Auszeichnung Guter Bauten 1997*, 1997, p. 2
- 17) 前掲4、2008年6月20日の聞き取り調査による。
- 18) 前掲4、2008年6月20日の聞き取り調査による。
- 19) 第4回(1997年)の審査員 Vittorio Magnago Lampugnani が、審査講評の中で「Ich kann mich nicht erinnern, jemals so viel qualitätvolle zeitgenössische Architektur auf so engem Raum gesehen zu haben.」と述べている。

## 【図版出典リスト】

- 写真5-4-1 筆者撮影(2012年)
- 写真5-4-2 筆者撮影(2014年)
- 写真5-4-3 筆者撮影(2013年)
- 写真5-4-4 Auszeichnung Guter Bauten 2013より転載。
- 写真5-4-5 Tec21, 2007.より転載。
- 写真5-4-6 筆者撮影(2008年)
- 写真5-4-7 筆者撮影(2013年)
- 写真5-4-8 Auszeichnug Guter Bauten 2008より転載。
- 写真5-4-9 筆者撮影(2013年)

## 第6章

### チューリッヒ市建築賞と日本の建築賞の比較考察

#### Chapter 6 ; A Comparative Study of the City of Zurich and Japan on Architectural Prizes

本章では、我が国における地方自治体が主催する建築賞、景観賞ならびに、建築関連団体が主催する建築賞、景観賞の実態を、ホームページ上に公開されている資料から整理し、その特徴を明らかにする。さらに、チューリッヒ市建築賞の特徴を踏まえて、今後の我が国の地方自治体における建築評価への展開可能性について考察する。

#### 第1節 日本における地方自治体が主催する建築賞・景観賞の実態

我が国には数多くの建築賞が存在する。2005年度までの状況は、木川田洋祐「建築関連顕彰制度にみる建築評価の日米比較」(北海道大学修士論文、2005年)の中で作成されたリストが存在する。北海道大学建築史意匠学研究室では、木川田作成のリストの内容を2015年10月までに電話連絡や通信手段を用いて更新してきた。表6-1-1は、我が国における地方自治体が主催する建築賞、都市景観賞を創設年順に表している。収集した建築賞・景観賞を「都道府県単独主催」「市区町村単独主催」および「共催」に分け、かつ「現在実施中」「統廃合/制度変更以前または未確認」の区別をした。都道府県単独主催の顕彰制度は、1980年代後半より創設件数が漸増の傾向を見せ、それは2000年代前半もなお続いている。市区町村単独主催の顕彰制度は、1980年代前半より増え始め、同後半より1990年代前半にかけて全国で創設が相次いだ。1990年代後半はやや熱が冷め、2000年代に入って極端に創設件数は減ってしまった。建築関連団体単独主催の顕彰制度は、1950年代以前から1980年代前半までほぼ横ばいだったが、同後半に急増、1990年代はやや落ち着いたが2000年代前半にまた急増と、二つのピークを持つ。

2015年10月時点で、確認できた我が国における地方自治体が主体となって運営する建築賞/都市景観賞の総数は211件である。このうち、廃止された、もしくは、現在も運営されているか不明なもの(毎年運営されていたが、過去5年以上開催のないものを含む)が75件(36%)ある(図6-1-1)。特に1980～2000年代に創設と廃止が相次いでいることが読み取れる(図6-1-2)。

現在も継続している建築賞のうち、審査員を公表している事例が55件確認できたが、このうち、審査員に当該自治体の職員が入らず、外部有識者に審査を委託している自治体が44件(80%)、審査員に1人だけ加わるものが6件(11%)、2人以上が加わるものは5件(9%)にとどまった。また、チューリッヒ市建築賞のように、市長が審査に加わる事例は一件も見られなかった。こうした背景には、我

が国の地方自治体の職員には建築・都市デザインの専門職が限られており、建築評価を行なうだけの専門性を持ち合わせていないことが指摘できよう。チューリッヒ市では、建築家やランドスケープアーキテクトとしての職能を持った人材を、一定期間行政組織の中で任用しているため、地方自治体の内部にも建築・都市デザイン分野の専門職が存在していることが大きな違いといえよう。

つづいて、具体的な我が国の建築賞、都市景観賞の一部を取り上げ、その実態と課題を述べる。

栃木県佐野市が主催するさのし建築賞は、2013年に佐野市水と緑と万葉のまち景観賞へ改称した。改称した際、それまでの受賞作品の情報等も一切公表せず、新たに第1回として建築賞・景観賞を始めることで、過去の評価の蓄積を無いものとしている。いかに魅力的なテーマを掲げてみても、過去の取り組みを無いようにするのは、長期的な視点で建築評価を行なっているかという点からは、不十分であるといえよう。

また、栃木県真岡市が主催する真岡建築賞は、他の地方自治体よりも開催間隔を空けた5年に一度の表彰を行なうことで、建築賞としての質を高めているようにも見受けられるが、創設の背景や理念、過去の受賞作品の情報が公開されていない点で、継続した建築評価に繋がっているのかが不明である。

千葉県建築文化賞は1994年に創設され、2014年までに計21回開催され、計111作品が受賞している。同賞は、「景観上優れた建築の部」及び「高齢者・障害者等に配慮した建築の部」の2部門への表彰制度として1994年に創設された。第3回(1996年)に「建築文化奨励賞」を新設し、第5回(1998年)に「環境に配慮した建築物の部」部門を新設した。また、第12回(2005年)に「高齢者・障害者等に配慮した建築の部」から「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」へと部門の名称を改称し、第20回(2013年)には、「一般建築物の部」及び「住宅の部」の2部門へと部門を再編した。さらに、第21回(2014年)より、「建築文化賞」及び「建築文化奨励賞」から、「最優秀賞」「優秀賞」及び「入賞」へと賞の区分を再編している。このように、時代とともに賞の役割が変遷してきていることが理解できる。「千葉県建築文化賞第21回表彰作品集」には、過去の受賞作品数のデータや、作品の所在地をプロットした千葉県図を掲載するなど、資料価値の高い作品集を公開している。こうした姿勢は、市民だけでなく、県外の人々が千葉県内の優れた建築作品を知る上でも効果があるといえよう。

長岡市都市景観賞は、2003年に市民に良好な景観について考えてもらうことをきっかけとして創設され、市都市計画課によって運営されている。3年に1度の開催で、現在まで5回の実施を確認で

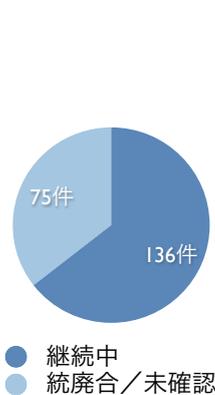


図 6-1-1 日本における地方自治体が主催する建築賞の継続状況 (2015年10月時点)

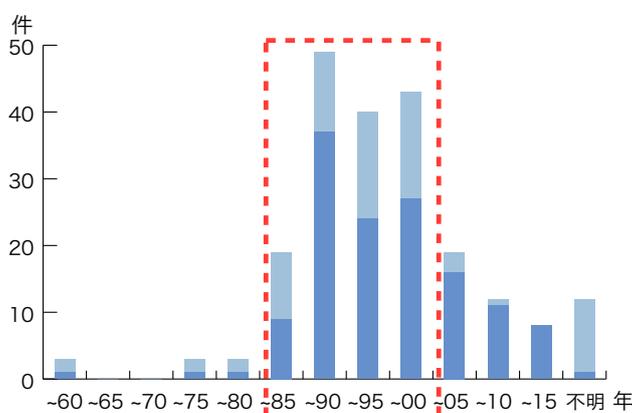


図 6-1-2 日本における地方自治体が主催する建築賞の創設時期と廃止時期の推移

きた。評価対象を建築部門とまちなみ部門に分けているが、歴史的建造物の受賞作品も含まれており、明確な竣工年による区分をしているわけではなく、どちらかという、市内にある景観に配慮した建築物は一通り評価しようという姿勢が読み取れる。しかしながら、保存の観点からの景観づくりと、今後の都市景観形成に対する建築評価のあり方では、評価基準が異なるはずであるが、同じ部門で評価をしているところに、同賞の理念、目的が明快ではないことが指摘できる。

岡崎市においては、1987年度から岡崎都市景観環境賞が始められ、2006年度まで、ほぼ隔年毎に10回にわたって実施された。2014年から、これを引き継ぐ形で、おかげ景観賞が実施されることとなった。審査員をつとめた瀬口哲夫は、同賞パンフレットの中で、「今回のおかげ景観賞では、20件の応募であったが、その中で、特に印象に残ったのは、景観まちづくり活動の応募が多かったことである。」と述べている。

札幌市都市景観賞は、札幌市における景観施策の一つとして、1983年から隔年で開催されてきた顕彰制度である。札幌市都市景観賞要綱の第1条の中に「良好な都市景観の創造及び保全（以下、「都市景観の形成」という。）に関する市民及び事業者の意識の高揚を図り、もって札幌らしい個性的で魅力的な都市景観の形成を推進することを目的とする。」とある。2009年の市民評価（事業仕分け）によって不要（廃止）と判断された。理由としては、「景観賞は国や北海道の景観賞および北海道遺産などと重なっている」、「応募作品数が減少している。北海道で実施している「北のまちづくり賞」の内容を充実させ、建物、広告など対象を広げ、札幌市の賞は廃止すべき」、「認知度がとてもひくい」、「札幌の景観をイメージアップするための具体的な事業であったことは事実であり、都市景観を表彰することについての価値は認めるし、必要であると考え。しかし、全体の仕組み自体が、バブル期の遺産ではないか」、「応募資格や対象物についての制限がほとんどないのに、応募数が100以下というのは、札幌市民190万人と比較して、関心が低過ぎないか」、「パンフ5000部では広報範囲や影響力が小さい」「景観に対する届出、指導は今後も継続すべきである」といったものが挙げられている。

現在継続中の136件中、賞の名称に「景観」がつくものは、69件（51%）にのぼる。景観賞は、市民の景観意識の向上を図ることを主題としているが、建築物、広告や植栽などのハード面から、イベントと市民活動といったソフト面への評価に移行していることが明らかとなった。こうした傾向は、「景観」を冠するすべての自治体で確認でき、都市景観形成要素である建築物を評価し続ける事例は一件も確認できなかった。ここから、我が国の地方自治体が主体となって運営する景観賞については、都市景観形成要素である建築を評価し続ける事例が見られないということが指摘できる。

## 第2節 建築関連団体が主催する建築賞・景観賞の実態

我が国における建築関連団体が主催する建築賞の概要を表6-2-1に表す。

我が国の建築関連団体が主催する建築賞のうち、現在まで続く最も歴史がある賞が、日本建築学会賞（1949年）である。毎年、優れた建築作品の設計者を評価する同賞は、我が国の建築専門家の間では広く知られた賞であろう。序章で述べた、専門家による専門家のための建築賞の典型的な事例である。こうした建築関連団体による建築賞は、数多く存在するが、施主を評価することの重要性を指

摘する団体によって運営される賞を以下に取り上げる。

BCS 賞は日本建設業連合会（旧建築業協会）によって 1960 年に創設された建築賞である。同賞は、建築主・設計者・施工者の 3 者表彰制度を採用し、村松貞治郎によれば、これが、各地の建築賞において 3 者表彰制度を採用する根拠となったと考えられている。同賞は、2015 年までに計 893 件の受賞作品を定めている。同賞の提唱者である竹中藤右衛門は、「優れた建築作品というものは、けっして表現の優劣だけで決められるものではなく、むしろその表現を支える技術の優劣こそがそれにも増して重要である」と述べており、技術的な専門性を評価することが主題となっている。数多くの受賞作品が存在するものの、建築物単体の評価に留まっており、都市景観との関連は読み取れない。

また、公共建築賞とは、優れた公共建築を表彰することにより公共建築の総合的な水準の向上に寄与することを目的とし、一般社団法人公共建築協会の創立 20 周年を記念して、昭和 63 年より建設省（現：国土交通省）及び全国知事会等の後援を得て、一年おきに開催している。対象となる建築物は、国の機関、地方公共団体又は政府関係若しくはこれに準ずる機関が施行した建築物及びその他公共性の高い建築物で、竣工後、3 年以上を経過したものとし、次にあげる視点により評価を行なっている。1) 建築として企画・設計・施工が優れていること、2) 地域社会への貢献が著しく、文化性が高いこと、3) 施設管理、保全が良好に行われていること。こうして優れた建築物の関係者（事業者又は建築主若しくは施設管理者・設計者・施工者）に対し表彰を行なっている。選考にあたっては、地区毎に選考数を定め（北海道地区 3 点、東北地区 4 点、関東地区 6 点、北陸地区 2 点、中部地区 4 点、近畿地区 4 点、中国地区 3 点、四国地区 2 点、九州沖縄地区 3 点）全国各地の公共建築を表彰している。2014 年の第 14 回開催までに、計 444 件が受賞している。事業者（ここでは地方自治体や国の機関）を表彰することで、設立趣意にあるように、公共建築の総合的な水準を高めるという効果は見られるであろう。

以上のように、建築関連団体による建築賞は、団体そのものの設立趣意に則った限られた専門性の中での建築評価であるため、全体を通して内に閉じた評価に留まっていると指摘できるが、公益的な位置付けとして、施主を対象とした建築賞の存在も確認することができた。

### 第 3 節 日本における展開可能性

数年で担当部局の職員が入替わること、どの自治体にもあることだが、主催側の中から審査員に加わることで、行政として、優れた建築、景観とは何かを発信することができるのではないだろうか。形式的な建築評価の仕組みだけを取り入れて、肝心の評価の部分に他任せる姿勢では、優れた建築・都市空間を行政が主体的に形成していくことはできないといえる。これを実現するためには、チューリッヒ市が進めているように、建築・都市デザイン分野の専門性を持った人物を任用することが方法の一つとして考えられる。

要項に記載の情報に関しても、現状もしくは、将来にわたる都市の課題や目指すべき方向性が見られず、漠然としたテーマ設定であることが、継続した建築評価が困難な要因の一つだといえる。行政が都市空間の質の向上を図る姿勢を持っているのであれば、もう少し具体的な視点で課題設定や将来像を示すことができるのではないだろうか。具体的な建築評価については、都市景観形成を主題とす

るのであれば、やはり優れた建築物の集積が優れた都市空間を形成するという基本的な認識を踏まえて、数十年と変わらずにこの考え方を継続していく態度が求められるであろう。社会状況に応じたテーマは時代とともに変遷していくことは自明であるが、根本的な建築評価の立ち位置がぶれてしまうと、それまでの建築評価の蓄積が活かされなくなり、結果として、何の為の建築賞なのかが曖昧なまま、何となく続けてしまう状況に繋がりがねない。チューリッヒ市における戦後から一貫した建築評価の理念を継承し、議論し続ける態度は、我が国の地方自治体でも大いに適用すべき姿勢であろう。

新たに賞を創設する動きは、現在でも見られるが、賞の創設に際しては、5年、10年ではなく、数十年先の状況にも堪え得る理念を掲げ、次世代に継承していけるような仕組みづくりが肝要である。その上で、過去の審査記録を保存し、一般に公開しているチューリッヒ市から学べることは大いにあろう。現在の建築評価を行なう際にも、1945年の議事録をもとに議論を深める姿勢は、長期的に都市空間・都市景観を形成する上で、重要な取り組みである。

ここからは、運営手法で展開できうる点をいくつか指摘したい。

チューリッヒ市建築賞は、4～5年毎に開催され、バーゼルも同様である。毎年開催するとなれば、運営に掛かる経費や、応募作品数も限られ、継続的な建築評価を実現させることは困難であろう。実際に、我が国で80年代に数多くの建築賞が出来ては消えた事実が裏付けられている。そうした中で、開催間隔を広げることにより、一回あたりの審査に対する予算配分や応募数の確保に繋がるといえる。

広報活動に関しては、単に授賞式を開催するだけでなく、その後に展示会を企画することで、審査の結果を広く市民に広める効果が期待できる。さらに、チューリッヒ市では、インターネット投票による市民の意見を取り入れた投票方式を導入し、審査段階で市民に関心を持ってもらう工夫が見られた。最終的な審査結果とは別の形で公表されることで、市民が考える良い建築と、審査委員会が評価する良い建築を相対的に比較することができる点で、興味深い手法を用いているといえる。チューリッヒ市は、2011年から、市の公式ホームページ上で、これまでの受賞作品の所在地をプロットした電子地図を公開している。これについて、担当者は、「単に受賞作品を知るだけでなく、実際に足を運んで見てもらうことが目的である」と述べており、こうした情報公開も市民の都市景観・都市空間に対する興味、関心を呼ぶ手法の一つといえる。

#### 第4節 小結

以上より、地方自治体が主体となって運営される建築賞は、審査を外部有識者に委託している点、景観賞において評価対象が建築物から屋外広告、植栽、市民活動やイベントに移行し、創設時から継続して建築物を評価し続ける賞は見られない点から、我が国における自治体主体の建築評価は、建築物への評価を通して今後の都市形成に活かしていくという意図が明確ではないことを指摘した。一方、建築関連団体が主催する建築賞の中には高い専門性を活かした建築評価を継続する中で、施主も表彰することによって、社会的な位置付けを明確にするとともに、建築文化を市民に広めようとする姿勢が見られるものも存在するが、そもそも建築関連団体の設立趣意に則った建築賞であるため、どうしてもその評価は技術者などの視点に立った限定し的な建築評価に留まっているといえる。こうした実態を踏まえ、チューリッヒ市建築賞から我が国が学べる点は第3節で指摘した通りである。

表 6-1-1 日本における地方自治体が主催する建築賞

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
1	神奈川建築コンクール	[PA]	継続中	1956	都道府県市区町村	神奈川県+横浜市+川崎市+横須賀市+藤沢市+相模原市+鎌倉市+厚木市+平塚市+小田原市+秦野市+茅ヶ崎市+大和市	共催 神奈川県+県下12市	1953年：横浜市建築コンクール創設 → 1956年：本賞に引き継ぎ
2	沼津市優良建築物表彰	[PA]	未確認	1958?	市区町村	沼津市	単独	
3	京都市文化功労者表彰	[IR]	継続中	1968	市区町村	京都市	単独	
4	建築物に付属する緑化施設表彰	[PA]	未確認	1970	市区町村	大阪市	単独	建築指導部
5	京都市芸術功労賞・芸術新人賞	[IR]	継続中	1975	市区町村	京都市	単独	
6	金沢都市美文化賞	[PA]	継続中	1978	市区町村	金沢都市美実行委員会	共催	
7	熊本市優秀建築物表彰	[PA]	未確認	1980	市区町村	熊本市	単独	都市整備局計画部建築指導課
8	横浜市優良工事請負業者表彰	[IR]	継続中	1980	市区町村	横浜市	単独	
9	大阪まちなみ賞（大阪都市景観建築賞）	[PA]	継続中	1981	都道府県市区町村公益社団法人	大阪府+大阪市+（公社）大阪府建築士会	共催	1990年：みどりの景観賞（大阪施設緑化賞）創設 → 2002年：本賞に統合
10	京都府文化賞	[IR]	継続中	1982	都道府県	京都府	単独	
11	市民が選ぶ都市景観賞	[PA]	未確認	1982	市区町村	秋田市	単独	1999年より隔年実施
12	高山市景観デザイン賞	[PA]	継続中	1982	市区町村	高山市	単独	
13	三春町建築賞	[PA]	継続中	1982	市区町村	三春町	単独	建設課
14	福島県建築文化賞	[PA]	継続中	1982	都道府県 一般社団法人 公益社団法人 民間企業	福島県 +（株）福島民報社 +（一社）福島県建設業協会 +（公社）福島県建築士会	共催	
15	足利市建築文化賞	[PA]	改称	1983	市区町村	足利市	単独	2011年より足利市建築・景観賞に改称
16	名古屋市都市景観賞	[dual]	改称	1984	市区町村	名古屋市	単独	計画部都市景観室 "2003年より隔年実施2012年よりまちなみデザインセレクションに改称"
17	盛岡市都市景観賞		継続中	1984	市区町村	盛岡市	単独	景観政策課
18	高知市都市美デザイン賞	[dual]	継続中	1985	市区町村	高知市	単独	1999年まで（財）高知市文化振興事業団で実施
19	街づくりデザイン賞	[PA]	継続中	1985	市区町村	徳島市	単独	後援（社）徳島県建築士会（社）徳島県建築士事務所協会 "2001年より隔年2013年より11部門から6部門に変更"
20	横浜市優良建築設計者表彰	[IR]	継続中	1985	市区町村	横浜市	単独	
21	美しい街並み賞	n/a	改称	1985	都道府県	山形県	単独	1993年：美しい街並み賞 → 1993年度：やまがた景観デザイン賞に改称
22	徳島街づくりデザイン賞		継続中	1985	市区町村	徳島市	単独	都市政策課
23	まちかどチャームング賞	[dual]	未確認	1986	市区町村	尼崎市	単独	
24	倉敷市都市建築優秀賞	[PA]	改称	1986	市区町村	倉敷市	単独	1986年：倉敷市都市建築優秀賞創設 → 1993年：改称
25	神戸景観・ポイント賞	[PA]	未確認	1986	市区町村	神戸市	単独	
26	豊の国木造建築賞	[PA]	継続中	1986	都道府県 社団法人 民間企業 他（建築関連）	大分県木造住宅等推進協議会	共催	協議会：（社）大分県建設業協会 大分県建設組合連合会 大分県建設合同労働組合（社）大分県建築士会（社）大分県建築設計事務所協会 大分県職業能力開発協会 大分県森林組合連合会 大分県木材協同組合連合会 大分県木材商業協同組合 大分県木造住宅事業協会 大分県地域づくり機構（大分県住宅供給公社） 大分県農林水産部林産振興室 大分県土木建築部建築住宅課
27	那覇の景観賞		継続中	1986	市区町村	那覇市	単独	都市計画課
28	うるおいのあるまちづくり顕彰事業	[IR]	継続中	1987	都道府県	茨城県	単独	土木部都市計画課 1987年：まちづくりグリーンリボン賞創設 → 1996年：まちづくりグッドサイン賞追加
29	千葉街並み景観賞	n/a	継続中	1987	都道府県	千葉県	単独	"主催：「都市景観の日」実行委員会（財）都市づくりパブリックデザインセンター後援：旧建設省（現国土交通省）"
30	長崎県木造住宅コンクール	[PA]	継続中	1987	都道府県	長崎県	単独	土木部住宅課まちづくり班

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
31	ハウジングデザイン賞	[PA]	継続中	1987	市区町村	大阪市	単独	
32	八戸市まちの景観賞	[PA]	継続中	1987	市区町村	八戸市	単独	都市計画課
33	福岡市都市景観賞	[PA]	継続中	1987	市区町村	福岡市	単独	
34	彩の国景観賞	[dual]	未確認	1987	都道府県 社団法人	彩の国景観賞実行委員会	共催	委員会：埼玉県+（社）埼玉建築士会+（社）埼玉県建築士事務所協会+（社）埼玉県建設業協会+（社）埼玉県造園業協会 "1987年：創設 → 2005年：3部門制に2010年の開催を最後に実施の痕跡なし"
35	大阪市ハウジングデザイン賞	[PA]	継続中	1987	市町村	大阪市	単独	
36	江別都市景観賞		継続中	1987	市区町村	江別市	単独	都市計画課
37	うるおい環境とやま賞		継続中	1987	都道府県	富山県	単独	建築住宅課
38	おかざき景観賞		改称	1987	市区町村	岡崎市	単独	岡崎都市景観環境賞が2014年改称
39	長崎市景観賞		継続中	1987	市区町村	長崎市都市景観表彰実行委員会（事務局：長崎市まちづくり推進室、長崎商工会議所青年部）	共催	まちづくり推進室 協賛企業多数
40	くまもと景観賞	[IR]	未確認	1988	都道府県	熊本県	単独	土木部景観整備課 くまもと景観賞とは別に、地域景観賞、緑と水の景観賞、広告景観賞の3つの部門賞と、地域景観奨励賞、特別賞を実施
41	北海道赤レンガ建築賞	[PA]	継続中	1988	都道府県	北海道	単独	建設部建築指導課 1994年より奨励賞付加
42	小樽市都市景観賞	[dual]	継続中	1988	市区町村	小樽市	単独	まちづくり推進課
43	川口市都市デザイン賞	[PA]	継続中	1988	市区町村	川口市	単独	都市計画課環境計画係
44	千葉市都市文化賞	[PA]	継続中	1988	市区町村	千葉市	単独	建設局建築部建築指導課 "平成23年度から名称を千葉市優秀建築賞から千葉市都市文化賞に改称、部門を増設"
45	とやま市都市景観建築賞	[PA]	未確認	1988	市区町村	富山市	単独	
46	長野市景観賞	[dual]	継続中	1988	市区町村	長野市	単独	まちづくり推進課
47	浜松市都市景観賞	[PA]	未確認	1988	市区町村	浜松市	単独	都市整備部土地政策課 "1992年（第5回）まで毎年、2000年（第9回）まで隔年、2003年以降3年毎実施。平成18年度までの実施は確認"
48	姫路市都市景観賞	[PA]	継続中	1988	市区町村	姫路市	単独	"1985年：姫路市建築文化賞実施（1回のみ） → 1988年：第1回姫路市都市景観賞実施以降、3年ごとに実施"
49	静岡県住まいの文化賞	[PA]	継続中	1988	都道府県 市区町村 社団法人 財団法人 民間企業	静岡県住宅振興協議会	共催	60団体から構成される。
50	静岡県景観賞	[dual]	継続中	1988	都道府県 社団法人 財団法人 民間企業	静岡県美しいまちづくり推進協議会	共催	協議会：静岡県、（株）静岡新聞社、静岡放送（株）、（社）静岡県建築士事務所協会、（社）静岡県建築士会、（社）日本造園建設業協会静岡県支部、（社）静岡県建設業協会、（財）静岡県建築住宅まちづくりセンター "平成20年度より名称を静岡県都市景観賞から静岡県景観賞に改称 田園や農山漁村などの幅広い景観にも対象を拡大して実施"
51	杉並「まち」デザイン賞	[PA]	継続中	1989	市区町村	杉並区	単独	
52	仙台市都市景観賞	[PA]	未確認	1989	市区町村	仙台市	単独	第4回（平成4年）までは毎年実施→第5回（平成6年度）から第8回（平成12年度）までは隔年実施→第9回（平成15年）→第10回（平成19年度）
53	へきなん都市デザイン文化賞	[PA]	継続中	1989	市区町村	碧南市+碧南商工会議所	単独	1994年第6回まで毎年、以降隔年実施
54	草加市まちなみ景観賞	[dual]	継続中	1988?	市区町村	草加市	単独	
55	函館市西部地区歴史的景観賞	[PA]	改称	1989	市区町村	函館市	単独	1995年度：函館市都市景観賞に改称
56	すまいる愛知住宅賞	[PA]	継続中	1989	都道府県 市区町村 社団法人 財団法人 市民団体 民間企業	愛知ゆとりある住まい推進協議会	共催	協議会：愛知県、名古屋市など官民あわせて75団体で構成
57	わか家のリフォームコンクール	[PA]	継続中	1989	都道府県 市区町村 社団法人 財団法人 市民団体 民間企業	愛知ゆとりある住まい推進協議会	共催	協議会：愛知県、名古屋市など官民あわせて75団体で構成
58	京都市都市景観賞	[PA]	継続中	1989	市区町村 社団法人	京都市+（社）京都府建築士会	共催	京都美観風致賞？ → 1989年：京都市都市景観賞

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
59	ヒロシマ賞	[IR]	継続中	1989	市区町村 財団法人	広島市+(公財)広島市未来都市創造財団	共催	3年毎に実施
60	福井市景観賞		改称	1989	市区町村	福井市	単独	都市整備室
61	大阪市都市環境アメニティ表彰	[PA]	未確認	1990	市区町村	大阪市	単独	
62	かわごえ都市景観表彰	[PA]	継続中	1990	市区町村	川越市	単独	都市景観課都市景観担当
63	まちなみ景観賞	[dual]	未確認	1990	市区町村	江東区	単独	"1997年まで毎年、以降不明2008年度までの実施を確認"
64	ふじさわ都市デザイン賞	[PA]	未確認	1990	市区町村	藤沢市	単独	
65	西宮市都市景観賞		継続中	1990	市区町村	西宮市	単独	景観まちづくり課
66	舞鶴市まちづくりデザイン賞	[dual]	継続中	1990?	市区町村	舞鶴市	単独	
67	蕨市ときめき都市賞	n/a	未確認	1990?	市区町村	蕨市	単独	1992年(第3回)まで毎年、以降隔年実施?
68	GIFU バリアフリー賞	[PA]	未確認	1991	都道府県	岐阜県	単独	"1991年:創設 → 1999年:「施設部門」と「福祉のまちづくり活動部門」とに分割2010年以降の開催が未確認"
69	茨木市都市景観賞	[PA]	継続中	1991	市区町村	茨木市	単独	概ね5年毎の開催
70	越谷市建築景観賞	[PA]	未確認	1991	市区町村	越谷市	単独	2001年以降より隔年実施
71	本庄市まちなみハーモニー賞	n/a	未確認	1991?	市区町村	本庄市	単独	91,92年のみ開催?
72	上田市都市景観賞	[dual]	継続中	1992	市区町村	上田市	単独	都市建設部都市計画課
73	千代田区都市景観賞	[dual]	未確認	1992	市区町村	千代田区	単独	
74	新居浜市都市景観賞	[PA]	未確認	1992	市区町村	新居浜市	単独	都市開発部都市計画課
75	半田市都市景観賞	[PA]	改称	1992	公益社団法人 市区町村	愛知建築士会半田支部、半田市	共催	"愛知建築士会のホームページによると「他の市町村の例を見ると都市景観賞の大半は行政が主導するものであるが、半田市都市景観賞の場合、建築士会半田支部が積極的に職能団体としての役割を果たしており、その点でユニークである。」としている。1992年:半田市都市景観賞創設 → 1995年:半田市ふるさと景観賞へ改称"
76	釧路市都市景観賞		継続中	1992	市区町村	釧路市	単独	都市計画課
77	宇都宮市まちなみ景観賞		継続中	1992	市区町村	宇都宮市	単独	都市計画課
78	宮崎市景観賞		継続中	1992	市区町村	宮崎市	単独	景観課
79	高岡都市美景観賞	[PA]	継続中	1992?	市区町村	高岡市	単独	
80	山梨県建築文化賞	[PA]	継続中	1992?	都道府県	山梨県	単独	
81	愛知まちなみ建築賞	[PA]	継続中	1993	都道府県	愛知県	単独	建設部公園緑地課
82	しまね景観賞	[PA]	継続中	1993	都道府県	島根県	単独	土木部都市計画課
83	美しい会津若松景観賞	[dual]	継続中	1993	市区町村	会津若松市	単独	都市計画課
84	倉敷市建築文化賞	[PA]	継続中	1993	市区町村	倉敷市	単独	建設局建築部建築指導課
85	景観づくり大賞	[IR]	継続中	1993	都道府県 市区町村	広島県景観会議	共催	会議:広島県+県内市町村 "広島県景観会議ホームページより「広島県景観会議は、優れた景観の保全と創造を図るため、県内の21市町
86	豊中市都市デザイン賞		継続中	1993	市区町村	豊中市	単独	都市計画課
87	鹿沼市木造建築物コンクール	[PA]	継続中	1993?	市区町村	鹿沼市	単独	
88	秩父市街なみ景観賞	[PA]	継続中	1994?	市区町村	秩父市	単独	
89	いしかわ景観大賞	[PA]	継続中	1994	都道府県	石川県	単独	土木部都市計画課
90	千葉県建築文化賞	[PA]	継続中	1994	都道府県	千葉県+(一社)千葉県建築士会	共催	
91	蒲郡市景観賞	[PA]	未確認	1994	市区町村 他(建築関連)	蒲郡市景観賞推進委員会	共催	"94, 96=蒲郡まちなみ景観賞 98, 00, 04=蒲郡市景観賞 2004年以降開催の情報なし。"
92	堺市景観賞	[dual]	継続中	1994	市区町村	堺市	単独	建築都市局都市計画部 都市景観室
93	高松市都市景観賞	[PA]	改称	1994	市区町村	高松市	単独	"94, 96, 99, 03年度開催""市長定例記者会見(平成23年7月11日)
94	ひろしま街づくりデザイン賞	[dual]	継続中	1994	市区町村	広島市	単独	都市計画局 計画調整課 都市デザイン係 "1978年:広島市優秀建築物表彰・優秀緑化施設表彰制度創設 → 1991年:優秀宅地開発表彰制度設置 → 1994年:三つの賞を統合 → 2000年(第7回)まで毎年、以降隔年実施。平成25年度(第14回)からは、各部門の対象をよりわかりやすくするため、これまでの11部門から6つの部門賞と街づくり提案賞に見直しを行いました。"
95	まえばし都市景観賞	[dual]	未確認	1994	市区町村	前橋市	単独	ホームページに情報なし。

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
96	大阪・心ふれあいまちづくり賞	[PA]	未確認	1994	都道府県 市区町村	大阪府+大阪市+ 大阪府建築士会	共催	第15回、2008年度以降、開催の 情報なし。
97	人にやさしい街づくり賞	[dual]	継続中	1995	都道府県	愛知県	単独	建設部建築指導課
98	くまもとアートポリス推進賞	[PA]	継続中	1995	都道府県	熊本県	単独	土木部建築課
99	函館市都市景観賞	[dual]	継続中	1995	市区町村	函館市	単独	1989年度：函館市西部地区歴史 的景観賞創設→1995年度：函館 市都市景観賞に改称
100	半田市ふるさと景観賞	[PA]	継続中	1995	市区町村	半田市	単独	協賛 (社)愛知建 築士会半田支部 "1992年：半田市都市景観賞創設 →1995年：半田市ふるさと 景観賞へ改称第1回：1995年度 開催、第2回：2005年度開催"
101	人にやさしい街づくり賞		継続中	1995	都道府県	愛知県	単独	住宅計画課
102	久喜市まちなみデザイン賞	n/a	未確認	1995?	市区町村	久喜市	単独	
103	三重県さわやかまちづくり賞	n/a	改称	1996	都道府県	三重県	単独	1999年度：三重県バリアフリー まちづくり賞に改称
104	岡山市まちづくり賞	[PA]	改称	1996	市区町村	岡山市	単独	都市整備局都市建設部 建築指導課 "1971年：岡山市優秀建築物表彰 →1996年：本賞へ移行? 2009年度：岡山市景観まちづく り賞に改称"
105	岐阜市都市景観賞	[dual]	改称	1996	市区町村	岐阜市	単独	"1981年：岐阜市都市美創出賞創 設→1996年：本賞へ移行 2010年度：岐阜市景観賞に改称 "
106	美しい街づくり賞	[dual]	継続中	1996	市区町村	呉市	単独	1984年：呉市優秀建築物表彰制 度創設→1996年：引き継ぎ
107	郡山市さわやか建築文化賞	[PA]	改称	1996	市区町村	郡山市	単独	2007年度：郡山市さわやか建築 文化賞と合併し、郡山市景観ま ちづくり賞に改称
108	徳島やさしいまちづくり賞	[PA]	未確認	1996	都道府県 財団法人	徳島県+ (財)とく しまノーマライゼー ション促進協会	共催	
109	飯伊地域景観賞	[dual]	未確認	1996	都道府県不明	飯伊地域景観推進会 議	共催	主催者の情報なし
110	大和市街づくり賞		継続中	1996	市区町村	大和市	単独	街づくり推進課
111	松山市都市景観賞		継続中	1996	市区町村	松山市	単独	都市デザイン課
112	かすかべ都市景観賞	n/a	未確認	1996?	市区町村	春日部市?	単独	
113	エコシティとこざわ賞	[IR]	継続中	1996?	市区町村	所沢市	単独	
114	高知県新しいなかデザイン賞	[dual]	未確認	1997	都道府県	高知県	単独	1997年：第1回→1999年： 第3回、以降見当たらず
115	春日井市都市景観賞	[PA]	未確認	1997	市区町村	春日井市	単独	"1997年：第1回、2000年：第2 回、2003年：第3回Webページ が2010.6.30以降更新されず"
116	とよた景観まちづくり賞	[dual]	未確認	1997	市区町村	豊田市	単独	"1987年：豊田市都市景観賞→ 1997年よりリニューアルして 開催豊田市景観写真コンテスト に改称した可能性あり"
117	萩都市景観賞	[PA]	継続中	1997	市区町村	萩市	単独	都市計画課 2014年度は応募作品なしのため、 表彰作品なし
118	延岡市都市景観賞		継続中	1997	市区町村	延岡市	単独	都市計画課
119	佐賀市景観賞		改称	1997	市区町村	佐賀市	単独	都市デザイン課 2006年までは佐賀市都市景観賞
120	景観ワンポイント賞	[PA]	継続中	1998?	市区町村	姫路市	単独	都市局計画部まちづく り指導課 98,99,01,02,04年度実施。
121	だれもが住みよい福祉のまち づくり表彰	[dual]	継続中	1998?	都道府県	宮城県	単独	
122	美しいひだ・みの景観づくり賞	[IR]	未確認	1998	都道府県	岐阜県	単独	都市建設部都市政策課 "1998年：創設→2000年： 隔年実施に変更 2009年度以降開催の情報なし"
123	北海道福祉のまちづくりコン クール	[dual]	継続中	1998	都道府県	北海道	単独	保健福祉部地域福祉課 後援 札幌市、北海道 福祉のまちづくり推進 連絡協議会 2003年：ソフト部門新設
124	大垣市都市景観賞	[PA]	未確認	1998	市区町村	大垣市	単独	おおがき景観フォトコンテスト に改称した可能性あり
125	バリアフリー社会推進賞	[dual]	継続中	1999	都道府県	石川県	単独	健康福祉部厚生政策課
126	人間サイズのまちづくり賞	[dual]	継続中	1999	都道府県	兵庫県	単独	県土整備部まちづくり 局都市政策課 1999年：「さわやか街づくり賞」 (1991年創設)と「福祉のまちづ くり賞」を統合・再編
127	福岡県美しいまちづくり賞	[dual]	継続中	1999	都道府県	福岡県	単独	"建築都市部住宅計画 課住宅指導係協賛： (財)福岡県建築住宅 センターほか"
128	明石市都市景観賞	[PA]	継続中	1999	市区町村	明石市	単独	都市整備部都市計画課 1999年度：第1回、2004年度： 第2回、2009年度：第3回
129	北九州市都市景観賞	[dual]	継続中	1999	市区町村	北九州市	単独	都市計画課景観担当 "1981年：建築文化賞、緑の街か ど賞、都市の色彩賞→1999年： 3賞を統合特設部門として「景観 フォトエッセイ」を設ける"
130	緑のまちかど賞	[dual]	改称	1999	市区町村	郡山市	単独	都市開発部公園緑地課 2007年度：郡山市さわやか建築 文化賞と合併し、郡山市景観ま ちづくり賞に改称

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
131	横浜・人・まち・デザイン賞	[dual]	継続中	1999	市区町村	横浜市	単独 都市整備局地域まちづくり部地域まちづくり課	1985年：まちなみ景観賞創設 → 1997年（第7回）をもって終了 → 1999年：まちづくり功労者賞と統合、本賞に
132	景観・まちづくりコンクール	[dual]	未確認	1999	市区町村 公益財団法人	京都市+京都市景観・まちづくりセンター	共催	"1999年度：第1回開催、2003年度：第2回開催の情報ありその後の情報なし"
133	米沢市都市景観賞		継続中	1999	市区町村	米沢市	単独 都市計画課	まちなみ部門の該当作品なしが続く
134	こまつまちなみ景観賞		継続中	1999	市区町村	こまつまちなみ景観賞実行委員会	共催 "まちデザイン第1課、小松商工会議所一般社団法人小松能美建設業協会小松委員会小松建築設計監理協会小松市造園業組合"	
135	人間サイズのまちづくり賞		継続中	1999	都道府県	兵庫県	単独 都市政策課	
136	宮崎県木造建築物設計コンクール	[PA]	未確認	2000	都道府県 民間企業	宮崎県+宮崎県木材協同組合連合会	共催	
137	福祉のまちづくりコンクール	[dual]	未確認	2001	都道府県	山形県	単独 健康福祉部障害福祉課	"2007年度までの本賞に関する予算がついていることを確認以後については未確認"
138	彩の国人にやさしいまちづくり賞	[dual]	継続中	2001	都道府県 市区町村 社団法人 民間企業	彩の国人にやさしい建物づくり連絡協議会	共催	主催者の事務局は、埼玉建築士会に所在
139	いわて夢住宅コンクール	[PA]	未確認	2001	都道府県 財団法人 民間企業	岩手県+いわて夢住宅推進協議会+岩手県建築住宅センター	共催	
140	文の京都市景観賞		継続中	2001	市区町村	文京区	単独 住環境課	景観創造賞、ふるさと景観賞、景観づくり活動賞
141	人にやさしい福祉のまちづくり表彰	[dual]	継続中	2001?	都道府県	宮崎県	単独	
142	岸和田市都市景観賞		継続中	2002	市区町村	岸和田市	単独 都市計画課	4年に一度
143	いわて省エネ・新エネ住宅大賞	[PA]	改称	2003	都道府県	岩手県	単独 環境生活部資源エネルギー課	
144	おおいと・福祉のまちづくり賞	[dual]	未確認	2003	都道府県	大分県	単独 福祉保健部福祉保健企画課	2005年度以降、開催の情報なし
145	三重県ユニバーサルデザインのまちづくり賞	[dual]	未確認	2003	都道府県	三重県	単独	"1996年：三重県さわやかまちづくり賞 → 1999年：三重県パリアフリーまちづくり賞 → 2003年：本賞 2013年度以降開催の情報なし"
146	長岡市都市景観賞		継続中	2003	市区町村	長岡市	単独 都市計画課	3年に一度
147	福祉のまちづくり賞	[IR]	継続中	2003?	都道府県	長野県	単独	
148	栃木県マロニエ建築・景観賞	[PA]	継続中	2004	都道府県	栃木県	単独 土木部建築課	1989年：栃木県マロニエ建築賞創設 → 2004年：「景観部門」設置により本賞に名称変更
149	木の住まいづくりコンクール	[PA]	未確認	2004	都道府県	鳥取県	単独 農林水産部林政課	第8回（2011年度）までの開催を確認
150	古都景観賞	[IR]	継続中	2004	市区町村	大津市	単独	
151	真岡市建築賞		継続中	2004	市区町村	真岡市	単独 建設課	5年に一度開催
152	とやま木造住宅コンクール	[PA]	継続中	2004?	都道府県	富山県	単独	
153	兵庫県産木造住宅コンクール	[PA]	継続中	2004?	都道府県	兵庫県	単独	
154	人にやさしい福祉のまちづくり賞	[dual]	未確認	2005	都道府県	群馬県	単独	
155	淡海ユニバーサルデザイン賞	[dual]	未確認	2005	都道府県	滋賀県	単独	主催者のWebページに本賞の情報なし
156	まちづくりデザイン賞	[dual]	継続中	2005	市区町村	帯広市	単独	"旧都市景観賞 → 2005年より改称「まち創り部門」と「まち育て部門」の2部門だが、内容を考慮し、研究対象とするのは「まち創り部門」のみとする"
157	大阪まちなみ百景	[PA]	継続中	2005	都道府県 市区町村 社団法人 財団法人 市民団体	大阪府+大阪美しい景観づくり推進会議	共催 推進会議：自治体・法人団体など多数	
158	多摩のまちなみ建築デザイン賞	[PA]	継続中	2005?	市区町村	立川商工会議所	単独	
159	国際海の手文化都市よこすか景観賞	[dual]	継続中	2005?	市区町村	横須賀市	単独	
160	郡山市景観まちづくり賞	[dual]	継続中	2007	市区町村	郡山市	単独 都市整備部開発建築指導課	郡山市さわやか建築文化賞と緑のまちかど賞が合併
161	しまね建築住宅コンクール		継続中	2007	都道府県	島根県	単独 建築住宅課	
162	平泉町景観建築賞		継続中	2008	市区町村	平泉町	単独 建設水道課	
163	柏市都市景観賞		継続中	2008	市区町村	柏市	単独 都市計画課	
164	岡山市景観まちづくり賞		継続中	2009	市区町村	岡山市	単独 都市整備局建築指導課	2009年度：岡山市まちづくり賞 → 岡山市景観まちづくり賞に改称
165	ふるさとあおり景観賞		継続中	2009	都道府県	青森県	単独 都市計画課	
166	わかやま木の家コンテスト		継続中	2009	都道府県	和歌山県	単独 林業振興課	「紀州材」の普及を目的

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
167	岐阜市景観賞		継続中	2010	市区町村	岐阜市	単独 まちづくり推進部まちづくり景観課	2010年度：岐阜市都市景観賞 → 岐阜市景観賞に改称
168	景観まちづくり賞		継続中	2010	市区町村	鹿児島市	単独 都市景観課	過去の鹿児島市建築文化賞を発展させて創設
169	平成の米子市都市景観施設賞		継続中	2010	市区町村	米子市	単独 都市計画課	
170	高松市美しいまちづくり賞	[dual]	継続中	2011	市区町村	高松市	単独 都市整備部都市計画課	"市長定例記者会見(平成23年7月11日)
171	松戸市景観表彰		継続中	2011	市区町村	松戸市	単独 都市計画課	建築物部門と景観づくり活動部門
172	神戸市都市デザイン賞		継続中	2011	市区町村	神戸市	単独 まちのデザイン課	建築文化賞、景観ポイント賞を発展させて創設
173	名古屋まちなみデザインセレクション	[PA]	継続中	2012	市区町村	名古屋市	単独 住宅都市局都市計画部 都市景観室	
174	埼玉県環境住宅賞		継続中	2013	都道府県	埼玉県	単独 住宅課	2009年埼玉県環境建築住宅賞が2013年改称
175	安城市まちなみ建築賞	[PA]	未確認	不明	市区町村	安城市	単独	
176	まちづくり建築賞	[PA]	未確認	不明	市区町村	安城市	単独	
177	一宮市まちづくり景観賞	[PA]	未確認	不明	市区町村	一宮市	単独	
178	犬山市都市景観賞	[PA]	継続中	不明	市区町村	犬山市	単独	90-1
179	今治市まちなみ景観賞	[PA]	継続中	不明	市区町村	今治市	単独	1988年：今治市都市景観建築賞創設 → 00-e：改称？
180	京都地域住宅(HOPE)コンクール	n/a	未確認	不明	市区町村	京都市	単独	1986-96年実施？
181	せたがや住宅賞	[PA]	未確認	不明	市区町村	世田谷区	単独 住宅政策部住宅管理課	
182	田島町優秀建築物コンクール	[PA]	継続中	不明	市区町村	田島町商工会	単独	
183	徳島県優秀建築設計コンクール	n/a	未確認	不明	都道府県	徳島県？	単独	
184	福祉のまちづくり施設賞	[PA]	継続中	不明	都道府県	山梨県	単独	00-e

注 「賞の区分」の各項目の意味は、下記の通り；[PA]: Program Awards (作品賞)、[IR]: Individual Recognitions (功労賞)、[dual]: [PA] & [IR] (複合賞)、n/a: 情報不足により不明。

表 6-2-1 日本における建築関連団体が主催する建築賞

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
1	学術賞	[IR]	廃止・統合	1938	一般社団法人	(一社) 日本建築学会	単独	
2	日本建築学会賞	[dual]	継続中	1949	一般社団法人	(一社) 日本建築学会	単独	1938-44年：学術賞 → 戦争のため中絶 → 1949年：装い新たに復活
3	日本造園学会賞	[dual]	継続中	1949	公益社団法人	(公社) 日本造園学会	単独	
4	大阪建築コンクール	[PA]	継続中	1954	公益社団法人	(公社) 大阪府建築士会	単独	後援：大阪府、(財)大阪21世紀協会、(社)大阪建築士事務所協会
5	青年技術者表彰	[IR]	継続中	1954	一般社団法人	(一社) 日本建築協会	単独	
6	照明普及賞	[dual]	継続中	1957	一般社団法人	(一社) 照明学会	単独	普及部
7	日本都市計画学会賞	[IR]	継続中	1959	公益社団法人	(公社) 日本都市計画学会	単独	
8	BCS賞(建築業協会賞)	[PA]	継続中	1960	一般社団法人	(一社) 日本建設業連合会	単独	2011年より主催者が(社)建築業協会から(社)日本建設業連合会へ移行
9	日本木材学会賞	[IR]	継続中	1960	一般社団法人	(一社) 日本木材学会	単独	
10	軽金属協会建築賞	n/a	廃止・統合	1961	社団法人	旧(社)軽金属協会	単独	
11	空気調和・衛生工学会賞	[IR]	継続中	1963	公益社団法人	(公社) 空気調和・衛生工学会	単独	
12	香川県(建築士会/優秀建築)作品表彰	[PA]	継続中	1964	一般社団法人	(一社) 香川県建築士会	単独	
13	地盤工学会賞	[IR]	継続中	1966	公益社団法人	(公社) 地盤工学会	単独	
14	SDA賞	[PA]	継続中	1966	公益社団法人	(公社) 日本サインデザイン協会	単独	
15	日本建築学会大賞	[IR]	継続中	1968	一般社団法人	(一社) 日本建築学会	単独	
16	市村産業賞/学術賞	[IR]	継続中	1969	公益財団法人	(公社) 新技術開発財団	単独	
17	関東甲信越建築士会ブロック会賞	n/a	要確認	1969	公益社団法人	(公社) 関東甲信越建築士会ブロック会青年建築士協議会	共催	
18	中部建築賞	[PA]	継続中	1969	一般社団法人	(一社) 東海建築文化センター	共催	中部圏9県(静岡/愛知/石川/福井/富山/長野/岐阜/三重/滋賀)の建設業協会、建築士会、日本建築家協会などで構成
19	照明学会研究奨励賞	[IR]	継続中	1970	一般社団法人	(一社) 照明学会	単独	
20	JID賞	[dual]	継続中	1970	公益社団法人	(公社) 日本インテリアデザイナー協会	単独	
21	JCDデザイン賞	[PA]	継続中	1973	一般社団法人	(一社) 日本商環境設計家協会	単独	
22	日本銅センター賞	n/a	継続中	1974	一般社団法人	(一社) 日本銅センター	単独	
23	東京建築賞「建築作品コンクール」	[PA]	継続中	1975	一般社団法人	(一社) 東京都建築士事務所協会	単独	
24	北海道建築賞	[PA]	継続中	1975	一般社団法人	(一社) 日本建築学会北海道支部	単独	
25	石川建築賞	[PA]	継続中	1979	一般社団法人	(一社) 石川県建築士会	単独	後援：石川県、(社)石川県建築士事務所協会、(社)石川県建設業協会
26	東北建築賞	[dual]	継続中	1980	公益社団法人	(公社) 日本建築学会東北支部	単独	後援(社)日本建築家協会東北支部、(社)建築士事務所協会(東北各県)、(社)建築士会(東北各県)、(社)福島県建築設計協会、(社)東北建設業協会連合会
27	岐阜県建築賞	[PA]	要確認	1981	一般社団法人	(一社) 岐阜県建築士事務所協会	単独	
28	緑の都市賞	[IR]	継続中	1981	公益財団法人	(公財) 都市緑化基金	単独	
29	瓦屋根・景観等設計実施例コンクール「豊賞」	[PA]	継続中	1981	一般社団法人民間企業	(一社) 全日本瓦工事業連盟+全国陶器瓦工業組合連合会	共催	当初は毎年実施
30	日本照明賞	[IR]	継続中	1982	一般社団法人	(一社) 照明学会	単独	
31	住宅建築賞	[PA]	継続中	1984	一般社団法人	(一社) 東京建築士会	単独	
32	奈良県景観調和デザイン賞	[PA]	継続中	1984	一般社団法人	(一社) 奈良県建築士会	単独	
33	日本建築学会北海道支部賞	[dual]	継続中	1984	一般社団法人	(一社) 日本建築学会北海道支部	単独	
34	都市公園コンクール	[PA]	継続中	1985	一般社団法人	(一社) 日本公園緑地協会	単独	

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
35	日本図書館協会建築賞	[PA]	継続中	1985	公益社団法人	(公社) 日本図書館協会	単独	
36	CLA 賞	[dual]	継続中	1985	一般社団法人	(一社) ランドスケープコンサルタンツ協会	単独	
37	京都賞	[IR]	継続中	1985	公益財団法人	(公財) 稲盛財団	単独	
38	住まいのリフォームコンクール	[PA]	継続中	1985	公益財団法人	(公財) 住みリフォーム・紛争処理支援センター	単独	
39	空気調和・衛生工学会振興賞	[IR]	継続中	1986	公益社団法人	(公社) 空気調和・衛生工学会	単独	
40	日本建築学会文化賞	[IR]	継続中	1986	一般社団法人	(一社) 日本建築学会	単独	1986年：学会創立100周年を記念して制定 → 1988年：常設の賞とする
41	日本建築学会東海賞	[dual]	継続中	1986	一般社団法人	(一社) 日本建築学会東海支部	単独	
42	日本建築士会連合会賞	[PA]	継続中	1986	公益社団法人	(公社) 日本建築士会連合会	単独	
43	東京クリエイション大賞	[PA]	廃止・統合	1987	社団法人	(社) 東京ファッション協会	単独	
44	日本建築協会賞	[IR]	継続中	1987	一般社団法人	(一社) 日本建築協会	単独	その都度委員会を立ち上げ " 通常3-4年ペースで実施してきたが、マンパワーが必要な賞なので、最近では休止2017年に協会が100周年を迎えるにあたり、実施を検討中 "
45	公共建築賞	[PA]	継続中	1988	一般社団法人	(一社) 公共建築協会	単独	
46	池田賞	[IR]	廃止・統合	1988	一般社団法人	(一社) 電気設備学会	単独	
47	電気設備学会賞	[IR]	継続中	1988	一般社団法人	(一社) 電気設備学会	単独	
48	国際居住年記念賞	[IR]	継続中	1988	一般社団法人	(一社) 日本住宅協会	単独	
49	公立学校優良施設表彰	[PA]	継続中	1988	一般社団法人	(一社) 文教施設協会	単独	選考基準を再調整中、募集は次年度以降
50	高松宮殿下記念世界文化賞	[IR]	継続中	1988	公益財団法人	(公財) 日本美術協会	単独	
51	日経ニューオフィス賞	[PA]	継続中	1988	一般社団法人 民間企業	(一社) ニューオフィス推進協議会 + (株) 日本経済新聞社	共催	
52	篠原記念賞	[IR]	廃止・統合	1989	社団法人	(社) 空気調和・衛生工学会	単独	2004年(第16回)をもって終了。
53	照明学会論文賞	[IR]	継続中	1989	一般社団法人	(一社) 照明学会	単独	
54	JIA 新人賞	[PA]	継続中	1989	公益社団法人	(公社) 日本建築家協会	単独	
55	日本建築学会霞が関ビル記念賞	[IR]	廃止・統合	1989	社団法人	(社) 日本建築学会	単独	
56	日本建築学会奨励賞	[IR]	継続中	1989	一般社団法人	(一社) 日本建築学会	単独	
57	いしかわ緑のまち賞	[PA]	要確認	1989	社団法人 財団法人	(財) いしかわ緑のまち基金 + (社) 石川県造園緑化建設協会	共催	
58	北陸建築文化賞	[dual]	継続中	1990	一般社団法人	(一社) 日本建築学会北陸支部	単独	2014年度から北陸地域の建築文化に対する貢献を優先評価すべく、審査基準を明確化
59	JSCA 賞	[dual]	継続中	1990	一般社団法人	(一社) 日本建築構造技術者協会	単独	"2012年度に表彰規定が改訂1.作品部門と業績部門が設けられました。2.作品部門には従来の「作品」と「新人」の賞に「奨励」の賞が加わり、表彰対象が広がりました。3.業績部門には賞の区分はありませんが、表彰対象が広がりました。"
60	インテリアプランニングアワード	[PA]	継続中	1990	一般社団法人	(一社) 日本インテリアプランナー協会 (JIPA)	単独	(公財) 建築技術教育普及センターからの助成を受けて実施
61	BELCA 賞	[PA]	継続中	1991	公益社団法人	(公社) ロングライフビル推進協会	単独	
62	病院建築賞	[PA]	廃止・統合	1991	社団法人	(社) 日本医療福祉建築協会	単独	
63	関西建築家大賞	[dual]	継続中	1991	公益社団法人	(公社) 日本建築家協会近畿支部表彰委員会	単独	
64	AACA 賞・芦原義信賞	[PA]	継続中	1991	一般社団法人	(一社) 日本建築美術工芸協会	単独	2002年：新人賞としての芦原義信賞を新設
65	木造住宅コンクール	[PA]	改称	1991	一般社団法人	福島県建築士会	単独	2002年度より「ふくしま住宅コンクール」に改称
66	都市景観大賞「都市景観100選」	[PA]	改称	1991	公益財団法人	都市づくりパブリックデザインセンター	単独	2001年度より「美しいまちなみ賞」に改称
67	日本生活文化大賞	[PA]	統合	1991	一般財団法人	日本ファッション協会	単独	2004年度に「東京クリエイション大賞」と統合し、「日本クリエイション大賞」に改称

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
68	日本建築工学会賞	[dual]	継続中	1991	他(建築関連)	日本建築工学会	単独	"功績賞/論文賞/作品賞/技術賞/技術開発賞/技能賞/論文奨励賞以上7つの賞がある"
69	くすのき建築文化賞	[PA]	継続中	1992	一般社団法人	兵庫県建築士事務所協会	単独	第15回全国大会(兵庫県)から開催
70	長野県建築文化賞	[PA]	継続中	1993	一般社団法人	長野県建築士会	単独	2001年度、第10回以降、長野県建築士会会員以外にも応募が可能となる。
71	ステンレス協会賞	[PA]	継続中	1993	他(建築関連)	ステンレス協会	単独	第13回、2009年度までは毎年開催 → 第14回、2011年度以降は隔年開始
72	優良木造施設表彰	[PA]	継続中	1993	社団法人財団法人 民間企業	木材利用推進中央協議会	共催	共催団体は、何も東京都に本拠地を置く団体。
73	前田工学会賞	[IR]	継続中	1994	公益財団法人	前田記念工学振興財団	単独	
74	医療福祉建築賞	[PA]	継続中	1995	一般社団法人	日本医療福祉建築協会	単独	"1991年：病院建築賞 → 1995年：本賞へ改称 2011年の募集要項より「準賞」を新たに設ける"
75	日本建築学会作品選奨	[PA]	継続中	1995	一般社団法人	日本建築学会	単独	
76	日本計画行政学会会計画賞	[IR]	継続中	1995	他(建築関連)	日本計画行政学会	単独	
77	JIA 熊本住宅賞	[PA]	継続中	1997	公益社団法人	日本建築家協会九州支部	単独	熊本会(熊本県建築家の会)
78	ひろしま建築文化賞	[dual]	継続中	1997	一般社団法人	広島県建築士事務所協会	単独	第4回(2003年度)までは2年毎の開催、第5回(2006年度)以降は3年毎の開催
79	JIA25年賞	[PA]	継続中	1997	公益社団法人	日本建築家協会	単独	
80	外壁改装作品コンテスト	[PA]	継続中	1999	他(建築関連)	建築改装協会	単独	
81	DOCOMOMO Japan 100選	[PA]	継続中	1999	他(建築関連)	DOCOMOMO Japan	単独	1999年：20選の選定 → 2003年：100選の選定
82	建設技術開発賞	[IR]	改称	1999	一般財団法人	国土開発技術研究センター+ (財) 沿岸技術研究センター	共催	2001年度：国土技術開発賞に改称
83	土木学会選奨土木遺産	[PA]	継続中	2000	公益社団法人	土木学会	単独	
84	JIA 環境建築賞	[PA]	継続中	2000	公益社団法人	(公社) 日本建築家協会	単独	
85	日本免震構造協会賞	[dual]	継続中	2000	一般社団法人	日本免震構造協会	単独	
86	大林賞	[IR]	継続中	2000	公益財団法人	大林都市研究振興財団	単独	
87	空気調和・衛生工学会特別賞「十年賞」「リニューアル賞」	[IR]	継続中	2001	公益社団法人	空気調和・衛生工学会	単独	2013年より、建築設備を長期間にわたり健全に維持する運用管理技術ならびに更新改修技術の発展と振興を図る目的で、特に優秀な会員の業績に対して賞を贈って表彰
88	土木学会景観・デザイン委員会デザイン賞	[PA]	継続中	2001	公益社団法人	土木学会	単独	景観・デザイン委員会 通称：土木学会デザイン賞
89	ハウスアダプテーション・コンクール	[PA]	廃止	2001	一般財団法人	住宅総合研究財団	単独	"2006年度：第5回を最後に廃止 5回のコンクールをまとめ、岩波書店『自分らしく住むためのバリアフリーハウスアダプテーションの事例から』
90	都市景観大賞「美しいまちなみ賞」	[PA]	改称	2001	公益財団法人	都市づくりパブリックデザインセンター	単独	1991年度～2000年度：都市景観大賞「都市景観100選」 → 2001年度～2010年度：本賞 → 2011年度：都市景観大賞「都市空間部門」及び「景観教育・普及啓発部門」に改称
91	国土技術開発賞	[IR]	継続中	2001	一般財団法人	国土開発技術研究センター+ 沿岸技術研究センター	共催	後援：国土交通省 1999年：建設技術開発賞創設 → 2001年：改称
92	ふくしま住宅コンクール	[PA]	要確認	2002	社団法人	福島県建築士会	単独	木造住宅コンクール → 2002年：改称
93	屋上・壁面・特殊緑化技術コンクール	[PA]	継続中	2002	公益財団法人	都市緑化技術開発機構	単独	
94	ecobuild (エコビルド) 賞	[PA]	確認中	2002	他(建築関連)	エコビルド実行委員会	単独	"2008年以降の受賞作品に関する記述見つからず主催者が解散した可能性あり"

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考	
95	「まちなみ住宅」100選	[PA]	廃止	2003	社団法人	住宅月間中央イベント実行委員会	単独	住宅生産団体連合会内	"2003年度から3年間実施
96	照明デザイン賞	[PA]	継続中	2003	一般社団法人	照明学会	単独		
97	次代につなぐやまがた景観賞	[PA]	継続中	2003	社団法人	(社)山形経済同友会	単独		(1993年：美しい街並み賞 → 1993年度：やまがた景観デザイン賞 →) 2003年度：次代につなぐやまがた景観デザイン賞 → 2008年度：地域づくりのやまがた景観賞に改称
98	空気調和・衛生工学会功績賞	[IR]	継続中	2004	公益社団法人	空気調和・衛生工学会	単独		
99	日本建築学会中国支部「構造賞」	[IR]	継続中	2004	一般社団法人	日本建築学会中国支部	単独	<後援>日本建築構造技術者協会中国支部	
100	中国建築文化賞	[PA]	継続中	2004	一般社団法人	日本建築学会中国支部	単独	後援予定：日本建築家協会中国支部、日本建築構造技術者協会中国支部、建築士事務所協会(中国各県)、建築士会(中国各県)	第10回(2013年度)までの開催を確認
101	日本SC大賞	[PA]	継続中	2004	一般社団法人	日本ショッピングセンター協会	単独		"協会設立30周年を記念して2004年、「日本SC大賞」を創設2年に1度の開催"
102	日本クリエイション大賞	[dual]	継続中	2004	一般社団法人	日本ファッション協会	単独		1987年：東京クリエイション大賞創設 → 1991年：日本生活文化大賞創設 → 2004年：統合
103	木の建築賞	[dual]	継続中	2004	市民団体(NPO法人)	木の建築フォーラム事務局	単独		
104	日本建築家協会優秀建築選・日本建築家協会賞・日本建築大賞	[PA]	継続中	2005	公益社団法人	日本建築家協会	単独	「JIA日本建築大賞」事務局	2010年度：日本建築家協会優秀建築選選出作品数が、200選から100選に変更
105	関西建築家新人賞	[PA]	継続中	2005	公益社団法人	日本建築家協会近畿支部	単独		創設年が2006年度の可能性あり
106	日事連建築賞	[PA]	継続中	2005	一般社団法人	日本建築士事務所協会連合会	単独		建築士事務所全国大会建築作品表彰 → 2005年：名称変更
107	サステナブル建築賞	[PA]	継続中	2005	一般社団法人	建築環境・省エネルギー機構	単独		環境・省エネルギー建築賞/住宅賞 → 2005年より改称
108	JIA 東北住宅大賞	[PA]	継続中	2006	公益社団法人	日本建築家協会東北支部	単独		
109	国際居住年記念奨励賞	[IR]	継続中	2006	一般社団法人	日本住宅協会	単独		
110	エコ・ハウスコンテストいわて	[PA]	継続中	2006	他(建築関連)	エコ・ハウスコンテストいわて実行委員会	単独		"2006年度：いわて省エネ・新エネ住宅大賞 → エコ・ハウスコンテストいわてに改称平成18年度は民間の実行委員会と岩手県の共催で事業を継承しようとする機運が高まり、名称も、いわて省エネ・新エネ住宅大賞から「エコ・ハウスコンテストいわて」と改め、2006年4月1日から新組織で活動し、2012年で7年目を迎えます。"
111	建築九州賞		継続中	2007	公益社団法人 一般社団法人	"(一社)日本建築学会九州支部主催	共催	(公社)JIA九州支部、(公社)JIA沖縄支部、(一社)日本建築学会九州支部大分市所"	
112	改装作品コンテスト	[PA]	継続中	2007	他(建築関連)	建築改装協会	単独		2007年度：第1回、2011年度：第二回、以後毎年開催
113	JIA いしかわ建築大賞		継続中	2008	公益社団法人	(公社)日本建築家協会北陸支部石川地域会	単独		
114	JIA 中国建築大賞		継続中	2009	公益社団法人	(公社)日本建築家協会中国支部	単独		
115	ゴールデンキューブ賞		継続中	2010	公益社団法人	(公社)日本建築家協会東海支部	単独		
116	北海網機デザインアワード	[PA]	継続中	2010					
117	都市景観大賞「都市空間部門」及び「景観教育・普及啓発部門」	[dual]	継続中	2011	公益財団法人	都市づくりパブリックデザインセンター	単独		2011年度：都市景観大賞「美しいまちなみ賞」 → 本賞
118	JIA 東海住宅建築賞		継続中	2013	公益社団法人	(公社)日本建築家協会東海支部	単独		

番号	表彰制度の名称	区分	運営状況	設立年	運営団体の区分	運営団体	運営団体の部局等	備考
119	鉄道建築協会賞	[dual]	継続中	1956?	社団法人	(社) 鉄道建築協会	単独	
120	日本材料学会賞	[IR]	継続中	1966?	社団法人	(社) 日本材料学会	単独	
121	富山県建築賞	[PA]	継続中	1971?	社団法人	富山県建築賞協議会	共催	構成団体(社) 富山県建設業協会 (社) 富山県建築士会 (社) 富山県建築士事務所協会
122	日本コンクリート工学協会賞	[dual]	継続中	1975?	社団法人	(社) 日本コンクリート工学協会	単独	
123	建築士事務所全国大会建築作品表彰	[PA]	廃止・統合	1976?	社団法人	(社) 日本建築士事務所協会連合会	単独	
124	hiroba 作品賞	[PA]	継続中	1977?	社団法人	近畿建築士会協議会	共催	
125	三重県建築賞	[PA]	継続中	1982?	社団法人	(社) 三重県建設業協会	単独	
126	茨城建築文化賞	n/a	継続中	1987?	社団法人	(社) 茨城県建築士事務所協会	単独	
127	建築コンクール・ちば	[PA]	未確認	1987?	社団法人	(社) 千葉県建築士会	単独	
128	日本鋼構造協会業績表彰	[IR]	継続中	1995?	社団法人	(社) 日本鋼構造協会賞	単独	
129	日本アルミニウム協会賞	[dual]	継続中	1999?	社団法人	(社) 日本アルミニウム協会	単独	1999年：旧日本アルミニウム連盟と旧軽金属協会が統合、日本アルミニウム協会発足。
130	読者と選ぶ「建築と社会」賞	[dual]	継続中	2001?	社団法人	(社) 日本建築協会	単独	
131	環境・設備デザイン賞	[PA]	継続中	2002?	社団法人	(社) 建築設備総合協会	単独	
132	照明学会賞	[IR]	継続中		社団法人	(社) 照明学会	単独	
133	照明技術開発賞	[IR]	継続中		社団法人	(社) 照明学会	単独	
134	日本音響学会技術開発賞	[IR]	未確認		社団法人	(社) 日本音響学会	単独	
135	日本鉄鋼協会一般表彰・特別表彰	[IR]	継続中		社団法人	(社) 日本鉄鋼協会	単独	
136	溶接学会賞	[IR]	継続中		社団法人	(社) 溶接学会	単独	
137	日本木青連木材活用コンクール	[dual]	継続中	1997?	民間企業	日本木材青壮年団体連合会	共催	

注 「賞の区分」の各項目の意味は、下記の通り；[PA]: Program Awards (作品賞)、[IR]: Individual Recognitions (功労賞)、[dual]: [PA] & [IR] (複合賞)、n/a: 情報不足により不明。

## 終章

### 総合考察

#### Chapter 8 ; General Conclusion

本論は、スイス・ドイツ語圏における自治体主体の建築賞について、チューリッヒ市建築賞に着目して論を展開してきた。本章は、総合考察として、チューリッヒ市建築賞の理念と手法について考察し、スイスの建築賞の中でチューリッヒ市建築賞を位置付けるとともに、課題と展望をしてきた上で、我が国における市町村による優れた都市景観／空間の創造に向けた建築評価のあり方について言及する。

#### 第1節 各章のまとめ

序章では、本研究の背景、目的、方法について論述するとともに、主題に関する既往研究について概括し、本研究の位置づけを行なった。最後に研究の構成と用語の定義について示した。

第1章「スイスにおける建築賞の概要と戦後チューリッヒの建築関連行政の活動」では、まず、スイスにおける建築賞について、主催団体別（地方自治体、職能団体、財団）に建築賞の創設年や評価対象などの概要をまとめ、それぞれの特徴を整理した。その中で、スイス・ドイツ語圏で戦後から運営されている建築賞は、施主を表彰の主対象にするところに独自性が認められ、チューリッヒ市建築賞がその嚆矢として他の地方自治体の建築賞創設に影響を及ぼしていたことが明らかとなった。次に、市内の都市計画から建築設計に至る権限を有する Stadtbaumeister 制を採用していたチューリッヒ市の建築関連行政組織の変遷に着目し、各 Stadtbaumeister による都市政策の特徴や、1997年の組織改編によって創設された都市計画局の活動を、戦後のスイス建築界の動向と関連付けながら明らかにした。

第2章「チューリッヒ市建築賞における審査体制と受賞作品の特徴」では、同賞の審査体制、受賞作品の建築種別、広報の3点に着目し、同賞の運営手法の特徴について論じ、市の都市形成過程と審査体制、受賞作品の建築種別に密接な関係があることを明らかにした。

第3章「市参事会議事録と関連出版物から見るチューリッヒ市建築賞の基本理念・審査方針・評価基準の変遷と特徴」では、同賞が設計者ではなく施主（Bauherr）を表彰の主対象とすることを踏まえた上で、審査方針並びに評価基準に関わる4つのキーワード（Baugesinnung, städtebaulich, Stadtbild, Verständnis）を通して議事録の詳細を追うことで、65余年にわたる同賞の基本理念、審査方針、評価基準の変遷と特徴を明らかにした。なかでも、施主の建築に対する考え方を評価する姿勢が、最も重要な理念として同賞創設時から受け継がれていることが特徴であった。

第4章「チューリッヒ市建築賞受賞作品の空間構成」では、受賞作品全193件の現地調査と図面資

料の分析から、既存の地形を尊重しつつ、複数の建物で外部空間を囲んだり、開放したりする設計手法などが、建築種別に関わらず、評価されていることが明らかになった。集合住宅に関しては、住戸単位の関係性に注目することによって、1990年代以降は、外観は単純な矩形に見えても、内部空間の断面構成や共有空間に積極的な工夫を凝らした多様な住宅作品が選出されていることが明らかとなった。

第5章「スイス・ドイツ語圏におけるバーゼル建築賞の特徴」では、スイス・ドイツ語圏の自治体主体の建築賞の中でも、チューリッヒ市の次に創設年が早く、受賞作品数も多い、バーゼル建築賞を分析対象とし、同賞の理念、手法、広報、審査体制、審査方針、評価基準、受賞作品の建築種別の特徴をチューリッヒ市建築賞と比較することによって明らかにした。バーゼル建築賞は、チューリッヒ市建築賞と共通した理念や方針をとりつつ、建築批評家やエンジニアを含んだ審査体制をとることで、バーゼルの都市景観に寄与する建築・土木作品を選出してきたことが明らかとなった。さらに、建築デザインに先進性を求めるバーゼルと、歴史的な街並に対して保守的な設計アプローチをとるチューリッヒは都市形成の歴史や気質に違いがあり、それぞれが目指すべき都市像が異なるが、その中で、優れた建築を継続して評価し、蓄積させることによって、地域性の違いを持った建築文化の醸成に繋がっていることを示した。

第6章「チューリッヒ市建築賞と日本の建築賞の比較考察」では、我が国における地方自治体が主催する建築賞、景観賞の実態を、ホームページ上に公開されている資料から整理し、その特徴を明らかにした。さらに、都市計画課やまちづくり課による賞の多くが、建築物に対する評価から、イベント等のソフト面への評価へ移行している点を考慮すると、我が国における自治体主体の建築評価は、建築物への評価を通して今後の都市形成に活かしていくという意図が見られないことを指摘した。そうした我が国の建築評価の実態を踏まえた上で、チューリッヒ市建築賞が、建築・都市デザインの専門性を持った人物を任用し、建築評価を主体的に運営している点や、優れた都市景観形成の為に、優れた建築物を集積させることが重要であり、賞の創設から一貫してその姿勢を貫いている点を我が国の地方自治体でも展開可能であることを指摘した。

## 第2節 結論

以上より、本論の結論は以下の4点にまとめられる。

- 1) チューリッヒ市建築賞は、地方自治体が主体となって、施主を表彰の主対象とすることで、優れた都市景観・都市空間の創造に寄与している点で先導的な事例であること、
- 2) チューリッヒ市が、Stadtbaumeister 制から組織的な改編はあったものの、65余年にわたり、一貫して建築単体としてだけでなく、都市景観構成要素として建築を評価し続けてきたこと、
- 3) チューリッヒ市建築賞と同じ理念の基に創設されたスイス・ドイツ語圏の他州の建築賞では、都市形成の歴史や気質の違いが、審査員構成や受賞作品の建築種別に反映されていたこと、
- 4) 建築都市計画関連行政組織の体系が異なる我が国においても、自治体主体で建築賞を運営する際には、長期的な理念・目的を掲げて取り組む必要があること

建築賞は、専門団体が専門家に与える名誉賞の意味合いをもつものもあれば、本論で扱ってきたよ

うな、地方自治体が主体となって、優れた都市空間、都市景観の創造に向けて、創設した建築賞もある。後者の賞を継続的に続けていくのであれば、過去の受賞作品を辿ることで、その都市の都市形成史が理解できるはずであり、各回の審査記録を読み取ることで、各時代の優れた建築、都市景観とはいかなるものであるかを知る手だてとなるはずである。しかしながら、賞の仕組みを時代の潮流に合わせて闇雲に変更したり、過去の建築評価を引き継ぐことなく、単独で開催していると、創設時の理念が薄れ、建築賞そのものの価値が無くなってしまふといえる。実際に、10年近く運営された後、市民から不要であるという評価を下され、廃止になった建築賞も存在することが明らかになった。こうした実態を踏まえ、地方自治体が主体となって建築賞を運営する際には、長期的な理念を掲げて取り組む必要があるといえる。

チューリッヒ市建築賞は、1945年の創設時から、優れた都市景観形成を主題として、その構成要素である建築物を評価することの重要性を表明してきた。この建築評価を継続的に遂行する上で、市当局に建築・都市デザインの専門職を持った人物が継続的に任用されてきたことが、自治体主体で建築賞を運営し、評価することが可能になったものである。こうした専門性を持った人物を我が国の地方自治体でも積極的に登用することで、地方分権が叫ばれる現代日本において、自治体独自の建築評価が実現できるといえよう。その際、優れた建築物の建設には、しっかりとした理念、考え方を持つ施主の存在が必要不可欠であり、当該自治体が積極的に施主に対する評価を継続することで、徐々に市民の建築・都市空間に対する理解も深まっていくはずである。さらに、こうした建築評価を実際の都市景観／都市空間の創造に結びつけるためには、継続した取り組みが必要であることは言うまでもなく、5年10年といった短い期間ではなく、何十年先にも堪え得る理念を掲げ、各回の審査結果をしっかりと文章としても記録し、後世の職員にも活かせるようなアーカイヴの確立も、実際の受賞作品の蓄積とともに必要であろう。チューリッヒ市では、賞創設時の議事録に加えて、現在までの審査記録を言語化された評価の蓄積として、将来的な都市空間のあり方を議論する際に用いている。これからの建築評価には、言語化された評価の蓄積と、空間化された評価の蓄積が両輪となることによって、地方自治体独自の都市景観の創造に寄与するといえよう。

以上のように、戦後チューリッヒ市が継続してきた建築評価の理念・手法は、我が国の地方自治体が主体となる都市景観／都市空間の創造に有用な知見を与えるものである。

### 第3節 今後の課題

本論で明らかにしたように、チューリッヒ市は、戦後から様々な社会状況の変化に対応させつつ、建築評価を継続してきた。近年の受賞作品を見ても、現代のチューリッヒ市が掲げる都市居住のあり方を窺うことができる。そうした中で、市中心部は、2000年代以降、国外からの資本の流入によって、これまで市が経験してきた速度を遥かに凌ぐ速度で大規模再開発が進んでいる。最後の審査が行なわれた2011年以降でも、次々と高層建築が建ち並び、都市景観は大きく変容している中で、これまでの建築評価の理念や手法が、今後の都市形成の状況にどのように対応するのかを注視する必要がある。さらに、初期の受賞作品は解体・改修の時期に差し掛かっており、建築賞を継続していく中で、過去の受賞作品をどのように再評価しているかについても注目していく必要がある。



## 資料篇

チューリッヒ市建築賞受賞作品の外観写真

チューリッヒ市参事会議事録における  
チューリッヒ市建築賞創設と各回の審査記録の原文



## 資料篇

### チューリッヒ市建築賞受賞作品の外観写真

#### Appendix; Photographs of the Award-Winning Works of Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich

本資料は、筆者が2008年10月および2011年8月から2014年6月にかけて、筆者が撮影したチューリッヒ市建築賞受賞作品全193件の写真である。2015年10月時点で現存していない作品については、作品No.のあとに「現存せず」と記した。



No. 1 (第1回) (現存せず)  
作品名：Überbauung am Katzenbach  
施主：Baugenossenschaft Glattal  
設計者：A.F. Sauter & A. Dirler  
竣工年：1946



No. 2 (第1回)  
作品名：Arbeitersiedlung im Riedacker <Sunnige Hof>  
施主：Siedlungsgenossenschaft Sunnige Hof  
設計者：Karl Kndig  
竣工年：1943



No. 3 (第1回) (現存せず)  
作品名：Engenpark  
施主：Immobilien-gesellschaft Turicasa AG  
設計者：William Dunkel  
竣工年：1943



No. 4 (第1回)  
作品名：Geschäftshaus Pelikan  
施主：D. Lanfranconi, W. Fuchs  
設計者：Andre E. Bosshard, Walter Niehus  
竣工年：1947



No. 5 (第1回)  
 作品名：Bellaria-Park  
 施主：Baugesellschaft Zürich AG  
 設計者：O. Becherer & W. Frey  
 竣工年：1945



No. 6 (第1回)  
 作品名：<Sonnengarten-Goldacker>  
 施主：Baugenossenschaft Sonnengarten  
 設計者：Karl Egender, Wilhelm Müller  
 竣工年：1949



No. 7 (第1回)  
 作品名：Bleicherhof  
 施主：Immobilien AG Bleicherweg  
 設計者：Otto Rudolf Salvisberg  
 竣工年：1940



No. 8 (第1回)  
 作品名：Rentenanstalt  
 施主：Schweizerische Lebensversicherungs- und Rentenanstalt  
 設計者：Gebrüder Pfister  
 竣工年：1939



No. 9 (第1回)  
 作品名：Kolonie Wasserwerk  
 施主：Baugenossenschaft des Eidgenössischen Personals  
 設計者：Aeschlimann & Baumgartner  
 竣工年：1947



No. 10 (第2回)  
 作品名：Siedlung <In der Ey>  
 施主：Baugenossenschaft Schheim  
 設計者：Anton & Karl Higi, Rudolf Pfister  
 竣工年：1949



No. 11 (第2回)  
 作品名：<Lux-Hof>  
 施主：Immobilien-gesellschaft Schimmeihof AG  
 設計者：O. Becherer & W. Frey, R. Schneider  
 竣工年：1948



No. 12 (第2回)  
 作品名：Überbauung <Im Herrlig>  
 施主：Allgemeine Baugenossenschaft Zürich  
 設計者：Aeschlimann & Baumgartner  
 竣工年：1948



No. 13 (第2回)  
 作品名：Siedlung Staudenbl  
 施主：Gewerkschaftliche Wohn- und Baugenossenschaft  
 設計者：A.F. Sauter & A. Dirler  
 竣工年：1950



No. 14 (第2回)  
 作品名：Siedlung am Burriweg  
 施主：Genossenschaft der Baufreunde  
 設計者：Hans Hubacher & Alfred Mrset  
 竣工年：1949



No. 15 (第3回)  
 作品名：First Church of Christ Scientist  
 施主：First Church of Christ Scientist  
 設計者：Adolf Kellermler, Hans hofmann  
 竣工年：1938



No. 16 (第3回)  
 作品名：Kolonien am Glattbogen  
 施主：Arbeiter-Siedlungsgenossenschaft Zürich  
 設計者：A.F. Sauter & A. Dirler  
 竣工年：1952



No. 17 (第3回)  
 作品名：Alterssiedlung <Espenhof>  
 施主：Stiftung Wohnungsfürsorge für betagte Einwohner der Stadt Zürich  
 設計者：Ernst Egli, Edy Rud. Knupfer  
 竣工年：1952



No. 18 (第3回)  
 作品名：Mehrfamilienhäuser  
 施主：Jakob Maurer  
 設計者：J. & J. Maurer  
 竣工年：1954



No. 19 (第3回)  
 作品名：Wohnbauten Hohenbühl  
 施主：Erben D. Schindler-Huber  
 設計者：Max E. Haefeli, Werner M. Moser & Rudolf Steiger  
 竣工年：1953



No. 20 (第3回)  
 作品名：Geschäftshaus Talgarten  
 施主：Immobilien Besitz AG Zürich  
 設計者：Roland Rohn  
 竣工年：1952



No. 21 (第3回)  
 作品名：Kirchgemeindehaus Schwamendingen  
 施主：Reformierte Kirchgemeinde Schwamendingen  
 設計者：Peter Germann, E. Regger  
 竣工年：1954



No. 22 (第3回)  
 作品名：Siedlung In der Au  
 施主：Stiftung Wohnungsfürsorge für kinderreiche Familien der Stadt Zürich  
 設計者：Cramer & Jaray & Paillard, Baerlocher & Unger  
 竣工年：1953



No. 23 (第3回)  
 作品名：Überbauung Mühlezelg  
 施主：Siedlungsgenossenschaft Sonnige Hof  
 設計者：A.F. Sauter & A. Dirler  
 竣工年：1950



No. 24 (第3回)  
 作品名：Kirche Altstetten  
 施主：Reformierte Kirchgemeinde Altstetten  
 設計者：Werner M. Moser  
 竣工年：1942



No. 25 (第3回)  
 作品名：Sihlgarten  
 施主：Weltwoche-Verlag, Karl von Schumacher & Co.  
 設計者：Karl Egender  
 竣工年：1948



No. 26 (第3回)  
 作品名：Liegenchaften Letten  
 施主：Baugenossenschaft berufstätiger Frauen  
 設計者：Karl Egender, Wilhelm Müller  
 竣工年：1952



No. 27 (第3回)  
 作品名：Siedlung Köchenrüti  
 施主：Baugenossenschaft Schönau  
 設計者：Arbeitsgemeinschaft Fritz Jenny, Werner Stücheli  
 竣工年：1949



No. 28 (第3回)  
 作品名：Wohnbau mit Läden am Talwiesenplatz  
 施主：Frau Kath. Koradi, Hch. Koradi jun.  
 設計者：Werner Stücheli  
 竣工年：1951



No. 29 (第3回)  
 作品名：Büro- und Wohlfahrtshaus  
 施主：Maschinenfabrik Escher Wyss, Aktiengesellschaft  
 設計者：Robert Landolt  
 竣工年：1949



No. 30 (第3回)  
 作品名：Geschäftshaus Langstrasse  
 施主：Edwin Schönbucher  
 設計者：Willy Dtwyler, Julius A. Burger  
 竣工年：1952



No. 31 (第3回)  
 作品名：<Zum Einhornli>  
 施主：G. & P. Marteloso und Robert Seyffer  
 設計者：Philipp Bridel  
 竣工年：1952



No. 32 (第4回)  
 作品名：Markus-Kirche Seebach  
 施主：Reformierte Kirchgemeinde Seebach  
 設計者：Albert H. Steiner  
 竣工年：1948



No. 33 (第4回)  
 作品名：Freibad Oberer Letten  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Ernst F. und Elsa Burckhardt-Blum  
 竣工年：1952



No. 34 (第4回) (現存せず)  
 作品名：Autoreparaturwerkstätte  
 施主：AMAG Automobil- und Motoren-AG  
 設計者：Hans Hochuli, Edward J. Cukierman  
 竣工年：1956



No. 35 (第4回)  
 作品名：Schulhausanlage <Untermoos>  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Eduard del Fabro  
 竣工年：1955



No. 36 (第4回)  
 作品名：Tramwartehalle  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Jacques Schader  
 竣工年：1956



No. 37 (第4回)  
 作品名：Schulhausanlage <Chriesiweg>  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Cramer & Jaray & Paillard  
 竣工年：1956



No. 38 (第4回)  
 作品名：Gewerbehser Eichstrasse  
 施主：Ernst Göhner AG  
 設計者：Werner Frey  
 竣工年：1956



No. 39 (第4回)  
 作品名：Geschtshaus Waltisbühl  
 施主：Erbengemeinschaft Anton Waltisbühl  
 設計者：Rudolf Zürcher  
 竣工年：1957



No. 40 (第4回)  
 作品名：Verwaltungsgebde  
 施主：Aluminium Industrie AG  
 設計者：Hans hofmann, Casetti & Rohrer  
 竣工年：1957



No. 41 (第4回)  
 作品名：<Zur Bastei>  
 施主：AG Heinrich Hatt-Haller  
 設計者：Werner Stücheli  
 竣工年：1955



No. 42 (第4回)  
 作品名：Überbauung <In der Zelg>  
 施主：Karl Ochsner-Krämers Erben  
 設計者：Eberhard Eidenbenz  
 竣工年：1956



No. 43 (第4回)  
 作品名：Einfamilienhaus Zollikerstrasse  
 施主：Hans und Annemarie Hubacher-Constam  
 設計者：Hans und Annemarie Hubacher-Constam  
 竣工年：1955



No. 44 (第4回)  
 作品名：Schulhausanlage <Luchswiesen>  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Max P. Kollbrunner  
 竣工年：1957



No. 45 (第5回)  
 作品名：Freibad und Primarschule Auhof  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Ernst Gisel, R. Lyrer  
 竣工年：1958



No. 46 (第5回)  
 作品名：Doppelfamilienhaus Sillerwies  
 施主：Nr. 7: Philipp Bridel; Nr. 9: Max Ziegler, in Firma Schucan & Ziegler  
 設計者：Max Ziegler  
 竣工年：1957



No. 47 (第5回)  
 作品名：Doppelhaus, 4. Etappe  
 施主：Baugenossenschaft Kleeweid  
 設計者：A. Hnni & S. Menn, H. Leuthold  
 竣工年：1959



No. 48 (第5回)  
 作品名：Clubhaus  
 施主：Schweizerische Rückversicherungsgesellschaft Zürich  
 設計者：Hans Hofmann, Res Wahlen, Casetti & Rohrer  
 竣工年：1958



No. 49 (第5回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus Bhtoldstrasse  
 施主：Dr. Eugen Curti  
 設計者：Ed. Neuenschwander  
 竣工年：1961



No. 50 (第5回)  
 作品名：Geschtschau Textor  
 施主：Jacob Textor  
 設計者：Ernst Schindler  
 竣工年：1958



No. 51 (第5回)  
 作品名：Saal- und Geschäftshaus Lindenplatz  
 施主：Initiativ-Genossenschaft Lindenplatz Altstetten  
 設計者：Werner Stücheli  
 竣工年：1958



No. 52 (第5回)  
 作品名：Familienheim-Genossenschaft Zürich, Bauetappe 19  
 施主：Familienheim-Genossenschaft Zürich  
 設計者：Aeschlimann & Baumgartner  
 竣工年：1960



No. 53 (第 5 回)  
 作品名：Kirchgemeindehaus Hottingen  
 施主：Kirchgemeinde Hottingen  
 設計者：Karl Flatz  
 竣工年：1959



No. 54 (第 5 回)  
 作品名：Einfamilienhaus Leutert  
 施主：Jakob Leutert  
 設計者：Ernst Gisel  
 竣工年：1960



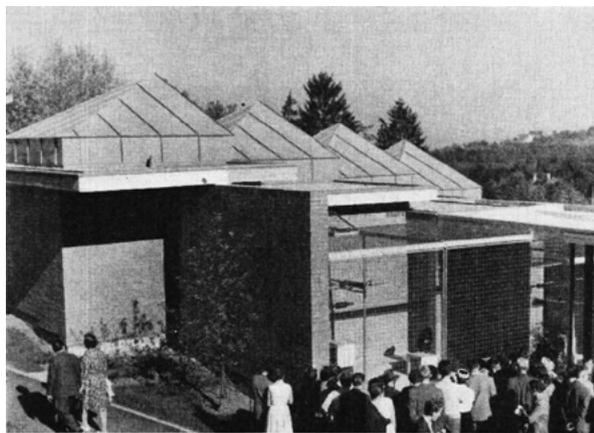
No. 55 (第 5 回)  
 作品名：Alterssiedlung Waldgarten  
 施主：Stiftung Wohnungsfürsorge für betagte Einwohner der Stadt Zürich  
 設計者：Hchler & Pfeiffer  
 竣工年：1959



No. 56 (第 5 回)  
 作品名：Bosshardhaus  
 施主：H.U. Bosshard  
 設計者：Ralph Peters, M. Schucan & Max Ziegler  
 竣工年：1958



No. 57 (第 5 回)  
 作品名：Geschtshaus Üetlibergstrasse  
 施主：Tages-Anzeiger für Stadt und Kanton Zürich  
 設計者：Werner Stcheli, J. de Stoutz, W. Adam  
 竣工年：1960



No. 58 (第 5 回)  
 作品名：Affenhaus  
 施主：Genossenschaft Zoologischer Garten Zürich  
 設計者：Max E. Haefeli, Rudolf Steiger, Werner M. Moser  
 竣工年：1959



No. 59 (第5回)  
 作品名：Sportanlage Letzigrund  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：William Dunkel  
 竣工年：1958



No. 60 (第5回)  
 作品名：Einfamilienhaus Wirzenweid  
 施主：Dr. H. Müller  
 設計者：Bruno Giacometti  
 竣工年：1957



No. 61 (第5回)  
 作品名：Jugendheim <Erika>  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Werner Frey  
 竣工年：1963



No. 62 (第5回)  
 作品名：Terrassenhaus  
 施主：Georges Boesch  
 設計者：Claude Paillard, Peter Leemann  
 竣工年：1960



No. 63 (第5回)  
 作品名：Überbauung Hirzenbach  
 施主：Baugenossenschaft der Baufreunde Zürich ほか  
 設計者：Adolf Wasserfallen  
 竣工年：1961



No. 64 (第5回)  
 作品名：Kantonsschule Freudenberg  
 施主：Baudirektion des Kantons Zürich  
 設計者：Jacques Schader, Werner Blaser, E. Kgi  
 竣工年：1959



No. 65 (第6回)  
 作品名：Verwaltungs- und Betriebsgebäude Herdern  
 施主：Genossenschaft Migros, Zürich  
 設計者：H. Vogelsanger, E. Schwarzenbach  
 竣工年：1964



No. 66 (第6回)  
 作品名：Veterinärmedizinische Fakultät der Universität Zürich  
 und Kantonales Tierspital  
 施主：Baudirektion des Kantons Zürich  
 設計者：Werner Stcheli, Jakob Frei  
 竣工年：1963



No. 67 (第6回)  
 作品名：Erweiterungsbau  
 施主：Tages-Anzeiger für Stadt und Kanton Zürich AG  
 設計者：Werner Stcheli, Jakob Frei  
 竣工年：1962



No. 68 (第6回)  
 作品名：Kirche Saathen  
 施主：Reformierte Kirchgemeinde Zürich-Schwamendingen  
 設計者：Fred Cramer, Werner Frey  
 竣工年：1964



No. 69 (第6回)  
 作品名：Gewerbehäus Hardturmstrasse  
 施主：Ernst Göhner AG, Zürich, Brauerei Eichhof, Luezen  
 設計者：Werner Frey, Albert Braendle  
 竣工年：1963



No. 70 (第6回)  
 作品名：Werkschulhaus Hardau  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Otto Glaus & Rudolf Lienhard  
 竣工年：1965



No. 71 (第6回)  
作品名：Einfamilienhaus mit Atelier  
施主：Edwin Schoch  
設計者：Edwin Schoch  
竣工年：1964



No. 72 (第6回)  
作品名：Post- und Telefongebäude Hirslanden  
施主：Direktion der Eidgenössischen Bauten, Bern  
設計者：Paul W. Tittel  
竣工年：1965



No. 73 (第6回)  
作品名：Einfamilienhaus Wasserstrasse  
施主：Lorenz Moser  
設計者：Lorenz Moser  
竣工年：1964



No. 74 (第6回)  
作品名：Schulhaus Riedhof  
施主：Stadt Zürich  
設計者：Alfred Roth  
竣工年：1963



No. 75 (第6回)  
作品名：Erweiterungsbau Schulhaus  
施主：Stadt Zürich  
設計者：Jacques Schader, Werner Blaser  
竣工年：1964



No. 76 (第6回)  
作品名：<In der Ey>  
施主：Werner Keller  
設計者：Rolf Limburg & Walter Schindler  
竣工年：1961



No. 77 (第6回)  
 作品名：<La Residence>  
 施主：Hansjörg Seitzmeir & Co.  
 設計者：Rudolf Klemenz & Fritz P. Flubacher  
 竣工年：1964



No. 78 (第7回)  
 作品名：Afrikahaus  
 施主：Genossenschaft Zoologischer Garten Zürich  
 設計者：Rudolf Zürcher  
 竣工年：1965



No. 79 (第7回)  
 作品名：Überbauung <Zum Bauhof>  
 施主：Dr. H. und Frau I. Reimann-Bächtold  
 設計者：Werner Gantenbein, H. Bruderer  
 竣工年：1967



No. 80 (第7回)  
 作品名：Kasino Zürichhorn  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Roland Rohn  
 竣工年：1964



No. 81 (第7回)  
 作品名：Andreaskirche im Heiligfeld  
 施主：Reformierte Kirchgemeinde Sihlfeld  
 設計者：Jakob Padrutt  
 竣工年：1964



No. 82 (第7回)  
 作品名：Freizeitanlage Heuried  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Hans Litz, Fritz Schwarz  
 竣工年：1964



No. 83 (第7回)  
 作品名：<Kantorei>  
 施主：Verein Verbindungshaus Zürcher Singstudenten  
 設計者：W. Behles, Karl Knell  
 竣工年：1968



No. 84 (第7回)  
 作品名：Bally-Haus  
 施主：Immobilien AG Eterna  
 設計者：Max E. Haefeli, Werner M. Moser & Rudolf Steiger  
 竣工年：1967



No. 85 (第7回)  
 作品名：Jugendherberge  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Ernst Gisel, Gerhard Erdt  
 竣工年：1966



No. 86 (第7回)  
 作品名：La Maison d'Homme, Centre Le Corbusier  
 施主：Heidi Weber  
 設計者：Le Corbusier  
 竣工年：1967



No. 87 (第7回)  
 作品名：Geschäftshaus Schmelzbergstrasse  
 施主：Verband Schweiz. Schreinermeister und Mobelfabrikanten  
 設計者：Werner Stcheli, Th. Huggenberger  
 竣工年：1967



No. 88 (第7回)  
 作品名：Wohnsiedlung Friesenberg  
 施主：Stiftung Wohnungsfürsorge für kinderreiche Familien der Stadt Zürich  
 設計者：Felix Rebmann, Maria Anderegg  
 竣工年：1965



No. 89 (第8回)  
 作品名：Wohnsiedlung Glaubten III  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Robert & Bernhard Winkler, Karl Hintermann  
 竣工年：1969



No. 90 (第8回)  
 作品名：Stadtspital Triemli II und Maternit  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Rud. Joss, Helmut Rauder  
 竣工年：1970



No. 91 (第8回)  
 作品名：Bahnhof Altstetten  
 施主：Schweizerische Bundesbahnen, SBB Kreis III, Zürich  
 設計者：Section Hochbau, SBB Kreis III, Zürich  
 竣工年：1968



No. 92 (第8回)  
 作品名：Mensa der Universität Zürich  
 施主：Baudirektion des Kantons Zürich  
 設計者：Werner Frey, Franz M. Richner  
 竣工年：1969



No. 93 (第8回)  
 作品名：Töchterschule IV  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Paul W. Tittel  
 竣工年：1966



No. 94 (第8回)  
 作品名：Geschäftshaus Patria  
 施主：Patria Schweizerische Lebensversicherungs-Gesellschaft Basel  
 設計者：Werner Frey, F. M. Fornasier  
 竣工年：1969



No. 95 (第8回)  
 作品名：Wohnsiedlung Unteraffoltern  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：G. P. Dubois, Helmuth Schnaudt  
 竣工年：1970



No. 96 (第8回)  
 作品名：Geschäfts- und Quartierzentrum Witikon  
 施主：K. Ochsner-Krämers Erben  
 設計者：E. Eidenbenz, R. Bosshard, B. Meyer  
 竣工年：1970



No. 97 (第8回)  
 作品名：Geschäftshaus Mythenquai  
 施主：Schweizerische Rückversicherungs-Gesellschaft  
 設計者：Werner Stcheli, Th. Hugenberg, Ernst Stcheli  
 竣工年：1969



No. 98 (第8回)  
 作品名：Geschäftshaus <Les Ambassadeurs>  
 施主：Les Ambassadeurs AG  
 設計者：Paul Steger, Jürg Flickiger  
 竣工年：1971



No. 99 (第8回)  
 作品名：Geschäftshaus SUIISA  
 施主：SUIISA, Gesellschaft der Urheber und Verleger  
 設計者：Werner Gantenbein  
 竣工年：1968



No. 100 (第9回)  
 作品名：Geschäftshaus Modissa  
 施主：Modissa AG  
 設計者：Werner Gantenbein  
 竣工年：1975



No. 101 (第9回)  
 作品名：Hallenbad Altstetten  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Bolliger, Honger, Dubach  
 竣工年：1973



No. 102 (第9回)  
 作品名：Überbauung Kolonie Wiedikon  
 施主：Allgemeine Baugenossenschaft Zürich  
 設計者：Jakob Frei  
 竣工年：1975



No. 103 (第9回)  
 作品名：Schulhaus und Freizeitanlage Loogarten  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Joachim Naef, Ernst Studer  
 竣工年：1975



No. 104 (第9回)  
 作品名：Jugendsiedlung Heizenholz  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Wolfgang Stger  
 竣工年：1973



No. 105 (第9回)  
 作品名：Primarschulhaus Sihlweid  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：H. Müller & P. Nietispach  
 竣工年：1975



No. 106 (第9回)  
 作品名：Pfarreizentrum Maria-Hilf  
 施主：Römisch Katholische Kirchgemeinde St. Franziskus  
 設計者：Walter Moser  
 竣工年：1974



No. 107 (第9回)  
 作品名：Kirchliches Zentrum St. Katharina Affoltern  
 施主：Römisch Katholische Kirchengemeinde St. Katharina  
 設計者：E. O. Fischer, Wilh. Fischer  
 竣工年：1974



No. 108 (第9回)  
 作品名：Überbauung Wehrenbachhalde  
 施主：Erbengemeinschaft Prof. Werner M. Moser, vertreten durch T. Styczynski  
 設計者：Lorenz Moser  
 竣工年：1975



No. 109 (第9回)  
 作品名：Atelierhaus  
 施主：Ernst Gisel  
 設計者：Ernst Gisel  
 竣工年：1973



No. 110 (第9回)  
 作品名：Kirchgemeindehaus Aussersihl  
 施主：Reformierte Kirchengemeinde Aussersihl  
 設計者：Jacques Schader  
 竣工年：1974



No. 111 (第9回)  
 作品名：Erweiterungsbau Kunsthau  
 施主：Stiftung Zürcher Kunsthaus  
 設計者：Erwin Miller, Heinrich Blumer  
 竣工年：1976



No. 112 (第9回)  
 作品名：Laubenganghäuser  
 施主：Eisenbahner-Baugenossenschaft <Dreispietz Zürich-HB>  
 設計者：Robert & Bernhard Winkler  
 竣工年：1973



No. 113 (第9回)  
 作品名：Gewebeschemulhaus  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Rudolf & Esther Guyer  
 竣工年：1972



No. 114 (第9回)  
 作品名：Wohnsiedlung Heuried  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Claude Paillard, Peter Leemann  
 竣工年：1975



No. 115 (第10回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus Wettingerwies  
 施主：Marianne Gisel  
 設計者：Ernst Gisel  
 竣工年：1978



No. 116 (第10回)  
 作品名：Fernbetriebszentrum 3, Zürich-Herdern  
 施主：Generaldirektion PTT, vertreten durch die Hochbau-  
 abteilung, Bern  
 設計者：Theo Hotz  
 竣工年：1978



No. 117 (第10回)  
 作品名：Hallenbad Oerlikon  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Max P. Kollbrunner  
 竣工年：1983



No. 118 (第10回)  
 作品名：Botanischer Garten und Instituts-Neubauten der Universität Zürich  
 施主：Direktion der öffentlichen Bauten des Kantons Zürich  
 設計者：Hans & Annemarie Hubacher  
 竣工年：1976



No. 119 (第10回)  
 作品名：Universität Zürich-Irchel  
 施主：Direktion der öffentlichen Bauten des Kantons Zürich  
 設計者：Max Ziegler, D. Stefanowic, E. Vogt  
 竣工年：1978



No. 120 (第10回)  
 作品名：Alterswohnheim <Grünhalde>  
 施主：Verein für Alters- und Pflegeheime Zürich-Seebach  
 設計者：Grninger & Theus  
 竣工年：1977



No. 121 (第10回)  
 作品名：Wohnanlage Dolderpark  
 施主：Erbengemeinschaft Schinz  
 設計者：Marcel Thoenen, Bauleitung Hurter & Thoma  
 竣工年：1979



No. 122 (第10回)  
 作品名：Schulhaus Grünau  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Walter Moser, R. Bnziger  
 竣工年：1977



No. 123 (第10回)  
 作品名：Wohnüberbauung Gutstrasse  
 施主：Siedlungsgenossenschaft Eigengrund  
 設計者：Kuhn & Stahel Architekten  
 竣工年：1979



No. 124 (第11回)  
 作品名：Überbauung Manessehof  
 施主：Familienheim-Genossenschaft Zürich  
 設計者：ARCOOP.  
 竣工年：1984



No. 125 (第11回)  
 作品名：Kirchliches Zentrum <Suteracher>  
 施主：Evang.-reformierte Kirchgemeinde  
 設計者：Benedikt Huber, Alfred Trachsel  
 竣工年：1982



No. 126 (第11回)  
 作品名：Stadelhofer Passage  
 施主：Spaltenstein AG Immobilien  
 設計者：Ernst Gisel, Christian Zweifel, Martin Sphler  
 竣工年：1983



No. 127 (第11回)  
 作品名：Einfamilienhaus Krähbühlweg  
 施主：Dr. Erwin P. Nigg  
 設計者：Egon Dachtler, Erwin P. Nigg  
 竣工年：1983



No. 128 (第11回)  
 作品名：Im Altried  
 施主：Baukonsortium Altried  
 設計者：Willi Egli, Othmar Brugger  
 竣工年：1982



No. 129 (第11回)  
 作品名：Krankenhaus Witikon  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Frank Krayenbhl, Mitarbeit Teepavillon  
 竣工年：1984



No. 130 (第11回)  
 作品名：Druckereigebäude Bubenberg  
 施主：Tages Anzeiger AG  
 設計者：Sücheli & Huggenberger Architekten  
 竣工年：1983



No. 131 (第 11 回)  
 作品名：Reiheneinfamilienhäuser Kienastewiesweg  
 施主：W. und S. Hürler-Vogt  
 設計者：Benno & Jacqueline Fosco-Oppenheim, Klaus Vogt  
 竣工年：1983



No. 132 (第 11 回)  
 作品名：Wohnüberbauung Winzerhalde  
 施主：Matthys Immobilien AG, Siedlungsgenossenschaft Eigengrund Zürich  
 設計者：Fischer Architekten  
 竣工年：1982



No. 133 (第 11 回)  
 作品名：Wohn- und Bürohaus Keltenstrasse  
 施主：Claude Paillard  
 設計者：Claude Paillard, Robert Bass  
 竣工年：1981



No. 134 (第 11 回)  
 作品名：Bürohaus Münzplatz  
 施主：Bank J. Bär & Co. AG  
 設計者：Gebäude-Ausseres  
 竣工年：1984



No. 135 (第 11 回)  
 作品名：Lehrlingsausbildungszentrum BBC, Werk Oerlikon  
 施主：BBC Aktiengesellschaft Brown, Boveri & Cie.  
 設計者：Jacques Schader  
 竣工年：1982



No. 136 (第 12 回)  
 作品名：Zeichensäle  
 施主：Schulleitung der ETH Zürich, Amt für Bundesbauten, Baukreis IV  
 設計者：Benedikt Huber, Atelier 3, R. Bolli & P. Gerber  
 竣工年：1987



No. 137 (第12回)  
 作品名：Werkbundsiedlung Neubühl  
 施主：Genossenschaft Neubühl  
 設計者：ARCOOP  
 竣工年：1987



No. 138 (第12回)  
 作品名：Wohn- und Ateliergebäude REZ  
 施主：Aktiengesellschaft REZ Häuser, Hauptaktionärin  
 Katharina Züst-Felle  
 設計者：Benno & Jacqueline Fosco-Oppenheim  
 竣工年：1986



No. 139 (第12回)  
 作品名：Aufnahmegebäude Bahnhof Stadelhofen  
 施主：Schweizerische Bundesbahnen, SBB Kreis III, Zürich  
 設計者：Arnold Amsler  
 竣工年：1989



No. 140 (第12回)  
 作品名：Erweiterung Bahnhof Stadelhofen  
 施主：Schweizerische Bundesbahnen, SBB Kreis III, Zürich  
 設計者：Arnold Amsler, Santiago Calatrava Valls SA  
 竣工年：1990



No. 141 (第12回)  
 作品名：Villa Meyer  
 施主：Dr. Franz und Pia Meyer-Federspiel  
 設計者：Dolf Schnebli, Tobias Ammann, P. Kolliker  
 竣工年：1986



No. 142 (第12回)  
 作品名：Wohnhaus Josefstrasse  
 施主：Erbengemeinschaft Peter Müller, Bruno und Frank Gloor  
 設計者：Flank Gloor  
 竣工年：1988



No. 143 (第12回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus <Reinachergüetli>  
 施主：Käthi und Jean Robert-Durrer  
 設計者：Ruedi Zai, Robert Hupertz  
 竣工年：1987



No. 144 (第12回)  
 作品名：Geschäftshaus Marti  
 施主：Marti Unternehmungen AG  
 設計者：Theo Hotz, Franz Romero  
 竣工年：1987



No. 145 (第12回)  
 作品名：Hörsaaltrakt Universitätsspital Zürich  
 施主：Hochbauamt des Kantons Zürich  
 設計者：Joachim Naef, Ernst Studer  
 竣工年：1990



No. 146 (第12回)  
 作品名：Rotachhäuser  
 施主：Ruggero Tropeano, Cristina Tropeano-Pfister, Germaine Stamm  
 設計者：Ruggero Tropeano, Cristina Pfister, Christian Stamm  
 竣工年：1990



No. 147 (第13回)  
 作品名：Geschäftshaus Apollo  
 施主：Schweizerische Bankgesellschaft  
 設計者：Theo Hotz, Peter Berger  
 竣工年：1991



No. 148 (第13回)  
 作品名：S-Bahnhof Museumstrasse und unterirdische Ladenpassagen  
 施主：Schweizerische Bundesbahnen, Kreisdirektion III  
 設計者：Trix & Robert Haussmann  
 竣工年：1990



No. 149 (第13回)  
 作品名：Technopark Zürich  
 施主：Technopark Immobilien AG  
 設計者：I + B Architekten  
 竣工年：1993



No. 150 (第13回)  
 作品名：Villa Bleuler  
 施主：Schweizerisches Institut für Kunstwissenschaft  
 設計者：ARCOOP  
 竣工年：1993



No. 151 (第13回)  
 作品名：Konferenzgebäude Grünenhof  
 施主：Schweizerische Bankgesellschaft  
 設計者：Theo Hotz  
 竣工年：1991



No. 152 (第13回)  
 作品名：Boutique Issey Miyake  
 施主：Erica Ouie AG  
 設計者：Isa Stürm & Urs Wolf  
 竣工年：1991



No. 153 (第13回)  
 作品名：Überbauung Brahmshof  
 施主：Evangelischer Frauenbund Zürich  
 設計者：Kuhn Fischer Partner Architekten  
 竣工年：1991



No. 154 (第14回)  
 作品名：Umnutzung Waschanstalt Wollishofen  
 施主：Lienhardt & Partner Privatbank AG  
 設計者：Angelil, Graham, Pfenninger, Scholl Architecture  
 竣工年：2001



No. 155 (第 14 回)  
 作品名：Oerliker Park  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：POP Planungsgemeinschaft Oerliker Park:  
 竣工年：2001



No. 156 (第 14 回)  
 作品名：Bürogebäude SVA  
 施主：Sozialversicherungsanstalt des Kantons Zürich  
 設計者：Isa Strm & Urs Wolf  
 竣工年：1998



No. 157 (第 14 回)  
 作品名：Wohnüberbauung Selnau  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Martin Spühler, David Munz  
 竣工年：1995



No. 158 (第 14 回)  
 作品名：Wohnüberbauung Im Föhrenhain  
 施主：Credit Suisse Real Estate Fund Siat  
 設計者：A. D. P. Architekten  
 竣工年：2000



No. 159 (第 14 回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus Kurfirstenstrasse  
 施主：Stockwerkeigentümer-gemeinschaft "Kurfirst"  
 設計者：Jakob Steib, Simon Thurnherr  
 竣工年：2000



No. 160 (第 14 回)  
 作品名：Zwei Häuser Krattenturmstrasse  
 施主：Bühlmann-Eschmann  
 設計者：Annette Gigon & Mike Guyer  
 竣工年：1998



No. 161 (第14回)  
 作品名: Haus in der Hub  
 施主: Stockwerkeigentümer-gemeinschaft "Hubacht"  
 設計者: Morger & Degelo, Andreas Derrer, Matthias Kleiber  
 竣工年: 1998



No. 162 (第14回)  
 作品名: Mehrfamilienhaus Bäckerstrasse  
 施主: Iwan und Manuela Wirth-Hauser  
 設計者: Theo Hotz, Jakob Hotz  
 竣工年: 2000



No. 163 (第14回)  
 作品名: Umbau und Aufstockung Geschäftshaus Hohlstrasse  
 施主: Halvetia Patria Versicherungen  
 設計者: Romeo & Schaeffle Architekten  
 竣工年: 2001



No. 164 (第14回)  
 作品名: Umbau Bürogebäude Susenbergstrasse  
 施主: Mutschler Immobilien AG  
 設計者: Patrick Gmür Architekten  
 竣工年: 2001



No. 165 (第14回)  
 作品名: Pneushop - Art Exchange  
 施主: Christian Schaller  
 設計者: Camenzind Grfensteiner, Susanne Zenker  
 竣工年: 2002



No. 166 (第14回)  
 作品名: Schulhaus Ahorn  
 施主: Stadt Zürich  
 設計者: Patrick Gmür Architekten  
 竣工年: 2002



No. 167 (第 14 回)  
 作品名：Heilpädagogische Schule Zürich  
 施主：Stadt Zürich  
 設計者：Barbara Neff, Bettina Neumann  
 竣工年：2000



No. 168 (第 15 回)  
 作品名：Wohnüberbauung Hagenbuchrain  
 施主：Baugenossenschaft Sonnengarten, Zürich  
 設計者：Bnzli & Courvoisier Architekten  
 竣工年：2004



No. 169 (第 15 回)  
 作品名：Wohnüberbauung Brombeerweg  
 施主：Familienheim-Genossenschaft Zürich  
 設計者：EM2N  
 竣工年：2003



No. 170 (第 15 回)  
 作品名：Wohnüberbauung Pflegi-Areal  
 施主：Stiftung Diakoniewerk Neumünster - Schweizerische  
 Pflegerinnenschule, Zürich  
 設計者：Annette Gigon & Mike Guyer  
 竣工年：2002



No. 171 (第 15 回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus Forsterstrasse  
 施主：Gisela Kerez  
 設計者：Christian Kerez, A. Meiler  
 竣工年：2003



No. 172 (第 15 回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus am Fuss des Üetlibergs  
 施主：Andreas Fuhrmann, Gabrielle Hächler, Balz Roth, Pipilotti Rist  
 設計者：Andreas Fuhrmann, Gabrielle Hächler  
 竣工年：2004



No. 173 (第15回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus Altstetterstrasse  
 施主：Pensionskasse Käppeli Unternehmungen, Wohlen  
 設計者：Guignard & Saner  
 竣工年：2003



No. 174 (第15回)  
 作品名：Wohn- und Geschäftshaus Hohlstrasse  
 施主：Stiftung PWG, Zürich  
 設計者：Peter Märkli  
 竣工年：2005



No. 175 (第15回)  
 作品名：<Greulich> Hotel, Restaurant, Bar, Wohnungen  
 施主：Dr. Thomas B. Brunner, Zürich  
 設計者：Romeo & Schaeffle Architekten  
 竣工年：2003



No. 176 (第15回)  
 作品名：Park Hyatt Zürich  
 施主：Hyatt International EAME LTD., Lausanne  
 設計者：Marcel Meili, Markus Peter, Zeno Vogel  
 竣工年：2004



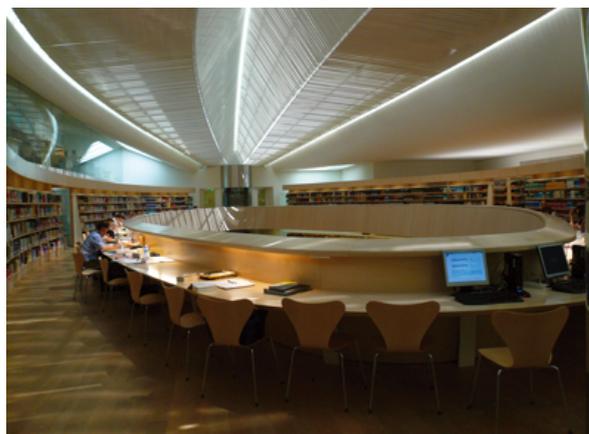
No. 177 (第15回)  
 作品名：Fachhochschule Sihlhof  
 施主：KV Schweiz, SKV Immobilien AG, Zürich  
 設計者：Giuliani. Honger Architekten  
 竣工年：2003



No. 178 (第15回)  
 作品名：Erweiterung und Sanierung Schulanlage Mattenhof  
 施主：Stadt Zürich, Hochbaudepartement  
 設計者：B. E. R. G. Architekten  
 竣工年：2003



No. 179 (第15回)  
 作品名：IBM Schweiz  
 施主：Allreal Generalunternehmung AG, Zürich  
 設計者：Max Dudler, M. van Kleeef  
 竣工年：2004



No. 180 (第15回)  
 作品名：Bibliothekseinbau und Aufstockung  
 施主：Baudirektion des Kantons Zürich  
 設計者：Santiago Calatrava Valls SA  
 竣工年：2004



No. 181 (第15回)  
 作品名：Pavillon am Hafen Riesbach  
 施主：Stadt Zürich, Hochbaudepartement  
 設計者：Andreas Fuhrmann, Gabrielle Hchler  
 竣工年：2004



No. 182 (第15回)  
 作品名：MFO Park  
 施主：Grün Stadt Zürich  
 設計者：Planergemeinschaft MFO Park  
 竣工年：2002



No. 183 (第16回)  
 作品名：Wohnüberbauung Aspholz Nord  
 施主：BVK Personalvorsorge des Kantons Zürich  
 設計者：pool Architekten  
 竣工年：2007



No. 184 (第16回)  
 作品名：ABZ Siedlung Wolfswinkel  
 施主：Allgemeine Baugenossenschaft Zürich  
 設計者：Egli Rohr Partner  
 竣工年：2007



No. 185 (第16回)  
 作品名：Mehrfamilienhaus Rondo  
 施主：Rondo-Bau GmbH  
 設計者：Graber Pulver Architekten  
 竣工年：2007



No. 186 (第16回)  
 作品名：Wohnsiedlung Werdwies  
 施主：Amt für Hochbauten und Liegenschaftenverwaltung  
 設計者：Adrian Streich Architekten  
 竣工年：2007



No. 187 (第16回)  
 作品名：Seniorenresidenz Spirgarten  
 施主：Atlas Stiftung  
 設計者：Miller & Maranta  
 竣工年：2006



No. 188 (第16回)  
 作品名：Wohn- und Geschäftshaus Selnaustrasse  
 施主：Einfache Gesellschaft Selnau  
 設計者：PARK Architekten  
 竣工年：2009



No. 189 (第16回)  
 作品名：Gesamt-sanierung SIA Haus  
 施主：SIA Haus AG  
 設計者：Romero & Schaeffe Architekten  
 竣工年：2008



No. 190 (第16回)  
 作品名：Ringelreigen  
 施主：Stadt Zürich, Amt für Hochbauten  
 設計者：Baumann Roserens Architekten  
 竣工年：2006



No. 191 (第 16 回)  
作品名：Im Viadukt  
施主：Stiftuna PWG  
設計者：EM2N  
竣工年：2010



No. 192 (第 16 回)  
作品名：Museum Rietberg  
施主：Stadt Zürich, Amt für Hochbauten  
設計者：ARGE Grazioli Krischanitz GmbH  
竣工年：2006



No. 193 (第 16 回)  
作品名：Schulhaus Leutschenbach  
施主：Stadt Zürich, Amt für Hochbauten  
設計者：Christian Kerez  
竣工年：2009



## 資料篇

### チューリッヒ市参事会議事録における チューリッヒ市建築賞創設と各回の審査記録の原文

Appendix; the Minutes of the City of Zurich regarding the Jury Records of  
*Auszeichnung für gute Bauten der Stadt Zürich*

本資料は、チューリッヒ市公文書館（Das Stadtarchiv Zürich）所蔵の『チューリッヒ市参事会議事録要約』のうち、1945年のチューリッヒ市建築賞創設に関するものと、第1～16回（1947～2011年）の計17回の議事録の原文である。本論の第3章でこの議事録を基礎史料として分析を行なった。

・チューリッヒ市建築賞創設時の議事録（1945年10月12日）

2023. Schaffung eines Preises der Stadt Zürich für gute Bauten.

Die überragende Bedeutung, welche die Erstellung architektonisch guter und eine anständige Baugesinnung aufweisender Bauten für das Stadtbild Zürichs besitzt, ließ im Kreise der hiesigen Architekten und bei den Behörden, die sich für die städtebauliche Weiterentwicklung der Stadt verantwortlich fühlen, den Wunsch wach werden, im Sinne der Förderung guten Bauens einen „Preis der Stadt Zürich für gute Bauten“ zu schaffen. Die Erweiterung des Literatur, Musik, Malerei und Bildhauerei bot insbesondere dem Vorstande der Ostgruppe Zürich des Bundes Schweizerischer Architekten Veranlassung, zusammen mit dem Vorstande des Bauamtes II und dem Stadtbaumeister beim Stadtpräsidenten vorzusprechen, um die Schaffung eines solchen Preises anzuregen.

Nicht nur bei den zuständigen Behörden, sondern in der gesamten Bevölkerung ist das Verständnis für eine gute bauliche Gestaltung der Stadt in starkem Maße gewachsen. Dieses Verständnis gilt es zu fördern. Das Gesicht der Stadt wird auf Generationen hinaus von den baulichen Leistungen bestimmt.

Ohne in irgendeiner Weise gegen die Förderung von Malerei, Literatur, Musik und Bildhauerei Stellung nehmen zu wollen, ist doch darauf hinzuweisen, daß eine Baute, die eine anständige Baugesinnung bekundet, ihrer stets sichtbaren und dauernden Gegenwart wegen, die Allgemeinheit in starkem Maße berührt. Neben Weiterentwicklung der Stadt besorgt zu sein, besteht eine weitere Möglichkeit, im Kampfe gegen eine lediglich spekulative Ausnützung die anständige Baugesinnung zu fördern, nämlich die Auszeichnung von architektonisch guten Bauwerken. Anders als beim Kunstpreis, bei dem Höchstleistungen der Malerei, der Bildhauerei, der Musik und der Literatur durch Verleihung von Preisen geehrt werden, soll durch den „Preis für gute Bauten“ die sich in einer Baute offenbarende Baugesinnung, die sich der Verantwortlichkeit der Gegenwart und der Zukunft gegenüber bewußt ist, gefördert und geehrt werden. Der Schöpfer eines Werkes der Malerei, der Bildhauerei, der Literatur oder der Musik ist auf sich selbst gestellt; er schafft seine Werke normalerweise aus eigener Initiative oder auch aus Auftrag. Der Schöpfer eines guten Bauwerkes hingegen ist weitgehend auf die Baugesinnung seines Auftraggebers, des Bauherrn, angewiesen. Durch Maßhalten in den Forderungen

hinsichtlich der baulichen Ausnützung seines Baugrundstückes durch verständnisvolles Eingehen auf die Ansichten seines verantwortungsbewußten Architekten ermöglicht es der Bauherr, ein gutes Bauwerk zu schaffen. Diese Baugesinnung soll von den verantwortlichen Behörden auf Grund der Vorschläge einer zu bildenden Kommission geehrt werden. Durch eine solche Anerkennung soll der Bauherr in seinem Verantwortungsbewußtsein der Allgemeinheit gegenüber gestärkt werden. Er wird angeregt, sein Bauvorhaben nicht nur unter dem Gesichtswinkel seiner persönlichen Interessen zu betrachten, sondern er wird der architektonischen Gestaltung und der Einfügung seines Baues in die Umgebung im Sinne der Vorschriften zum Schutze des Stadt- und Landschaftsbildes vom 18. Februar 1925 vermehrte Beachtung schenken. Er wird dementsprechend auch den Fachmann wählen, der die nötigen fachlichen Grundlagen besitzt und der sich ebenfalls seiner Verantwortung gegenüber der Allgemeinheit bewußt ist. Die Auszeichnung des Bauherrn kann bestehen in

1. einer Urkunde mit öffentlicher Erwähnung;
2. einer Plakette in Form einer farbigen Keramik (Zürcher-wappen mit Wappentieren), die am betreffenden Haus angebracht wird;
3. einem Geschenk in Form eines Gemäldes, einer Plastik, einer Graphik, eines kunstgewerblichen Gegenstandes oder ausnahmsweise eines Geldpreises.

Neben der Auszeichnung des Bauherrn soll der Stadtrat auch die Möglichkeit erhalten, den Architekten, der ja weitgehend am guten Gelingen eines Bauwerkes mit beteiligt ist, zu ehren. Eine solche Ehrung kann durch eine Urkunde geschehen.

Zur Prämiiierung sind folgende architektonische Werke vorgesehen: Wohnbauten (Einfamilien- und Mehrfamilienhäuser), Siedlungen und Genossenschaftsbauten, Bureau- und Geschäftsbauten, Gewerbe- und Industriebauten, Tiefbauten, gesellschaftliche und kirchliche Bauten, Schulhäuser u. s. w. Dabei sollen nur Bauten privater und genossenschaftlicher Initiative mit Preisen ausgezeichnet werden. Für öffentliche Bauten käme nur eine Auszeichnung des Architekten durch eine Urkunde in Frage.

Zur Auszeichnung von etwa 10 bis 12 verschiedenen Bauten und Bautengruppen, die alle zwei Jahre zu erfolgen hätte, ist eine Jury zu bestellen, bestehend aus:

- Drei Vertretern der Stadt;
- Einem Vertreter der Eidgenössische Technischen Hochschule (Bauschule) und
- Drei Architekten (wobei auswärtige Architekten herangezogen werden können). Allenfalls kann auch ein Ingenieur zugezogen werden.

Die Jury, die ehrenamtlich zu arbeiten hat, ist jeweils entsprechend der Amtsdauer der Behörden für eine Periode von vier Jahren zu bestellen; sämtliche Unterlagen, Photographien, Schreibeitern u. s. w. sind von der Stadt zu übernehmen.

Zur Beurteilung sollen die Arbeiten der zwei bis drei vorangegangenen Jahre gelangen, wobei aber auch rückblickend Arbeiten früherer Jahre ausgezeichnet werden können. Nicht nur Neubauten, sondern auch Umbauten und Renovationen sollen mit Preisen ausgezeichnet werden.

Ein Betrag von Fr. 10,000, der je alle zwei Jahre einzusetzen ist, wird für die Durchführung der Veranstaltung und die Ausrichtung der Preise ausreichen. Die Höhe des Betrages steht in einem angemessenen Verhältnis zur Förderung, die die andern Kunstarten genießen.

Da der Preis erstmals im Jahre 1946 zur Verteilung gelangen soll, ist der Stadtpräsident zu ermächtigen, nach Zustimmung des Gemeinderates zur Schaffung des „Preises der Stadt Zürich für gute Bauten“ den erforderlichen Kredit von Fr. 10,000 in den Voranschlag für das 1946 aufzunehmen. Die Ausgabe geht zu Lasten eines neuen Titels D257a, Ausrichtung von Preisen für gute Bauten.

Die Vorbereitung der Geschäfte und der Sitzungen wird zweckmäßiger dem Bauamt II übertragen; die eigentliche

Preisübergabe soll dagegen durch den Stadtpräsidenten erfolgen, der deshalb auch als Vorsitzender der Jury amten wird.

Das Baukollegium, das gemäß Artikel 49 der Gemeindeordnung den Bauämtern I und II zur Begutachtung wichtiger Baufragen beigegeben ist, hat der Schaffung des Preises nach eingehender Beratung zugestimmt.

Auf den im Einvernehmen mit dem Vorstände des Bauamtes II gestellten Antrag des Stadtpräsidenten beschließt der Stadtrat:

1. Der Schaffung eines „Preises der Stadt Zürich für gute Bauten“ wird unter dem Vorbehalt der Zustimmung des Gemeinderates grundsätzlich zugestimmt.
2. Der Stadtpräsident wird eingeladen, den erforderlichen Kredit von Fr. 10,000 unter der neuen Konto-Nr. D257a, Ausrichtung von Preisen für gute Bauten, in den Voranschlag für das Jahr 1946 aufzunehmen und dem Gemeinderate seinerzeit einen entsprechenden Antrag auf Schaffung eines „Preises der Stadt Zürich für gute Bauten“ zu unterbreiten.
3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, Vorschläge für die zu bildende Jury aufzustellen und dem Stadtrate zur Genehmigung vorzulegen.
4. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes I und II, das Hochbauamt und den Bund Schweizer Architekten, Ostgruppe Zürich (Obmann Architekt A. Gradmann, Höggerstraße 148).

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 1 回議事録 (1947 年 12 月 19 日)

<1> 2808. Verleihung von Auszeichnungen der Stadt Zürich für gute Bauten. In der Sitzung vom 12. Februar 1947 stimmte der Gemeinderat der vom Stadtrat beantragten Verleihung von Auszeichnungen der Stadt Zürich für gute Bauten, die alle zwei Jahre, erstmals im Jahre 1947, ausgerichtet werden, zu. Für die Deckung der Kosten wird jedes zweite Jahr ein Kredit von Fr. 10,000 bewilligt, erstmals im Jahre 1947 auf Konto-Nr. D 257 a. Mit Beschlüssen vom 7. März und 25. April 1947 (Protokollnummern 551 und 969) bestellte der Stadtrat die Jury für die Verleihung der Auszeichnungen aus folgenden Mitgliedern: Stadtpräsident als Vorsitzender, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister, Architekt Professor Dr. H. Hofmann als Vertreter der Eidgenössischen Technischen Hochschule und den Architekten H. Leuzinger, W. M. Moser und J. Schütz. Nach einer Reihe eingehender Besichtigungen und Besprechungen legt die Jury ihre Anträge dem Stadtrat vor. Sie schlägt vor, in diesem Jahre den Siedlungsbau unter Beschränkung auf größere zusammenhängende Ueberbauungen und den Geschäftshausbau der letzten Jahre in Betracht zu ziehen, in der Meinung, daß sich spätere Auszeichnungen auch auf den freistehenden Einfamilienhausbau, Kirchen, Renovationen und andere Bauten erstrecken sollen. Den Ausführungen in der Weisung an den Gemeinderat entsprechend sollen gelegentlich auch früher erstellte Bauten einer Prüfung unterzogen werden. Die Jury teilt mit, daß sie die Schulhausneubauten, bei denen die Stadt selbst Bauherrin ist, für dieses Mal außer Betracht gelassen habe. Auch von der Prämiiierung von Bauten, die durch im Preisgericht mitwirkende Architekten erstellt wurden, wurde abgesehen. Die Jury schlägt vor, den Bauherren und Architekten der für die Auszeichnung vorgesehenen Bauten eine Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und dem Bauherrn überdies eine Plakette (Zürcher Wappen mit Wappentieren), die am betreffenden Hause angebracht werden soll, zu verleihen. Nach der Auffassung der Jury soll jedoch auf die Uebergabe eines Geschenkes in Form eines Gemäldes, einer Plastik, einer Graphik, eines kunstgewerblichen Gegenstandes oder eines Geldpreises - wie dies nach den Ausführungen in der Weisung an den Gemeinderat zulässig wäre - abgesehen werden.

Plakette und Urkunde werden, sobald die ausführungsbereifen Entwürfe vorliegen, dem Stadtrat zur Genehmigung unterbreitet. Da die Aushändigung der Urkunden und Plaketten infolge der langen Lieferfristen, dieses Jahr nicht mehr möglich sein wird, ist den mit einer Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren durch den Stadtrat vor der Veröffentlichung in der Presse eine entsprechende schriftliche Mitteilung zukommen zu lassen.

Auf den Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschließt der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 aufgeführten Bauherren und Architekten als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Plakette.

2. An die Tagespresse, die Redaktion "Das Werk", die Schweizerischen Bauzeitung, den Verlag Baublatt A.-G. und an die mit Auszeichnungen bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

In Würdigung der Tatsache, daß architektonisch gute und von einer verantwortungsbewußten Baugesinnung zeugende Bauten für das Stadtbild von überragender Bedeutung sind und daß es gilt, das Interesse und das Verständnis für eine gute Stadtgestaltung zu fördern, hat der Gemeinderat, einem Antrage des Stadtrates stattgebend, in seiner Sitzung vom 12. Februar 1947 der Verleihung von Auszeichnungen der Stadt Zürich für gute Bauten zugestimmt. Für die Deckung der Kosten wird jedes zweite Jahr ein Kredit von Fr. 10,000 bewilligt, der erstmals im Jahre 1947 beansprucht werden soll.

In der Folge hat der Stadtrat die Jury bestellt, der die Aufgabe obliegt, die für die Verleihung von Auszeichnungen an Bauherren und Architekten in Frage kommenden Bauten zu prüfen und dem Stadtrate Antrag zu stellen. Die Jury, bestehend aus dem Stadtpräsidenten als Vorsitzendem, Stadtrat Hch. Oetiker, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister A. H. Steiner, Professor Dr. h. c. Hans Hofmann als Vertreter der Eidgenössischen Technischen Hochschule und den Architekten Hans Leuzinger, Werner M. Moser und Josef Schütz, hat gestützt auf eingehende Prüfungen und Besichtigungen dem Stadtrat ihre Anträge unterbreitet. Der Anregung, der Jury, in diesem Jahre vorwiegend den Mehrfamilienwohnhausbau unter Beschränkung auf größere, zusammenhängende Ueberbauungen und den Geschäftshausbau der letzten Jahre in Betracht zu ziehen, in der Meinung, daß spätere Auszeichnungen sich auch auf den freistehenden Einfamilienhausbau, Kirchen, Renovationen und andere Bauten erstrecken sollen, hat der Stadtrat zugestimmt. Den Bestimmungen entsprechend sollen künftig auch Bauten früherer Jahre einer Prüfung unterzogen werden. Von der Auszeichnung werden grundsätzlich die Schulhausbauten, bei denen die Stadt selbst Bauherrin ist, ausgenommen, und selbstverständlich mußte auch von der Prämiiierung von Bauten, die durch im Preisgericht mitwirkende Architekten erstellt wurden, abgesehen werden.

Unter Zugrundelegung, des Berichtes der Jury hat der Stadtrat in seiner Sitzung vom 19. Dezember 1947 die Auszeichnung folgender guter Bauten beschlossen:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung; alle Auszeichnungen sind gleichwertig.

Den Bauherren wird eine Urkunde und eine Plakette (Zürcher-wappen mit Wappentieren), die am betreffenden Hause angebracht wird, verliehen. Die vorstehend genannten Architekten erhalten eine Urkunde.

Der Zuschrift an die Architekten und Bauherren wird noch folgender Satz beigefügt:

Infolge der langen Lieferfristen für die Urkunden und Plaketten ist es leider nicht möglich, diese noch im laufenden Jahre auszuhändigen. Dies wird aber sobald als möglich erfolgen.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, das Hochbauamt mit der Anbringung der Plaketten zu beauftragen. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen und Plaketten sind der Konto-Nr. D 257 a zu belasten.

4. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, den Vorstand des Bauamtes II, das Hochbauamt, das Hochbauinspektorat und durch Zuschrift an die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

· 第 2 回議事録 (1950 年 3 月 3 日)

<2> 473. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Mit Beschluß Nr. 2808/1947 hat der Stadtrat an neun Bauherren von Siedlungsbauten und Geschäftshäusern und den betreffenden Architekten als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel verliehen. Diese Verleihung gründete sich auf den Gemeinderatsbeschluß vom 12. Februar 1947, wonach alle 2 Jahre, erstmals im Jahre 1947, solche Auszeichnungen verliehen werden können. Im Dezember 1949 tagte das aus dem Stadtpräsidenten, dem Vorstand des Bauamtes II, dem Stadtbaumeister und den Architekten Professor Dr. H. Hofmann, H. Leuzinger, W. N. Moser und J. Schütz bestehende Preisgericht, um dem Stadtrat die im Jahre 1949 fällig gewesene Auszeichnung von weiteren guten Bauten vorschlagen zu können. Auch in diesem Jahre wurden zur Hauptsache größere zusammenhängende Siedlungsbauten und einige neu erstellte Geschäftshäuser besichtigt, wobei wiederum die von der Stadt als Bauherrin erstellten Gebäude und solche, die von Mitgliedern des Preisgerichtes stammen, von der Begutachtung ausgenommen wurden. Ausgenommen wurden auch Siedlungen, die noch nicht fertig erstellt waren und deren Beurteilung (Fehlen der Umgebungsarbeiten usw.) noch nicht abschließend möglich war. Nach Auffassung des Preisgerichtes hat nunmehr die vorwiegende Berücksichtigung von größeren Wohnsiedlungen ihr Ende gefunden. Es wird Aufgabe der im Jahre 1951 tagenden Jury sein, zu bestimmen, welche Art Bauten dannzumal in Betracht gezogen werden soll.

Für das Preisgericht waren bei der Auswahl der dem Stadtrat zu unterbreitenden Vorschläge die in Ziffer 2 des Beschlusses aufgeführten Ueberlegungen maßgebend. Es ist auch anlässlich der diesmaligen Verleihung der Auszeichnungen der Auffassung, daß es bei der Verleihung einer Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und der Uebergabe einer am betreffenden Gebäude anzubringenden Bronzetafel (Zürcher Wappen mit Wappentieren) sein Bewenden haben und daß auf weitere Geschenke (Gemälde, Graphiken, Plastiken oder Geldpreis) verzichtet werden sollte.

Nachdem das Preisgericht nunmehr zweimal getagt hat, äußern die darin tätigen frei erwerbenden Architekten den Wunsch, von ihrem Amte entbunden zu werden. Sie sind der Auffassung, daß sich eine neue Jury aus auswärtigen Architekten zusammensetzen sollte.

Auf den Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschließt der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 aufgeführten Bauherren und Architekten als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel.

2. An die Tagespresse, die Redaktion <Das Werk>, die Schweizerische Bauzeitung; den Verlag-Baublatt A.-G. und die Schweizerische Bauzeitung, den Verlag Baublatt A.-G. und die mit Auszeichnungen bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Der Gemeinderat hat im Frühjahr 1947 einem Antrag des Stadtrates zugestimmt, wonach die Bauherren und Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten durch eine öffentlich zu erwähnende Urkunde und eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel ausgezeichnet werden sollen. Diese Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten soll - wie schon damals in der Presse dargelegt wurde - in Würdigung der Tatsache erfolgen, dass architektonisch gute und von einer verantwortungsbewußten Baugesinnung zeugende Bauten für das Stadtbild von überragender Bedeutung sind und daß es gilt, das Interesse und das Verständnis für eine gute Stadtgestaltung zu fördern. Die erstmalige, im Jahre 1947 vorgenommene Auszeichnung einzelner solcher Bauten hat denn auch seinerzeit in der Bevölkerung erhebliche Beachtung und im allgemeinen Zustimmung gefunden.

Das vom Stadtrat eingesetzte Preisgericht hat nunmehr im Dezember 1949 in einer zweiten Aktion eine Reihe von weiteren Bauten einer eingehenden Besichtigung und Prüfung in architektonischer und städtebaulicher Hinsicht unterzogen und

ersterem seine Vorschläge zur Beschlussfassung unterbreitet. Das Preisgericht, in dem der verstorbene Stadtpräsident Dr. A. Lüchinger durch den amtierenden Stadtpräsidenten Dr. E. Landolt ersetzt werden mußte, arbeitete im übrigen in der gleichen Zusammensetzung wie anlässlich der ersten Aktion: Stadtpräsident Dr. E. Landolt als Vorsitzender, Stadtrat Hch. Oetiker, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister A. H. Steiner, die Architekten Professor Dr. Hans Hofmann, Hans Leuzinger, Werner M. Moser und Josef Schütz.

Bei der Auswahl der dem Stadtrat zu unterbreitenden Vorschläge waren für das Preisgericht folgende Ueberlegungen wegleitend:

Schon anlässlich der erstmaligen Begutachtung konnten die Mitglieder des Preisgerichtes feststellen, daß vor allem die zusammenhängende, einem einheitlichen Gedanken entspringende Ueberbauung mit größeren Wohnsiedlungen im Laufe der letzten Jahre weitere beachtliche Fortschritte gemacht hat, die zu einer städtebaulich erfreulichen Weiterentwicklung der Stadt Zürich führten. Um die Idee, gute Bauten auszuzeichnen, nicht verflachen zu lassen, mußte die Jury jedoch einen strengeren Maßstab anlegen und sich auf wenige Objekte, deren Auszeichnung besonders begründet und bei deren Wahl das Preisgericht einstimmig war, beschränken. Maßgebend waren eine städtebaulich einwandfreie Situierung und eine gute architektonische Gestaltung. Es werden dem Stadtrat auch nur Bauten vorgeschlagen, bei denen nicht Schwächen der architektonischen Haltung durch spielerische Einzelheiten verdeckt werden mußten. Die Zusammenlegung einzelner Grundstücke zu größeren überbaubaren Flächen, die - besonders ermöglicht durch die interne Anwendung der Bestimmungen der neuen Bauordnung - einen Wechsel zwischen hohen und niedrigen Bauten, eine Gliederung der einzelnen Reihen und Schaffung größerer Freiflächen ermöglicht, ist in städtebaulicher Hinsicht zu begrüßen. Die neue Bauordnung hat sich, trotzdem sie leider noch nicht in Kraft gesetzt werden konnte, schon heute in städtebaulicher Hinsicht günstig ausgewirkt. Die starr wirkende lange Aneinanderreihung gleich hoher Bauten wich einer lebendigeren Gestaltung, ohne daß dabei Bauland verschwendet worden wäre. Es liess sich anlässlich der Besichtigung feststellen, daß bei fast allen Siedlungen der letzten Jahre die umgebenden Freiflächen landschaftlich und gärtnerisch mit großer Sorgfalt gestaltet sind. Bei einigen Siedlungsbauten lassen sich Ansätze zu einer erfreulichen Weiterentwicklung in der Planung der Grundrisse und des architektonischen Ausdruckes erkennen.

Aus diesen Ueberlegungen schlägt das Preisgericht dem Stadtrat zur Hauptsache die Auszeichnung größerer zusammenhängender Ueberbauungen vor.

Auch in diesem Jahre wurden Bauten, die von der Stadt selbst erstellt wurden, ausser Betracht gelassen. Ausgenommen von der Jurierung waren auch Bauwerke, die durch im Preisgericht amtierende Architekten erstellt wurden.

Unter Zugrundelegung des Berichtes der Jury hat der Stadtrat am 3. März 1950 die Auszeichnung folgender fünf Bauten beschlossen:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung; alle Auszeichnungen sind gleichwertig.

Den Bauherren wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Zürcher Wappen mit Wappentieren), die am betreffenden Hause angebracht wird, verliehen. Die Architekten erhalten eine Urkunde.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, das Hochbauamt mit der Anbringung der Bronzetafeln zu beauftragen. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen sind der Konto Nr. J 218, Hochbauamt, Preis für gute Bauten, zu belasten.

4. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes II, das Hochbauamt, das Hochbauinspektorat und durch Zuschrift an die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 3 回議事録 (1954 年 7 月 30 日)

<3> 1761. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Nachdem der Stadtrat mit Beschluß Nr. 473/1950 letztmals Auszeichnungen für gute Bauten an einige Bauherren und an die betreffenden Architekten verlieh, hat nun eine neu gewählte Jury am 14. und 15. Juni und 7. Juli 1954 aus einer großen Anzahl von den in den Jahren 1949 bis 1953 erstellten Bauten eine Reihe von Objekten ausgewählt, die eine solche Auszeichnung verdienen. Besichtigt wurde eine Reihe neuerer Geschäftsbauten, Siedlungen und kirchlichen Bauten. Von der Erwägung ausgehend, daß die Siedlungen Espenhof und Au Werke von selbständigen Stiftungen darstellen, wurden auch diese in die Prüfung miteinbezogen. Bei diesen letzteren Bauten kommt jedoch lediglich die Verleihung einer Urkunde an die Architekten, nicht aber die Anbringung einer Bronzetafel am betreffenden Gebäude in Frage. Bauten, die von der Stadt Zürich oder allenfalls von Architekten, die im heutigen Preisgericht mitwirken, erstellt wurden, blieben von der Beurteilung ausgeschlossen. Da seit der letzten Prämiiierung längere Zeit verstrichen ist, wurde der Kreis der auszuzeichnenden Bauten etwas erweitert.

Die Ueberlegungen, welche die Preisrichter dazu führten, dem Stadtrate die Prämiiierung der nachstehend aufgeführten Bauten zu beantragen, sind in der an die Tagespresse, einige Fachzeitschriften und an die mit Auszeichnungen bedachten Architekten und Bauherren zu richtenden Zuschrift enthalten (vergl. Ziffer 2).

Die auswärtigen Fachpreisrichter halten dafür, daß ein ständiger Ausschluß stadteigener Bauten nicht gerechtfertigt ist; sie regen deshalb an, bei der nächsten Juriierung auch städtische Bauten in die Beurteilung miteinzubeziehen, wobei jedoch nur die beauftragten Architekten geehrt werden sollen. Der Stadtrat kann sich dieser Anregung anschließen. Die nächste Aktion soll ferner nach der Auffassung des Preisgerichtes auch private Einzelhäuser und Tiefbauten umfassen, während die Siedlungsbauten weniger berücksichtigt werden sollen.

Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschließt der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 aufgeführten Bauherren und Architekten als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und den Bauherren (mit Ausnahme der Bauten in der Siedlung Au, Stiftung Wohnungsfürsorge für kinderreiche Familien und der Bauten Espenhof, Stiftung Wohnungsfürsorge für betagte Einwohner der Stadt Zürich) überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel.

2. An die Tagespresse, <Das Werk>, die Schweizerische Bauzeitung, den Verlag Baublatt AG und die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Wie schon früher bekannt gegeben wurde, stimmte der Gemeinderat im Jahre 1947 einem Antrag des Stadtrates zu, wonach die Bauherren und Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten durch eine öffentlich zu erwähnende Urkunde und eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel ausgezeichnet werden sollen. Vor kurzem hat nunmehr das vom Stadtrat eingesetzte Preisgericht wiederum eine große Zahl von Bauten geprüft. Das Preisgericht tagte unter dem Vorsitz von Stadtpräsident Dr. E. Landolt, weiter gehörten ihm an der Vorstand des Bauamtes II, Stadtrat Dr. S. Widmer, Stadtbaumeister A. H. Steiner und ferner die Architekten O. Dreyer, Luzern, A. Dürig, Basel, W. Krebs, Bern, und H. G. Lesemann, Genf. Zugezogen wurde der Adjunkt des Stadtbaumeisters Architekt A. Wasserfallen. Von der Prüfung und allfälligen Prämiiierung ausgeschlossen waren die von der Stadt Zürich erstellten Bauten, wie Schulhäuser, Stadtspital, Badeanlagen usw. Einbezogen in die Prüfung wurden hingegen die Alterssiedlung Espenhof und die Siedlung Au, da diese nicht von der Stadt selbst, sondern durch selbständige Stiftungen (Stiftung Wohnungsfürsorge für betagte Einwohner der Stadt Zürich und Stiftung Wohnungsfürsorge für kinderreiche Familien) geplant und erstellt wurden. Auf eine Verleihung der Bronzetafel zur Anbringung an den Häusern dieser Stiftungen soll jedoch verzichtet werden, hingegen beantragte das Preisgericht dem Stadtrat, den betreffenden privaten Architekten eine Urkunde zu verleihen. Die Ersetzung

der bisher im Preisgericht tätigen, in der Stadt Zürich ansässigen Architekten durch Auswärtige bot auch die Möglichkeit, Bauten der bisherigen Preisrichter zu berücksichtigen. Die neu amtierenden auswärtigen Preisrichter halten dafür, daß ein grundsätzlicher Ausschluß stadteigener Bauten nicht gerechtfertigt ist. Sie empfahlen deshalb dem Stadtrat, in einer kommenden Aktion auch solche Bauten zu berücksichtigen, wobei nur die Auszeichnung des beauftragten Architekten in Frage kommen könnte. Von der Erwägung ausgehend, daß gerade auch diese Bauten (Schulhäuser, Spitalbauten, Badeanlagen, öffentliche Brücken, Platzgestaltungen, Straßenbauten usw.) für die städtebauliche Gestaltung der Stadt von großer Bedeutung sind, stimmte der Stadtrat dieser Anregung zu. Neben diesen Bauten sollen bei einer nächsten Prämiiierung in vermehrtem Maße auch private Einzelhäuser und Industriebauten berücksichtigt werden.

Da seit der letzten Auszeichnung etliche Zeit verstrichen ist, wurde der Kreis der auszuzeichnenden Bauten etwas weiter gezogen.

Auch an der diesjährigen Juriierung konnte eine erfreuliche Weiterentwicklung sowohl in architektonischer als auch in städtebaulicher Hinsicht vermerkt werden. Festzustellen ist auch, daß sich die nunmehr für die Wohnzonen genehmigte neue Bauordnung auf die Gestaltung der Ueberbauungen gut ausgewirkt hat. Die Gefahr der schematischen Ueberbauung größerer zusammenhängender Bauareale konnte größtenteils behoben werden, die Siedlungsbauten mit ihrer Abwechslung hinsichtlich Höhe und Lage zeugen von einer freieren Gestaltung, die auf eine vernünftige Ausschöpfung der durch die neue Bauordnung gegebenen Möglichkeiten zurückzuführen ist. In dieser Hinsicht lag den Baubehörden die Pflicht ob, zusammen mit den Bauherren und den beauftragten Architekten einerseits eine den heutigen Anschauungen entsprechende Ueberbauung zu schaffen und zu ermöglichen, anderseits aber die Grenze gegenüber einer willkürlichen, das freie Ermessen überschreitende Anwendung der baugesetzlichen Bestimmungen strikte zu beachten. Das starke Wachstum unserer Stadt erfordert je länger je mehr, auf die Schaffung ausreichender Freiflächen zu achten, in denen sich das erholungssuchende Publikum ergehen kann und in denen besonders auch den Kindern die Gelegenheit zu natürlichem Spiel gegeben wird. Auch dieser Forderung wurde in den letzten Jahren in erfreulichem Maße nachgelebt.

Besondere Aufmerksamkeit wurde der Entwicklung in der eigentlichen Altstadt geschenkt. Die bauliche Einfügung von Neubauten in der erhaltungswürdigen Altstadt ist von außerordentlicher Wichtigkeit, so wie auch die Einzelgestaltung der Neubauten gerade in diesem Gebiet besondere Beachtung verdient.

Unter Zugrundelegung des Berichtes der Jury hat der Stadtrat am 30. Juni 1954 die Auszeichnung folgender Bauten beschlossen:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung; alle Auszeichnungen sind gleichwertig. Den Bauherren (mit Ausnahme der oben erwähnten Stiftungen) wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Zürcher Wappen mit Wappentier), die am betreffenden Hause angebracht wird, verliehen. Sämtliche Architekten beziehungsweise Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, das Hochbauamt mit der Anbringung der Bronzetafeln zu beauftragen. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen sind der Konto Nr. J 218 des Hochbauamtes zu belasten.

4. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, den Vorstände des Finanz- und des Bauamtes I und II, das Tiefbauamt, das Hochbauamt, das Hochbauinspektorat und durch Zuschrift an die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 4 回議事録 (1957 年 7 月 19 日)

<4> 1859. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Nach dem der Stadtrat im Jahre 1954 zum dritten Male Auszeichnungen für gute Bauten verliehen hatte, konnten im Frühjahr 1957 die Vorbereitungen für eine vierte Aktion getroffen werden. Entsprechend dem von der Jury bei der letzten Aktion geäußerten Wunsche wurde der Kreis der auszuzeichnenden Bauten etwas weiter gezogen, indem diesmal auch städtische Objekte wie Schulen, Bäder usw. Bei der Beurteilung berücksichtigt wurden, da diese für die städtebauliche Gestaltung der Stadt von großer Bedeutung sind. Ferner wurde auch private, Einzelhäuser beurteilt. Für städtische Bauten kann selbstverständlich nur die Auszeichnung des Architekten in Betracht kommen. Für die Prämiiierung sind in der Regel nur Objekte vorgesehen, die in den letzten 5-6 Jahren erstellt und die nicht bereits bei der letzten Aktion beurteilt wurden. Die Jury war sich zum vornherein der Schwierigkeiten bewußt, die ihr beispielsweise bei der Wahl von auszuzeichnenden Schulbauten und Geschäftshäusern aus einer großen Zahl von Neubauten bevorstanden. Da seit der letzten Beurteilung drei Jahre vergangen sind, konnten 12-15 Objekte für die Auszeichnung vorgesehen werden. Aus einem vom Hochbauamt erstellten Verzeichnis von über 500 Objekten mußten rund 170 durch die Jury beurteilt werden, wobei Mehr- und Einfamilienhäuser, Wohn- und Ladenbauten, Wohnhochhäuser, Geschäftshäuser, Fabrik- und Werkstattbauten, Kirchen, Schulbauten, Bäder, Spitäler, Wartehallen, Tankstationen, Schießstände vertreten waren.

Nachdem in den früheren Jahren Wohnsiedlungen im Vordergrund gestanden hatten, konnten diesmal in vermehrtem Maße andere Objekte wie Geschäftshäuser, Schulbauten usw. berücksichtigt werden.

Die Bauten wurden durch die Jury während drei Tagen einer eingehenden Besichtigung und Prüfung unterzogen. Bei der Beurteilung mußte, nachdem in den letzten Jahren sehr viele Neubauten entstanden waren, ein sehr strenger Maßstab angelegt werden. So konnten mehrmals von einer Reihe guter Bauten der gleichen Kategorie nur ein oder zwei der besten Objekte für die Auszeichnung vorgeschlagen werden. Als Ergebnis dieser eingehenden Prüfung beantragt das Preisgericht, den im Dispositiv 2 aufgeführten privaten Bauherren und Architekten als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten wiederum eine Urkunde und den Bauherren überdies eine Bronzetafel zu übergeben.

Es ist noch zu erwähnen, daß bei einer Wohnbebauung an der Kilchbergstraße auf die Verleihung einer Urkunde an die Projektverfasser und die Bauherrschaft verzichtet werden mußte, obwohl das Objekt eine Auszeichnung verdient hätte. Die Pläne wurden von Beamten des Hochbauamtes erstellt; da bei der Projektierung der in der Jury für die Auszeichnungen mitwirkende Architekt A. Wasserfallen beteiligt war, können diese Bauten nur lobend erwähnt werden.

Sodann befand sich unter den im Jahre 1954 ausgezeichneten Bauten das Geschäftshaus Langstraße 94. Als Projektverfasser war damals Architekt Willy Dätwyler genannt worden. Nachträglich ging ein Gesuch von Architekt Jules Burger ein, der als Mitverfasser erwähnt werden wollte. Die Ueberprüfung der von ihm beigebrachten Unterlagen durch das Hochbauamt ergab, daß die Erwähnung von Architekt J. Burger als Projektmitverfasser berechtigt ist, da er einen wesentlichen Anteil an der Projektierung nachweisen konnte. Architekt Burger ist deshalb nachträglich noch eine Urkunde auszufertigen und zu übergeben.

Die Verleihung der Auszeichnungen soll wiederum im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen. Der Vorstand des Bauamtes II ist zu ermächtigen, durch das Hochbauamt die Urkunden ausfertigen zu lassen und die Vorbereitung der Feier in Zusammenarbeit mit der Verwaltungsabteilung des Stadtpräsidenten zu organisieren. Die Ausgaben gehen zulasten des Kontos Nr. J 218, Preis für gute Bauten. Der erforderliche Kredit ist im Voranschlag für das Jahr 1957 enthalten.

Der Stadtrat beschließt auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten privaten Bauherren und Architekten gemäß dem Antrag der Jury als

Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde mit öffentlicher Erwähnung und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Objekten erhalten lediglich die Architekten eine Urkunde.

2. An die Tagespresse das <Werk> die Schweizerische Bauzeitung, den Verlag Baublatt AG und die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Der Gemeinderat hat im Jahre 1947 auf den Antrag des Stadtrates der Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten zugestimmt. Die Bauherren - soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. Diese Auszeichnungen der Stadt Zürich erfolgen in Würdigung der Tatsache, daß architektonisch gute Bauten für das Stadtbild von größter Wichtigkeit sind. Da die in den Jahren 1947, 1950 und 1954 erfolgten Auszeichnungen bei Baubeflissenen und Architekten großen Anklang fanden, wurde im Jahre 1957 eine vierte Aktion eingeleitet.

Der Kreis der auszuzeichnenden Bauten wurde diesmal etwas weiter gezogen, indem auch städtische Objekte wie Schulen, Bäder usw., ferner private Einzelhäuser, die in den vergangenen 4-5 Jahren erstellt wurden, für die Beurteilung in Betracht fielen. Eine Ausnahme machte die Jury bei der Kirche Seebach, die wohl schon im Jahre 1948 fertiggestellt war, aber erst diesmal ausgezeichnet werden konnte, weil der Projektverfasser Professor A.H. Steiner bei den früheren Aktionen Mitglied der Jury für die Auszeichnungen war.

Entsprechend den seinerzeit aufgestellten Richtlinien konnten, nachdem seit der letzten Aktion drei Jahre verflossen sind, 12-15 Objekte berücksichtigt werden. Im übrigen waren für die Auswahl die gleichen Voraussetzungen, wie sie schon für die bisherigen Aktionen bestanden hatten, maßgebend. Aus einem vom Hochbauamt erstellten Verzeichnis von über 500 Bauten mußten rund 170 durch die Jury beurteilt werden, wobei folgende Kategorien vertreten waren:

Mehr- und Einfamilienhäuser, Wohn- und Ladenbauten, Wohnhochhäuser, Geschäftshäuser, Fabrik- und Werkstattbauten, Kirchen, Schulbauten, Bäder, Spitäler, Wartehallen, Tankstationen, Schießstände.

Während in den früheren Jahren Wohnsiedlungen im Vordergrund gestanden hatten, konnten diesmal in vermehrtem Maße Geschäftshäuser, Schulbauten usw. berücksichtigt werden. Die Bauten wurden durch die Jury am 27. und 28. Mai und 19. Juni 1957 eingehend besichtigt und in architektonischer und städtebaulicher Hinsicht gründlich geprüft. Die Jury tagte unter dem Vorsitz von Stadtpräsident Dr. E. Landolt. Als weitere Mitglieder gehörten ihr an: Stadtrat Dr. S. Widmer, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister-Stellvertreter A. Wasserfallen, die Architekten Otto Dreyer, Luzern, Arthur Dürig, Basel, Werner Krebs, Bern, und H. G. Lesemann, Genf. Da zufolge der starken Bautätigkeit der letzten Jahre sehr viele Neubauten entstanden sind, mußte bei der Beurteilung ein sehr strenger Maßstab angelegt werden. So konnte besonders bei Geschäftshäusern und Schulbauten von einer ganzen Reihe guter Bauten nur ein oder zwei der besten Objekte für die Auszeichnung vorgeschlagen werden, da sonst die Zahl der Auszeichnungen zu groß geworden wäre. Als Ergebnis dieser eingehenden Prüfung beantragt das Preisgericht die Auszeichnung folgender Bauten:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung; alle Auszeichnungen sind gleichwertig. Den Bauherren - soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Zürcher Wappen mit Wappentier) verliehen, die am betreffenden Hause angebracht wird. Alle vorstehend erwähnten Architekten bzw. Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde.

Die Verleihung der Auszeichnungen an die Bauherren und Architekten wird wie bisher üblich im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen. Die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten werden zu

gegebener Zeit zu diesem Anlaß eingeladen.

Es ist noch zu erwähnen, daß bei einer Wohnbebauung an der Kilchbergstraße ein Sonderfall vorliegt, weil sie von Beamten des Hochbauamtes projektiert wurde. Da bei der Projektierung auch der in der Jury für die Auszeichnungen mitwirkende Architekt A. Wasserfallen beteiligt war, muß von einer offiziellen Auszeichnung dieser Bauten und der Verleihung einer Urkunde abgesehen werden; hingegen ist die Jury der Auffassung, daß die Bauten, die unter anderen Umständen ausgezeichnet worden wären, lobend erwähnt werden sollen.

Sodann befand sich unter den im Jahre 1954 ausgezeichneten Bauten das Geschäftshaus Langstraße 94. Als Projektverfasser war damals nur Architekt Willy Dätwyler genannt worden. Nachträglich ergab sich, daß auch Architekt Jules Burger einen wesentlichen Anteil an der Projektierung nachweisen konnte. Architekt Burger ist deshalb ebenfalls noch eine Urkunde auszufertigen und anläßlich der Aktion 1957 zu übergeben:

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen:

a) die Urkunden auszufertigen und zu gegebener Zeit auch die Bronzetafeln anbringen zu lassen;

b) im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten den Zeitpunkt der Uebergabefeier im Muraltengut festzusetzen und die erforderlichen Vorbereitungen treffen zu lassen.

4. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen sind dem Konto Nr. J 218 des Hochbauamtes zu belasten.

5. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes I und II, das Hochbauamt (2), das Hochbauinspektorat und durch Zuschrift an die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten und die Presse.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 5 回議事録 (1961 年 7 月 14 日)

<5> 2048. Verleitung von Auszeichnungen für gute Bauten. Im Jahre 1957 waren zum vierten Male Auszeichnungen für gute Bauten verliehen worden, so daß die Durchführung einer weiteren Aktion für das Jahr 1960 vorgesehen werden konnte. Die Vorbereitungen erforderten aber so viel Zeit, daß die Einberufung der Jury im Jahre 1960 nicht mehr möglich war und auf das Frühjahr 1961 verschoben werden mußte. Für die Auszeichnung kamen alle Kategorien von Bauten, die seit der letzten Prämiiierung erstellt worden waren, in Betracht. Auch städtische, kantonale oder eidgenössische Objekte wurden berücksichtigt. Im Hinblick darauf, daß inzwischen nahezu 4 Jahre verflossen sind, konnten 15-18 Objekte für die Prämiiierung in Aussicht genommen werden. Ein vom Hochbauamt erstelltes Verzeichnis umfaßt rund 800 Bauten, von diesen wurden ungefähr 130 in die engere Wahl gezogen. Darunter waren Mehr- und Einfamilienhäuser, Wohnhochhäuser, Laden- und Atelierbauten, Geschäftshäuser, Verwaltungsgebäude, Fabrik-, Garage- und Werkstattbauten, Kirchen, Spitäler, Schulbauten, Bäder und Sportanlagen vertreten.

Die Bauten wurden durch die Jury während drei Tagen eingehend besichtigt und geprüft. Bei der Großzahl von Bauten war es unvermeidlich, daß bei der Beurteilung ein sehr strenger Maßstab angewendet werden mußte. Es konnten oftmals von einer ganzen Anzahl guter Bauten der gleichen Kategorie nur eines, allenfalls zwei oder – wie bei den Geschäfts-, Einfamilien- und Mehrfamilienhäusern höchstens drei der besten Bauten für die Auszeichnung berücksichtigt werden. Insgesamt verblieben 17 Einzelobjekte für die Prämiiierung. Bauherren und Architekten sollen in gewohnter Art eine Urkunde erhalten, in der die mit der Auszeichnung bedachte Baute genannt ist und zudem bekundet wird, daß der Bau ein gutes Beispiel verantwortungsbewußter Baugesinnung und architektonischer Leistung darstellt. Am Bau selbst wird an geeigneter Stelle eine Bronzetafel angebracht werden.

Zu erwähnen sind noch einige besondere Fälle, nämlich die Ueberbauung des Hirzenbachareals im Quartier

Schwamendingen sowie diejenigen der Familienheim-Genossenschaft im Friesenberg und des Quartierzentrums Lindenplatz im Quartier Altstetten. Bei diesen Ueberbauungen ist es nicht möglich, einzelne Bauten herauszunehmen und auszuzeichnen: sie verdienen es aber, als gute Beispiele größerer zusammenhängender Bebauungen mit einer Auszeichnung bedacht zu werden. Die Bauherren sollen wie diejenigen von Einzelobjekten eine Urkunde erhalten. Eine Auszeichnung der Ersteller dieser Ueberbauungen ist angezeigt, weil sie darauf verzichteten, ihr Bauvorhaben ausschließlich unter dem Gesichtspunkt des persönlichen Interesses zu betrachten, sondern den Mut zu neuartigen Lösungen hatten und Hand dazu boten – zum Teil unter erheblichen Opfern - die Verwirklichung einer Gesamtplanung, die einen starken Einfluß auf das Stadtbild ausübt, zu ermöglichen, obwohl dies oft jahrelange Vorbereitungen erforderte, während Einzelbebauungen rascher hätten verwirklicht werden können. Auf eine Auszeichnung der Architekten hingegen muß in diesen Fällen verzichtet werden.

Die Verleihung der Auszeichnungen soll wie üblich im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen. Der Vorstand des Bauamtes II ist zu ermächtigen, durch das Hochbauamt die Urkunden anfertigen zu lassen und die Vorbereitung der Feier in Zusammenarbeit mit der Verwaltungsabteilung des Stadtpräsidenten zu organisieren. In einem späteren Zeitpunkt sollen photographische Vergrößerungen der prämierten Objekte im Helmhaus öffentlich ausgestellt werden. Die Ausgaben sind dem Konto Nr. J 218, Preis für gute Bauten, zu belasten. Der erforderliche Kredit war im Voranschlag für das Jahr 1960 enthalten; durch die Verschiebung auf das Jahr 1961 wurde der Kredit nicht beansprucht; zur Deckung der Aufwendungen mußte er mit der ersten Reihe der Nachtragskreditbegehren 1961 nachgesucht werden.

Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschließt der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 3 genannten privaten Bauherren und Architekten gemäß dem Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Bauten erhalten lediglich die Architekten eine Urkunde.

2. Die an der Gesamtüberbauung im Hirzenbach, Quartier Schwamendingen, beteiligten Bauherren sowie die Familienheim-Genossenschaft Zürich als Erstellerin der Ueberbauung mit Quartierzentrum im Friesenberg und die Initiativgenossenschaft Lindenplatz Altstetten Initiatorin und Bauherrin des Quartierzentrums Lindenplatz werden in Anerkennung ihrer vorbildlichen Leistungen bei der Schaffung großzügiger Quartierbebauungen ebenfalls durch öffentliche Urkunden ausgezeichnet.

3. An die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Der Gemeinderat stimmte im Jahre 1947 dem Antrag des Stadtrates nach Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten zu. Die Bauherren -soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und die Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. Diese Auszeichnungen der Stadt Zürich erfolgen in Würdigung der Tatsache, dass architektonisch gute Bauten für das Stadtbild von großer Wichtigkeit sind. Da die in den Jahren 1947, 1950, 1954 und 1957 erfolgten Auszeichnungen bei Baubeflissenen und Architekten großen Anklang fanden, wurde im Jahre 1960 eine fünfte Aktion eingeleitet.

Der Kreis der auszuzeichnenden Bauten wurde diesmal sehr weit gezogen, indem alle Kategorien von Bauten, einschliesslich städtischer, kantonaler und eidgenössischer Bauten, in Betracht fielen.

Entsprechend den bestehenden Richtlinien konnten, nachdem seit der letzten Aktion drei Jahre verflossen sind, 15-18 Bauten berücksichtigt werden. Im übrigen waren für die Auswahl die gleichen Voraussetzungen, wie sie schon für die bisherigen Aktionen bestanden hatten, maßgebend. Aus einem vom Hochbauamt erstellten Verzeichnis von über 800 Bauten mußten rund 130 durch die Jury beurteilt werden, wobei folgende Kategorien vertreten waren:

Mehr- und Einfamilienhäuser, Wohnhochhäuser, Laden- und Atelierbauten, Geschäftshäuser, Verwaltungsgebäude, Fabrik-,

Garagen- und Werkstattbauten, Kirchen, Schulbauten, Bäder, Spitäler, Jugend- und Altersheime, Alterssiedlungen.

Die Bauten wurden durch die Jury am 15., 16. und 17. Mai 1961 besichtigt und in architektonischer und städtebaulicher Hinsicht geprüft. Die Jury tagte unter dem Vorsitz von Stadtpräsident Dr. E. Landolt. Als weitere Mitglieder gehörten ihr an: Stadtrat Dr. S. Widmer, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister A. Wasserfallen, die Architekten Hermann Baur, Basel, Otto Dreyer, Luzern, Henry G. Lesemann, Genf, und Hans Reinhard, Bern. Da infolge der starken Bautätigkeit der letzten Jahre viele Neubauten entstanden sind, mußte bei der Beurteilung ein sehr strenger Maßstab angelegt werden. So konnten besonders bei Geschäftshäusern, Verwaltungsgebäuden, Ein- und Mehrfamilienhäusern und Schulbauten von einer ganzen Reihe guter Bauten nur ein bis drei der besten für die Auszeichnung vorgeschlagen werden, da sonst die Zahl der Auszeichnungen zu groß geworden wäre. Als Ergebnis dieser eingehenden Prüfung beantragt das Preisgericht die Auszeichnung folgender Bauten:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung; alle Auszeichnungen sind gleichwertig. Den Bauherren – soweit dies nicht die Stadt selber betrifft – wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Züricher Wappen mit Wappentier) verliehen, die am betreffenden Hause angebracht wird. Alle vorstehend erwähnten Architekten bzw. Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde.

Zu erwähnen sind noch einige besondere Fälle, namentlich die Ueberbauung des Hirzenbachareals, Quartier Schwamendingen, sowie diejenigen der Familienheim-Genossenschaft im Friesenberg und des Quartierzentrums Lindenplatz, Quartier Altstetten. Bei diesen Ueberbauungen können nicht einzelne Bauten für sich allein bewertet und ausgezeichnet werden. Es ist aber gerechtfertigt, sie als Beispiele guter Quartiergestaltung und Zeugen einer vorbildlichen Baugesinnung lobend zu erwähnen. Dabei ist zu berücksichtigen, daß die Ersteller darauf verzichteten, ihr Bauvorhaben in erster Linie unter dem Gesichtswinkel des persönlichen Interesses zu betrachten, sondern daß sie den Mut zu neuartigen Lösungen aufbrachten und Hand zu einer städtebaulich vorbildlichen Gesamtplanung boten. Sie nahmen dabei den Nachteil jahrelanger Vorbereitungsarbeiten auf sich, obwohl Einzelbebauungen rascher zu verwirklichen gewesen wären. Diese Bauherren sollen deshalb wie diejenigen von Einzelbauten eine Urkunde erhalten. Auf eine Auszeichnung der Architekten muß dagegen verzichtet werden.

Die Verleihung der Auszeichnungen an die Bauherren und Architekten wird wie bisher üblich im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen. Die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten werden zu gegebener Zeit zu diesem Anlaß eingeladen.

4. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen,

- a) die Urkunden anfertigen und zu gegebener Zeit auch die Bronzetafeln anbringen zu lassen;
- b) im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten den Zeitpunkt der Uebergabefeier im Muraltengut festzusetzen und die erforderlichen Vorbereitungen treffen zu lassen.

5. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen sind dem Konto Nr. J 218 des Hochbauamtes zu belasten.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes II, das Hochbauamt (2), die Mitglieder der Jury und durch Zuschrift an die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 6 回議事録 (1965 年 7 月 30 日)

<6> 2036. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Nachdem die letztmalige Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten vor vier Jahren durchgeführt wurde, erscheint es gegeben, in diesem Jahr die sechste Prämierung vorzunehmen. Ein vom Hochbauamt verfaßtes Verzeichnis umfaßt rund 1000 Objekte, von diesen wurden 128 in die engere Wahl gezogen. Die Jury besichtigte und prüfte alle diese Bauten eingehend während dreier Tage. Bei der Großzahl von Bauten war es wiederum unvermeidlich, daß bei der Beurteilung ein sehr strenger Maßstab angelegt werden mußte. Dabei war man bemüht möglichst viele Kategorien von Bauten zu berücksichtigen. Besondere Erwähnung verdient das Hochhaus <Zur Palme> der Architekten Haefeli, Moser und Steiger, welches die Jury wegen seiner großen architektonischen Qualitäten gerne zur Auszeichnung empfohlen hätte, jedoch schließlich wegen städtebaulicher Bedenken davon absah.

So verblieben insgesamt 13 Einzelobjekte, die zur Prämierung vorgeschlagen werden. Den Bauherren und Architekten soll in gewohnter Weise eine Urkunde überreicht werden, in der mit der Auszeichnung bedachte Baute genannt ist und zudem bekundet wird, daß der Bau ein gutes Beispiel verantwortungsbewußter Baugesinnung und architektonischer Leistung darstellt. Ferner wird wiederum eine Bronzetafel überreicht, die am Bau selber an geeigneter Stelle angebracht werden kann.

Die Verleihung der Auszeichnung soll wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen. Diese ist auf den 14 September 1965 vorgesehen und wird durch die Abteilung des Stadtpräsidenten in Zusammenarbeit mit dem Bauamt II organisiert. In einem späteren Zeitpunkt sollen photographische Vergrößerungen der prämierten Objekte im Helmhaus öffentlich ausgestellt werden. Die Kosten der gesamten Aktion gehen zu Lasten der entsprechenden Konti des Ordentlichen Verkehrs des Hochbauamtes.

Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschließt der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 3 genannten Bauherren und Architekten gemäß Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Bauten erhalten lediglich Architekten eine Urkunde.

2. An die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Im Jahre 1947 stimmte der Gemeinderat dem Antrag des Stadtrates auf Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten zu. Die Bauherren -soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und die Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren über dies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. Diese Auszeichnungen durch die Stadt Zürich erfolgen in Würdigung der Tatsache, dass architektonisch gute Bauten für das Stadtbild von großer Wichtigkeit sind.

Die Auszeichnungen werden periodisch alle drei bis vier Jahre vorgenommen. Nachdem die letzten Auszeichnungen im Jahre 1961 erfolgten, scheint es gegeben, in diesem Jahr die sechste Prämierung vorzunehmen. Entsprechend den bestehenden Richtlinien mußten aus einem vom Hochbauamt erstellten Verzeichnis von rund 1000 in der Zwischenzeit neu erstellten Bauten deren 128 durch die Jury beurteilt werden. Die Beurteilung erfolgte wieder nach den gleichen Maßstäben wie in den bisherigen Aktionen.

Die Jury, welche während dreier Tage tagte, stand unter dem Vorsitz von Stadtpräsident Dr. E. Landolt. Ihr gehörten ferner an: Stadtrat Dr. S. Widmer, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister A. Wasserfallen, die Architekten Hermann Baur, Basel, Arthur Lozeron, Genf, und Hans Reinhard, Bern. Die große Zahl der in den letzten vier Jahren entstandenen Neubauten zwang die Jury, bei der Beurteilung einen sehr strengen Maßstab anzulegen. Bei den verschiedenen Kategorien von Bauten, wie Geschäftshäusern, Verwaltungsgebäuden, Ein- und Mehrfamilienhäusern und Schulbauten, konnten jeweils nur ein bis drei der besten für die Auszeichnung vorgeschlagen werden. Auf Antrag der Jury hat der Stadtrat die

Auszeichnung folgender Bauten beschlossen:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung. Den Bauherren – soweit dies nicht die Stadt selber betrifft – wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Züricher Wappen mit Wappentier) verliehen, die am betreffenden Hause angebracht wird. Alle vorstehend erwähnten Architekten bzw. Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde. Die Verleihung der Auszeichnungen an die Bauherren und Architekten wird wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Dienstag, den 14. September 1965, vorgesehen ist. Die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten erhalten zur gegebenen Zeit noch eine besondere Einladung.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anfertigen zu lassen.

4. Der Stadtpräsident wird eingeladen, im Einvernehmen mit dem Bauamt II die Vorbereitungen für die Uebergabefeier im Muraltengut treffen zu lassen.

5. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs des Hochbauamtes belastet.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes II, das Hochbauinspektorat, das Hochbauamt (3), die Mitglieder der Jury und durch Zuschrift an die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 7 回議事録 (1968 年 8 月 8 日)

<7> 2437. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Im Jahre 1945 beschloss der Stadtrat (Prot.-Nr.2023) die Schaffung eines Preises für gute Bauten, welchem Beschluss der Gemeinderat im Jahre 1947 zustimmte. Seit dem werden ungefähr alle drei Jahre Auszeichnungen vorgenommen. Da die letztmalige Verleihung von Auszeichnungen im Jahre 1965 stattfand, erscheint es gegeben, in diesem Jahre die siebente Prämiiierung durchzuführen. Ein vom Hochbauamt verfasstes Verzeichnis zeigt rund 600 Objekte, von diesen wurden 89 in die engere Wahl gezogen. Die Jury besichtigte und prüfte alle diese Bauten am 15. 16. und 17. Juli 1968. Für die Auszeichnung kamen alle Kategorien von Bauten, die seit der letzten Prämiiierung erstellt worden waren in Frage. Da die Auswahl bereits im Januar erfolgen musste, können später vollendete Bauten erst bei der nächsten Aktion berücksichtigt werden. Bei der großen Zahl von Bauten war es unvermeidlich, dass bei der Beurteilung ein strenger Maßstab angelegt werden musste. Insgesamt wurden elf Bauten für die Prämiiierung ausgewählt. Einen Sonderfall bildet das «Centre le Corbusier» an der Höschgasse, wo die Verleihung der Auszeichnung den Dank der Stadt dafür ausdrücken soll, dass dieser bedeutende Architekt und Künstler am Ende seines Wirkens auch in Zürich ein Gebäude erstellt hat.

Bei der Ueberbauung Heuried, die eine Freibade- und Sportanlage- samt Freizeithaus umfasst, wird die Gesamtanlage ausgezeichnet, da die Jury die Gesamtorganisation der Anlage, die Bauidee und –massenverteilung als gutes Beispiel würdigte. Aehnlich verhält es sich bei der Ueberbauung «Zum Bauhof» an der Gubel-/Baumackerstrasse, Quartier Oerlikon, wo die Gesamtanlage, insbesondere die Gesamtkonzeption, als auszeichnungswürdig betrachtet wurde.

Die Jury besichtigte auch verschiedene Umbauten und Renovationen in der Altstadt. Sie empfiehlt, künftig geglückte Umbauten und Renovationen in der Altstadt in einem getrennten Verfahren auszuzeichnen, da keine Vergleichsgrundlage mit den übrigen Bauten besteht und die Auszeichnung hier nach anderen Kriterien - vorab nach Grundsätzen der Denkmalpflege - zu erfolgen hat. Für diese Aufgabe fühlt sich die Jury jedoch nicht zuständig. Sie empfiehlt jedoch für dieses Mal von den

besichtigten Bauten das Gebäude der «Kantorei» am Neumarkt zur Auszeichnung.

Die Verteilung der Auszeichnung soll wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier erfolgen. Da das Muraltengut zurzeit renoviert wird, ist die Durchführung am 10. September 1968 im Stadthaus vorgesehen. Sie wird durch die Verwaltungsabteilung des Stadtpräsidenten in Zusammenarbeit mit dem Bauamt II organisiert. Ferner sollen photographische Vergrößerungen der prämierten Objekte anschliessend im Stadthaus öffentlich ausgestellt werden.

Den Bauherren und Architekten soll in gewohnter Weise eine Urkunde überreicht werden, in der die mit der Auszeichnung bedachte Baute genannt ist und zudem bekundet wird, dass der Bau ein gutes Beispiel verantwortungsbewusster Baugesinnung und architektonischer Leistung darstellt. Ferner wird wiederum eine Bronzetafel überreicht, die am Bau selber an geeigneter Stelle angebracht werden kann.

Die Kosten der gesamten Aktion sind den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs des Hochbauamtes zu belasten. Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten Bauherren und Architekten gemäss Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Bauten erhalten lediglich die Architekten eine Urkunde.

2. An die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Im Jahre 1947 stimmte der Gemeinderat dem Antrag des Stadtrates auf Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten zu. Die Bauherren -soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und die Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. Diese Auszeichnungen durch die Stadt Zürich erfolgen in Würdigung der Tatsache, dass architektonisch gute Bauten für das Stadtbild von grosser Wichtigkeit sind.

Die Auszeichnungen werden periodisch alle drei Jahre vorgenommen. Nachdem die letzten Auszeichnungen im Jahre 1965 erfolgten, scheint es gegeben, in diesem Jahr die siebente Prämierung vorzunehmen. Entsprechend den bestehenden Richtlinien mussten aus einem vom Hochbauamt erstellten Verzeichnis von rund 600 in der Zwischenzeit neuerstellten Bauten deren 89 durch die Jury beurteilt werden. Die Beurteilung erfolgte wieder nach den gleichen Massstäben wie in den bisherigen Aktionen.

Die Jury, welche während dreier Tage tagte, stand unter dem Vorsitze von Stadtpräsident Dr. S. Widmer. Ihr gehörten ferner an: Stadtrat E. Frech, Vorstand des Bauamtes II, Stadtbaumeister Wasserfallen, die Architekten Professor A. Camenzind, Zürich, Fritz Haller, Solothurn, Professor A. Lozeron, Genf, und M. Schlup, Biel, sowie als Sekretär Dr. R. v. Tschärner, Abteilungssekretär des Bauamtes II. Die grosse Zahl der in den letzten drei Jahren entstandenen Neubauten zwang die Jury, bei der Beurteilung einen sehr strengen Massstab anzulegen. Bei den verschiedenen Kategorien von Bauten, wie Geschäftshäuser, Wohnhäuser und öffentliche Bauten, konnten jeweils nur die besten für die Auszeichnung vorgeschlagen werden. Auf den Antrag der Jury hat der Stadtrat die Auszeichnung folgender Bauten beschlossen:

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung. Den Bauherren – soweit dies nicht die Stadt selber betrifft – wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Zürcher Wappen mit Wappentier) verliehen, die am betreffenden Hause angebracht kann. Alle erwähnten Architekten beziehungsweise Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde. Die Verleihung der Auszeichnungen an die Bauherren und Architekten wird wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier im Stadthaus erfolgen, die auf Dienstag, den 10. September 1968, vorgesehen ist. Die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und

Architekten erhalten zur gegebenen Zeit noch eine besondere Einladung.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anfertigen zu lassen.

4. Der Stadtpräsident wird eingeladen, im Einvernehmen mit dem Bauamt II die Vorbereitungen für die Uebergabefeier im Stadthaus treffen zu lassen.

5. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs des Hochbauamtes belastet.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes II, das Hochbauinspektorat, das Hochbauamt (3), die Mitglieder der Jury und durch Zuschrift an die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 8 回議事録 (1972 年 1 月 27 日)

<8> 301. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Die Stadt verleiht in dreijährigem Zyklus Auszeichnungen für gute Bauten. Da die letzte Prämierung im Jahre 1968 stattfand, ist es gegeben, die 8. Auszeichnung in diesem Jahre vorzunehmen. Von den rund 600 in den Jahren 1968 bis 1971 erstellten

Bauten hat das Hochbauamt 120 Objekte zur Besichtigung und Prüfung ausgewählt. Die Jury benötigte für ihre Arbeit 4 Tage. Dabei wurde das Urteil nicht nach einem «Punktverfahren» gefällt, sondern auf Grund eines differenzierten Abwägens am einzelnen Objekt. Es gab Bauten, wie das Einkaufszentrum Witikon, bei denen schon die Baugesinnung des Bauherrn eine wichtige Rolle spielte. Bei anderen Objekten wurde vor allem die Gesamtanlage und nicht die Detailgestaltung als auszeichnungswürdig empfunden. Die Beurteilung anderer Objekte, wie die der vorbildlichen Siedlung Am Suteracher, musste zurückgestellt werden, da diese Ueberbauungen nicht vollkommen abgeschlossen waren.

Die Jury schlägt dem Stadtrat 11 Objekte zur Prämierung vor. Den Bauherren und Architekten soll in gewohnter Weise eine Urkunde überreicht werden, in der das mit der Auszeichnung bedachte Objekt genannt ist und zudem bekundet wird, dass der Bau ein gutes Beispiel verantwortungsbewusster Baugesinnung und architektonischer Leistung darstellt. Ferner wird wiederum eine Bronzetafel überreicht, die am Bau selber an geeigneter Stelle angebracht werden kann.

Die Verleihung der Auszeichnung soll wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen. Diese ist auf den 10. März 1972 vorgesehen und wird durch das Bauamt II in Zusammenarbeit mit der Präsidialabteilung organisiert. Der Stadtpräsident wird eingeladen, bei der Ansprache die Meinung des Stadtrates in geeigneter Form zum Ausdruck zu bringen, der die architektonische Gestaltung des Hauses «Les Ambassadeurs» als nicht sehr passend zur Bahnhofstrasse empfindet. In einem späteren Zeitpunkt sollen photographische Vergrößerungen der prämierten Objekte im Helmhaus öffentlich ausgestellt werden. Die Kosten der gesamten Aktion gehen zu Lasten der entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt).

Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten Bauherren und Architekten gemäss Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Bauten erhalten lediglich die Architekten eine Urkunde.

2. An die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Im Jahre 1947 stimmte der Gemeinderat dem Antrag des Stadtrates auf Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten zu. Die Bauherren - soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und die Architekten von architektonisch und städtebaulich guten Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. Diese Auszeichnungen durch die Stadt Zürich erfolgen in Würdigung der Tatsache, dass architektonisch gute Bauten für das Stadtbild von grosser Wichtigkeit sind.

Die Auszeichnungen werden periodisch alle drei Jahre vorgenommen. Nachdem die letzte Auszeichnung im Jahre 1968 erfolgte, war in diesem Jahr die 8. Prämiiierung fällig. Entsprechend den bestehenden Richtlinien mussten aus einem vom Hochbauamt erstellten Verzeichnis von rund 600 in der Zwischenzeit neu erstellten Bauten deren 120 durch die Jury beurteilt werden. Die Beurteilung erfolgte wieder nach den gleichen Massstäben wie in den bisherigen Aktionen.

Die Jury, welche während 4 Tagen tagte, stand unter dem Vorsitz von Stadtpräsident Dr. S. Widmer. Ihr gehörten ferner an: Stadtrat Edwin Frech, Stadtbaumeister Adolf Wasserfallen, die Architekten Frederic Brugger, Professor Alberto Camenzind, Fritz Haller, Max Schlup sowie als Sekretär Dr. R. von Tscharnar. Bei den verschiedenen Kategorien von Bauten, wie Geschäftshäuser, Verwaltungsgebäude, Wohnsiedlungen und Schulbauten, konnten jeweils nur die allerbesten für die Auszeichnung vorgeschlagen werden. Die Beurteilung erfolgte aufgrund eines differenzierten Abwägens am einzelnen Objekt. Es gab Bauten, bei denen schon die Baugesinnung des Bauherrn eine wichtige Rolle spielte. Bei anderen Objekten wurde vor allem die Gesamtanlage und nicht die Detailgestaltung als auszeichnungswürdig empfunden. Auf den Antrag der Jury hat der Stadtrat die Auszeichnung der im Anhang verzeichneten 11 Objekte beschlossen. Die Reihenfolge bedeutet dabei keine Rangordnung. Den Bauherren – soweit dies nicht die Stadt selber betrifft – wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Züricher Wappen mit Wappentier) verliehen, die am betreffenden Hause angebracht kann. Alle nachstehend erwähnten Architekten beziehungsweise Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde. Die Verleihung der Auszeichnungen an die Bauherren und Architekten wird wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Freitag, den 10. März 1972, vorgesehen ist. Die Presse und die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten erhalten zur gegebenen Zeit noch eine besondere Einladung.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anfertigen und die Vorbereitungen für die Uebergabefeier im Muraltengut treffen zu lassen

4. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt) belastet.

5. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes II (3), das Hochbauinspektorat, das Hochbauamt (3), die Mitglieder der Jury und durch Zuschrift an die mit Auszeichnungen bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

• 第9回議事録 (1976年8月25日)

<9> 2393. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Seit 1954 verleiht die Stadt in ungefähr dreijährigem Zyklus Auszeichnungen für gute Bauten. Aus verschiedenen Gründen umfasste die letzte Periode einen Zeitraum von vier Jahren. Dementsprechend war eine bedeutend grössere Zahl von Bauten zu beurteilen. Von den rund 800 (letztmal 600) in der Zeit von Januar 1972 bis März 1976 erstellten Bauten hat das Hochbauamt 137 Objekte zur Besichtigung und Prüfung ausgewählt. Die Jury benötigte für ihre Arbeit drei Tage. Wie gewohnt wurde das Urteil nicht nach einem «Punktverfahren»

gefällt, sondern aufgrund eines differenzierten Abwägens am einzelnen Objekt. Auffallend war die grosse Zahl guter Bauten, bei denen die Stadt als Bauherrin zeichnete. Dies erklärt sich dadurch, dass bei städtischen Bauten in der Regel ein Wettbewerb durchgeführt wird, wodurch schon eine Vorauswahl erfolgt. Die Kommission hat deshalb bei den städtischen Bauten besondere Zurückhaltung geübt. Hervorzuheben ist auch, dass nicht «schöne», sondern gute Bauten ausgezeichnet wurden. Der ästhetische Eindruck allein genügte nicht. Des weiteren versuchte man keine absolute Beurteilung, sondern eine Beurteilung in den verschiedenen Gebäudekategorien. So wurden die Geschäftshäuser, Wohnüberbauungen, Kirchen usw. innerhalb ihrer Kategorie verglichen und gewertet. Primär wurde die Qualität der Baute, daneben aber auch die Baugesinnung des Bauherrn berücksichtigt.

Die Jury schlägt dem Stadtrat 15 Objekte zur Prämierung vor. Bei verschiedenen Objekten standen den positiven Werten negative Faktoren gegenüber. So wurde zum Beispiel die geschlossene Fassade beim Geschäftshaus «Modissa» an der Bahnhofstrasse durch die Grosszügigkeit des offenen Erkers kompensiert.

Bei der Wohnüberbauung der Bundesbahnen beim Viadukt wurde die gute Lösung unter schwierigsten Verhältnissen anerkannt. Beim Erweiterungsbau des Kunsthauses wurde insbesondere die städtebauliche Leistung anerkannt, jedoch bei der technischen Detailgestaltung des Innenraumes Vorbehalte angebracht.

Den Bauherren und Architekten der prämierten Objekte soll in gewohnter Weise eine Urkunde überreicht werden, in der das mit der Auszeichnung bedachte Objekt genannt ist und zudem bekundet wird, dass der Bau ein gutes Beispiel verantwortungsbewusster Baugesinnung und architektonischer Leistung darstellt. Ferner wird wiederum eine Bronzetafel überreicht, die am Bau selber an geeigneter Stelle angebracht werden kann.

Die Verleihung der Auszeichnung soll wie bisher im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Freitag, 3. Dezember 1976, vorgesehen ist und durch das Bauamt II in Zusammenarbeit mit der Präsidialabteilung organisiert wird. Ferner sollen photographische Vergrösserungen der prämierten Objekte öffentlich ausgestellt werden. Die Kosten der gesamten Aktion gehen zu Lasten des entsprechenden Kontos des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt).

Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten Bauherren und Architekten gemäss Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Bauten erhalten lediglich die Architekten eine Urkunde.

2. An die mit der Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Der Stadtrat nimmt periodisch alle drei bis vier Jahre Auszeichnungen guter Bauten vor. Diese erfolgen in Würdigung der Tatsache, dass architektonisch gute Bauten das Stadtbild prägen und deshalb von grösster Wichtigkeit sind. Dieses Jahr findet die 9. Prämierung statt. Von rund 800 in der Zwischenzeit neu erstellten Bauten wurden 137 durch eine Jury beurteilt. Wie gewohnt wurde das Urteil nicht nach einem <Punktverfahren> gefällt, sondern aufgrund eines differenzierten Abwägens am einzelnen Objekt. Des weiteren erfolgte keine absolute Beurteilung, sondern eine Beurteilung in den verschiedenen Gebäudekategorien. So wurden die Geschäftshäuser, Wohnüberbauungen, Kirchen usw. innerhalb ihrer Kategorie verglichen und bewertet. Primär wurde die Qualität der Baute, daneben aber auch die Baugesinnung des Bauherrn berücksichtigt.

Die Jury stand unter dem Vorsitz des Stadtpräsidenten Dr. S. Widmer. Ihr gehörten ferner an: Stadtrat Edwin Frech, die Architekten Frédéric Brugger, Paul Biegger, Professor Franz Oswald, Florian Vischer, Stadtbaumeister Adolf Wasserfallen sowie als Sekretär Dr. R. von Tschärner. Auf den Antrag der Jury hat der Stadtrat die Auszeichnung der im Anhang verzeichneten fünfzehn Objekte beschlossen. Die Reihenfolge bedeutet dabei keine Rangordnung. Den Bauherren - soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - wird eine Urkunde und eine Bronzetafel (Zürcher Wappen mit Wappentier)

verliehen, die am betreffenden Hause angebracht werden kann. Alle nachstehend erwähnten Architekten beziehungsweise Architektengemeinschaften erhalten eine Urkunde. Die Verteilung der Auszeichnung an die Bauherren und Architekten wird, wie bisher, im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Freitag, 3. Dezember 1976, vorgesehen ist. Die Presse und die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten erhalten zur gegebenen Zeit noch eine besondere Einladung.

ten eine Urkunde. Die Verteilung der Auszeichnung an die Bauherren und Architekten wird, wie bisher, im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Freitag, 3. Dezember 1976, vorgesehen ist. Die Presse und die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten erhalten zur gegebenen Zeit noch eine besondere Einladung.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anfertigen und die Vorbereitungen für die Uebergabefeier im Muraltengut treffen zu lassen.

4. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt) belastet.

5. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes II (3), das Hochbauinspektorat, das Hochbauamt (4), die Mitglieder der Jury für die Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten und durch Zuschrift an die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

• 第 10 回議事録 (1981 年 2 月 4 日)

<10> 364. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten.

Dieses Jahr erfolgt zum zehnten Mal die Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten, die auf einen Stadtratsbeschluss von 1945 zurückgehen und seither anfänglich in drei-, später in vierjährigem Zyklus vorgenommen wurden. Von den rund 230 (letztes Mal 800) in der Zeit vom März 1976 bis März 1980 erstellten Bauten hat das Hochbauamt 110 Objekte zur Besichtigung und Prüfung ausgewählt. Die Jury benötigte für ihre Arbeit 4 1/2 Tage und schlägt dem Stadtrat 9 Objekte zur Auszeichnung vor.

Bei stadteigenen Bauten hat die Kommission besondere Zurückhaltung geübt, da diese in der Regel das Ergebnis eines Wettbewerbes sind und in diesem Sinne bereits einer Selektionierung unterstanden. Ein sehr interessantes Hallenbad, welches durch das Hochbauamt in eigener Regie, das heisst ohne Beizug eines privaten Architekten erstellt wurde, konnte trotz hervorragender Qualitäten nicht ausgezeichnet werden, da es nicht Aufgabe der Stadt sein kann, Leistungen einer eigenen Dienstabteilung zu prämiieren.

Einen Sonderfall bildete eine Mehrfamilienhaus-Siedlung an der Furttalstrasse. Das aus einem Wettbewerb hervorgegangene Projekt zeigt erhebliche Qualitäten, die an sich eine Auszeichnung rechtfertigen würden. Hervorzuheben war die schöne und lebendige Beziehung der Innen- und Aussenräume der subtil differenzierten Anlage. Die äusserst interessante Wohnform mit den offenen Grundrissen kann als wegweisendes Beispiel einer städtischen Siedlung bezeichnet werden. Auf eine Auszeichnung dieses Objektes musste jedoch verzichtet werden, weil die Baudurchführung nicht den Erwartungen der Bauherrschaft entsprach.

Die Uebergabe der Auszeichnungen erfolgt an einer kleinen Feier im Muraltengut, die auf Freitag, den 27. März 1981 vorgesehen ist und durch das Bauamt II organisiert wird. Gleichzeitig soll im Stadthaus eine öffentliche Ausstellung über alle zehn Auszeichnungen erfolgen. Die Kosten gehen zulasten der entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt). Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II

beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten Bauherren und Architekten gemäss Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Haus anzubringende Bronzetafel. Bei den städtischen Bauten erhalten lediglich die Architekten eine Urkunde.

2. An die mit Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Der Stadtrat nimmt periodisch alle vier Jahre Auszeichnungen guter Bauten vor, das heisst von Bauten, die als überdurchschnittlich und wegweisende Lösungen angesehen werden. Die Bauherren - soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und die Architekten solcher Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. Die Auszeichnungen erfolgen in der Erkenntnis, dass architektonisch gute Bauten das Stadtbild prägen und deshalb von grösster Wichtigkeit sind. Dieses Jahr findet die zehnte Prämierung statt. Von den rund 230 (letztes Mal 800) in der Zeit vom März 1976 bis März 1980 erstellten Bauten wurden deren 110 Objekte durch eine Jury beurteilt. Dabei wurden Umbauten und Renovationen nicht bewertet, da hier eine Beurteilung nach ganz anderen Kriterien erfolgen müsste.

Die Beurteilung aller Objekte erfolgte durch Quervergleiche in den verschiedenen Gebäudekategorien, wie Industriebauten, Geschäftshäuser, Wohnüberbauungen usw. Bei der Beurteilung der Objekte waren nicht allein die architektonische Leistung und die Baugesinnung massgebend. Im besonderen bewertet wurden auch:

>Planerische und städtebauliche Zusammenhänge;

>das Verhältnis zur näheren Umgebung, örtliche Eingliederung in ein Strassen- und Quartierbild;

>Einbezug und Gestaltung des Umfeldes, Parzellenbezogenheit;

>Aesthetisch-funktionelle Qualität der Architektur;

>Konstruktion, innere Struktur, technische Ausstattung, Behaglichkeit.

Die Jury stand unter dem Vorsitz des Stadtpräsidenten Dr. S. Widmer. Ihr gehörten femer an: Stadtrat Edwin Frech, die Architekten Frédéric Brugger, Paul Biegger, Professor Franz Oswald, Wilfried Steib, Stadtbaumeister Adolf Wasserfallen sowie als Sekretär Dr. R. von Tscherner. Auf den Antrag der Jury hat der Stadtrat die Auszeichnung der nachstehend verzeichneten neun Objekte beschlossen. Die Reihenfolge bedeutet dabei keine Rangordnung:

#### 1. Mehrfamilienhäuser Gutstrasse 206/228

Die Ueberbauung gilt als richtungsweisendes Beispiel, wie auf einem recht schmalen, rechteckigen Grundstück an einer Hauptverkehrsader Wohnungen mit einem hohen Wohnwert entstehen können. Hervorzuheben ist neben der geschickten äusseren Abschirmung auch die lebendige Architektur. Die markante Gliederung und Terrassierung der Anlage bringen neben lärmschutztechnischen Vorteilen den Wohnungen zugerechnete intime, windgeschützte nischenartige Balkone. Die Grundrisse sind gekennzeichnet durch die ansehnliche Grösse der Schlaf- und Wohnräume, die verschiedene Nutzungsvarianten zulassen und in den Kinderzimmern Spielzonen ermöglichen.

#### 2. Eigentumswohnungen Kurhausstrasse

Hervorzuheben ist die vorbildliche Baugesinnung der Bauherrin, die eine starke Reduktion der Ausnützung in Kauf nahm, was eine gute Eingliederung in das schöne Gelände und die Erhaltung des Baumbestandes ermöglichte. Interessant ist die Idee des «Rohbauhauses», welche eine freie, individuelle Grundrissgestaltung nach den Wünschen des Bewohners gestattet. Die Ueberbauung bildet ein sympathisches Beispiel für einen gehobenen Wohnstandard, wobei es gelang, durch ein diszipliniertes und bis ins Detail sorgfältig durchgeführtes Konzept in Technik und Architektur sowie durch die Wahl von einfachen Materialien jede manierierte Aufdringlichkeit zu vermeiden.

### 3. Mehrfamilienhaus mit Ateliers, Wettingerwies 2

Hier gefällt die situationsgemässe Disziplin, die es ermöglichte, ein modernes Wohn- und Geschäftshaus (Galerie und Architekturbüro) in zurückhaltender Weise in die Biedermeierumgebung einzuordnen. Mit einfachen Mitteln wird eine künstlerische Wirkung erreicht. Ausserdem gelang es, einen «Hinterhof» als kleine «Quartier-Piazza» zu gestalten und zu beleben.

### 4. Alterswohnheim «Grünhalde», Grünhaldenstrasse 19

Dieser Bau verdient vor allem eine Auszeichnung durch die menschlich sympathische Atmosphäre im Innern, insbesondere durch eine hervorragende Innengestaltung von Aufenthalts- und Essraum. Zudem vermittelt das Treppenhaus mit seinen Galerien wohltuende räumliche Durchblicke. Durch eine sinnvolle Material- und Farbwahl wurde für die Bewohner ein Gefühl der Geborgenheit erreicht.

### 5. Fernbetriebszentrum Aargauerstrasse 10

Das der Technik dienende Gebäude überzeugt durch seinen aus der besonderen Gebäudefunktion entwickelten architektonischen Ausdruck, seine materialgerechte äussere Gestaltung und die bis ins Detail konstruktiv sorgfältige innere Durchbildung. Die systematische Verwendung des Materials führt zu einer überzeugenden Einheit.

### 6. Universität Zürich-Irchel, Winterthurerstrasse 190

Durch die Konzentration der Anlage gelang es, ein relativ weiträumiges Umgelände freizuhalten, wobei durch Gliederung und Staffelung der Bauten sowie durch eine massvolle Höhenbeschränkung der exponierten Lage Rechnung getragen wurde. Die komplexe Ueberbauung wahrt ihre Uebersichtlichkeit durch eine klare Gliederung. Die zentrale Fussgängerachse und die Einblicke in die offenen, unterschiedlich gestalteten Höfe helfen eine Monotonie zu vermeiden. Die Beschränkung auf wenige Materialien im Aeusseren und Inneren wirkt wohltuend.

### 7. Botanischer Garten und Institutsneubauten der Universität Zürich, Zollikerstrasse 107

Die zurückhaltende, naturnahe Gestaltung der einzelnen Landschaftsbereiche sowie die formal einfachen und konsequent durchgebildeten Tropenhäuser entsprechen in hervorragender Weise den Lebensbedingungen der vielfältigen Pflanzenwelt. Die grossen Plexiglaskuppeln der Treibhäuser und ihre dunkle Tönung fügen sich ausgezeichnet in die Landschaft ein. Eine bemerkenswerte architektonische und technische Leistung, die dem Programm gerecht wird.

### 8. Schulhaus Grünauring 26/30

Die natürlich und unaufdringlich entwickelte Schulanlage steht in angenehmem Kontrast zu den grossen, umgebenden Hochbauten. Sie zeigt einen lebendigen inneren Ablauf unter erfreulich einfacher Verwendung von Material und Farbe. Der bescheidene Kubus erfährt durch die runden Treppenhäuser eine willkommene Gliederung. Im ganzen wurde ein grosses Programm auf wohltuende Weise verwirklicht.

### 9. Hallenbad Oerlikon, Wallisellenstrasse 100

Das Projekt zeichnet sich aus durch die räumliche und kubische Bewältigung des sich aus einem vielseitigen Programm ergebenden grossen Bauvolumens, wobei sich der Bau in den städtebaulichen Rahmen wohltuend einfügt.

Die Verteilung der Auszeichnung an die Bauherren und Architekten wird im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Freitag, den 27. März 1981, vorgesehen ist. Gleichzeitig wird im Stadthaus eine Ausstellung über sämtliche bisher erfolgten Auszeichnungen durchgeführt. Die Presse und die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten erhalten zur gegebenen Zeit noch eine besondere Einladung.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anzufertigen und die Vorbereitungen für die Ausstellung im Stadthaus und die Uebergabefeier im Muraltengut treffen zu lassen.

4. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs

(Hochbauamt) belastet.

5. Der Vorstand des Bauamtes I wird eingeladen, im Muraltengut durch das Gartenbauamt einen angemessenen Blumenschmuck anbringen zu lassen.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes I und II (3), das Gartenbauamt, das Hochbauamt (4), das Hochbauinspektorat, die Mitglieder der Jury für die Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten und durch Zuschrift an die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 11 回議事録 (1985 年 2 月 6 日)

<11> 416. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Seit 1945 verleiht der Stadtrat alle vier Jahre Auszeichnungen für gute Bauten. Von den in der Zeit vom März 1980 bis Dezember 1984 erstellten Bauten konnte das Hochbauamt 153 zur Besichtigung und Prüfung vorschlagen. Die Jury benötigte für ihre Arbeit

4 Tage und beantragt dem Stadtrat 12 Objekte auszuzeichnen. Es handelt sich um vier Wohnüberbauungen, eine Wohnüberbauung mit Büros und Ladenzentrum, ein Wohn- und Bürohaus, ein Bürohaus, zwei Industriebauten, ein Einfamilienhaus, eine Kirche und ein Krankenhaus.

In den letzten Jahren hat sich als neues Thema das Problem gestellt, Neubauten bzw. Neubauteile in die Altsubstanz einzufügen. Dabei haben sich in zwei Fällen sehr interessante Lösungen gezeigt. An der Wolfbachstrasse/Hottingerstrasse wurden Denkmalschutzobjekte durch Zwischenbauten geschickt miteinander verbunden. Im zweiten Fall wurde im alten Fabrikgebäude Reishauer eine baugewerbliche Schule eingerichtet. Beide Lösungen wurden zwar sehr positiv bewertet, jedoch noch nicht als auszeichnungswürdig taxiert.

Die Übergabe der Auszeichnungen erfolgt, wie gewohnt, an einer kleinen Feier im Muraltengut, die auf Donnerstag, den 28. Februar 1985, festgesetzt ist und durch das Bauamt II organisiert wird. Die Kosten gehen zu Lasten der entsprechenden Konti des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt).

Auf den im Einvernehmen mit dem Stadtpräsidenten gestellten Antrag des Vorstandes des Bauamtes II beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten Bauherren und Architekten gemäss Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am betreffenden Haus anzubringende Bronzetafel. Beim städtischen Bau erhält lediglich der Architekt eine Urkunde.

2. An die mit Auszeichnung bedachten Architekten und Bauherren wird geschrieben:

Seit 1945 nimmt der Stadtrat alle vier Jahre Auszeichnungen guter Bauten vor, d.h. von Bauten, die als überdurchschnittlich und wegweisende Lösungen angesehen werden. Die Bauherren - soweit dies nicht die Stadt selber betrifft - und die Architekten solcher Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am betreffenden Hause anzubringende Bronzetafel, ausgezeichnet werden. 153 Objekte wurden durch eine Jury beurteilt. Diese stand unter dem Vorsitz von Stadtpräsident Dr. Thomas Wagner. Ferner gehörten ihr an: Stadtrat Hugo Fahrner, die Architekten Paul Biegger, Mario Campi, Florian Vischer, Stadtbaumeister Adolf Wasserfallen und als Sekretär Dr. R. v. Tscharnier.

Auf den Antrag der Jury hat der Stadtrat die Auszeichnung von zwölf Objekten beschlossen. Die Reihenfolge bedeutet dabei keine Rangordnung:

1. Wohnüberbauung Winzerhalde 16 bis 42

Die Bereitschaft der Bauherrschaften, ein aus einem Architekturwettbewerb entstandenes Projekt als Gemeinschaftswerk durchzuführen, hat zu einer lebendig gestalteten Wohnüberbauung mit gut dimensionierten Aussenräumen geführt. Das Projekt zeichnet sich durch eine sehr interessante städtebauliche Haltung unter Einbezug der Flusslandschaft aus und zeigt eine sympathische, menschliche Atmosphäre. Die Grundrisse sind durchdacht. Material- und Farbgebung sind positiv zu werten.

#### 2. Lehrlingsausbildungszentrum BBC, Werk Oerlikon, Affolternstrasse 52

Das Gebäude ist eine geschickte Synthese zwischen einem Schul- und Industriebau. Die volumetrischen und die räumlichen Verhältnisse überzeugen. Besonders zu erwähnen ist die differenziert gestaltete Werkhalle und die konsequente Haltung der konstruktiven Durchbildung. Das provokative Gelb überrascht

und ist nicht unbedingt eine Metallfarbe, vermag aber das Gebäude aus seiner eintönigen Umgebung hervorzuheben.

#### 3. Wohnsiedlung und Gewerbehäuser Altried

Diese geglückte Wohnüberbauung am Stadtrand mit einem vielfältigen Wohnangebot und die daraus resultierende grosse Baumasse ist architektonisch und massstäblich interessant gestaltet. Die grosszügig konzipierte Verbindungshalle mit vielfältigen Zugängen bildet ein interessantes Experiment, die Bewohner zusammenzuführen und die Wohngemeinschaft zu fördern. Auch der gemeinsame Hof zwischen den Bauten weist hohe Qualitäten auf.

#### 4. Einfamilienhaus Krähbühlweg 17

Der Bau zeigt eine sensible Einordnung in die Landschaft. Er öffnet sich gegen Garten und Wald und wendet sich durch die geschlossene Fassade von der Strasse ab. Hervorzuheben sind die differenzierte Raumfolge und die Durchblicke im Inneren des Hauses. Die konsequente Haltung in Material und Farbe bildet einen weiteren positiven Beitrag. Die Orientierung nach Norden mit Blick in den besonnten Garten kann bei einem Eigenheim in dieser Situation akzeptiert werden.

#### 5. Wohn- und Bürohaus, Keltenstrasse 45

Das gestaltete Thema, eine Kombination von Wohn- und Arbeitsräumen in einem Baukörper zu einer Einheit zu vereinigen, ist geschickt gelöst. In dieser Beziehung sind die getrennten Eingänge hervorzuheben. Gut wirkt die städtebauliche Einordnung in eine differenzierte Umgebung mit Solitärbauten. Die Konsequenz der Materialverwendung fällt angenehm auf.

#### 6. Krankenhaus Witikon

Das formal gute Gebäude weist konstruktiv anspruchsvolle Details auf. Die sorgfältige Durcharbeitung bis in die Einzelheiten mit den lebendig gestalteten Grundrissen, mit der differenzierten Lichtführung fördert die Wohnlichkeit des Heimes. Kritisch ist lediglich die Garageneinfahrt, die jedoch durch die topographischen Verhältnisse weitgehend bestimmt ist.

#### 7. Reiheneinfamilienhäuser, Kienastewiesweg 26 bis 34

Der Bau zeichnet sich durch eine formal sehr gute Lösung aus. Die unkonventionelle Form der Grundrisse ist bedingt durch den Zuschnitt des Baugeländes. Die Strassen- und die Wohnseite finden jeweils ihren adäquaten Ausdruck : Abschirmung gegen die Strasse, Öffnung zum Gelände. Die formale Differenzierung von Strassen- und Wohnseite ist überzeugend.

#### 8. Stadelhofer Passage

Die Baugruppe führt zu einem interessanten Dialog mit den bestehenden Denkmalschutzobjekten. Hervorzuheben ist die räumlich lebendige Gestaltung des Fussgängerbereiches. Durch die differenzierte Nutzung waren vielfältige architektonische Aufgaben zu lösen, was hier vorbildlich gelang. Hervorzuheben ist auch die konsequente Materialbehandlung, Die Wohnungen weisen gute Grundrisse auf.

#### 9. Bürohaus Miinzplatz 3

Der Bau bildet eine interessante Ecklösung. Der Übergang zur Kirche vermag nicht voll zu überzeugen. Jedoch ist die Überleitung von Bahnhofstrasse zur Altstadt gelungen. Die Proportionen sind angenehm. Die Durcharbeitung ist ausserordentlich seriös. Architektur und Materialwahl werden für diese Aufgabenstellung als gutes Beispiel anerkannt.

#### 10. Zeitungsdruckerei Bubenberg

Es handelt sich um einen Industriebau von guter Qualität, der infolge seiner bescheidenen Haltung sehr sympathisch wirkt. Seine Gesamtanlage ist in jeder Beziehung positiv zu bewerten, wenn auch die Behandlung einiger Detailspekte nicht immer überzeugt.

#### 11. Überbauung Manessehof, Uetlibergstrasse 20/Hopfenstrasse 11

Der Bau bildet eine gute Antwort auf eine präzise städtebauliche Situation. Das aktuelle Thema einer Hofrandüberbauung fand eine konsequente Bewältigung. Der Übergang zwischen der bestehenden Bausubstanz und dem Neubau ist feinführend gelöst. Der Quartiercharakter wurde aufgenommen. Die Einordnung ist massstäblich richtig. Alle Wohn- und Schlafräume sind gegen den grossen und freien Innenhof gerichtet. Aktuelle architektonische Tendenzen wurden gut in die funktionell angepasste Form gebracht. Ausserdem sind die gut funktionierenden Grundrisse positiv zu bewerten.

#### 12. Kirche, Am Suteracher 2

Trotz seiner kleinen Dimension kommt der sakrale Charakter des Gebäudes gut zum Ausdruck. Der Innenraum weist insbesondere durch die geschickte Lichtführung grosse Qualitäten auf. Mit einfachsten Mitteln ist es gelungen, einen stimmungsvollen Raum zu schaffen.

Die Verteilung der Auszeichnung an die Bauherren und Architekten wird im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltengut erfolgen, die auf Donnerstag, den 28. Februar 1985, festgesetzt ist, wobei auf die separate Einladung verwiesen wird.

3. Der Vorstand des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anzufertigen und die Vorbereitungen für die Ausstellung im Stadthaus und die Übergabefeier im Muraltengut treffen zu lassen.

4. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konten des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt) belastet.

5. Der Vorstand des Bauamtes I wird eingeladen, im Muraltengut durch das Gartenbauamt einen angemessenen Blumenschmuck anbringen zu lassen.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes I und II, das Stadtarchiv, das Gartenbauamt, das Hochbauamt (4), das Hochbauinspektorat, die Mitglieder der Jury für die Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten und durch Zuschrift an die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

#### • 第 12 回議事録 (1991 年 11 月 6 日)

<12> 3240. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten. Seit 1945 verleiht der Stadtrat in regelmässigen Abständen, im Durchschnitt alle 4 Jahre, Auszeichnungen für gute Bauten. Dieses Jahr schlug das Hochbauamt der Jury zur Beurteilung 168 Bauten vor, die zwischen Januar 1985 und Dezember 1990 fertiggestellt wurden. Nach einer Vorausscheidung besichtigte die Jury an drei Tagen insgesamt 45 Objekte. Sie beantragt dem Stadtrat, 11 Bauten bzw. Massnahmen an bestehenden Bauten auszuzeichnen. Es handelt sich um zwei bahnbezogene Bauten, die Erweiterung eines Spitaltraktes, ein Geschäftshaus, ein Provisorium für Hochschulzwecke, eine Reihenwohnhauszeile, ein Wohnhaus, eine Villa sowie die Restauration bzw. Renovation einer Wohnsiedlung, einer Reihenwohnhauszeile und eines Wohnhauses aus dem frühen 19. Jahrhundert.

Nachdem das Thema Renovation und Umbauten bereits bei der letzten Jurierung diskutiert wurde (vgl. StRB Nr. 416/1985),

bezog die Jury dieses Jahr auch Massnahmen an bestehenden Bauten - wie namentlich das Weiterbauen in und an Altbauten oder aber ihr Instandstellen - in einem umfassenden Sinne in die Beurteilung ein. Dieser Gruppe ist mehr als die Hälfte aller Bauvorhaben zuzurechnen, wobei nur zu einem kleinen Teil Denkmalschutzobjekte betroffen sind. Der angemessene Umgang mit vorhandener Architektur ist von grosser kultureller Bedeutung für die Stadt und ihre Geschichte. Jeder Eingriff in die Stadt, ob Renovierung, Umbau oder Weiterbau, verlangt eine intellektuelle Auseinandersetzung mit den unterschiedlichen Zeitschichten. Das heisst: Geschichte muss lesbar bleiben, ohne dass der Raum oder die Stadt etwas Additives, Zusammenhangloses erhalten. Bauherr und Architekt sind mitverantwortlich dafür, wie weit Eingriffe erfolgen dürfen bzw. müssen. Das Mass des Eingriffs wird von der Bedeutung und dem Zustand des Gebäudes, vom städtebaulichen Umfeld, aber auch von der angestrebten (neuen) Nutzung bestimmt. Dabei muss es gelingen, die neuen Elemente mit den historischen Schichten zu verknüpfen, ohne dass Übergänge verschliffen werden. Es ist wichtig, dass neue Schichten entstehen, denn durch sie entsteht Geschichte, wird Geschichte sichtbar gemacht. Nur so bleibt die Stadt lebendig und wird sie nicht zur Kulisse.

Eine Aufgabe, die zunehmend an Bedeutung gewinnt, ist die Stadtreparatur: das Beheben von Widersprüchlichkeiten im Stadtbild, die das Ergebnis von allzu sorglosen und unüberlegten Eingriffen früherer Zeit sind. Ein interessantes Beispiel dafür stellt die Neugestaltung des Sockelgebäudes beim Migros-Hochhaus am Limmatplatz dar, die eine deutlich bessere räumliche Fassung des Platzes und des Strassenraumes erbracht hat. Diese Massnahme ist positiv zu bewerten, auch wenn die bauliche Zufügung im Detail nicht als auszeichnungswürdig erachtet wird.

Von den beurteilten Wohnüberbauungen konnte nur jene an der Hardeggstrasse in Höngg ausgezeichnet werden. Einen interessanten städtebaulichen Ansatz weist die Überbauung Lommisweg an der Ecke Hohlstrasse/Altstetterstrasse auf, und innenräumliche Qualitäten haben die Wohnungen der Überbauung am Zwängiweg, doch wird in beiden Fällen das Niveau der Auszeichnungswürdigkeit nicht erreicht.

Ebenfalls einer eingehenden Prüfung wurden die Ausrüstungselemente im öffentlichen Raum, insbesondere die zahlreichen in den letzten Jahren erstellten Tramwartehallen unterzogen. Diese Elemente sind für das Stadtbild von grosser Bedeutung. Die Anstrengungen zu ihrer besseren Gestaltung und sorgfältigeren Platzierung sind zu begrüßen. Insbesondere die Neugestaltung des Albisriederplatzes weist interessante Ansätze auf, die jedoch für eine Auszeichnung nicht genügen.

Die Übergabe der Auszeichnung erfolgt, wie gewohnt, an einer kleinen Feier im Muraltengut, die auf Donnerstag, den 5. Dezember 1991, festgesetzt ist und durch das Bauamt II organisiert wird. Die Kosten gehen zu Lasten der entsprechenden Konti des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt). Auf den Antrag der Vorsteherin des Bauamtes II beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den in Ziffer 2 genannten Bauherren und Architekten gemäss Antrag der Jury als Auszeichnung der Stadt Zürich für gute Bauten je eine Urkunde und den Bauherren überdies eine am bzw. im betreffenden Haus anzubringende Bronzetafel.

2. An die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten wird geschrieben:

Seit 1945 verleiht der Stadtrat in regelmässigen Abständen, im Durchschnitt alle 4 Jahre, Auszeichnungen für gute Bauten. Ausgezeichnet werden Bauten und Massnahmen an bestehenden Bauten, die als überdurchschnittlich und wegweisende Lösungen angesehen werden. Die Bauherren und Architekten solcher Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherren überdies durch eine am bzw. im betreffenden Haus anzubringende Bronzetafel ausgezeichnet werden. Rund 170 Objekte wurden durch eine Jury beurteilt. Diese stand unter dem Vorsitz von Stadträtin Dr. Ursula Koch. Ferner wirkten in ihr mit: Stadtbaumeister Hans- Rudolf Rüegg, die Architektin Katharina Steib, die Architekten Prof. Mario Campi, Prof. Franz Oswald und Prof. Karljosef Schattner sowie mit beratender Stimme Denkmalpfleger Dieter Nievergelt, Leiter Bauberatung und -begutachtung Beat Maeschi und Dr. Christoph Schaub als Sekretär. Auf den Antrag der Jury hat der Stadtrat die

Auszeichnung der nachstehend bezeichneten 11 Objekte beschlossen. Die Reihenfolge bedeutet dabei keine Rangordnung:

#### A. Kategorie Neubauten (einschliesslich neubauähnliche Umbauten)

##### 1. Erweiterung Bahnhof Stadelhofen

Verkehrsmittel prägen das Leben der Menschen. Damit zusammenhängende Bauten können deshalb nicht nur als technische Lösung projektiert und ausgeführt werden, sondern müssen als kulturelle Aufgabe wahrgenommen werden. Der Ausbau des Bahnhofs Stadelhofen ist von der Bauherrschaft als ein bedeutender städtebaulicher Eingriff erkannt worden. Mit dem Neubau der Bahnhofumgebung Stadelhofen ist ein Stück Stadtopographie architektonisch geprägt worden. Tunnelort, Stützmauern und Dächer sind plastisch formuliert, die Kräfte des Erddrucks werden widergespiegelt. Besonders schön wird in der Unterführung das «Unterirdische» zu einem Erlebnismoment gestaltet. Die darüberliegenden Lasten werden sichtbar bewältigt, eine raffinierte Lichtführung steigert den höhlenartigen Eindruck und erzeugt gleichzeitig eine geborgene Atmosphäre. Ein Stück Stadt hat eine unverwechselbare Identität erhalten.

##### 2. Aufnahmegebäude Bahnhof Stadelhofen

Mit dem Entschluss, das historische Aufnahmegebäude des Bahnhofs Stadelhofen in seiner äusseren Erscheinung zu erhalten, wurde ein wichtiger Beitrag für die Stadt und den Stadtraum erbracht. Die neu eingefügte Baustruktur ist bewusst von der historischen Raumschale abgesetzt, sie stellt dennoch einen präzisen Bezug zur Hülle bei. Innenräumliche Entwicklung, Lichtführung und Durchgestaltung der neuen Bauteile im Detail sind von hoher Qualität. Sie streben keine Anbiederung an den klassizistischen Stil der Gebäudehülle an, sondern sind mit den Elementen und den Materialien unserer Zeit gestaltet.

##### 3. Wohnhaus Josefstrasse 176

Die Gesamterneuerung des Gebäudes ist ein gelungenes Beispiel für den Weiterbau in und an der Stadt. Das Auswechselln der inneren Struktur wird nach aussen zur Strasse hin in der Erdgeschosszone deutlich gezeigt, die Hoffassade ist verändert, lässt aber die frühere Ordnung erkennen. Die innenräumliche Entwicklung und die verwendeten neuen Elemente sind von hoher Qualität.

##### 4. Villa Südstrasse 41

In einer landschaftlich empfindlichen Umgebung ist die Villa als stark raumwirksamer Einzelbau sorgfältig eingefügt worden. Baukörper und umgebender Raum treten zueinander in einen Dialog, verstärken sich gegenseitig in ihrer Wirkung. Diese Wirkung wird gesteigert durch den klaren und einfachen Gebäudeaufbau und die in ihrer Kargheit edle Durchgestaltung des Baukörpers. Die interessante Lichtführung bewirkt eine hohe räumliche Qualität im Gebäudeinnern. Das Zusammenwirken von Bauherrschaft und Architekt hat zu einer vorbildlichen Lösung der Bauaufgabe geführt.

##### 5. Wohn- und Ateliergebäude REZ, Hardegstrasse 17-23

Das Gebäude reagiert sehr bestimmt auf die örtlichen Verhältnisse. Es prägt mit seiner dem Flussbogen folgenden Südfassade sehr stark den Flussraum und fasst auf der Rückseite den Strassenraum. Die Ateliers, der klare Gebäudeaufbau und die bewusst einfache Durchgestaltung der Fassaden erinnern an den Fabrikbau, der hier früher stand. Das Gebäude erbringt einen wertvollen Beitrag zum Thema des Wohnungsbaus. Die Haltung und Gesinnung, die die private Bauherrschaft mit diesem Neubau ausdrückt, verdient Anerkennung.

##### 6. Provisorische Erweiterungsbauten für Zeichensäle ETH Hönggerberg

Das Provisorium für Zeichensäle der ETH Hönggerberg erfüllt die Ansprüche, die an gute definitive Architektur gestellt werden: Klarheit und Ablesbarkeit der Form, Funktion und Konstruktion. Als Holzbau-Provisorium eignet ihm zudem ein Vorzug, den definitive Bauten heute nur noch ausnahmsweise erreichen - eine Harmonie von Material und

Materialverarbeitung, die aussen und innen gleichermaßen erlebbar ist.

#### 7. Geschäftshaus Thurgauerstrasse 56

Das Geschäftshaus besticht durch seine prägnante, schlicht und elegant differenzierende Architektur. Streng, direkt ablesbar aus den funktionalen und technischen Notwendigkeiten heraus entwickelt, wirkt sie leicht, beschwingt, heiter. Die äussere Umgebung erhält dadurch einen unverwechselbaren Charakter, unvergesslich das Quartierbild formend; im Innern ist eine klare, angenehme Atmosphäre mit reichhaltigem Nutzungsangebot geschaffen. Dank geschickter Anordnung sowie sinngebender Ausformung der notwendigen Bauteile ist eine Architektur ohne unnützes formales und technisches Beiwerk (Klimaanlage z. B.) verwirklicht worden. Die Architektur dieses Geschäftshauses lässt eine Baugesinnung erkennen, die willens ist, Interessen und Imagepflege einer privaten Bauherrschaft mit den hohen Anforderungen, die an die Architektur eines Stadtteiles gestellt sind, in Einklang zu bringen.

#### B. Kategorie Umbauten, Renovationen, Restaurationen, bauliche Erweiterungen

#### 8. Renovation Werkbundsiedlung Neubühl

In beispielhafter Weise überzeugt diese Renovation durch ihr Ergebnis in architektonischer Hinsicht; durch die gründlich genaue Vorgehensweise zu ihrer Vorbereitung und Begleitung; durch die Beteiligung der Bewohnerschaft. Die technischen und gestalterischen Massnahmen, mit denen die erforderlichen bau- und energietechnischen Verbesserungen erzielt wurden, zeichnen sich im einzelnen

durch meisterhafte Werktreue aus. Der respektvolle, kultivierte Umgang mit der Bausubstanz eines für das Neue Bauen wichtigen Zeugnisses von Stadtarchitektur und der Wille, die ursprünglichen Ausdrucksformen unverfälscht zu erhalten, zeugen von einer hohen, an zeitbeständigen Massstäben orientierten Baugesinnung.

#### 9. Restauration Hauser Wasserwerkstrasse 27-31, 8006 Zürich

Stimmung und Ausstrahlung der Häuser des Neuen Bauens beruhen in höchstem Masse auf den originalen Baumaterialien und Innenausstattungen (Putz, Fenster, Beschläge, Einbaumobiliar, Sanitärapparate, Farben usw.). Mit grosser Sachkenntnis und Fingerspitzengefühl - sowie auch gestützt auf gründliche Untersuchungen - sind diese schönen, einfachen Wohnungen vorbildlich restauriert worden. Wo immer möglich wurden ursprüngliche Bauteile erhalten oder in gleicher Art ersetzt. Gebrauchs- und Altersspuren durften bleiben. Die Bewohner achten den Geist des Hauses, leben mit den Unperfektheiten als einer Bereicherung besonderer Art, sammeln auch Möbel aus der Zeit, so dass heute der Eindruck entsteht, das Gebäude sei über die Jahre hin ununterbrochen verständnisvoll bewohnt und unterhalten worden.

#### 10. Erweiterung und Sanierung des Hörsaaltraktes am Universitätsspital

In vorbildlicher Art ist ein neuer Gebäudeteil in das schützenswerte Gebäudeensemble der Architekten Häfeli, Moser und Steiger eingefügt worden. Durch eine auf den Altbau abgestimmte Materialwahl und Durchgestaltung der Details ordnet sich der neue Gebäudeteil aussen wie im Innern dem Altbau unter, durch die Rundform setzt er sich gleichzeitig klar ab und bleibt so als Ergänzung lesbar. Der neue Hörsaaltrakt besticht durch seine hohe architektonische Qualität und durch die klare Art, in der die neuen, dem Raumprogramm entsprungenen Teile in den Altbau eingefügt worden sind.

#### 11. Restauration und Umbau der zwei Gebäude Freiestrasse 119

Ein Wohnhaus, das 1827 in biedermeierlich sparsamem Klassizismus gebaut wurde, ist sorgfältig instandgestellt und heutigen Anforderungen angenähert worden. Die notwendigen baulichen Eingriffe und Beifügungen sind ablesbar und dabei so gelöst, dass sie den Reiz der ursprünglichen baulichen Strukturen und Oberflächen steigern. Die unpräzise Art, mit der ein für die Geschichte des Quartiers wichtiger Zeuge baulich weiterentwickelt wurde, ist vorbildlich.

Der Stadtrat freut sich, die Auszeichnungen den Bauherren und Architekten im Rahmen einer kleinen Feier im Muraltentgut, die am Donnerstag, 5. Dezember 1991, stattfinden wird, zu überreichen. Eine separate Einladung wird folgen.

3. Die Vorsteherin des Bauamtes II wird eingeladen, die Urkunden und Bronzetafeln anfertigen und die Vorbereitungen für die Übergabefeier im Muraltengut treffen zu lassen.

4. Die Kosten für die Verleihung der Auszeichnungen werden den entsprechenden Konti des Ordentlichen Verkehrs (Hochbauamt) belastet.

5. Der Vorstand des Bauamtes I wird eingeladen, im Muraltengut durch das Gartenbauamt einen angemessenen Blumenschmuck anbringen zu lassen.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstände des Finanz- und des Bauamtes I und II, das Stadtarchiv, das Gartenbauamt, das Hochbauamt (4), das Hochbauinspektorat, die Mitglieder der Jury für die Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten (8) und durch Zuschrift an die mit Auszeichnung bedachten Bauherren und Architekten.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber

· 第 13 回議事録 (1995 年 5 月 15 日)

<13> 1301. Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten, 1991 bis 1994, Zuschrift an die Bauherrschaften, Architektinnen und Architekten. Auf den Antrag der Vorsteherin des Bauamtes II wird an die diesjährigen Träger und Trägerinnen der Auszeichnungen für gute Bauten geschrieben:

Seit 1945 verleiht der Stadtrat in regelmässigen Abständen, im Durchschnitt alle vier Jahre, Auszeichnungen für gute Bauten. Ausgezeichnet werden Um- und Neubauten, die als überdurchschnittliche und wegweisende Lösungen angesehen werden. Die Bauherrschaften, Architektinnen und Architekten solcher Bauten sollen durch eine Urkunde, die Bauherrschaften überdies durch eine am oder im betreffenden Haus anzubringende Bronzetafel ausgezeichnet werden. Rund dreissig Objekte sind nach einer Vorauswahl durch eine Jury beurteilt worden. Die Jury stand unter dem Vorsitz von Stadträtin Dr. Ursula Koch, und es gehörten ihr im weiteren Stadträtin Kathrin Martelli, Stadtbaumeister Hans Rudolf Rüegg sowie die Architekten Prof. Hans Kollhoff (Berlin), Prof. Karljosef Schattner (Eichstätt) und Peter Zumthor (Haldenstein/GR) an. Mit beratender Stimme wirkten ferner Denkmalpfleger Dieter Nievergelt, der Leiter des städtischen Büros für Architektur und Stadtbild, Beat Maeschi, sowie, als Sekretär, Dr. Dominik Bachmann mit. Die ebenfalls als Jurorin gewählte Architektin Katharina Steib musste sich entschuldigen.

Der Stadtrat hat die Auszeichnung der nachstehend aufgeführten sieben Objekte beschlossen (die Reihenfolge richtet sich nach Stadtkreisen und bedeutet keine Rangordnung). Er folgt damit dem Antrag der Jury, die zur diesjährigen Auswahl und zu den ausgezeichneten Objekten folgendes festgehalten hat:

#### Vorbemerkung

Die Jury schlägt dem Stadtrat die Auszeichnung einiger qualitätvoller, für sich genommen überzeugender Bauten vor. Die Jury hat die gestellte Aufgabe ernstgenommen, da sie der Auffassung ist, dass in Zürich eine Bausubstanz vorhanden ist, die es zu fördern gilt. Gemessen an diesem Massstab kann sie nur wenige Bauten als auszeichnungswürdig erachten. Zu viele Bauten gefallen sich in ihrem vermeintlichen Ausnahmecharakter und nagen an der vorhandenen Struktur, anstatt sie zu stärken, fortzusetzen und weiter zu verfeinern. Dabei gibt es in Zürich eine eindrucksvolle moderne Tradition städtischen Bauens, an die man anknüpfen könnte.

Das anspruchsvolle Bauen in der Stadt Zürich, so wie es sich der Jury im Überblick über die letzten fünf Jahre Bautätigkeit darbietet, ist zum einen geprägt von einigen Solitärbauten, die sich auf dem Hintergrund des historischen Stadtkörpers als besondere Objekte hervortun. Zum andern zeigen viele gute Neubauten einen Zug ins Leichtgewichtige, elementhaft

Gefügte und Verkleidete, das ländlich wirkt und kaum auf die Kraft und Präsenz des historischen Stadtkörpers, auf dessen Urbanität einzugehen scheint. Neubauten, die auf die historische Masse der Stadt, die aus Stein gebaute Urbanität eingehen und an dieser weiterbauen, sind der Jury erstaunlicherweise nicht zu Gesicht gekommen.

Die Würdigung eines Bürohauses, das sich dieses Massstabes bewusst ist und gleichwohl als baulicher Ausdruck unserer Zeit verstanden wird, oder eines städtischen Wohnhauses, das sich nicht provisorisch gibt und nicht lieber im Grünen sein will, wird einer kommenden Jury vorbehalten sein.

#### Zürich Hauptbahnhof: S-Bahnhof Museumstrasse und unterirdische Ladenpassagen

Der im Untergrund des Hauptbahnhofes Zürich gebaute S-Bahnhof mit den zuführenden neuen Ladenpassagen ist eine wichtige Erweiterung der bestehenden Anlage, und die Bauherrschaft hat diesen Ausbau auch als seine wichtige kulturelle Aufgabe verstanden. Das Ergebnis unterscheidet sich wohltuend von ähnlichen Einrichtungen in anderen grossen Städten: Mit Hilfe der eingesetzten Elemente, der Materialien und der Lichtführung ist es gelungen, der Stadt an diesem Ort Räume mit einer geborgenen Atmosphäre anzubieten, die von nobler Zurückhaltung sind.

Indem Untergrund und oberer Bahnhof in der historischen Bahnhofshalle miteinander verknüpft werden, kann diese Halle von störenden Einbauten befreit werden, so dass ein grosszügiger öffentlicher Raum entsteht. Man möchte hoffen, dass unnötige Möblierungen, die diese Grosszügigkeit stören, auf beiden Ebenen unterbleiben.

#### Boutique Issey Miyake, Storchengasse 7/In Gassen

Die einfache Innenarchitektur dieser Boutique in einer versteckten Ladenpassage entwickelt aufgrund grosszügiger Proportionierung, sorgfältiger Materialwahl und intelligenter Detaillierung eine intime, dem Verkauf dienliche Atmosphäre einerseits und eine grossstädtische Ausstrahlung andererseits. Die einfühlsame Auseinandersetzung mit der Aufgabe und den Bedingungen des Ortes hat hier einen Raum hervorgebracht, dessen Poesie in Erinnerung bleiben wird, wenn ihn einmal das Schicksal der jeder Lederarchitektur eigentümlichen Kurzlebigkeit ereilen wird.

#### Konferenzgebäude Grünenhof, Nüscherstrasse 9

Beengte Verhältnisse innerhalb einer Blockrandbebauung werden in Kauf genommen zugunsten eines Bankkonferenzentrums weltstädtischer Prägung in zentraler Citylage. Transparenz und konstruktive Leichtigkeit wollen hier nicht plakativer Kontrast zur historischen Stadtstruktur sein, sondern werden in Erfüllung funktionaler Anforderungen konzeptionell verarbeitet: eine zerbrechliche Vitrine, geschützt von der muralen Kruste der Hofrandbebauung. Die Funktionalität des Gebäudes ist von ebenso herausragender Qualität wie seine filigrane, bis ins Detail ausgefeilte Konstruktion. Im Verborgenen hat die Stadt hier einen Ort gewonnen, der die Bankenmetropole angemessen zur Darstellung bringt.

#### Brahmshof, Brahmsstrasse 22 bis 44

Die aus einem Wettbewerb hervorgegangene Wohnanlage Brahmshof schliesst ein Geviert im baulichen Gewebe der Stadt mit dem klassischen Typus des Wohnhofes und gibt dem Stadtkörper zwei wichtige Elemente: die geschlossene, strassenbegleitende Fassade zum öffentlichen Raum hin und den Innenhof als halböffentliche Zone. Diese typologische Setzung überzeugt durch ihre Einfachheit und Klarheit.

Die angebotenen Wohnungen sind zweckmässig zugeschnitten und entsprechen dem sozialen Charakter der Bauaufgabe. Gemeinnützige Einrichtungen, die im Komplex integriert sind, ergänzen das Angebot.

Der Brahmshof zeigt auf, was der klassische Bautypus eines Laubenganghofes mit seinen abgestuften Zonen von Öffentlichkeit und Privatheit als Form des städtischen Wohnens auch heute noch zu leisten vermag. Mit der Auszeichnung des Brahmshofes wird die Leistung der Bauträgerin gewürdigt, in einem für das soziale Leben der Stadt wichtigen Stadtteil

eine Wohnanlage zu schaffen, die preisgünstiges und gemeinschaftsbezogenes Wohnen im Quartier ermöglicht, und dies in einer architektonischen Form, die Identität zu stiften vermag.

Geschäftshaus Apollo, Stauffacherstrasse 41

Das Apollo-Geschäftshaus der Schweizerischen Bankgesellschaft ordnet sich ruhig und vornehm in die hier durch Hofrandbebauungen geprägte Stadtstruktur ein. Die leicht geschwungene Hauptfassade und die hochgezogene Gebäudeecke stellen dabei eine bewusste Abweichung vom städtebaulichen Grundmuster dar, die als Reaktion auf die gegenüberliegende öffentliche Grünanlage gelesen werden kann.

Die beiden Nachbarhäuser an der Stauffacherstrasse und der St. Jakobstrasse werden durch das präzise Anschliessen und den materialmässigen Kontrast in ihrer Wirkung aufgewertet. Die volumetrisch interessante Durchbildung und die besonders sorgfältige Gestaltung der Hofseite bringen eine Bereicherung in diesen wichtigen Freiraum.

Technopark Zürich, Technoparkstrasse 1

Das Gebäude bietet eine räumliche Hülle für eine beabsichtigte neue Form des Zusammenwirkens von Produktion, Forschung, Entwicklung, Schulung und Waren- und Informationsaustausch. Der Baukörper bringt diesen Inhalt zum Ausdruck, indem eine hohe zentrale Halle, die als Kontaktzone dient, ein Gebäudesockel mit Werkhallen und drei darüber hinwegführende Gebäudezeilen zu einer interessant gegliederten Grossform zusammengefügt sind. Mit der Gestaltung des Volumens – beispielsweise den schlanken Gebäudeköpfen – und mit einfachen Materialien wird eine Bereicherung der hier sehr heterogenen Stadtstruktur dar und besticht durch die hohe Qualität der baulichen Details.

Der Baukomplex ist als Etappe konzipiert und wird insbesondere durch die vorgesehene Erweiterung des Freiraums und der Öffnung der Wegachse im Zuge der neuen Schiffahrtsstrasse wesentlich gewinnen.

Villa Bleuler, Zollikerstrasse 32

Mit ihrem unterirdischen Neubau und der Renovierung der Villa Bleuler haben Architekt und Bauherrschaft im Zusammenwirken mit der Denkmalpflege die schwierige Aufgabe gelöst, eine Erweiterung der unter Denkmalschutz stehenden Anlage zu realisieren.

Die Restaurierung der Villa besticht durch die herausragende Sorgfalt. In Rücksicht auf die schützenswerte Gesamtanlage wird die umfangreiche Erweiterung im Untergeschoss neben das Gebäude gestellt, wobei es durch die Verwendung zurückhaltender Elemente gelingt, nach aussen hin deutlich zu zeigen, welche Bereiche der Neubau besetzt.

Der Stadtrat freut sich, den Bauherrschaften, Architektinnen und Architekten die Auszeichnungen im Rahmen einer feierlichen Vernissage von <50 Jahre Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich> am 29. Juni 1995 (Beginn um 19.30 Uhr) im Stadthaus zu überreichen. Eine separate Einladung wird folgen.

Mitteilung an den Stadtpräsidenten, den Vorsteher des Finanzamtes, die Vorsteherinnen des Bauamtes I und II (4), das Stadtarchiv, das Hochbauamt (4), das Hochbauinspektorat, die auswärtigen Mitglieder der Jury für die Verleihung von Auszeichnungen für gute Bauten: Prof. Hans Kollhof, Fasanenstrasse 70, D-10719 Berlin, Prof. Karljosef Schattner, Spindeltal 32, D-85072 Eichstätt, Peter Zumthor, Architekt, Süsswinkel 33, 7033 Haldenstein, und durch Zuschrift an die mit Auszeichnungen bedachten Architektinnen und Architekten.

Seit 1945 - seit 50 Jahren also - werden gute Bauten in der Stadt Zürich in regelmässigen Abständen, im Durchschnitt alle vier Jahre, vom Stadtrat ausgezeichnet. In diesem Jahr hat das Hochbauamt der Jury Bauten zur Beurteilung vorgeschlagen, für die im Zeitraum von anfangs Januar 1991 bis Ende Dezember 1994 die baupolizeiliche Bezugsbewilligung erteilt worden ist. Nach einer Vorausscheidung hat die Jury an drei Tagen insgesamt 28 Objekte besichtigt. Sie beantragt dem Stadtrat, sieben Objekte auszuzeichnen. Es handelt sich um eine Bahnhofbaute, zwei Geschäftshäuser, einen Industrie-

und Dienstleistungskomplex, eine Wohnanlage, die Restauration und bauliche Erweiterung eines Baudenkmals sowie die Inneneinrichtung eines Ladengeschäftes.

Anlässlich der letzten Jurierung sind erstmals auch Massnahmen an bestehenden Bauten - wie namentlich das Weiterbauen in und an Altbauten oder aber deren Instandstellung - in einem umfassenden Sinne in die Beurteilung einbezogen worden. Diese Gruppe macht, nicht zuletzt wegen des konjunkturell bedingten Rückgangs der Neubautätigkeit, einen immer bedeutenderen Teil aller Bauvorhaben aus. Sie umfasst auch, aber keinesfalls vorwiegend Denkmalschutzobjekte. Angesichts der Erfahrungen, die im Jahr 1991 gemacht worden sind, sah sich die Jury zu einer Präzisierung der Beurteilungskriterien genötigt: Noch eindeutiger als damals hat die Jury in diesem Jahr Qualität und Angemessenheit eines Eingriffs in den Altbau - seien es Ein- und Umbauten, sei es ein Anbau - zum Gegenstand der Beurteilung gemacht. Mit der (Auszeichnung für gute Bauten) will nämlich nicht ein Denkmalschutzpreis vergeben werden: Es sollen weder das kunst- und sachgerechte Instandstellen eines Baudenkmals noch das schlichte Unberührtseinlassen prämiert werden, obwohl gerade dies dem Baudenkmal sehr oft am meisten dient.

Was für das Umbauen oder Erweitern bestehender Bauten gesagt werden kann, gilt für alle baulichen Eingriffe in die Stadt, also auch für das Neu- und Weiterbauen im städtischen Gefüge: Sie verlangen eine Auseinandersetzung mit den unterschiedlichen Zeitschichten. Es muss gelingen, die neuen Elemente mit den historischen Schichten zu verknüpfen. Dabei sollen einerseits nicht die Übergänge verschliffen werden und darf andererseits die Stadt nicht etwas Zusammenhangloses erhalten. Es liegt wesentlich in der Verantwortung von Bauherrschaft und Architektinnen und Architekten, das richtige Mass zwischen Anschliessen und Absetzen zu finden. Gerade in dieser Hinsicht waren aber die diesjährigen Beratungen der Jury geprägt von einem leisen Missbehagen, das sie in einer Vorbemerkung zu den Auszeichnungen auch formuliert hat: einer Enttäuschung darüber, dass sich im beurteilten Zeitraum zwar gute Einzelobjekte, aber nur wenige Beispiele dafür finden lassen, wie an die urbane Bautradition Zürichs, die in hoher Qualität vorhanden ist und weit über die Stadtgrenzen hinaus ausstrahlt, angeknüpft werden kann und soll.

Die Übergabe der Auszeichnung erfolgt am 29. Juni 1995 - anders als bisher üblich - im Rahmen einer kleinen Feier im Stadthaus: Dort wird an jenem Abend eine Ausstellung eröffnet, die dem Publikum einen Rückblick auf die nunmehr fünfzigjährige Geschichte der <Auszeichnungen für gute Bauten> vermittelt.

• 第 14 回議事録 (2001 年 12 月 19 日)

<14> 2042. Verleihung von Auszeichnungen für gutes Bauen 1995 bis 2001, Auswahl der Objekte. Seit 1945 wird gutes Bauen in der Stadt Zürich in regelmässigen Abständen, im Durchschnitt alle vier Jahre, vom Stadtrat ausgezeichnet. Bisher hat das Amt für Städtebau, vormals Hochbauamt, der Jury (zur Zusammensetzung der Jury vgl. StRB Nr.1287 /2001) Bauten zur Beurteilung vorgeschlagen. In diesem Jahr wurden Bauträgerschaften sowie Architekten und Architektinnen in Tageszeitungen und Fachzeitschriften eingeladen, Bauten zur Auszeichnung vorzuschlagen, die zwischen 1995 und 2001 in der Stadt Zürich erstellt worden sind. Es wurden 131 Objekte eingereicht. Ausgezeichnet werden sollten Bauträgerschaften sowie Architektinnen und Architekten, deren Bauwerke mit einem präzisen städtebaulichen Eingriff und einer kohärenten Architektur einen Beitrag zur Baukultur und zur Identität der Stadt leisten. Zur Vorbereitung liess das Amt für Städtebau allen Jurymitgliedern eine Dokumentation sämtlicher Eingaben zukommen. Nach einer Vorausscheidung anhand von Plänen und Fotos besichtigte die Jury (Heinz Tesar, Architekt, Wien, entschuldigt. Ersatz: Roderik Hönig, Architekturkritiker, Bern) an zwei Tagen insgesamt 27 Objekte. Sie beantragt dem Stadtrat, vierzehn Objekte auszuzeichnen. Es handelt sich um eine Wohnüberbauung mit Restaurant und Läden, sechs Wohnhäuser, ein Büro- und Gewerbehau, zwei Schulen, zwei

Bürogebäude, ein Büro- und Geschäftshaus und eine Parkanlage.

Bei den eingereichten Objekten fällt zunächst auf, dass sie ein breites Spektrum der Bautätigkeit (z.B. Innenausbauten, Aufstockungen, Anbauten, Neubauten, Gestaltung von Freiräumen) in der Stadt Zürich abdecken. Diese Vielfalt widerspiegelt sich auch in den ausgezeichneten Objekten. Obwohl die eingereichten Bauten ein repräsentatives Bild für die vielfältige Bautätigkeit in der Stadt Zürich seit 1991 geben, fehlten auch einige Objekte.

Zur Auszeichnung vorgeschlagen, werden folgende 14 Objekte:

Umnutzung Waschanstalt, Seestrasse 457 bis 467

Alt und Neu verhalten sich wie These und Antithese und stellen unter Beweis, dass ein Dialog auch mit Widersprüchen geführt werden kann. Am Weiterbauen an der fragmentierten vorderen Front zur Seestrasse diente ein Relikt des alten Fabrikareals als Anhaltspunkt. Während die Mauerflucht des rotgebänderten historischen Klinkerbaus im Obergeschoss des Neubaus übernommen wird, unterschneiden die Architekten sie im Erdgeschoss markant. So kragen über eine verglaste Ladenfront drei indischrot verputzte Boxen kammartig hinweg und stellen die gewohnten Gesetze der Schwerkraft in Frage. 2 Häuser in Zürich, Krattenturmstrasse 22, 24

Obwohl Annette Gigon als Architektin selbst hier residiert, wurden die Häuser keineswegs auf die heutigen Eigentümer zugeschnitten, sondern bewusst allgemein genug gehalten, um Flexibilität zu erlauben. Beide Kuben bieten die Möglichkeit, in zwei Maisonette-Wohnungen unterteilt zu werden. Das roh belassene Innere kontrastiert mit dem im Dialog mit einem Künstler ausgeklügelten Farbkonzept der in Kalkzement verputzten Fassaden.

Oerliker Park, Birchstrasse

Die traditionelle Koexistenz von Wohnen und Schwerindustrie, die Oerlikon über ein Jahrhundert nachhaltig geprägt hat, wandelt sich nun in eine Nachbarschaft von Wohnen und Dienstleistung. Das Quartier verändert sein Gesicht grundlegend. An dem Scharnier des Oerliker Parks lässt sich dieser Wandel schon jetzt ablesen. Zwei Architekten und drei Landschaftsplaner bildeten ein Planungsteam, das interdisziplinär zusammenarbeitete, statt Aufgaben nach Zuständigkeitsbereichen aufzusplittern. Die von Menschenhand gezähmte Parklandschaft lässt Raum für architektonische Experimente. Eine im Raster von vier mal vier Metern gepflanzte Eschenschonung gruppiert sich um eine Lichtung, einen Platz im Platz. Wäldchen und Lichtung erstrecken sich über zwei Planquadrate westlich und östlich der Birchstrasse.

Mehrfamilienhaus, Kurfürstenstrasse 18

Ein in architektonischer Hinsicht durchschnittliches Wohnquartier auf einem Moränenhügel in der Enge hat mit dem Neubau des stark plastisch gegliederten Mehrfamilienhauses von Jakob Steib an Profil gewonnen. Vor- und Rücksprünge sowie die markanten Eckauskragungen des mit Backstein verkleideten Betonbaus erinnern an Mies van der Rohes legendäres Denkmal für Rosa Luxemburg und Karl Liebknecht.

Pneushop-Art Exchange, Mythenquai 322

In Zürich-Wollishofen, wo der Stadtrand ausfranst und die Tücke der Peripherie unkontrollierbar um sich greift, ist mit dem Pneushop von Camenzind und Gräfensteiner ein Point de vue entstanden, der das anarchische Potential des Ortes in kreative Bahnen lenkt.

Hart an der Kante zwischen ratternden Zügen und vorbeiflitzenden PKWs bleibt der Pavillon nicht unbemerkt, denn anstelle des obligatorischen Michelin-Maskottchens, auf das hier bewusst verzichtet wurde, fesselt eine Schwimmerin die Blicke der Pendler und verwandelt die Schaufenstervitrine des Obergeschosses, wo die Pneus gelagert werden, in ein mit karibikblauem Wasser gefülltes Aquarium.

Heilpädagogische Schule, Gotthelfstrasse 53

Bei der Heilpädagogischen Schule in Zürich-Wiedikon handelt es sich um den Umbau und die Erweiterung eines Altbaus aus den frühen 60er Jahren.

Das Architektinnen-Team Barbara Neff und Bettina Neumann überzog den unansehnlich gewordenen Sichtbetonbau aus ästhetischen wie wärmetechnischen Gründen mit einer dünnen Putzhaut, die den Minergie-Standards entspricht und das Gebäude, um zwei Geschosse aufgestockt, in einem neuen Kleid erscheinen lässt.

Wohnüberbauung Selnau, Selnau-/Sihlramt-/Sihlhölzlistrasse

Während der Architekt Martin Spühler zum östlich angrenzenden, kleinteiliger strukturierten Stadtquartier durch kammartig gestaffelte Zeilen Anschluss sucht, wagt er zum Fluss die grosse Geste: Eine 200 m lange Zeile riegelt den Block ab.

Hier, wo die Sihl eine stattliche Breite erreicht, und eine prägnante Lichtung durch das verdichtete Häusermassiv schlägt, lohnt diese Geste doppelt. Denn der elegante, weisse Riegel setzt ein weithin sichtbares Zeichen, einen innerstädtischen Akzent, der mühelos über das Flussbett hinweg bis auf das gegenüberliegende Ufer fortwirkt.

Hans in der Hub, In der Hub 8

Am Zürichberg realisierten die Basler Architekten Morger und Degelo einen Präzedenzfall, den wir uns als Regelfall nur wünschen können. Den Anstoss dazu gab die Bauträgerschaft. Als gleichberechtigte Nutzergemeinschaft träumte sie von gleicher Aussicht für alle. Um dies zu garantieren, verabschiedeten sich die Architekten von dem horizontal fixierten Geschosswohnungsschema und konzipierten jede der drei Wohnungen vertikal, über die vorhandenen drei Etagen hinweg. Äusserlich sieht man dem abgewinkelt am Hang ruhenden Volumen sein Innenleben kaum an. Doch der erste, flüchtige Eindruck täuscht, Die vertikal organisierte Fensterverteilung gibt subtile Hinweise auf die inneren Abläufe.

Mehrfamilienhaus Bäckerstrasse, Bäckerstrasse 51

Was man von aussen für ein Geschäftshaus halten könnte, entpuppt sich, abgesehen von der Weinhandlung an der Ecke, von innen als reines Wohnhaus. Und was für eines! Die stolze Noblesse, mit der das einem Ozeandampfer gleich im steinernen Häusermeer gestrandete Gebäude äusserlich zu seiner Umwelt Distanz hält, weicht im Innern einer Gastlichkeit, die den Dingen innewohnt, selbst wenn die Gastgeber abwesend sind. Dass Glas und Beton nicht notgedrungen einfallslosen Funktionalismus bedeuten müssen, zeigt bereits der Grundriss. Hotz implantiert in die neutrale gläserne Gebäudehülle den Grundriss einer klassischen palladianischen Villa.

Umbau und Aufstockung Geschäftshaus Hohlstrasse 560

Im Verwaltungsbau haben die 70er Jahre ihre nicht immer angenehmen Spuren hinterlassen. Damit konfrontiert, einen Sichtbetonbau mit substanziellen Schwachstellen zu sanieren, entschieden sich Romero & Schaeffle für einen neuen Fassadenmantel, der durch die ungebrochene Horizontalität der Fensterbänder sowie durch elegante Geschoss- und Brüstungsbänder Qualitäten gewinnt, die dem Altbau fehlten. Die neu gestaltete Empfangshalle im Erdgeschoss besticht durch vornehme Zurückhaltung: Travertin und geätztes Glas wechseln miteinander ab.

Erweiterung Schulhaus Ahorn, Ahornstrasse 12

Das bestehende 50er-Jahre-Schulhaus Ahorn in Schwamendingen erweiterte Patrick Gmür durch zwei rückwärtige Risalite, die, ihrerseits aus Holz, zu den «gewöhnlich» geprägten Provisorien der 40er Jahre überleiten, ohne sich deren Behäbigkeit anzubiedern. Farbe bringt Pfiff in das Grau der Umgebung.

Büroumbau, Susenbergstrasse 108

Die unattraktivste Stelle eines insgesamt wenig attraktiven Terrassenhauses an der landschaftlich reizvollen Susenbergstrasse bot eine Herausforderung, die Architekt und Landschaftsgestalter mit Elan angenommen und mit Bravour bestanden haben. Das Souterrain, über das man zuvor grosszügig hinweg sah, lenkt nun alle Blick auf sich: Ein steinerner Findling im türkisblau gefassten Innenhof bestimmt über die Eingangshalle hinweg das Fassadenbild.

Bürogebäude SVA, Röntgenstrasse 17

Zwischen den Bahngleisen und dem genossenschaftlich geprägten Wohnquartier «Röntgenareal» - zwischen permanenter Dynamik und beschaulichem Stillstand - errichteten Sturm und Wolf den neuen Verwaltungssitz der SVA, dessen geschweifte Architektur wie ein Blitz in Bewegung geraten zu sein scheint.

Wohnüberbauung «Im Föhrehain», Margrit-Rainer-Strasse 16-22

Im für Wohnzwecke neu erschlossenen ehemaligen Industriequartier Zürich Nord gehört die an holländische Vorbilder erinnernde Blockrandbebauung von ADP- Architekten zu den gelungenen Beispielen durchmischten Wohnens. Die um einen begrünten privaten Innenhof organisierten Zeilen bieten Grundrissvarianten von 11/2 bis 41/2-Zimmer-Wohnungen, vom Etagen- bis zum Maisonette-Typ.

Sonderpreis

Bei der diesjährigen Auszeichnung sollte erstmals ein Sonderpreis an Personen oder Unternehmen verliehen werden, die sich kontinuierlich für die Förderung der Baukultur eingesetzt oder durch ausserordentliche Leistungen für die Stadtentwicklung von Zürich hervorgerufen haben. Ziel ist insbesondere, die AuftraggeberInnen, welche ganz am Anfang eines Projektes die wichtigsten qualitätsbestimmenden Rahmenbedingungen wie Verfahrenswahl, Auswahl der Planungsteams, Nutzungskonzepte usw. bestimmen, zu sensibilisieren für ihre wichtige Rolle.

Die diesjährig vorgeschlagenen Preise sollen somit ein Zeichen setzen und damit andere Bauträgerschaften motivieren, sich ebenfalls für das Entstehen guter Bauten einzusetzen. Gerade die kontinuierliche Förderung der Baukultur erfordert grosses Engagement. Aus den Vorschlägen des Amtes für Städtebau wählte die Jury daher vier Bauträgerschaften für den diesjährigen Sonderpreis aus.

Allgemeine Baugenossenschaft Zürich, ABZ

- Regina-Kägi-Hof, Regina-Kägi-Hof
- Mehrfamilienhaus Gustav-Heinrich-Weg 6
- Renovation Siedlung Entlisberg, Hintermeisterhof 1-15/2-10, Entlisbergstrasse 26-50
- Umbau und Anbau Neugasse 30-34, Ackerstrasse 9, 11

Schweizerische Bundesbahnen AG, SBB

- Stellwerk Vorbahnhof Zürich, Hohlstrasse 358, 8004 Zürich
- Neues Unterwerk Kohledreieck, Remisenstrasse, 8004 Zürich
- Erweiterung Perrondächer Hauptbahnhof
- Renovation Bahnhof Wiedikon, Birmensdorfer Strasse 83

Schweizerische Rückversicherungs-Gesellschaft, Swiss Re

- Umbau Klubhaus Swiss Re, Alfred-Escher-Strasse 85
- Renovation und Umbau Stammhaus, Mythenquai 50/60
- Swiss Re Brunau, Giesshübelstrasse 30
- Umbau Bürogebäude, Gotthardstrasse 43,45

ZFV-Unternehmungen, Zürcher Frauenverein

- Umbau und Erweiterung Hotel Zürichberg, Orellstrasse 21
- Drei Wohnhäuser, Susenbergstrasse 84, 86, 88
- Umbau Hotel Seefeld, Seefeldstrasse 63
- Umbau Restaurant Troika, Werdmühleplatz 3

- Umbau Hotel Seidenhof, Seidenhof

Die Übergabe der Auszeichnungen erfolgt an der Vernissage vom 18. Januar 2002 im Vortragssaal des Kunsthauses Zürich. Dort werden während einer Woche nicht nur die 14 ausgezeichneten, sondern auch die 13 weiteren Objekte ausgestellt, welche die Jury in die engere Wahl zog und ebenfalls besichtigte. Ebenso werden die Objekte der Sonderpreise der Öffentlichkeit präsentiert.

Erstmals in der Geschichte der Auszeichnung für gutes Bauen wird ein Publikumspreis verliehen. Die Wahl soll unter den 27 ausgestellten Objekten getroffen werden. Der Preis wird anlässlich der Finissage vom 25. Januar 2002 verliehen. Eine Publikation würdigt alle ausgestellten Objekte.

Die Übergabefeier wird durch das Hochbaudepartement organisiert. Die Kosten von insgesamt Fr.100 000.- (Jurierung Fr. 20 000.-, Ausstellung Fr. 40 000.-, Publikation Fr. 40 000.-) sind der Laufenden Rechnung des Amtes für Städtebau, Konto Nr. 4015.3180.000, zu belasten.

Auf den Antrag des Vorstehers des Hochbaudepartements beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht gemäss dem Antrag der Jury den Bauherrschaften, Architektinnen und Architekten der in Ziff. 2 genannten Objekte je eine Urkunde und den Bauträgerschaften überdies eine am oder im betreffenden Haus anzubringende Bronzetafel als Auszeichnung der Stadt Zürich für gutes Bauen sowie den in Ziff.3 genannten Bauträgerschaften je eine Urkunde als Sonderpreis der Stadt Zürich für gutes Bauen.

2. Die Auszeichnungen werden für folgende Objekte verliehen:

- Waschanstalt, Seestrasse 457-467
- zwei Wohnhäuser, Krattenturmstrasse 22,24
- Oerliker Park, Birchstrasse
- Mehrfamilienhaus, Kurfürstenstrasse 18
- Pneushop-Art Exchange, Mythenquai 322
- Heilpädagogische Schule, Gotthelfstrasse 53
- Wohnüberbauung Selnau, Selnau-Sihlhölzli-Sihlramstrasse
- Mehrfamilienhaus, In der Hub 8
- Mehrfamilienhaus, Bäckerstrasse 51
- Büro- und Geschäftshaus, Hohlstrasse 560
- Schulhaus Ahorn, Ahornstrasse 12
- Büroumbau, Susenbergstrasse 108
- Bürogebäude, Röntgenstrasse 17
- Wohnüberbauung, Margrit-Rainer-Strasse 16,22

Diese Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung.

3. Der Sonderpreis der Stadt Zürich für gutes Bauen geht an folgende Bauträgerschaften:

Allgemeine Baugenossenschaft Zürich, ABZ Gertrudstrasse 103,8055 Zürich

Schweizerische Bundesbahnen AG, SBB, 8021 Zürich

Schweizerische Rückversicherungsgesellschaft, Swiss Re Mythenquai 50/60,8002 Zürich

ZFV-Untemehmungen, Zürcher Frauenverein Muhlebachstrasse 86, 8008 Zürich

Diese Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung.

4. Der Vorsteher des Hochbaudepartements wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anfertigen und die Vorbereitungen für die Zuschrift an die Bauträgerschaften, Architektinnen und Architekten sowie für die Übergabefeier im

Vortragssaal des Kunsthhauses Zürich treffen zu lassen.

5. Die Kosten von insgesamt Fr. 100000.- (Jurierung Fr. 20000.-, Ausstellung Fr. 40 000.-, Publikation Fr. 40000.-) sind der Laufenden Rechnung des Amtes für Städtebau, Konto Nr. 4015.3180.000, zu belasten.

6. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstehenden des Finanz-, des Tiefbau- und Entsorgungs-, des Hochbau-, des Schul- und Sportdepartements sowie die übrigen Mitglieder des Stadtrates, den Stadtschreiber, den Rechtskonsulenten, das Stadtarchiv, die Liegenschaftenverwaltung, Grün Stadt Zürich, das Amt für Städtebau (4), das Amt für Hochbauten, die Immobilien Bewirtschaftung, Wiel Arets, Architekt, d'Artagnanlaan 29, NL6213 Maastricht, Roderick Hönig, Architekt, Gerechtigkeitsgasse 17, 3011 Bern, Ulrike Jehle-Schulte Strathaus, Kunsthistorikerin, St. Alban-Tal 40, 4052 Basel, und Heinz Tesar, Architekt, Heinz-Este-Platz 6/7, A-1030 Wien.

· 第 15 回議事録 (2006 年 2 月 8 日)

<15> 153. Amt für Städtebau, Auszeichnungen für gute Bauten der Stadt Zürich 2002 bis 2005. Seit 1945 werden vom Stadtrat in regelmässigen Abständen von durchschnittlich vier Jahren Auszeichnungen für gute Bauten vergeben. Ausgezeichnet werden Bauwerke, die sich durch hohe architektonische Qualität und durch präzise städtebauliche Eingriffe hervorheben. In erster Linie richten sich die Auszeichnungen an die Bauherrschaften, die mit ihren Bauwerken einen kulturellen Beitrag in der Stadt Zürich leisten. Mit der Preisvergabe sollen darüber hinaus die Baukultur und die Diskussion über Architektur und Städtebau in der Öffentlichkeit gefördert werden. Wie in der vorangegangenen Auszeichnungsperiode wurden im September 2005 die Architektinnen, Architekten und Bauherrschaften in Tageszeitungen und Fachzeitschriften eingeladen, Objekte zur Auszeichnung einzureichen, die in Zürich zwischen 2002 und 2005 fertig gestellt worden sind. Der Begriff der Bauten wird weit gefasst, entscheidend ist deren städtebauliche Relevanz. Es sind 124 Projekte eingegangen.

Die Jury (Zusammensetzung der Jury vgl. StRB Nr. 1098/2005, Winy Maas, Architekt Rotterdam, entschuldigt; Ersatz: Jürg Rehsteiner, Architekt AfS) hat sich anhand der eingereichten Fotos und Pläne einen Überblick verschafft und sich in einer einleitenden Diskussion auf Kriterien der Jurierung geeinigt: Städtebauliche Einordnung, Qualität der Architektur und Konstruktion, Innovation und Angemessenheit. Nach einer Vorauswahl besichtigte die Jury 36 Objekte. Nach dem Augenschein musste die Jury feststellen, dass die erwarteten Qualitäten der Objekte aufgrund der Plandokumentation nicht in jedem Fall bestätigt wurden; es erfolgte eine weitere Eingrenzung auf 31 Objekte. Aus dieser engeren Wahl schlägt die Jury dem Stadtrat vor, 15 Objekte auszuzeichnen. Es handelt sich um sechs Wohnhäuser, ein Wohn-Geschäftshaus, zwei Hotels, zwei Schulhäuser, ein Geschäftshaus, einen Bibliothekseinbau, einen Park und einen Pavillon im Park.

Anhand der Sichtung aller eingereichten Objekte und in der Diskussion konnte die Jury drei wichtige Aspekte der diesjährigen Jurierung feststellen:

- die architektonische Qualität der Objekte ist generell hoch, dies gilt im gleichen Mass für Wohnungsbauten, Schulanlagen, Bürogebäude, Sanierungen und Aussenraumprojekte;
- bei der Hälfte der eingegebenen Objekte handelt es sich um Sanierungen, Erweiterungen, Ergänzungen, Instandstellungen und Erneuerungen;
- der Wohnungsbau ist stark vertreten.

Die Diskussion anhand der gesetzten Kriterien - städtebauliche Einordnung, Architektur und Konstruktion, Innovation und Angemessenheit - ergab schnell, dass die meisten der eingereichten Projekte hohe Qualität aufweisen und die Kriterien weitgehend erfüllen. So wurde die Frage nach zusätzlichen, herausragenden Qualitäten und Innovationen für die Beurteilungen der Jury massgebend. Alle 31 Projekte der engeren Wahl wären an sich auszeichnungswürdig. Die

Beschränkung auf 15 Projekte bedeutet eine Auswahl, die auch die Zusammensetzung und Subjektivität der Jury spiegelt. Die Bauaufgaben des Weiterbauens, der Erneuerungen, Ergänzungen und Instandstellungen von bestehender Substanz sind wichtig und sehr aktuell. Jedoch erwies sich die vergleichende Diskussion zwischen Neubauten und sanierten, ergänzten Anlagen als schwierig, da die entscheidenden Kriterien auf anderen Ebenen angesiedelt sind.

Zur Auszeichnung vorgeschlagen werden folgende 15 Objekte:

Wohnüberbauung, Hegianwandweg 28 bis 36

Die Siedlung besticht zunächst durch das einfache Grundkonzept: Eine lang gestreckte Einstellhalle erschliesst die Parzelle in ihrer ganzen Tiefe sowohl für die Parkierung als auch für die Fussgänger im Erdgeschoss. An dieses Rückgrat sind die drei grösseren Häuser angedockt, die beiden kleineren sitzen auf der künstlichen Plattform, welche zugleich das leicht abfallende Gelände nivelliert. Die Häuser spannen so einen öffentlichen Platz beträchtlicher Grösse auf, der den Wohnungen sehr zugute kommt, zumal er der Siedlung ein eindeutiges räumliches Zentrum gibt, die Häuser ausrichtet und Beziehungen untereinander schafft. Alle wesentlichen Nutzungen liegen unmittelbar an dieser inneren Erschliessung: Die Eingänge, die Gemeinschaftsräume, die Abgänge in die Einstellhalle und die verschiedenen Bereiche der Gärten. Die Siedlung ist eines von mehreren aktuellen Zürcher Beispielen, die belegen, dass im Wohnungsbau gerade auch bei engen ökonomischen Randbedingungen Innovation und architektonische Kultur gefördert und gepflegt werden können.

Wohnüberbauung, Hagenbuchrain 10 bis 13

Die sechs Wohnhäuser sind so in die bestehende Topographie und in die Bebauung gelegt, dass sie mit der Umgebung verschmelzen, ohne dabei auf ihren eigenen, unverwechselbaren Charakter zu verzichten. Wie die Instrumente eines kleinen Orchesters übernehmen hier die einzelnen Gebäude präzise Rollen, die sie zueinander in ausgewogene Beziehungen bringen. Dabei wird nicht die Konkurrenz zur Nachbarschaft gesucht, es wird ihr vielmehr mit Nähe und Respekt begegnet. Der zwischen den Häusern frei fliessende Aussenraum findet im Innern seine Entsprechung in offenen, hellen, differenziert gestalteten Eingangs- und Erschliessungsbereichen. Die angenehme, zurückhaltend edel gestaltete Raumfolge führt zu den Wohnungen, die aus mehreren, gut proportionierten Kammern aufgebaut sind. Der disziplinierte Umgang mit diesen einzelnen Bausteinen und die freie Kombination der Elemente zu immer neuen Figuren verleihen den Häusern ihre aussergewöhnliche Ausgeglichenheit. Die Wohnhäuser am Hagenbuchrain stehen beispielhaft für zeitgenössischen und zugleich nachhaltig wertvollen Wohnungsbau.

Wohnbauten Pflögi-Areal, Carmenstrasse 28 bis 38

Die Neubebauung des freigewordenen Areals der Pflögerinnenschule steht für die gelungene Lösung einer typischen Aufgabe zeitgenössischen Städtebaus in der Schweiz: die Neuorganisation von innerstädtischen Geländen im Rahmen eines Nutzungswechsels unter Respektierung komplizierter Nachbarschaften. Die bestehenden Bauten aus den 30er-Jahren (Arch. Gebrüder Pfister) bilden den Ausgangspunkt der Operation, sie werden räumlich und thematisch in ein neues Ganzes überführt und spielen dabei weiterhin eine gewichtige Rolle; sie geben Masse, Massstab und Gliederung der neuen Bauten vor. Durch zwei unterschiedlich lange Zeilen werden die Pfister-Bauten so ergänzt, dass eine offene, gestaffelte Gesamtanlage entsteht, die unterschiedliche Aussenräume ausscheidet. Die ausgeführte Komposition schafft zwei grosse Zonen mehrfacher Lesbarkeit. Zwischen den beiden neuen Zeilen liegt die Tiefgarage, darüber ein Platz, der durch Bäume in grossen Steinkörben gegliedert wird. Der eigentliche, grüne Garten folgt der Samariterstrasse. Diese Aussenräume, besonders aber der innere Hof, sind für das neue Bild des Ortes von grosser Bedeutung.

Mehrfamilienhaus, Forsterstrasse 38

Mit seiner einfachen äusseren Erscheinung und der komplexen inneren Raumwelt lotet das Haus einen Spannungszustand aus, welcher das Wohnen in der Stadt schlechthin ausmacht: die Privatheit der Wohnung und die Öffentlichkeit der Gebäude

und der Umräume. Hier wird dieser Gegensatz durch eine vollständige Verglasung der Aussenwände gezeigt. Scheinbar wird alles gelegt, doch wird das Innere gerade dadurch verborgen und bleibt Gegenstand von Vermutungen. Die Strukturierung des Raums durch mächtige Betonscheiben, die freigestellt vom Boden bis zur Decke reichen, sie sind in den Grundrissen so verteilt, dass sie eine primäre Struktur von Räumen errichten, welche zueinander in offener, spannungsvoller Beziehung stehen. Auf einer zweiten Ebene werden Unterteilungen mit wenigen leichten Einbauten, Schränken und Küchenmöbeln vorgenommen. Das Wohnhaus an der Forsterstrasse ist ein Gebäude von grosser konzeptioneller Kraft und Dichte, eine manifestartige Untersuchung über die Grundbegriffe des Wohnens und der Konstruktion, es ist aber auch ein sorgsam in das Gelände gefügtes Haus.

Mehrfamilienhaus am Fusse des Entlibersberg, Sädlweg 16

Das Wohnhaus gleicht einer kunstvollen musikalischen Fuge. Es operiert mit zwei gegenläufigen Themen, welche so ineinander verwoben sind, dass beide Stimmen ihren unverkennbaren Charakter behalten, dass sich aber auch aus der Kombination eine eigenständige Qualität ergibt. Das erste Thema ist der Bezug auf den häufig anzutreffenden Bautyp eines bürgerlichen Mehrfamilienhauses, das bewusst mit Zeichen und mit Massstabssprüngen arbeitet, um die Betrachter im Unklaren darüber zu lassen, ob es sich bei dem Gebäude nicht doch um eine grosse Villa handelt. Das zweite Thema betrifft den vielschichtigen Umgang mit Materialien und Oberflächen. Das System der Innenräume beginnt in einer einfachen Eingangshalle mit vier Türen; hinter den Türen beginnt allerdings eine komplexe Welt ineinander verschränkter Wohnungen mit engen, labyrinthischen Treppen und grossen, teilweise überhohen Räumen. Das Ganze wird mit grosser Virtuosität vorgetragen, die Wohnungen sind in sich reich und räumlich spannungsvoll.

Mehrfamilienhaus, Altstetterstrasse 278

Der kleine, unpräzise Wohnblock liegt in einem unscheinbaren Wohnquartier, in der zweiten Bautiefe, von der Strasse etwas zurückgenommen. Die Erscheinung des Gebäudes erinnert zunächst an die Wohnhäuser der 60er-Jahre, an eine Architektur, die ganze Landstriche prägt und zum vertrauten Bild der Schweiz gehört. Auf den zweiten Blick, vor allem beim Umschreiten des Gebäudes, lässt sich allerdings erkennen, dass es hier nicht um ein Zitat geht. Vielmehr werden die architektonischen Themen in einem neuen Zusammenhang nutzbar gemacht: Das Haus erhebt sich über einem unregelmässigen Grundriss und ist wie eine städtebauliche Passform in seine Umgebung eingefügt. Es handelt sich also um einen sorgfältig geschnittenen Massanzug, der keine goldenen Knöpfe braucht, um zu überzeugen. Die Verfeinerung wird mit leisen Tönen erreicht, wie etwa mit der fast unmerklichen Ausbildung von horizontalen Bändern durch unterschiedlich strukturierte Putze. Auch die Ausbildung des Sockels oder der unterschiedlichen Dachränder festigen diesen Eindruck edler Unaufdringlichkeit.

Wohn- und Geschäftshaus, Hohlstrasse 78

Das Haus bildet den Abschluss einer Zeile und damit den Kopf der Bebauung gegenüber der Bäckeranlage. Die freie Fassade gegen Osten führt in der Art einer Brandmauer abgestaffelt in die Tiefe der Parzelle. Die äussere Erscheinung des Gebäudes lehnt sich an die unspektakuläre Architektursprache der frühen 70er-Jahre an. Dadurch erscheint der Neubau auf den ersten Blick durchaus vertraut, er nimmt sich zugunsten der städtebaulichen Gesamtwirkung zurück. Auf den zweiten Blick aber lässt sich ein differenzierter Umgang mit den Bauteilen erkennen, eine sorgfältige Proportionierung und ein subtiles Ausbalancieren von dicken und dünnen, schweren und leichten, massiven und transparenten Elementen. Während im Erdgeschoss Geschäftsräume untergebracht sind, nehmen die vier Obergeschosse je zwei Wohnungen, das Attikageschoss eine Wohnung mit Dachterrace auf. Die beiden Wohnungen der Regelgeschosse sind unterschiedlich gross geschnitten, entlang der Hohlstrasse ist der Tagbereich der grossen Wohnung als durchgehende Raumfolge ausgelegt. Sie ist durch die regelmässige Stützenreihe gegliedert, wird aber vor allem durch den eingezogenen Balkon und die Geometrie des Raums

zoniert. In diesem Bereich verschränkt sich die städtebauliche Interpretation des Ortes mit der innenräumlichen Idee der Wohnungen, es entsteht eine präzise, in vielseitigen Beziehungen stehende städtische Wohnsituation.

Hotel Greulich, Herman-Greulich-Strasse 56

Mit der Umgestaltung einer Eckbebauung aus den 50er-Jahren wird eine neue Situation von grosser städtebaulicher Wirkung und innenräumlicher Kraft geschaffen. Die Fassade des Neubaus folgt der vorgegebenen Baulinie und respektiert damit die städtebaulichen Nachbarschaften, wie etwa mit der Ausbildung des Brückenkopfs mit einer dem gegenüberliegenden Geviert analogen Einkerbung erfolgt. Die Neuinterpretation wird durch die Ausrundungen der Aussenwand, das Zusammenfassen der Fenster zu durchgehenden Bändern und die intensive blaue Farbe erreicht. Das Restaurant ist souverän in den Neubau mit seiner hofseitigen Erweiterung eingeschrieben. Die verschiedenen Bereiche der Bar und des Restaurants sind als System von kammerartigen Räumen und fliessenden Übergangsbereichen organisiert. Um zu den Hotelzimmern zu gelangen, verlässt der Gast das Haupthaus und findet sich in einem mit Birken eng bestandenen Hof wieder, von welchem aus sich eine mit Glas überdeckte Halle öffnet.

Park Hyatt Hotel, Beethovenstrasse 21 (Gebäudestruktur und Hülle)

Das Hotel belegt ein ganzes Geviert der regelmässigen, dichten Bebauung ausserhalb des Schanzengrabens. Das kräftige städtebauliche Grundmuster des Ortes mit seinen grossen, klar geschnittenen, sechsgeschossigen Baublöcken wird zunächst ganz selbstverständlich aufgenommen und weitergeführt. Das Volumen wird dann aber mit Einkerbungen und der Ausbildung eines überhohen Sockels so modifiziert, dass zum einen die halböffentliche Nutzung angedeutet, zum anderen eine differenzierte Einbindung des Gebäudes in die unmittelbare Nachbarschaft erreicht werden kann. Der Haupteingang an der Beethovenstrasse wird mit einer grossen, zweigeschossigen Einkerbung angezeigt; der hallenartige Aussenraum bildet zugleich den Auftakt zu einer Folge öffentlicher Räume im Innern des Gebäudes. Die städtebaulichen und architektonischen Themen des Hotels werden in der äusseren Erscheinung mit einer raffinierten konstruktiven Durchbildung der Fenster aufgenommen und präzisiert. Die Fenster sind in verschiedenen Ebenen vor die dunkler gehaltene Aussenwand gelegt, sie werden an den Gebäudeecken zu kastenartigen Elementen und begleiten so die ganze, lange Abwicklung der Fassaden. Die Ebene des Glases, die breiten Umrundungen der einzelnen Elementen und der darüber gespannte Sonnenschutz bilden mit ihrer leicht verschobenen Geometrie gut proportionierte, untereinander in Beziehung tretende und das Hotel charakterisierende Einheiten.

Fachhochschule Sihlhof, Lagerstrasse 5

Die erste Besonderheit des Sihlhofs ist sein Programm: Zwei Hochschulen teilen sich das Haus. Sie nutzen gewisse Bereiche gemeinsam, pflegen darüber hinaus aber auch eigenständige Profile. Die Gebäudestruktur bildet diesen Umstand ab, indem die beiden inneren Hallenräume so zueinander versetzt sind, dass sie sowohl als autonome Kerne der Schulen und auch als die korrespondierenden Teile einer gemeinsamen Raumfigur gelesen werden können. Der Hof bringt Licht ins Innere des sehr tiefen Gebäudes und stellt durch eine Vielzahl von Blickbeziehungen auch die Übersichtlichkeit und die Orientierung sicher. Die städtebauliche Verträglichkeit des grossen Volumens wird mit einer Reihe von Massnahmen sichergestellt. Das Gebäude ist stark abgetreppert, es dreht sich wie eine Schraube ins Innere des Gevierts; am höchsten Punkt sieben-, am niedrigsten zweigeschossig. Die in der Regel zweigeschossigen Abtreppungen, die übergrosse Dimension der Fenster und die nach strikten Regeln schön gefügten Fassadenelemente aus Kunststein gliedern das Volumen, passen es in die unterschiedlichen Nachbarschaften ein und geben ihm zugleich seinen kräftigen, selbstbewussten Ausdruck.

Erweiterung, Sanierung Schule Mattenhof, Dübendorfstrasse 300

Es kommt beim Bauen manchmal darauf an, einen besonderen Ton zu treffen, eine Klangfarbe oder ein feines Intervall. Bei der Erweiterung und Instandsetzung der Schulanlage aus den 50er-Jahren sind alle diese drei Herausforderungen in

ausserordentlich schöner Art und Weise bestanden. Das Intervall entsteht aus der Setzung des neuen Volumens in Beziehung zu den bestehenden Gebäuden der Schulanlage. Es ergänzt die Situation zu einem weiten Hof, wobei die ganz leicht zueinander verdrehten Baukörper eine innere Spannung aufbauen. Die Häuser scheinen auseinander zu streben und werden doch durch eine gleichsam magnetische Kraft zusammen gehalten. Der Neubau schärft diese Situation, indem er die Topographie im Innern zurückhält und zur Strasse hin der ganzen Anlage einen Kopf und ein Gesicht gibt. Was die Klangfarbe betrifft, so leitet sie sich aus einer respektvollen Auseinandersetzung mit der Architektur der Schwamendinger Gründerjahre ab, aus dem Interesse an jener einfachen, grundsoliden und dabei heiteren Art zu bauen. Die ganze Anlage, von ihrer städtebaulichen Setzung bis Verarbeitung des Innenausbaus lassen erkennen, das hier mit Können und mit grosser Zuneigung nach einer gültigen Lösung gesucht wurde – und dass sie auch gefunden wurde.

Geschäftshaus IBM Schweiz, Vulkanstrasse 106

Das grosse Bürohaus liegt unmittelbar an der Bahnlinie und schafft mit seinem 14-geschossigen, sich aus einer niedrigeren Bebauung erhebenden Turm einen präzise bezeichneten Eingang zur Stadt. Der siebengeschossige Baukörper entwickelt sich Z-förmig in der Tiefe der Parzelle; er verzahnt sich so mit der benachbarten Bebauung und bildet gemeinsam mit ihnen eine Folge von städtischen Aussenräumen. Die Wirkung der urbanen Grossform und ihrer plastischen Präsenz wird durch die regelmässige Gebäudestruktur und die modulare Ordnung der Fassaden unterstrichen. Die leicht hochrechteckigen Fenster sind wie in ein grosses gefaltetes Gitter tief in die Aussenwand gelegt, das der ganzen Abwicklung des Gebäudes folgt. Der Gebäudekomplex besticht vor allem durch die Angemessenheit der Lösung auf verschiedenen Ebenen. Die ausgreifende städtebauliche Geste wird in allen Teilen bis zur Detaillierung umgesetzt und eingelöst. Dass dabei einfache Mittel und Strukturen zur Anwendung kommen, gereicht nicht nur der Nutzung zum Vorteil, sie belegt auch die rigorose gestalterische Disziplin, mit welcher das Gebäude gedacht, entwickelt und realisiert wurde. Diese starke Haltung verleiht der ganzen städtischen Situation Charakter und Ausstrahlung.

Bibliothekseinbau Universität Zürich, Rämistrasse 74

Die Bibliothek ist in den ehemaligen Lichthof des Institutsgebäudes eingebaut, das zudem teilweise aufgestockt wurde. Der neue zentrale Raum ist wiederum ein Lichtraum, der sich linsenförmig über die ganze Höhe der sieben Geschosse entwickelt und von einer grossen Glaskuppel abgeschlossen wird. Die Bibliothek bezieht sich auf klassische Bautypologien und entwickelt sie aufgrund der besonderen örtlichen Situation weiter. Wie in den frühen Stiftsbibliotheken wird ein in sich ruhender Raum mit sakraler Wirkung errichtet, in welchem die Bücher selbst als Bestandteil der Raumbegrenzung inszeniert werden. Die runde Form findet später ebenfalls oft Verwendung, um in grossen öffentlichen Lesesälen der frei zugänglichen Bildung einen adäquaten Ausdruck zu verleihen. Durch die relativ geringe Grundfläche, die hier zur Verfügung stand, war es nicht denkbar, einen Lesesaal auf einer Ebene anzubieten. Die Stapelung der Bereiche und ihre Orientierung nach innen auf eine gemeinsame Halle ermöglichte es, die Höhe in verschiedener Hinsicht (Raumwirkung, Organisation, Lichtführung) nutzbar zu machen. Dabei ergibt sich im Ganzen eine Verbindung zwischen stiller Konzentration und angenehmer Belebtheit.

Pavillon Hafen Riesbach, Klausstrasse 2/Seefeldquai

Die Aufgaben, die der kleine Pavillon übernehmen muss, sind bescheiden, seine Lage ist hingegen heikel und exponiert: die Wiese unmittelbar am See, ein viel begangener städtischer Park, dar mit grossen Bäumen bestanden ist. Der Pavillon ist in der Tradition der <Folies> gedacht, jener kleinen Architekturen, die zum Vokabular des englischen Landschaftsgartens gehören. Der Reiz dieser Gebäude besteht darin, dass sie einen Weg mit einer Vielzahl von Blickbeziehungen bereichern, sich einmal zeigen, um sich sogleich wieder zu verbergen. Zudem deuten sie oft Nutzungen an, die sie nicht enthalten und entziehen sich auch dadurch einer eindeutigen Zuordnung. Der Pavillon macht bewusst, wie stark der öffentliche Raum der

Stadt von scheinbar nebensächlichen Bauten und Einrichtungen geprägt ist und er belegt, Welch grosses Potenzial darin verborgen liegt.

MFO-Park, Sophie-Täuber-Strasse/James-Joyce-Weg

Die relativ hohe Dichte an Parks im neuen Stadtteil Neu-Oerlikon hat es möglich gemacht, unterschiedliche Wege zu beschreiten und die Rolle der Grünanlagen innerhalb der städtischen Bebauung auch grundsätzlich zu hinterfragen. Der MFO-Park bietet eine überraschende Antwort, indem die verschiedenen Ansprüche gleichsam voneinander getrennt und einzeln neu gelöst werden. Die Fläche des Parks wird praktisch vollständig begehbar gemacht, indem die Bereiche für Pflanzungen auf wenige Punkte beschränkt werden, von denen Kletterpflanzen aller Art ein grosses, haushohes Gerüst bewachsen. Die Möglichkeit, den Grünraum auf verschiedenen Wegen und auch in der Höhe zu durchwandern, ermöglicht einen stetigen Wechsel der Perspektive, wie er sonst nur in deutlich grösseren Landschaftsparks erlebt werden kann. Die räumliche Wirkung des Parks auf seine Umgebung ist ebenfalls ungewohnt. Denn während der durch Bäume und Gehölz verdichteten Räume und der Weite offener Rasenflächen setzt, wird hier die Bepflanzung selbst mit Hilfe des Gerüsts zu einem grossen homogenen Körper. Dabei werden die Qualitäten eines Aussenraums vollständig erhalten und teilweise noch künstlich überhöht: Die Witterung, die gefilterte Besonnung, der Wechsel der Tages- und der Jahreszeiten prägen die Stimmung des Ortes und beeinflussen seine Benutzung.

Auf den Antrag der Vorsteherin des Hochbaudepartments beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den Bauherrschaften, Architektinnen und Architekten der in Ziff. 2 genannten Objekte je eine Urkunde und den Bauherrschaften überdies eine am oder im betreffenden Objekt anzubringende Bronzetafel als Auszeichnung für gute Bauten.
2. Die Auszeichnungen werden für folgende Objekte verliehen:  
Die Reihenfolge bedeutet keine Rangordnung.
3. Die Vorsteherin des Hochbaudepartments wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anfertigen und Vorbereitungen für die Zuschriften an Bauherrschaften und Architektinnen und Architekten sowie für die Übergabefeier im ewz-Unterwerk Selnau treffen zu lassen.
4. Die Kosten für Jurierung, Ausstellung und Publikation sind der laufenden Rechnung des Amtes für Städtebau zu belasten.
5. Mitteilung an den Stadtpräsidenten, die Vorstehenden des Finanz-, des Tiefbau- und Entsorgungs-, des Hochbau- sowie des Schul- und Sportdepartments, die übrigen Mitglieder des Stadtrates, den Stadtschreiber, den Rechtskonsulenten, die Fachstelle für Stadtentwicklung, das Amt Archiv und Statistik Stadt Zürich, die Liegenschaftenverwaltung, Grün Stadt Zürich, das Amt für Städtebau (8), das Amt für Hochbau, die Immobilien-Bewirtschaftung der Stadt Zürich und das Amt für Baubewilligungen. Das Amt für Städtebau wird angewiesen, die auswärtigen Mitglieder der Jury für die Verleihung der Auszeichnungen für gute Bauten zu benachrichtigen: Adolf Krischanitz, Architekt, Wien; Matthias Ackermann, Architekt, Basel; Eva Keller, Architektin, Herisau; Winy Maas, Architekt, Rotterdam.

・ 第 16 回議事録 (2011 年 7 月 13 日)

<16> 901. Amt für Städtebau, Auszeichnungen für gute Bauten der Stadt Zürich 2006 bis 2010.

Seit 1945 werden vom Stadtrat in regelmässigen Abständen von durchschnittlich vier Jahren Auszeichnungen für gute Bauten vergeben. Ausgezeichnet werden Bauwerke und Anlagen, die sich durch hohe architektonische Qualität und durch präzise städtebauliche Eingriffe hervorheben. In erster Linie richten sich die Auszeichnungen an die Bauherrschaften,

die mit ihren Bauwerken einen kulturellen Beitrag in der Stadt Zürich leisten. Mit der Preisvergabe sollen darüber hinaus die Baukultur und die Diskussion über Architektur und Städtebau in der Öffentlichkeit gefördert werden. Wie in der vorangegangenen Auszeichnungsperiode wurden im April/Mai 2011 die Architektinnen, Architekten und Bauherrschaften in Tageszeitungen und Fachzeitschriften eingeladen, Objekte zur Auszeichnung einzureichen, die in Zürich zwischen 2006 und 2010 fertig gestellt worden sind. Es sind 114 Projekte eingegangen.

Die Jury (Zusammensetzung der Jury vgl. Protokoll 297 des Stadtrates vom 16. März 2011) hat sich anhand der eingereichten Pläne und Fotos einen Überblick verschafft und sich in einer einleitenden Diskussion auf folgende Kriterien der Jurierung geeinigt: städtebauliche Einordnung, Qualität der Architektur, Konstruktion und Innovation. Nach einer Vorauswahl besichtigte die Jury die Objekte, die in der Beurteilung nicht eindeutig erschienen. Nach dem Augenschein musste die Jury feststellen, dass die erwarteten Qualitäten der Objekte aufgrund der Plandokumentation nicht in jedem Fall bestätigt wurden; es erfolgte eine weitere Eingrenzung auf 32 Objekte. Aus dieser engeren Wahl schlägt die Jury dem Stadtrat vor, 11 Objekte auszuzeichnen. Es handelt sich um fünf Wohnhäuser, ein Wohn-Geschäftshaus, ein Schulhaus, ein Geschäftshaus, ein Museum, einen öffentlichen Platz und einen Viadukt.

Anhand der Sichtung aller eingereichten Objekte und in der Diskussion konnte die Jury drei wichtige Aspekte der diesjährigen Jurierung feststellen:

- die architektonische Qualität der eingereichten Objekte ist hoch, dies gilt im gleichen Mass für Wohnungsbauten, Schulanlagen, Bürogebäude, Sanierungen und Aussenraumprojekte;
- bei einem Drittel der eingegebenen Objekte handelt es sich um Sanierungen, Erweiterungen, Ergänzungen, Instandstellungen und Erneuerungen;
- der Wohnungsbau ist stark vertreten.

Die Diskussion anhand der gesetzten Kriterien ergab schnell, dass die meisten der eingereichten Projekte hohe Qualität aufweisen und die Kriterien weitgehend erfüllen. So wurde die Frage nach zusätzlichen, herausragenden Qualitäten und Innovationen für die Beurteilungen der Jury massgebend, insbesondere wurde die Qualität des Aussenraums, der Bezug zum öffentlichen Raum wichtig. Die Beschränkung auf 11 Projekte bedeutet eine Auswahl, die auch die Zusammensetzung und Subjektivität der Jury spiegelt. Die Bauaufgaben des Weiterbaus, der Erneuerungen, Ergänzungen und Instandstellungen von bestehender Substanz sind wichtig und sehr aktuell. Drei Auszeichnungen gehen an Projekte, die mit dem Bestand besonders gut umgehen und einen neuen Mehrwert hervorbringen (Geschäfts- und Wohnhaus Selnau, SIA Hochhaus, Viaduktbogen). Eine Vielzahl von Projekten zeichnet sich durch kleine präzise Interventionen im öffentlichen Raum aus, die eine Umdeutung und Aneignung des öffentlichen Raums bewirken; eine Auszeichnung geht an die neue Gestalt des Limmatplatzes.

Die Jury schlägt die folgenden 11 Objekte zur Auszeichnung vor:

Wohnüberbauung Aspholz Nord in Zürich Affoltern

Pool Architekten/BVK Personalvorsorge des Kantons Zürich

Am Rand des Siedlungsgebietes gelegen, schafft die mäandrierende schmale Gebäudefigur einerseits einen gefassten Eingangshof und andererseits ist der Blickbezug in den angrenzenden Landschaftsraum gewährleistet. Das Wohnhaus vermittelt eine bestechende Leichtigkeit im Ausdruck. Das Sockelgeschoss lässt eine spezielle Nutzung zu, was zusammen mit der platzartigen Ausweitung der Strasse für das Quartier einen Mehrwert schafft.

Siedlung Wolfswinkel in Zürich Affoltern

Egli Rohr Partner AG/ABZ Allgemeine Baugenossenschaft Zürich

Eine Reihung von polygonalen Baukörpern schafft einen überzeugenden Übergang vom Siedlungsgebiet zum

Landschaftsraum. Die zwischen den Baukörpern entstandenen Platz- und Gartenräume werden durch eine attraktive Fussgängerverbindung als Siedlung zusammengehalten. Neben der hohen Wohn- und Aufenthaltsqualität der Bauten gelingt eine angemessene Anbindung der Siedlung an den öffentlichen Raum.

Wohnsiedlung Werdwies in Zürich Altstetten

Adrian Streich Architekten/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten

In einer Setzung von sieben verschieden grossen Baukörpern wurde mit der Siedlung Werdwies ein Zentrum im Grünaquartier geschaffen. Ihren städtischen Ausdruck schöpfen die Wohnbauten aus ihrer massiven und schweren Erscheinung. Die Ballung der 152 Wohnungen in einzelne, freistehende Baukörper formt Energien, die in die Zwischenräume abstrahlen. Durch das Versetzen der Körper entstand trotz hoher Dichte eine offene Mitte für das Quartier.

Meherfamilienhaus Rondo in Zürich Oerlikon

Graber Pulver Architekten/Rondo-Bau GmbH

Das Wohnhaus fällt durch seinen markanten fünfeckigen Grundriss und die umlaufenden, geschwungenen Balkone auf. Die Wohnungen sind um einen gemeinsamen, gedeckten Innenhof angeordnet, der von den skulptural angeordneten Treppenläufen geprägt ist. Es handelt sich um einen Wohnungsbau, der in der bestehenden Umgebung und im Innern hohe Qualitäten aufweist.

Seniorenresidenz Spirgarten in Zürich Altstetten

Miller Maranta/Atlas Stiftung

Die Gebäudefigur festigt die räumliche Situation an der Ecke Badener-/Spirgartenstrasse und prägt mit ihrer eigenständigen Architektursprache einen neuen, unverwechselbaren Ort. Der Baukörper ist virtuos gegliedert und trifft die Stimmigkeit des Ortes auf überzeugende Art und Weise. Mit dem Café/Restaurant wird auf angenehme Weise ein Bezug zur Öffentlichkeit geschaffen. Es entsteht ein dem städtischen Wohnen angemessener stimmiger Ausdruck.

Wohn- und Geschäftshaus Selnau in Zürich Enge

PARK Architekten/Einfache Gesellschaft Selnau

Das Weiterbauen interpretierten die Architekten so, dass sie die Struktur des Hauses so weit wie möglich erhalten und weiterdenken wollten. Das in dieser Logik Zugefügte ist nicht kaschiert, sondern mit sichtbaren Fugen und Materialwechseln im Innern wie Äusseren ablesbar. Die neuen, oberen zwei Geschosse nehmen Linien und Themen des Bestands auf. Im Strassenraum erscheint das umgebaute Haus neu als markantes Eckhaus.

SIA-Haus in Zürich Enge

Romero & Schaeffle Architekten/SIA Haus AG

Mit der Sanierung des Scheibenhochhauses gibt sich der SIA als Berufsverband der Architekten und Ingenieure einen neuen stilvollen Auftritt im Stadtbild. Die reliefartige Wirkung der Fassadenelemente verleiht dem Gebäude eine schöne Plastizität. Das Thema der Fassadensanierung, der (Er-)Findung einer angemessenen architektonischen Thematik ist hier vorbildlich gelungen.

Schulhaus Leutschenbach in Zürich Schwamendingen

Christian Kerez/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten

Das Projekt sorgte schon als Wettbewerbssieger für grosse Aufmerksamkeit. Die Umsetzung der gestapelten Schule ist konstruktiv und architektonisch äusserst gelungen. Ihre Ausstrahlung als markantes Objekt im Park ebenso wie die Kraft der Innenräume sind überzeugend.

Museum Rietberg in Zürich Enge

ARGE Grazioli Krischanitz GmbH/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten

Das Projekt reagiert auf die denkmalgeschützte Situation des Rieterparks und der Villa Wesendonck mit der diskreten Geste eines verglasten Einschnitts in eine künstliche Topografie. Der gläserne Kubus des Museumseingangs, in Smaragdgrün und mit Kristallornament, kündigt auf kleiner Fläche vollumfänglich den Reichtum der Ausstellungen an.

<Im Viadukt>, Umnutzung Viaduktbögen in Zürich Industrie

EM2N/Stiftung PWG

Aus einem Infrastrukturbau im Industriequartier wurde ein Herzstück der urbanen Aufwertung. Über gut 500m Länge wurde diese wichtige Position im Stadtgefüge öffentlichen, kulturellen und kommerziellen Nutzungen zugeführt. Aus der Interpretation des Viadukts nicht nur als Brücke und Infrastruktur, sondern als eigene Landschaft, ergab sich gegen aussen ein zurückhaltendes Erscheinungsbild.

Tramhaltestelle Limmatplatz in Zürich industrie

Baumann Roserens Architekten/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten

Mit der Neugestaltung der Tramhaltestelle erhielt der Limmatplatz einen der Bedeutung des Langstrassenquartiers entsprechenden urbanen Ausdruck. Die unwirtliche Kreuzung wurde mit dieser Aufwertung in den Stadtraum zurückgeholt.

In den letzten fünf Jahren ist in Zürich viel gebaut worden. Die Objekte der engeren Wahl repräsentieren die Breite der Bauaufgaben und die hohe Sorgfalt und Qualität in der Weiterentwicklung des Bauwerks Zürich. Um die Objekte der engeren Wahl mittels Anerkennung zu würdigen, werden sie hier namentlich aufgeführt, und in der zu erstellenden Publikation werden sie mehr Raum bekommen, als dies in vorangehenden Auszeichnungszyklen der Fall war.

Die Anerkennungen:

Wohnüberbauung A-Park in Zürich Albisrieden

Baumann Roserens Architekten/Baugenossenschaft Zurlinden

Wohnsiedlung Papillon in Zürich Wollishofen

Guagliardi Ruoss Architekten/immobilienfonds UBS Sima/Balintra AG

Wohnsiedlung Wasserschöpfli in Zürich Friesenberg

Althammer Hochueli Architekten/Helvetia Versicherungen

Wohn- und Geschäftshaus Badenerstrasse in Zürich-Albisrieden

Pool Architekten/Baugenossenschaft Zurlinden

Wohnsiedlung Diener-Areal in Zürich Schwamendingen

Adrian Streich Architekten/Carl Diener Söhne Kommanditgesellschaft

Malzturm, Hürlimann-Areal in Zürich Enge

Thomas Schregenberger GmbH/PSP Properties AG

Mehrfamilienhaus an der Quellenstrasse, Zürich Industrie

Kissling & Roth Architekten/Kissling & Roth

Mehrfamilienhaus an der Zurlindenstrasse, Zürich Aussersihl

HuggenbergerFries Architekten AG/Eigentümergeinschaft Zurlindenstrasse

Max-Bill-Platz in Zürich Oerlikon

Haerle Hubacher Architekten/Stadt Zürich, Tiefbauamt

Geschäftszentrum Lochergut in Zürich Aussersihl

Pool Architekten/Stadt Zürich, Liegenschaftsverwaltung

Umbau und Erweiterung Kino Xenix in Zürich Aussersihl

Frei + Saarinen Architekten/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten

Schulhaus mit Turnhalle Hirzenbach in Zürich Schwamendingen  
Boltshauser Architekten AG/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten  
Schulhaus Milchbuck in Zürich Unterstrass  
B.E.R.G. Architekten/Stadt Zürich Industrie  
Spillmann Echsle Architekten/Freitag lab. AG  
Atelier Boltshauser  
Boltshauser Architekten AG/Boltshauser Architekten AG  
System für eine Containersiedlung in Zürich Schwamendingen  
NRS Team/Asylorganisation Zürich AOZ  
Rio-Bar  
Stucky Schneebeili Architekten/Stadt Zürich, Amt für Hochbauten  
Renovation, Umbau Feldeggstrasse 4  
Marques AG Architekten/Zürich Lebensversicherungs-Gesellschaft AG  
Geschäftshäuser Holbeinstrasse  
Stücheli Architekten/Züblin Immo AG  
Zentrum Sihl-City in Zürich Enge  
Theo Hotz Architekten/Miteigentümerschaft Sihlcity c/o Crédit Suisse AG Sihlcity

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangierung.

Auf den im Einvernehmen mit der Stadtpräsidentin gestellten Antrag des Vorstehers des Hochbaudepartments beschliesst der Stadtrat:

1. Der Stadtrat verleiht den Bauherrschaften und den Architektinnen und Architekten der in Ziff. 2 genannten Objekte je eine Urkunde und den Bauherrschaften überdies eine am oder im betreffenden Objekt anzubringende Bronzetafel als Auszeichnung für gute Bauten.

2. Die Auszeichnungen werden für folgende Objekte vergeben:

Wohnüberbauung Aspholz Nord in Zürich Affoltern

Siedlung Wolfswinkel in Zürich Affoltern

Wohnsiedlung Werdwies in Zürich Altstetten

Meherfamilienhaus Rondo in Zürich Oerlikon

Seniorenresidenz Spirgarten in Zürich Altstetten

Wohn- und Geschäftshaus Selnau in Zürich Enge

SIA-Haus in Zürich Enge

Schulhaus Leutschenbach in Zürich Schwamendingen

Museum Rietberg in Zürich Enge

<Im Viadukt>, Umnutzung Viaduktbögen in Zürich Industrie

Tramhaltestelle Limmatplatz in Zürich Industrie

Die Reihenfolge bedeutet keine Rangierung.

3. Der Vorsteher des Hochbaudepartments wird eingeladen, die Urkunden und die Bronzetafeln anzufertigen und Vorbereitungen für die Zuschriften an Bauherrschaften und Architektinnen und Architekten sowie für die Übergabefeier im Museum für Gestaltung treffen zu lassen.

4. Die Kosten für Jurierung, Ausstellung und Publikation sind der Laufenden Rechnung des Amtes für Städtebau zu belasten.
5. Mitteilung an die Stadtpräsidentin, die Vorstehenden des Finanz-, des Tiefbau und Entsorgungs-, des Hochbau-, des Schul- und Sportdepartments sowie des Departments der Industriellen Betriebe, die übrigen Mitglieder des Stadtrates, den Stadtschreiber, den Rechtskonsulenten, Archiv und Statistik, die Stadtentwicklung, die Liegenschaftenverwaltung, das Amt für Städtebau (9, für sich und für die auswärtigen Mitglieder der Jury), das Amt für Hochbauten, die Immobilien-Bewirtschaftung und das Amt für Baubewilligungen.

Für getreuen Auszug der Stadtschreiber



## 参考文献リスト

### References

参考文献を以下に示す。尚、出版年、出版社の情報は、奥付を基に付した。

一般刊行物				
資料名称	著者／編著	出版社	発行年	所蔵
50 JAHRE AUSZEICHNUNGEN FÜR GUTE BAUTEN IN DER STADT ZÜRICH	Bauamt II der Stadt Zürich	ETH Hönggerberg	1995	北海道大学建築史意匠学研究室
Auszeichnung gutes Bauten der Stadt Zürich 1995-2001	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	Hürlimann AG, Zürich	2002	北海道大学建築史意匠学研究室
Auszeichnungen für gute Bauten in der Stadt Zürich 2002-2005	Stadt Zürich, Amt für Städtebau	Siggset AG, Zürich	2006	北海道大学建築史意匠学研究室
Mehr als Wohnen Gemeinnütziger Wohnungsbau in Zürich 1907-2007	Stadt Zürich, Finanzdepartement und Hochbaudepartement	Offsetdruckerei Karl Grammlich GmbH, Pliezhausen	2007	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich HIRSLANDEN / RIESBACH	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	NZZ Fretz AG, Schlieren	2003	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich AUSSERSIHL / INDUSTRIE	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	NZZ Fretz AG, Schlieren	2004	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich WIEDIKON / ALBISRIEDEN / ALTSTETTEN	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	NZZ Fretz AG, Schlieren	2005	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich ENGE / WOLLISHOFEN / LEIMBACH	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	NZZ Fretz AG, Schlieren	2006	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich STADTZENTRUM ALTSTADT / CITY	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	NZZ Fretz AG, Schlieren	2008	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich UNTERSTRASS / WIPKINGEN / HÖNGG	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	NZZ Fretz AG, Schlieren	2009	北海道大学建築史意匠学研究室
Baukultur in Zürich AFFOLTERN / OERLIKON / SCHWAMENDINGEN / SEEBACH	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	Druckerei Uhl GmbH, Radolfzell	2009	北海道大学建築史意匠学研究室
125 Jahre Baugeschichtliches Archiv	Stadt Zürich, Amt für Städtebau Hochbaudepartement	printlink ag	2002	北海道大学建築史意匠学研究室
ZÜRICH WIRD GEBAUT	Hochbaudepartement der Stadt Zürich, Amt für Städtebau	Hochparterre	2001	北海道大学建築史意匠学研究室
New Directions in Swiss Architecture	Jul Bachmann	George Braziller	1969	北海道大学建築史意匠学研究室
POST-WAR MODERNITY IN SWITZERLAND (II)	Verena Huber	Birkhäuser	2001	北海道大学建築史意匠学研究室
Swiss Made	Steven Spier with Martin Tschanz	Thames & Hudson	2003	北海道大学建築史意匠学研究室
Alfred Roth. Architekt der Kontinuität	Waser		1985	ETH-BAU (Zürich)
Architektur in der Schweiz 1980-1990	Verlag ADV Advertising		1991	ETH-BAU (Zürich)
Architektur in Zürich 1980-1990	Bauamt II der Stadt Zürich		1990	ETH-BAU (Zürich)
Freudenberg. Der Architekt Jacques Schader und die Kantonsschule in Zürich-Enge, Zürich 1992	Museum für Gestaltung		1992	ETH-BAU (Zürich)
Hans Hofmann. Vom neuen Bauen zur neuen Baukunst, Zürich 1985	GTA Verlag		1985	ETH-BAU (Zürich)
Werkbundsiedlung Neubühl in Zürich-Wollishofen 1928-1932. Ihre Entstehung und Erneuerung	GTA Verlag		1990	ETH-BAU (Zürich)
4 × 25 Günstig wohnen in Zürich	Stadt Zürich	NZZ Fretz AG, Schlieren	2009	北海道大学建築史意匠学研究室
Die Disziplinierung der Stadt. Moderner Städtebau in Zürich, 1900 bis 1940	Kurz, Daniel	gta Verlag, ETH Zürich	2008	ETH-BAU (Zürich)
Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zug	Kanton Zug, et al.	Hochbauamt des Kantons Zug	2006	ETH-BAU (Zürich)
Auszeichnung gutes Bauen 1991-1995 : Region AI, AR, FL, SG, SH, TG	Hrsg. Architekturforum Nordostschweiz	Architekturforum Nordostschweiz, St. Gallen	1996	ETH-BAU (Zürich)
Ausgezeichnete Innenarchitektur : die besten Innenarchitekten aus dem Wettbewerb Deutscher Innenarchitekturpreis	Bund Deutscher Innenarchitekten	Callwey, München	2009	ETH-BAU (Zürich)
Auszeichnung kostengünstige Stallgebäude = Distinction pour étabes de bon rapport qualité/prix	Hilty, Richard	Eidgenössische Forschungsanstalt für Agrarwirtschaft und Landtechnik	1993	ETH-BAU (Zürich)

資料名称	著者／編著	出版社	発行年	所蔵
40 Wakkerpreise 1972-2011 = 40 Prix Wakker 1972-2011	Schweizer Heimatschutz	Schweizer Heimatschutz, Zürich	2011	ETH-BAU (Zürich)
Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zürich 2006	Baudirektion Kanton Zürich et al.	Stiftung für die Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zürich	2006	ETH-BAU (Zürich)
Auszeichnung gutes Bauen 2001-2005 : Kantone Appenzell Ausser- und Innerrhoden, Glarus, St. Gallen, Schaffhausen, Thurgau und Fürstentum Liechtenstein	Hrsg: Architektur Forum Ostschweiz	Hochparterre, Zürich	2006	ZHAW-A (Winterthur)
Auszeichnung ausgewählter Bauten im Kanton Solothurn 1996-1998	Kantonales Kuratorium für Kulturförderung	Kantonales Kulturzentrum Palais Besenval, Solothurn	1998	ZHDK-MIZ (Zürich)
Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zürich 2003	Baudirektion Kanton Zürich et al.	Stiftung für die Auszeichnung guter Bauten im Kanton Zürich, Zürich	2003	ETH-BAU (Zürich)
Auszeichnung guter Bauten 2008	Basel-Stadt. Baudepartement Basel-Landschaft. Bau- und Umweltschutzdirektion	B a u - u n d Umweltschutzdirektion, Liestal	2008	FHNW-HB (Muttens)
Der Gestaltungsplan des bernischen Baurechts : Beispiel eines raumplanungsrechtlichen Instituts	Suter, André	Buch- und Offsetdruck Burkhardt, Bern	1973	ETH-HDB (Zürich)
Der Gestaltungsplan nach zürcherischem Recht	Eschmann, Stepha	Verlag der Fachvereine	1985	ETH-BIB (Zürich)
Stadtökologie in Bebauungsplänen : Fachgrundlagen, Rechtsvorschriften, Festsetzungen	Stich, Rudolf	Bauverlag, Wiesbaden	1992	ETH-BAU (Zürich)
Architekturprojekt und Gestaltungsplan fuer ein staedtisches Zentrum mit gemischter Nutzung	ETHZ Architekturabteilung	ETHZ, Zürich	1975	ETH-BAU (Zürich)
Stadt der Planer - Stadt der Architekten	Corboz, André	Verlag der Fachvereine an den Schweizerischen Hochschulen, Zürich	1988	ETH-HDB (Zürich)
Das "Hochhaus zur Palme" : eine Betrachtung der geschichtlichen Zusammenhänge : Chicago - Frank Lloyd Wright - "Hochhaus zur Palme"	Kubli, Noémie	ETH, Abteilung für Architektur, Zürich	1997	ETH-BAU (Zürich)
Kommunaler und genossenschaftlicher Wohnungsbau in Zürich : ein Inventar der durch die Stadt geförderten Wohnbauten 1907-1989	Koch, Michael	Finanzamt, Zürich	1990	ETH-HDB (Zürich)
Städtebau in der Schweiz 1800-1990 : Entwicklungslinien, Einfüsse und Stationen	Koch, Michael	v d f Verlag der Fachvereine, Zürich	1992	EPF-BIB (Lausanne)
Schweiz	Meseure, Anna et al.	Prestel, München	1998	ZHDK-MIZ (Zürich)
Wohnbaugenossenschaften : eine Sonderausgabe von Intelligent bauen		Fachkom, Langnau a.A.	2011	ZB (Zürich)
Vom Haus zur Palme zum Hochhaus zur Palme : eine Familien- und Hausgeschichte ; <<Der>> heruntergefallene Kronleuchter	Schindler, Peterr and Ilya Kabakov	Kranich-Verlag, Zollikon	2003	ZB (Zürich)
Metahistory : die historische Einbildungskraft im 19. Jahrhundert in Europa	Hayden V. White	Fischer, Frankfurt am Main	1991	ZB (Zürich)
世界の現代建築 7 スイス篇	猪野勇一、小池新二	彰国社	1953	北海道大学工学部図書館
スイス独立史研究	瀬原義生	ミネルヴァ書房	2009	北海道大学附属図書館
都市はいかにつくられたか	鯖田豊之	朝日選書	1988	北海道大学建築史意匠学研究室
海外の都市政策事情	土岐寛	ぎょうせい	1987	北海道大学建築史意匠学研究室
オーストリア スイス 現代史	矢田俊隆、田口晃	山川出版社	1995	北海道大学附属図書館
ヨーロッパ読本 スイス	森田安一、踊共二	河出書房新社	2007	北海道大学附属図書館
スイス史研究の新天地 都市・農村・国家	踊共二、岩井隆夫	昭和堂	2011	北海道大学附属図書館
メイド・イン・スイス : 小さな国の豊かなデザイン	慶應義塾大学 DMF	株式会社いちい書房	2005	北海道大学附属図書館
スイスの地方自治	財団法人自治体国際化協会	財団法人自治体国際化協会	2006	北海道大学附属図書館
現代スイスの都市と自治 : チューリッヒ市の都市政治を中心として	岡本三彦	早稲田大学出版部	2005	北海道大学附属図書館
スイスを知るための 60 章	スイス文学研究会	明石書店	2014	北海道大学附属図書館
スイス : 歴史から現代へ	森田安一	刀水歴史全書	1994	北海道大学附属図書館
サステイナブル・スイス : 未来志向のエネルギー、建築、交通	滝川薫	学芸出版社	2009	北海道大学附属図書館
アイデンティティと持続可能性 : 「縮小」時代の都市再開発の方向	木下勇、ハンス・ビンダー、岡部明子	萌文社	2012	北海道大学附属図書館
建築巡礼 34 スイスの住居・集落・街	齊木崇人	丸善	1994	北海道立図書館
図説スイスの歴史	踊共二	河出書房新社	2011	北海道立図書館
スイスの歴史	U. イムホーフ	刀水書房	1997	北海道立図書館
もう一つのスイス史 独語圏・仏語圏の間の深い溝	クリストフ・ビュヒ	刀水書房	2012	北海道立図書館
世界の教科書シリーズ 27 スイスの歴史	バルバラ・ボンハーゲほか	明石書店	2010	北海道立図書館

定期刊行物		
資料名称	発行	所蔵
Space Design	鹿島出版会	北海道大学建築史意匠学研究室
archithese	Niggli Verlag	北海道大学建築史意匠学研究室
Werk	Vereinigte Stahlwerke AG	北海道大学工学部図書館
Abitare	Abitare	ETH-BAU (Zürich)
Anthos	Bund Schweizer Landschaftsarchitekten und Landschaftsarchitektinnen	ETH-BAU (Zürich)
Architectural Design	Wiley	ETH-BAU (Zürich)
Bauen + Wohnen	Vereinigte Stahlwerke AG	ETH-BAU (Zürich)
Baumeister	Callwey	ETH-BAU (Zürich)
Bauwelt	Bertelsmann Fachzeitschriften GmbH	ETH-BAU (Zürich)
Byggekunst	Norske Arkitekters Landsforbund	ETH-BAU (Zürich)
Casabella	Elemond spa.	ETH-BAU (Zürich)
Das Werk	Fretz	ETH-BAU (Zürich)
Domus	Domus	ETH-BAU (Zürich)
FACES	Institut d'Architecture de l'Université de Genève	ETH-BAU (Zürich)
L'Architecture d'Aujourd'hui	L'Architecture d'Aujourd'hui	ETH-BAU (Zürich)
Rivista tecnica	ADV Publishing House	ETH-BAU (Zürich)
Schweizer Ingenieur und Architekt (SI+A)	Verlags-AG der Akademischen Technischen Vereine	ETH-BAU (Zürich)
Schweizerische Bauzeitung (SBZ)	Verlags-AG der Akademischen Technischen Vereine	ETH-BAU (Zürich)
Unsere Kunstdenkmäler,	Gesellschaft für Schweizerische Kunstgeschichte	ETH-BAU (Zürich)
werk. archithese	Vereinigte Stahlwerke AG	ETH-BAU (Zürich)
Wohnen	Vereinigte Stahlwerke AG	ETH-BAU (Zürich)
Informationen / Bündner Vereinigung für Raumplanung	Chur : BVR	ETH-BAU (Zürich)

研究論文				
文献名称	著者	掲載元	発行年	所蔵
建築関連顕彰制度にみる建築評価の日米比較	木川田洋祐	北海道大学修士論文	2005	北海道大学建築史意匠学研究室
日本における建築批評の変遷にみる 1950 年代の意義	阿部仁祐、近江榮	日本建築学会大会学術講演梗概集	1994	日本建築学会データベース
都市の景観表彰制度とその実態の調査研究 (埼玉県下の都市事例)	馬野宏貴、宇杉和夫	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	日本建築学会データベース
建築評価のフレームワーク	大野秀敏	日本建築学会大会研究協議会資料	1997	東京大学大野秀敏研究室 HP
名古屋市都市景観賞に関する考察	奥山健二	日本建築学会大会学術講演梗概集	1999	日本建築学会データベース
岐阜市における都市景観表彰制度の評価に関する研究	小川英明	日本建築学会大会学術講演梗概集	2002	日本建築学会データベース
Swiss Made Materiality Analysis of non-building materials in contemporary Swiss-German architecture	Otsachev Iliia, Ishida Tochikazu	日本建築学会九州支部研究報告	2007	日本建築学会データベース
チューリッヒにおける工業地区および建築のコンバージョンに関する研究	高橋直子、松村秀一	日本建築学会大会学術講演梗概集	2003	日本建築学会データベース
ノイビュール・ゾードルンク的设计経緯と計画理念について	田所辰之助	日本建築学会関東支部研究報告	2003	日本建築学会データベース
1920 ~ 30 年代初頭における工作連盟のゾードルンクについてその 3 ヨーロッパにおける都市交通戦略への視点ストラスブル、チューリッヒの事例	諫山正	新潟青陵大学短期大学部研究報告	2006	新潟青陵大学 HP
建築物の長寿命化に関する研究—BELCA 賞受賞物件の調査を通して	銀山正晴、沖塩莊一郎、塚田幹夫、荒木牧人	日本建築学会大会学術講演梗概集	1997	日本建築学会データベース
集合住宅の空間構成における多様性・均質性 現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究	足立 真、坂本一成、奥山信一	日本建築学会計画系論文集	1996	日本建築学会データベース
住戸の集合と外部空間の配列による構成形式 現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究その 2	足立 真、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1999	日本建築学会データベース
要素の配列による集合住宅の外形構成 現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究その 3	足立 真、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2000	日本建築学会データベース
外部空間の接続と配列による集合住宅の構成形式 現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究その 4	足立真、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2000	日本建築学会データベース
建築の外部空間の文節と配置形式 領域的性格からみた建築の外部空間の構成形式に関する研究	寺内美紀子、坂本一成、奥山信一	日本建築学会計画系論文集	1997	日本建築学会データベース
現代日本の建築作品における外形構成とアプローチ空間 領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究 (2)	寺内美紀子、村田 淳、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1999	日本建築学会データベース
現代日本の建築作品における外部領域要素の配列 領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究 (3)	寺内美紀子、坂本一成、奥山信一、小川次郎	日本建築学会計画系論文集	2001	日本建築学会データベース
街路型建築作品における外部ヴォイド空間の構成 領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究 (4)	寺内美紀子、町田敦、坂本一成、奥山信一、小川次郎	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース

研究論文				
文献名称	著者	掲載元	発行年	所蔵
現代日本の建築作品における地形化表現による外形構成 領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究 (5)	寺内美紀子、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース
現代日本の住宅作品における空間の分節と接続 住宅建築の構成形式に関する研究	塚本由晴、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1994	日本建築学会データベース
現代日本の住宅作品における外部空間の分節と結合 住宅建築の構成形式に関する研究	塚本由晴、繁昌朗、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1995	日本建築学会データベース
現代日本の住宅作品における空間の分割 住宅建築の構成形式に関する研究	塚本由晴、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1995	日本建築学会データベース
住宅作品における架構表現による構成単位 住宅建築の構成形式に関する研究	塚本由晴、奥矢恵、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1996	日本建築学会データベース
現代日本の市庁舎建築における空間構成と用途の分節 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究	中井邦夫、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	1999	日本建築学会データベース
現代日本の建築作品における室の集合と外形構成 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究 (2)	中井邦夫、大内靖志、小川次郎、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2000	日本建築学会データベース
現代建築作品における架構と空間構成 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究 (3)	中井邦夫、妹尾慎吾、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース
現代日本の博物館建築における立地環境と外形構成 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究 (4)	中井邦夫、森山ちはる、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2006	日本建築学会データベース
街路に面した商業施設の外形構成 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究 (5)	中井邦夫、根本理恵、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2007	日本建築学会データベース
ヴォリュームの配列からみた複合建築の構成における統合形式	美濃部幸郎、坂本一成、塚本由晴	日本建築学会計画系論文集	1999	日本建築学会データベース
ヴォリュームの配列と接続からみた増築建築の構成形式	美濃部幸郎、増山絵理奈、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2001	日本建築学会データベース
外部空間の分節からみた分棟建築の構成 ヴォリュームの配列による現代建築の統合形式に関する研究	美濃部幸郎、寺内美紀子、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース
周辺環境との隣接関係からみた都市建築の統合形式 ヴォリュームの配列による現代建築の統合形式に関する研究	美濃部幸郎、寺内美紀子、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース
外形ヴォリュームと室の配列による建築の構成 現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式	小川次郎、小野田環、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2000	日本建築学会データベース
外部空間の配列と接続からみた都市型住宅作品の構成 現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式 (2)	岡村航太、小川次郎、坂本一成	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース
傾斜地における住宅建築の断面構成 建築と周辺環境による空間構成に関する研究	遠藤康一、坂本一成、寺内美紀子	日本建築学会計画系論文集	2002	日本建築学会データベース
坂道における空所の平面構成・坂道における都市の空所 (1)	本橋良介、坂本一成ほか	日本建築学会大会学術講演梗概集	2008	日本建築学会データベース
札幌都市景観賞の審査評における批評言語	那須聖	日本建築学会計画系論文集	2012	日本建築学会データベース
持続可能な地域マネジメント型市街地整備の展開に関する研究	木下勇	科学研究費基盤研究(C)一般	2008	
ドイツの都市計画における国際建築展 (IBA) の役割と存在意義に関する研究-IBA の歴史的発展と現代的位置付けに注目して-	太田尚孝ほか	日本都市計画学会都市計画論文集	2012	科学技術情報発信・流通総合システム

## 研究業績リスト

### Research Achievements

#### 【査読付き論文】

- ・大脇慶多、小澤丈夫「スイス・チューリッヒ市建築賞（1947～2011年）受賞作品における集合住宅の配置・住棟構成の特徴と都市景観形成への役割」日本建築学会計画系論文集第716号 pp.2375-2383（2015年10月）
- ・大脇慶多、小澤丈夫「スイス・ドイツ語圏におけるパーゼル建築賞の特徴 -チューリッヒ市建築賞との比較に見る地方自治体が運営する建築賞に関する研究-」日本建築学会計画系論文集第715号 pp.2149-2155（2015年9月）
- ・大脇慶多、小澤丈夫「参事会議事録と作品集に見るスイス・チューリッヒ市建築賞の基本理念・審査方針・評価基準の変遷と特徴 -チューリッヒ市による建築評価の理念と手法に関する研究その2-」日本建築学会計画系論文集第713号 pp.1671-1679（2015年7月）
- ・Takeo Ozawa, Keita Ohwaki「Features of Jury Organization and Award-Winning Works of a Swiss Architecture Prize for Patronage, Auszeichnung für Gute Bauten der Stadt Zürich : An Investigation of the Idea and Methods of Architectural Evaluation Envisaged by the Zurich Municipal Authority - Part 1」日本建築学会計画系論文集第670号 pp.2467-2476（2011年12月）

#### 【研究報告】

- ・小澤丈夫、大脇慶多「スイス・チューリッヒ市主催の建築賞受賞作品に関する研究 審査員構成と受賞作品の建築種別・分布について その1」日本建築学会大会学術講演梗概集F2、pp.413-414（2010年9月）
- ・大脇慶多、小澤丈夫「スイス・チューリッヒ市主催の建築賞受賞作品に関する研究 審査員構成と受賞作品の建築種別・分布について その2」日本建築学会大会学術講演梗概集F2、pp.415-416（2010年9月）
- ・大脇慶多、小澤丈夫、角幸博、石本正明「スイス・チューリッヒ市主催の建築賞受賞作品に関する研究 受賞作品の空間構成について」日本建築学会北海道支部研究報告集No.83、pp.337-340（2010年7月）
- ・大脇慶多、小澤丈夫「スイス・チューリッヒ市主催の建築賞受賞作品に関する研究 集合住宅の空間構成について」日本建築学会大会学術講演梗概集F2、pp.705-706（2009年8月）

#### 【その他】

- ・「チューリッヒの建築行政と都市形成」（ART and ARCHITECTURE REVIEW、2012年、7月）
- ・「スイス・チューリッヒ市の再開発と歴史的建造物の保存活用」（センターレポート184号、一般財団法人北海道建築指導センター、2013年4月）
- ・「スイス・チューリッヒ市における都市計画決定について」（センターレポート185号、一般財団法人北海道建築指導センター、2013年7月）



## あとがき

本研究を進めるにあたっては、多くの方々にご協力を賜りました。

特に、指導教員である主査・小澤丈夫准教授には、本論のきっかけとなる北海道大学修士課程時代のスイス調査から、7年にわたってご指導いただきました。また、副査をお引き受け頂いた瀬戸口剛教授、森傑教授をはじめ、学位授与審議委員会の岡田成幸教授、菊地優教授、緑川光正特任教授、羽山広文教授、千歩修教授、小篠隆生准教授、岡崎太一郎准教授に、心より御礼申し上げます。

また、角幸博名誉教授、石本正明博士には、建築史意匠学研究室に配属されてから4年間ご指導いただきました。この場をお借りして、深謝の意を表します。

スイスへの留学に際しては、筑波大学貝島桃代准教授にスイス連邦工科大学の Laurent Stalder 教授を紹介いただいたことがきっかけとなり、その後の3年間を有意義に過ごすことができました。

スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETHZ)建築史建築理論研究所(gta)の Laurent Stalder 教授には、筆者がチューリッヒ滞在中に、十分な研究環境を与えて下さるとともに、本論に関連する資料の提供や関係者を快く紹介してくださいました。

チューリッヒ市都市計画部所属の Regula Iseli 氏をはじめ、チューリッヒ市公文書館の職員の方々や ETHZ 建築学部図書館職員の方々にも、数多くの資料を提供いただきました。

チューリッヒ市を拠点に活動する建築設計事務所 office haratori の Zeno Vogel 氏、原奈穂子氏、Jürg Spaar 氏には、スイスにおける建築設計業務の実態を数々のプロジェクトを通して、経験させていただきました。資料分析だけでなく、実際に設計者がどのような考え方で都市景観形成に携わっているかを身を以て経験できたことは、本論を進める上でも非常に重要な示唆を与えていただきました。

チューリッヒでの3年間が無ければ、本論を纏めることは出来なかったと思います。滞在中にお世話になった全ての方々に深く感謝いたします。

最後に、これまでの研究生活を支えてくれた家族に心から感謝して、本論の謝辞にかえさせていただきます。

2015年11月